昭和56年 5 月10日発行　第13巻第 6 号　通巻163号

TAKANAKA

高中正義SUPER GUITAR

ヤング・ギター5月号増刊



- ニュー・アルバム「虹伝説」全曲集（全曲完璧コピー、TAB譜付）
- TAKANAKA'S GUITAR
- 高中正義のギターサウンドを探る
- 「セイシェルズ」から「虹伝説」までアルバム・サウンド解剖

RAINBOW GOBLINS

武道館 TAKANAKA





武道館が虹いろに輝やいた

文●斉藤節雄
写真●三浦憲司

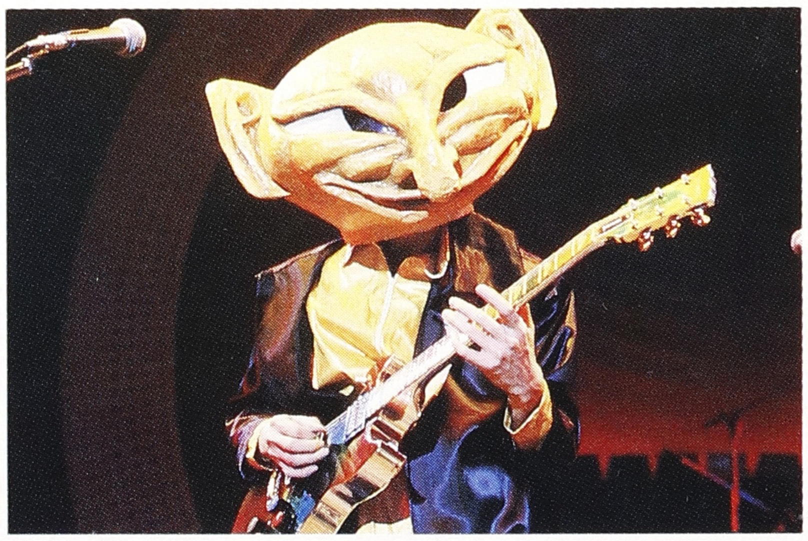


すでにY.G.本誌5月号のカラー・グラビアをフルに駆使して紹介した高中正義の武道館公演（1981年3月10、11日）。強力なP.A.システムと総額3,000万円を掛けたというステージ・セットやライティング・システム、そして高中率いる7人のバック・ミュージシャンが相まって、内外アーティストを含め、ここ数年来で最も印象深いコンサートとなったワケである。

で、ここでは当日の演奏内容をもう少し詳しめにリポートしたいと思うが、まず大まかなポイントをまとめておこう。

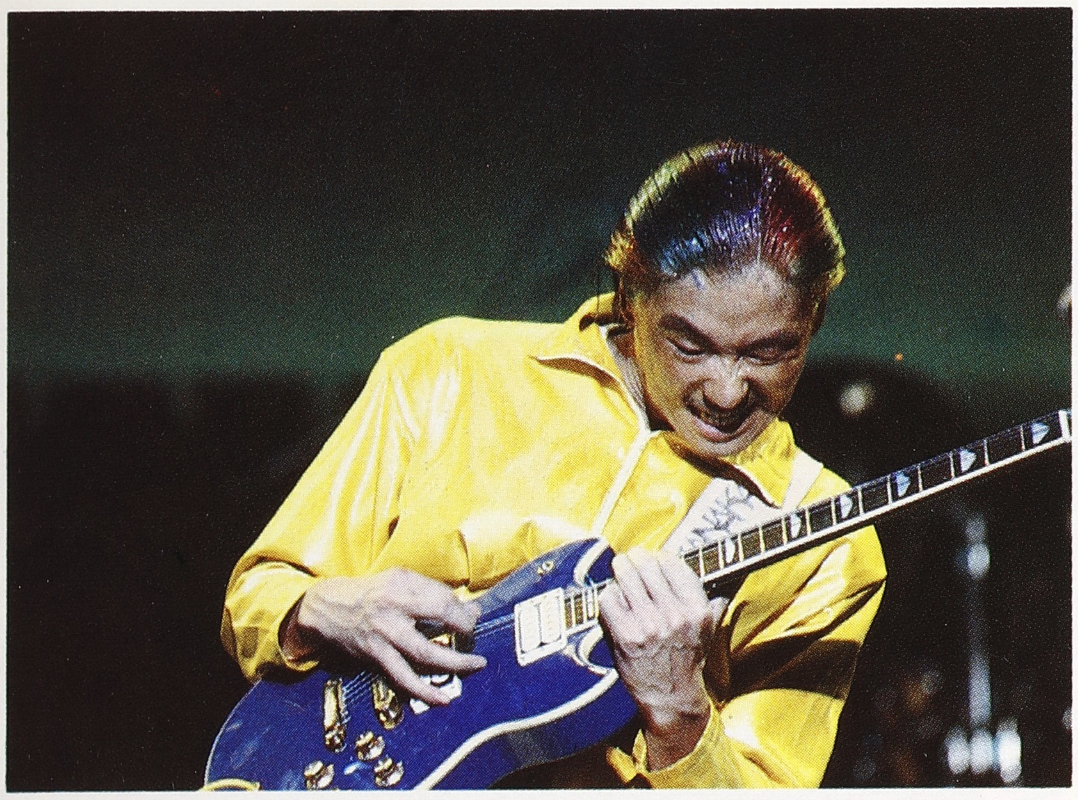
『SUPER TAKANAKA LIVE』でもそうだが、高中のライヴ・パフォーマンスで聴けるギター・プレイは、ほぼスタジオ・レコーディング通りである。作品全体のアレンジが変更されることはあっても、ギター・プレイ自体にほとんど変化はない。中には“レコード通りでつまらない”とか“レコード通りにしか弾けないのでは？”といった高中のライヴを認めたがらない向きもある。が、本書における高中のインタビューにも登場するキメ・ゼリフだが、「僕のギター・プレイは作曲したもの」なのだからしょうがない。いわゆるアドリブ・パートも、全てインプロヴィゼイション（即興演奏）ではなく、彼が考え付き、思い付いた、最もベターなメロディー・ラインの集大成なのだ。

ライヴ・パフォーマンスには、聴かせる、見せる、参加させる……といくつかのパターンがあると思うが、聴かせるのにも、演奏を聴かせるタイプと、曲を聴かせるタイプがある。前者にはエリック・クラプトン、ジェフ・ベック、ラリー・カールトン、リー・リトナーなどがいる。バンド全体としては曲を聴かせるが、TOTOのスティーヴ・ルカサーな

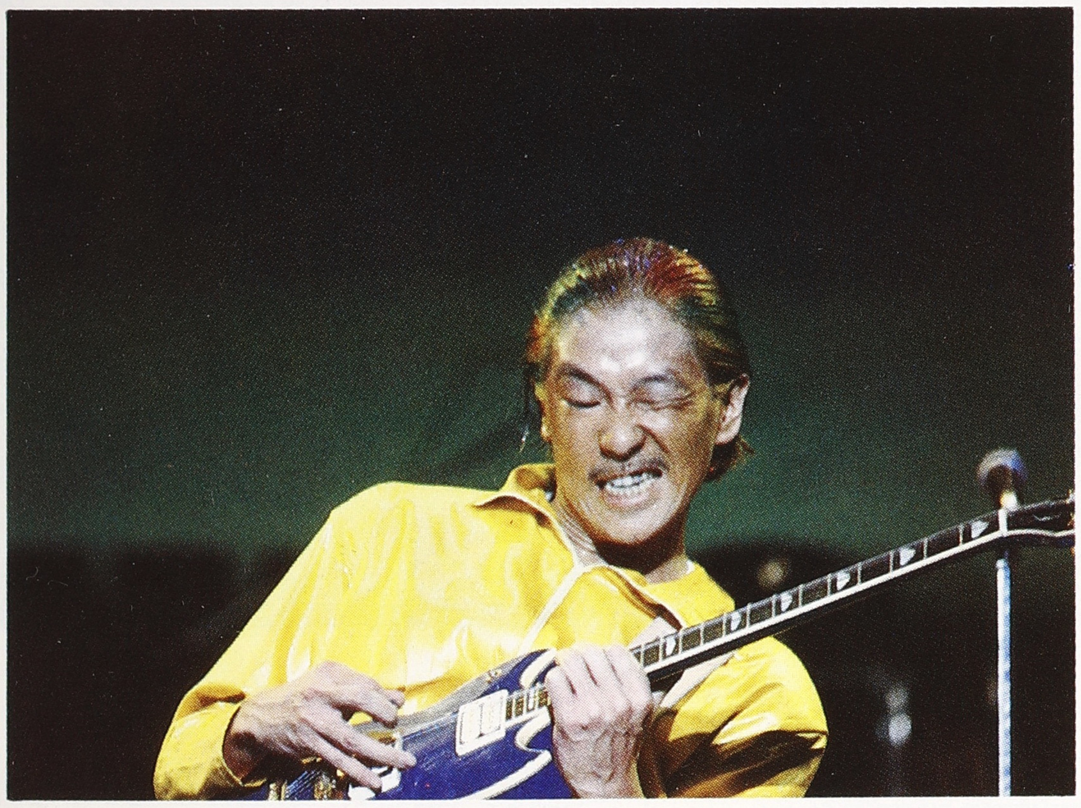














ども演奏を聴かせる行き方を取っている。で後者にはイーグルス、ポール・マッカートニー、クイーン、解散したレッド・ツェッペリン、ヴァン・ヘイレンなどもいて、そして高中正義もいるというワケだ。

だから、確かにステージならではのインプロヴィゼイションが少ない（ないワケではない）という点をつまらないと感じる人もいるだろうが、高中にギンギンのインプロヴィゼイションを求めるというのは、お門違いなのである。

ギターは、ヤマハSGを4本用意していて、第一部の『虹伝説』では、あのコンサートのために用意したレインボー・カラー・フィニッシュ、そして「ブルー・ラグーン」からスタートする第二部で御馴染のブルー・フィニッシュのものを使った。

アンプは、ブギとコンポーネント・アンプとの2系統の使い分け。

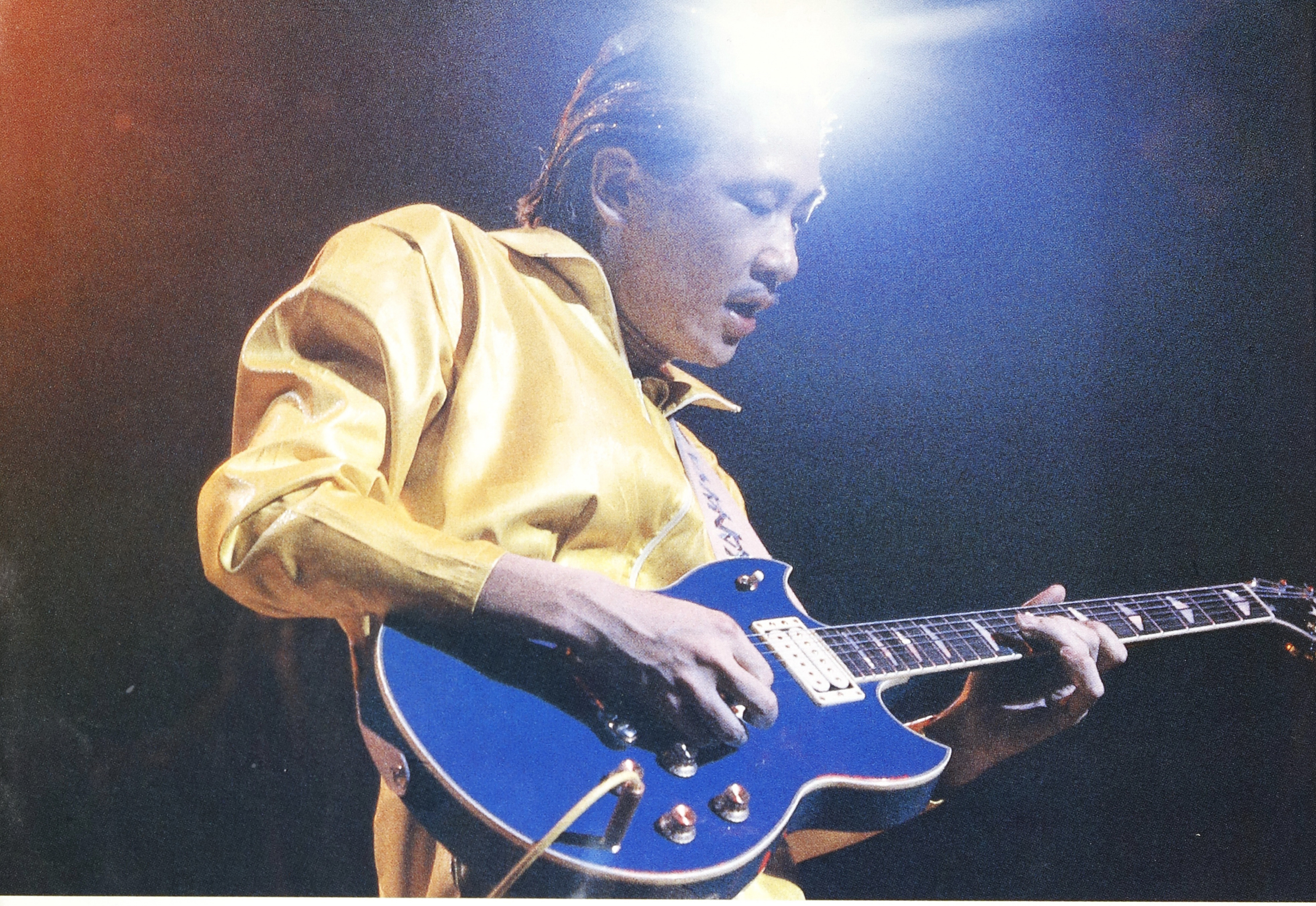
エフェクツは、例のエフェクツ・ボード・システムをセットしているため、ずい分と活用しているように感じるだろうが、『虹伝説』でもそうであるように、コンプレッサー、ファズ、コーラス・マシーン、エコー・マシーン、ヴォリューム・ペダル、ヴォコーダーを、本当に必要な部分だけに使うというようになって来たらしい。数の上では多いかも知れないが、さり気ない使い方が多いので、エフェクツの存在感は大してないだろう。実際の存在価値は高いのだが。

「プロローグ」。ファイナル・ナンバーのテーマ・メロディーと呼応した、ストリングス中心の作品。ライヴではテープ演奏で代用。

「ワンス・アポン・ア・ソング」。レコードでは、この演奏もほかの半数あまりの曲と同様ストラトでプレイされているが、「ステージでの使用ギターは1本が良い！」という高中のポリシーにより、ヤマハSGでプレイされたワケだ。

「セブン・ゴブリンズ」。イントロのディレイ・ホールド（ディレイ・リピートを半永久的に持続する）をピッチ・トランスポーズ（音程を変える。ここでは序々に上げる）するサウンド・エフェクトは、多分テープを使ったのだろう。フロント＆リアのフェイズ・イン・ミックスにセットされたヤマハSG＋ブギ・アンプのナチュラル・オーヴァードライヴ・サウンドがレコード同様滑らかに鳴り響いた。

「ザ・サンセット・ヴァレイ」。レコードでは、ソリーナ（ストリング・シンセサイザー）



をヴォコーダーに通して歌っているが、ステージでは、ギターをヴォコーダーに通していた。当然アコースティック・ギター・ソロは、ヤマハSGに置き変えられていた。

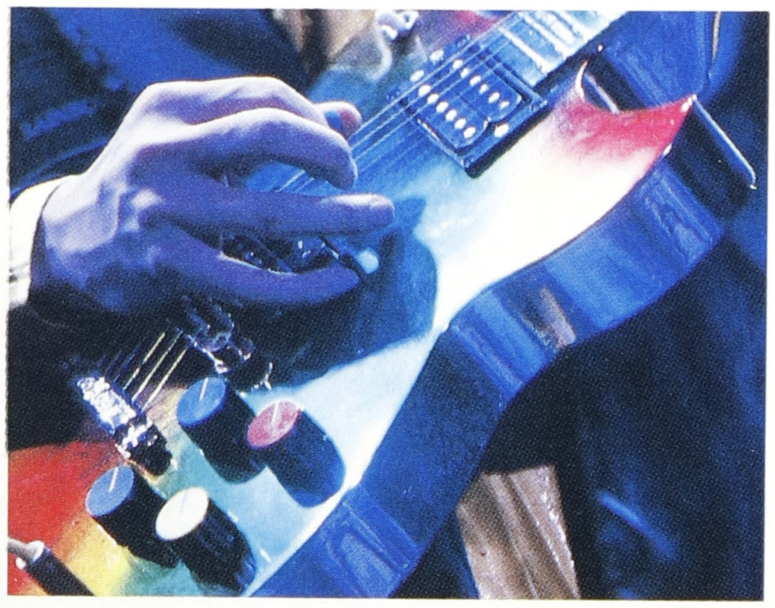
「ザ・ムーン・ローズ」。高中は、ヤマハSGのフロント＆リア・ミックスのブライトを巧く弾き出しているので、レコードではストラトのハーフ・トーンが印象的なこの演奏も、それなりに聴けてしまう。

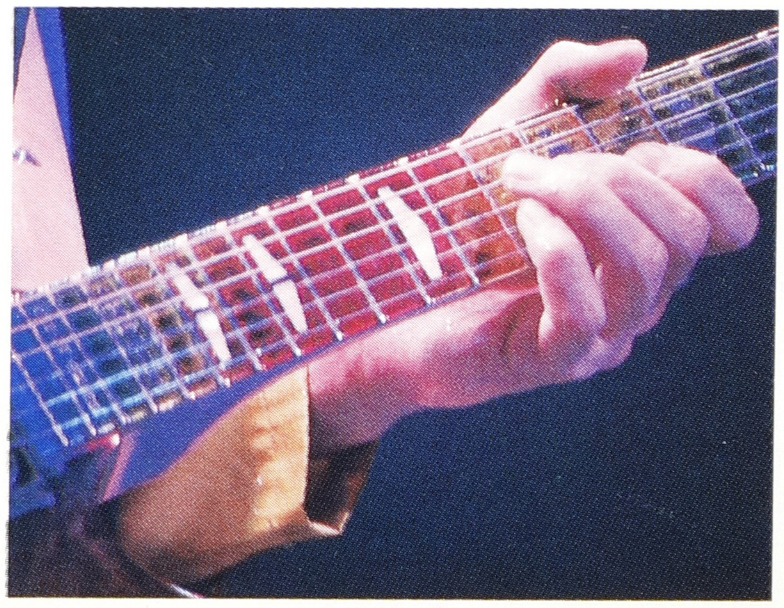
「スーン」。高中ならではのラテン・フレイヴァーたっぷりの演奏。ドラムス＋パーカッションふたりということでも分かる通り、高中はサンタナ・タイプのラテン・ムードが大好きなのだ。

「マジカル・ナイト・ライト」〜「レインボー・パラダイス」(メドレー)。素晴しいギター・サウンディングだ。エコーもコーラスも実に要所要所でキマっている。出だしのテーマなど、よーく聴いてみると、うすーくオクターヴ・ダブラーで厚みを付けている。

「サンダー ストーム」。ゴブリン（小鬼）の頭を付けての演奏。見えない、聴こえないのハードな演出だが、無事終えた。

「ライジング・アーチ」。何とラリー・カー







ルトン直伝！というクラシック・ギター式ハーモニクス奏法を駆使した演奏。正にハーモニクス・ファンタジーだ。

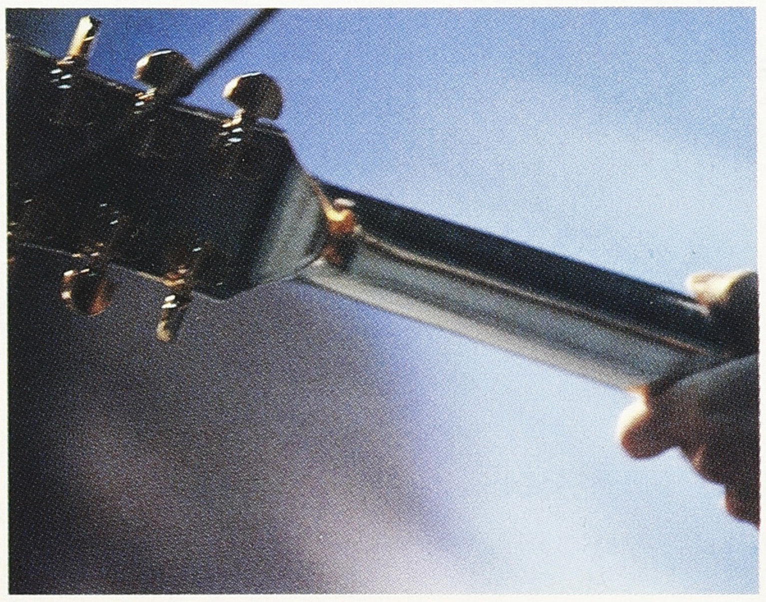
「ジャスト・チャックル」。ここでも、レコードではソリーナ＋ヴォコーダーのパートを、ギター＋ヴォコーダー、さらにポリフォニック・シンセ＋ヴォコーダーに置き変えていた。

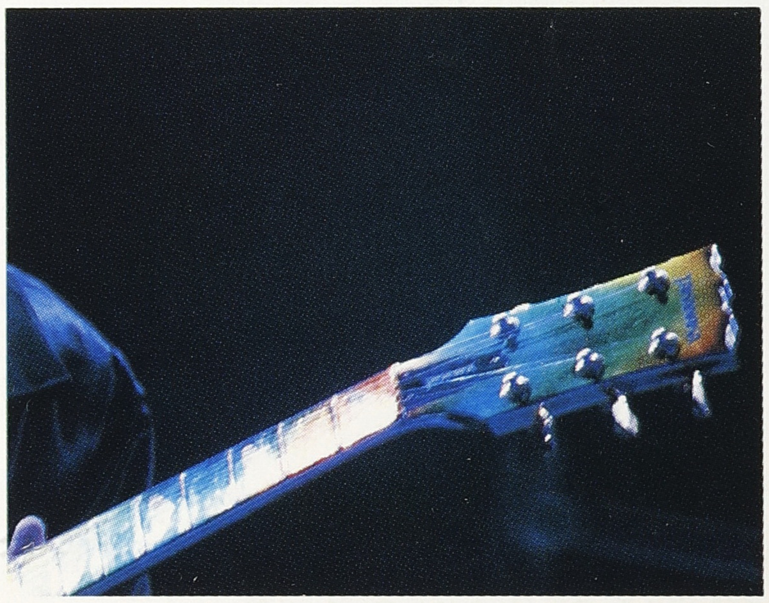
で、唯一「レインボー・ウォズ・リボーン」のみカットされた。演奏時間の都合と、あまりにストラト（ハーフ・トーン＋フィンガー・ピッキング）のイメージが強いためかも知れない。

「プルームド・バーズ」。いわばフュージョンっぽく、アップ・テンポでシカケの多い演奏。アルバム中、最もギター・キッズ好みと言えるだろう。

そして、ラスト「ユー・キャン・ネヴァー・カム・トゥ・ジス・プレース」。“譜面にまとめた上でソロをダビングした”という演奏だけあり、その整然としたドラマティック・ソロ・ラインは見事。エンディングは、フランジャーのジェット効果でキメた。

小休止のあとの第二部は「ブルー・ラグー







ン」から。ライヴ・ヴァージョンのアレンジでラテン風パーカッションを強調してあり、実に軽快。

「レイニー・デイ・ブルー」そして「フィンガー・ダンシン」。この２曲は何となく、ミディアム・ヴァージョン、アップ・ヴァージョンの２部作のように感じてしまう。で、どちらもヤマハSG＋ブギ・アンプのナチュラル・オーヴァードライヴがエネルギッシュかつエモーショナルで良い。

「プラスティック・ティアーズ」。ヤマハSGのクリーン・サウンドに、ロング・ディレイにリピートを多く掛けたエコー・マシーンが絡まる。さらにヴォリューム・ペダルによって表情が付く。これもまた高中ならではのギター・プレイなのだ。

「ハート・エイク」。「ブルー・ラグーン」並にアレンジを変えられたこの作品もまたラテン・フレイバーたっぷりだった。

目ざまし時計が「リリ～ン」とくれば「アーリー・バード」のスタートだ。途中「ロック・アラウンド・ザ・クロック」(ロックン・ロールの代表作）をミックスし、ロックン・ロールお決まりのライン・ダンスもキメ、会場の興奮は最高頂。

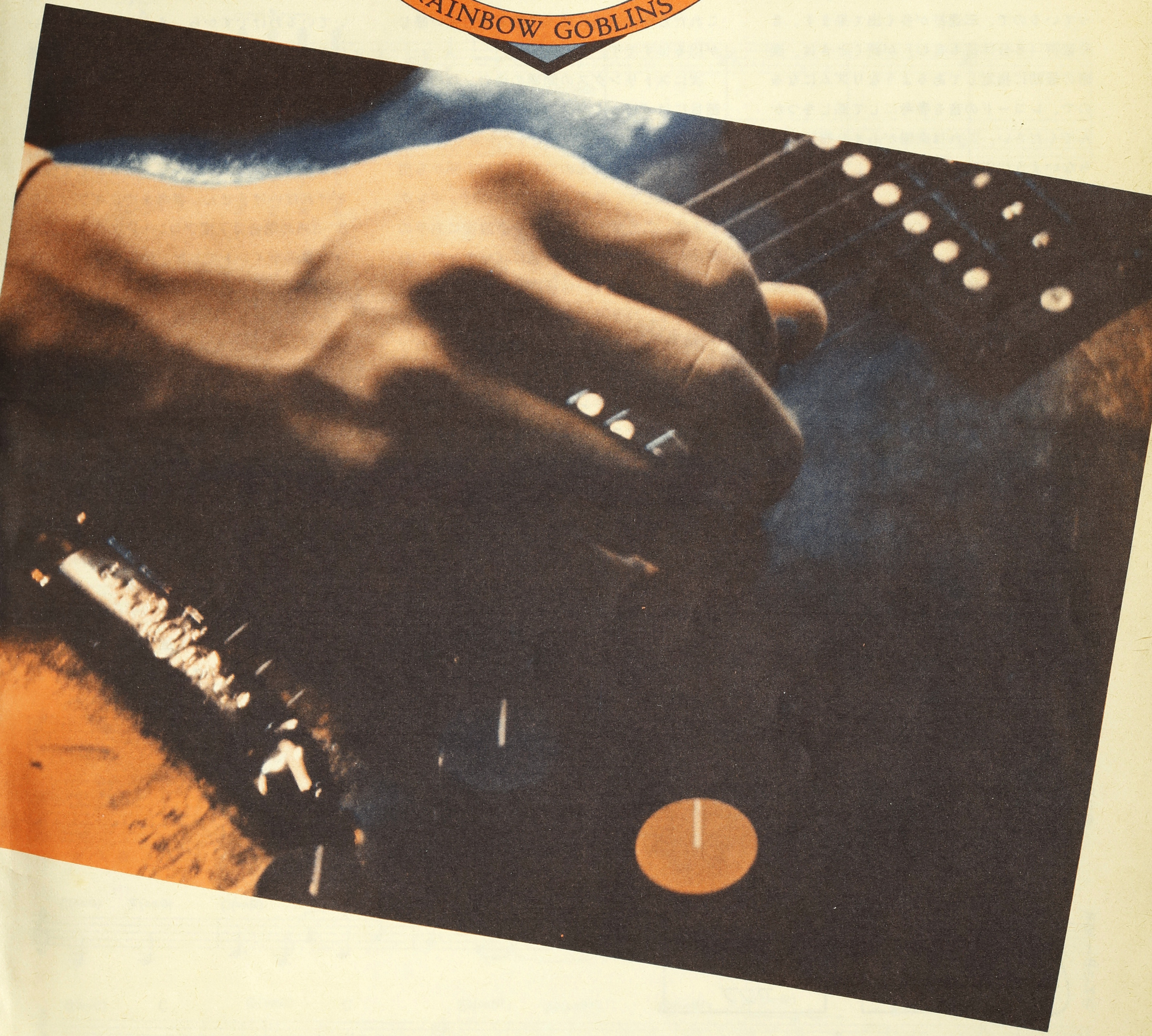
そして、アンコールの第一弾「トロピック・バーズ」がワイルドなハーモニクス・リフでスタート。高中自身がフェヴァリット・ナンバーに挙げるだけあって、取り分け気の入った演奏だが、エンディングの観客席との掛け合いにおける、ブルース・ギターっぽい展開が一番気になった。やはり高中だってブルース・ギターは嫌いじゃなさそう。

２度目のアンコールは、「鉄腕アトム」の余興から「レディ・トゥ・フライ」そして「黒船」とライヴ通りのエンディング。「レディ～」で思いっ切り盛り上げた後での、ゆったりとした味わいの「黒船」、見事なフィナーレだ。

以上が２時間半に渡る高中正義の武道館におけるコンサートの模様である。最後にバック・ミュージシャンを挙げておこう。石川清澄(エレクトリック・グランド・ピアノ)、小林泉美（シンセサイザー類)、田中章弘（ベース)、宮崎全弘(ドラムス)、管原由起及び木村誠(パーカッション)、薩摩光二(サックス)、以上７名。



PART-1
虹伝説
全曲集
RAINBOW GOBLINS



ONCE UPON A SONG

演奏解説

ちょっとスウィングするアップ・テンポの$\frac{12}{8}$拍子風の曲ですネ。楽譜上では$\frac{4}{4}$拍子になっているので、三連符が多く出て来ます。8分音符（8分休符も含む）が続くときは、楽譜の最初に指定してあるようなリズムになるので、レコードの音を参考にして感じをつかんでください。これは楽譜があまり複雑にならないように省略した書き方をしてあるのです。

さて、まずテーマ・メロディーの弾き方のポイントですが、フィンガリングやポジショニングにはそれほど難かしい部分はありません。ただ楽譜中にも指定してありますが、ひとつの音を短かめに切って弾く“スタッカート”が多くなっていますね。エレキ・ギターの場合スタッカートで弾くには三種類くらいのやり方がありますが、この曲に適した方法は、ピッキングした直後にピックで弦を押さえるような感じで弦の振動を止める方法です。これだと他の方法に比べて確実で力強い感じが出るはずです。

次にストリングスの間奏の後のソロの5小節目には“ピッキング・ハーモニクス”が出て来ます。この弾き方はピックを深く持って、ピックの先端がほんの少しだけ指の間から出るようにして、普通よりも強目にピッキングします。こうするとピッキング直後に右手の親指が弦に当たって、普通にピッキングしたときには目立たない倍音成分が強調されて出てきます。つまり本来そのフレットを押さえて弾いたときの音とは違う音が出てくるわけですね。ただこのとき気をつけなければいけないのは、ピッキングする位置によって倍音（ハーモニクス）の出方が違うということです。ピッキングの位置と言っても普通はフロントとリアのピックアップの間のあたりを弾いているわけですから、そんなに極端な違いはないはずです。ところがわずか5ミリの差でもハーモニクスの場合は差が出てくるものです。そこでみなさんがプレイする場合は、楽譜（レコード）の音と同じハーモニクスが出るピッキング・ポジションをさがして弾かなければいけません。参考までにギブソンES—335の場合は丁度フロントP.U.の上のあたりが最適ポイントでした。他のギターでもほとんど同じはずですよ。

その他の弾き方の注意点は、とにかくポジション・チェンジをスムーズにすることです。このポジション・チェンジに手間取っていては、曲の流れがメチャクチャになってしまいますからネ。

サウンド解説

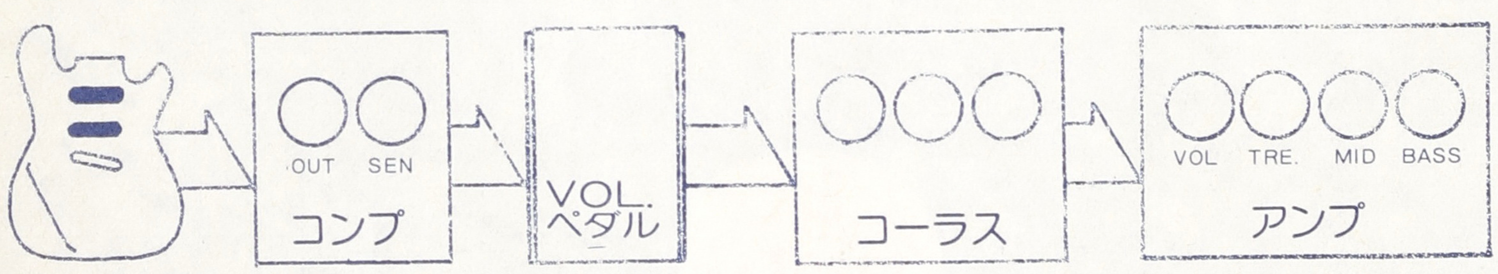
典型的なストラト・ハーフ・トーンwithコンプレッサーによるクリーン・サウンドですネ。多分センター＆リアではなく、センター＆フロントのハーフ・トーン、つまりフェイズ・イン・ミックスでしょう。

で、よりシヴィアーに聴いてみますと、まず、いわゆるクリーン・サウンドよりは若干ラフで、ほんの少しオーヴァードライヴしたニュアンスが感じられます。これは、MXRのダイナ・コンプではなくオレンジ・スクイーザーを使っているため、もしくはブギ・アンプに通しているため、と思われます。

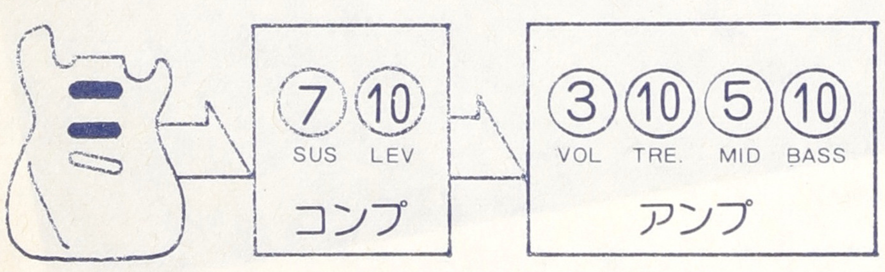
また、所々フラット・ピックではなく、指（右手）でピッキングした、フィンガー・ピッキングならではのトーン・ニュアンスもありますから、マジでやりたい人は、マァ、じっくりと聴き込んでみましょう。

それから、リード・ギターでは例によってヴォリューム・ペダルも通していますし、バッキングにはコーラスが掛かっていますよ。

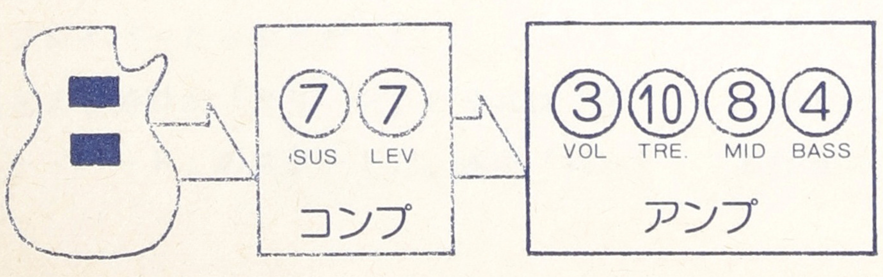
高中正義



ギター・キッドⒶ



ギター・キッドⒷ

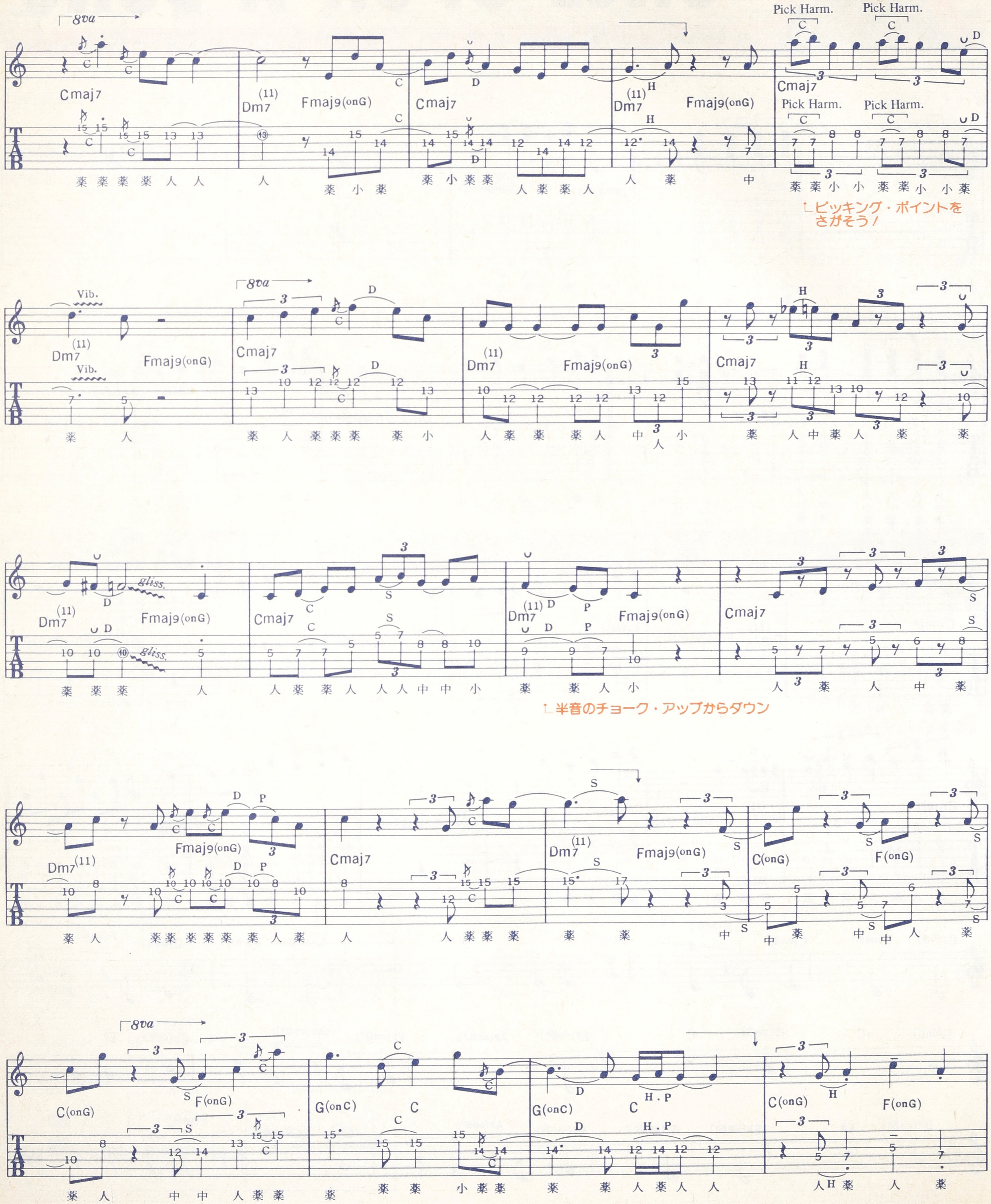


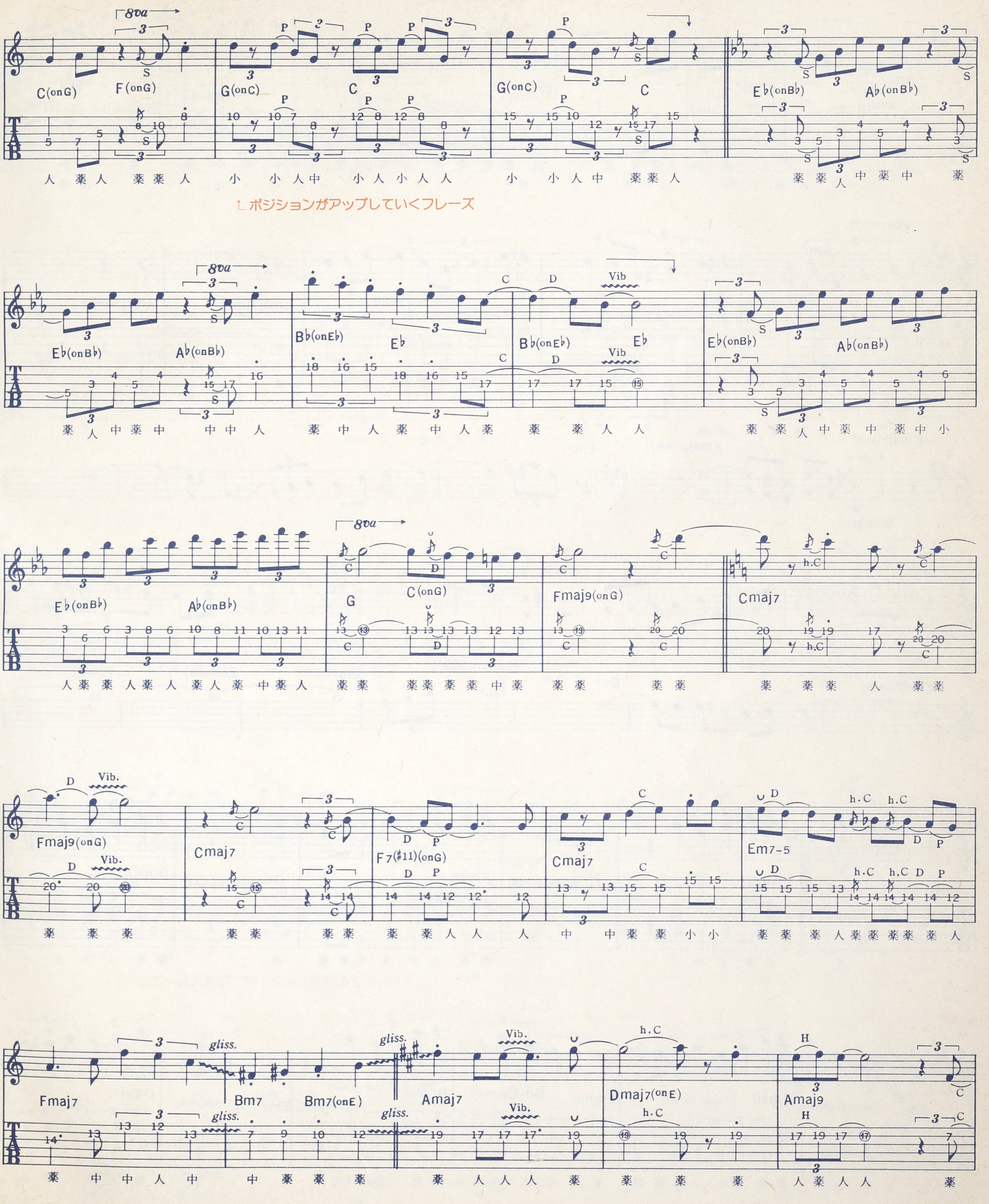


ONCE UPON A SONG

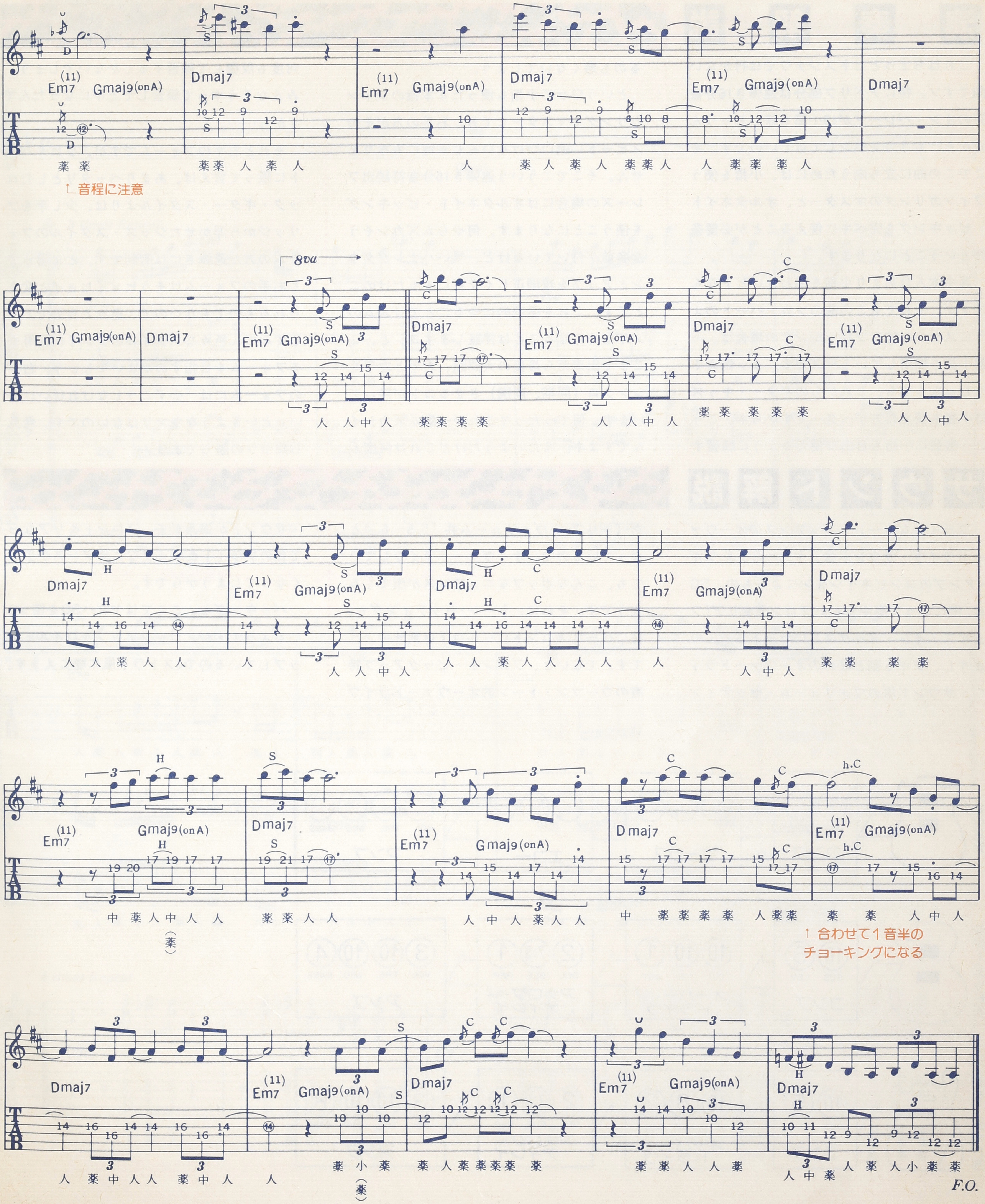
by Masayoshi Takanaka




8va
Pick Harm.
Cmaj7
Dm7(11)
Fmaj9(onG)
└ピッキング・ポイントをさがそう！
Vib.
gliss.
└半音のチョーク・アップからダウン
C(onG)
F(onG)
G(onC)
C


8va
C(onG)
F(onG)
G(onC)
C
G(onC)
C
E♭(onB♭)
A♭(onB♭)
└ポジションがアップしていくフレーズ
8va
E♭(onB♭)
A♭(onB♭)
B♭(onE♭)
E♭
B♭(onE♭)
E♭
Vib
E♭(onB♭)
A♭(onB♭)
E♭(onB♭)
A♭(onB♭)
8va
G
C(onG)
Fmaj9(onG)
Cmaj7
Fmaj9(onG)
Vib.
Cmaj7
F7(♯11)(onG)
Cmaj7
Em7-5
h.C
Fmaj7
gliss.
Bm7
Bm7(onE)
gliss.
Amaj7
Vib.
Dmaj7(onE)
h.C
Amaj9


D7(♯11)(onE)
Amaj7
C♯m7-5
Dmaj7
G7
F♯7
Bm7
C♯m7
Dm7
Em7
Fm7
F♯dim
Emaj7(onB)
Amaj7(onB)
└スライドによるポジション・チェンジがポイント
(Strings)
E♭7-10
D7-10
Cm7
A♭maj7(addD)
D♭7-5
Dm7-5(addB♭)
Dm7(onG)
Em(onG)
F(onG)
G(onA)
Em7(11)
Gmaj9(onA)
└このポジション・ダウンをスムーズに


Em7(11) Gmaj9(onA)
Dmaj7
音程に注意
8va
合わせて１音半の
チョーキングになる
F.O.

SEVEN GOBLINS

演奏解説

これはちょっとヒトスジナワでは行かない曲ですゾ。特にアドリブ部分は速弾き16分音符のオン・パレードが19小節も続いちゃうんだから、もうカンベンしてほしいのです。そこでこの曲に立ち向うためには、小指を使うフィンガリングのマスターと、オルタネイト・ピッキングを完ペキに使えることが必要条件ということになります。

高中本人はあまり小指を使わないヒトなんですが、それでもこの曲のソロ・パートのようにスケール的なフレージングの場合は、一部小指を使用しているハズです。まァ例えそうじゃなくても、これからのギター・キッズは小指も使えた方がベターですからネ。こういう機会に小指も自由に使えるように練習するのも悪くないでしょう。

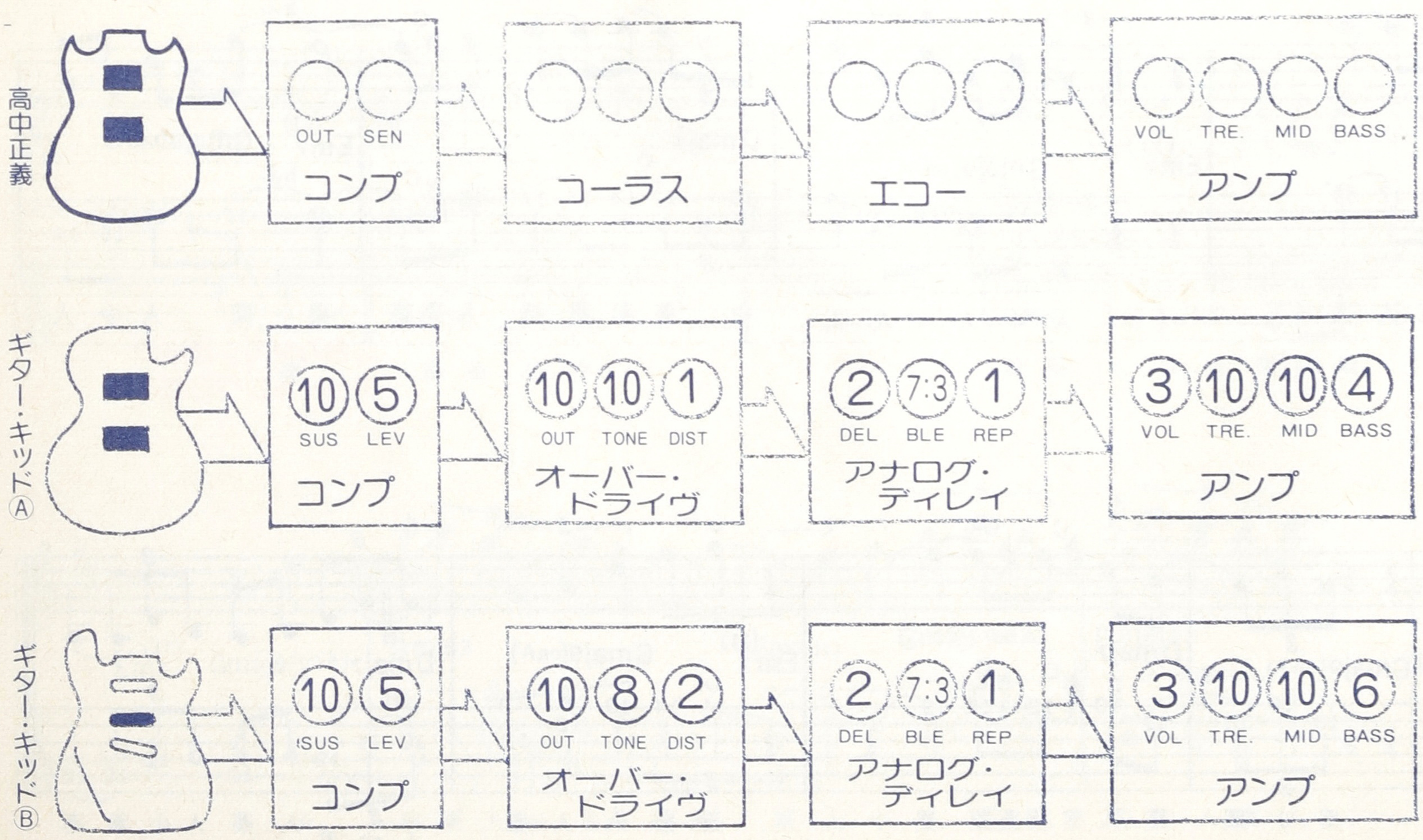
というワケで小指も使った４本指のフィンガリングをマスターしても、右手の方がそのスピードに追いつけないんじゃ何にもなりません。そこでこういう速弾き16分音符続出フレーズの場合にはオルタネイト・ピッキングを使うことになります。何やらムズカシそうな名前が付いているけど、早いハナシがダウンとアップを規則正しく交互にするだけのことです。これを徹底的にやることでリズムのノリもよくなることは保証しますヨ。と、ここまで出来たら最後の大問題、右手と左手をシンクロ（同期、同調）させるコトが残っています。何てったってこれが一番ムズカシイんですよネ。冷たいようだけどこれは何度も何度も反復して練習するしかないでしょう。みんなそうやって練習して上手になったんですから……。

それと右手のフォームですが、ソロ・パートに限って言えば、あまりベッタリとしたロック・ギター・スタイルよりは、少し手をブリッジから浮かせたジャズ・スタイルのフォームの方が速弾きには有利です。とは言っても右手のフォームはそうヒョイヒョイと変えられるものでもないので、色々と自分で工夫してみて、色々なスタイルのプレイに通用するフォームを目指すのがよいでしょう。右手のフォームには「必ずこうしなければいけない」というようなキマリはないのです。発見したヤツの勝ちですヨ！

サウンド解説

ブライトなトーン・ニュアンスのオーヴァードライヴ・サウンドは、ヤマハSG＆ブギ・アンプのコンビネイションによるもの。SGは、例によって高中らしいフロント＆リア（フェイズ・イン・ミックス）にセットされていますし、ブギも割と軽めのオーヴァードライヴ・サウンド用のヴォリューム・セッティング（トリプル・ヴォリューム共「5.5～６」）となっているので、オーヴァードライヴしていても、こんなポップなニュアンスが出てくるようです。それに、トーン・セッティングも、特にベース・コントロールは下げ気味のようです。でないと、フロント・ピックアップ特有のウーマン・トーン的オーヴァードライヴ・サウンドが強過ぎて、フロント＆リアならではのブライト＆ポップなニュアンスが少なくなってしまうからです。

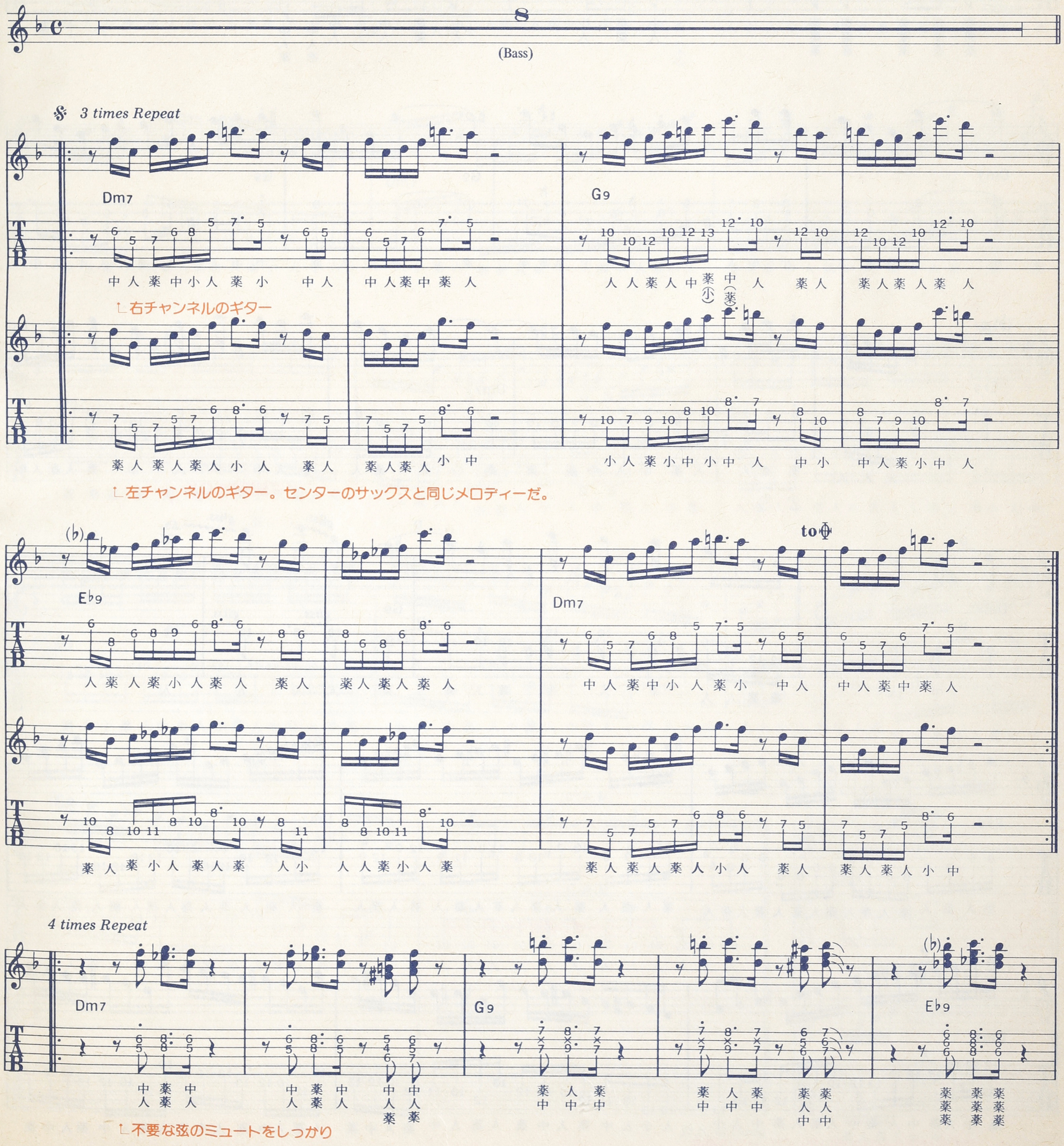
バッキングも、ここではヤマハSGを使っているようですが、ピックアップをコイル・タップしているので、ストラト風に聴こえます。





SEVEN GOBLINS

by Masayoshi Takanaka




1.2.3.
4.
E♭9
Dm7
G9
└12は薬指でもOK
└1フレットずつ移動するフレーズ
└ここからは是非小指も使いたいフレーズの連続


G9
E♭9
Dm7
G9
G9
E♭9
Dm7
C & D
└トリッキーにキメよう
Coda
Dm7
D.S. al Coda

THE SUNSET VALLEY

演奏解説

アコースティック・ギターのソロがヤマになっている曲で、エレキ・ギターの方はオブリガート的なフレーズしか出て来ません。従ってエレキの方はそれほど奏法的に難かしいところはありませんが、部分的にヴォリューム・ペダルを使ってフェイド・イン・プレイにするなど、芸の細かいところはさすがですネ。

オブリガートの3小節目、7小節目のフレーズはどちらも$\frac{14}{1}$と$\frac{14}{2}$を人差指のジョイントで押さえるフォームで、薬指でチョーキングやプリングなどのワザを組合せます。これは典型的なロック・ギターの常用フォームなので、是非覚えておいて損はないですヨ。このタイプのフレーズはエンディングの方でもまた使われていますから、さがしてみてください。

さて問題のアコースティック・ギターのパートですが、愛器のマーチンD—21を使って小粋な仕上がりになっていますネ。このソロは単なるアドリブではなくて、色々と考えながら創ったフレージングでしょう。そのためかフィンガリングの方もいわゆる“手なり”ではなくて、ポジションの移動も多くなっています。アコースティック・ギターの場合は3〜6弦は響きもあまり良くないし、リードの場合はフィンガー・ノイズも気になってしまうので、なるべく1、2弦を多用して弾くのが普通ですが、スケール的なフレーズではそうもいかないので、その辺のフレーズの組み合わせみたいなものがエレキよりも難かしいのですね。それとチョーキングもあまり使えないので、どうしてもポジションの移動が多くなってしまうのです。

楽譜では小指を使う指定になっていますが、後半のスケール的なフレーズ以外はほとんど薬指でも弾けるはずです。またフレーズが比較的ゆっくりとしているので、もっと別のポジションを使って弾くことも十分に可能です。各自研究してみると面白いでしょう。響きやノイズの問題を気にしなければ、もっと楽なポジションで弾ける部分もあるはずですよ。エレキを弾きなれている人はその方がいいかもしれませんネ。

右手の方はレコードを聴く限りややソフトなタッチで弾いているようですが、実際にみんながステージなどでプレイするときは強目にピッキングしないと音にならないので注意してください。

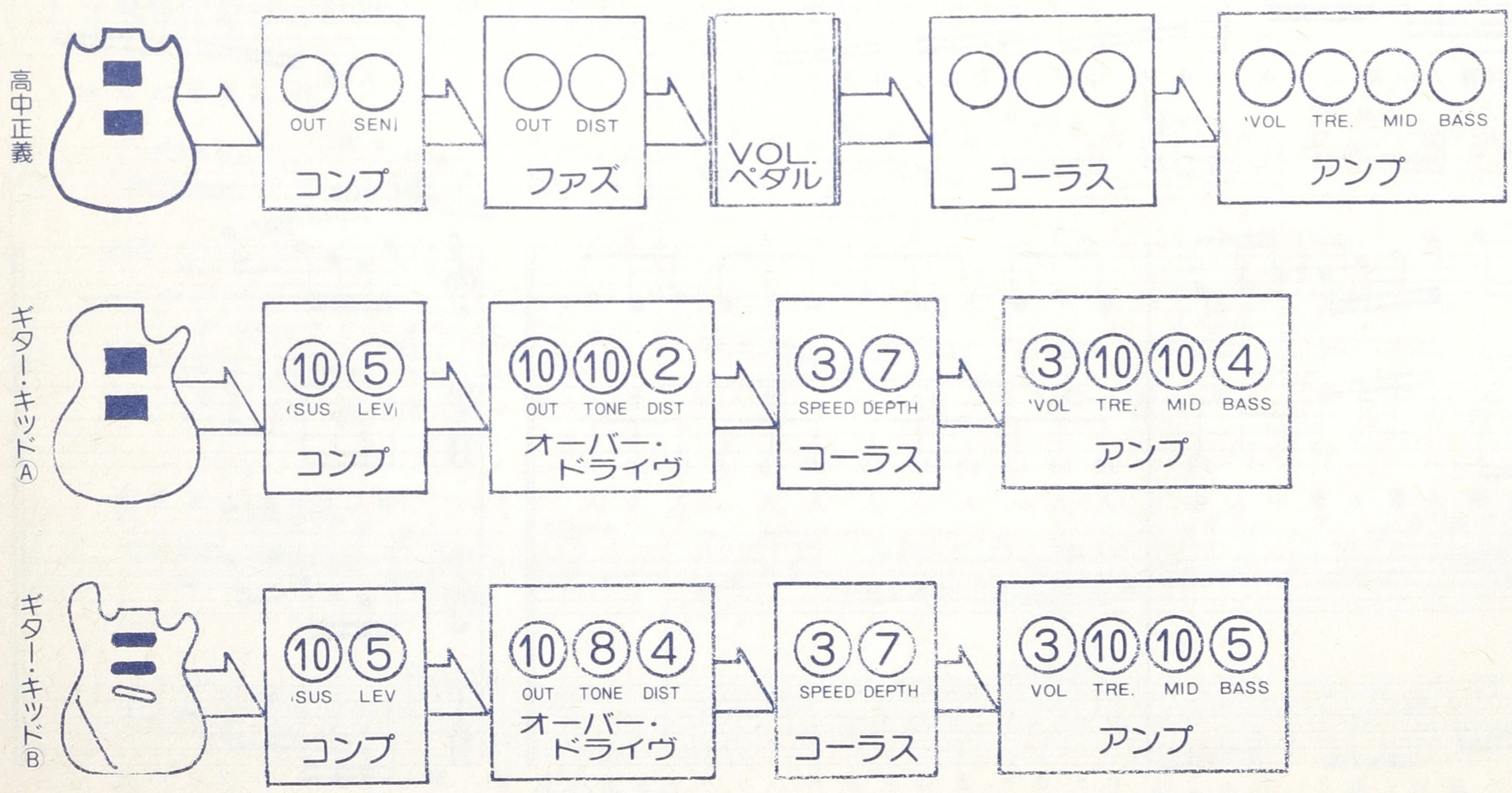
サウンド解説

ソロはマーチンのアコースティック・ギターで、テーマ・メロディーは、ソリーナ（ストリングス・シンセサイザー）でピッチ・コントロールしたヴォコーダーによって、プレイされています。

2本のエレクトリック・ギター・パートは共にコーラス・マシーンが隠し味として活用されていますネ。コンプレッサーも、多分どちらにもONでしょうし……。

リードは、フロント・ピックアップをファズでオーヴァードライヴさせたギター・サウンドです。そこにコーラスが絡まり、実に効果的なエコー・エフェクトを醸し出しています。（コーラス・マシーンって、エコー・マシーンの兄弟分ですから、エコー・エフェクトも若干持っているんですよネ。）

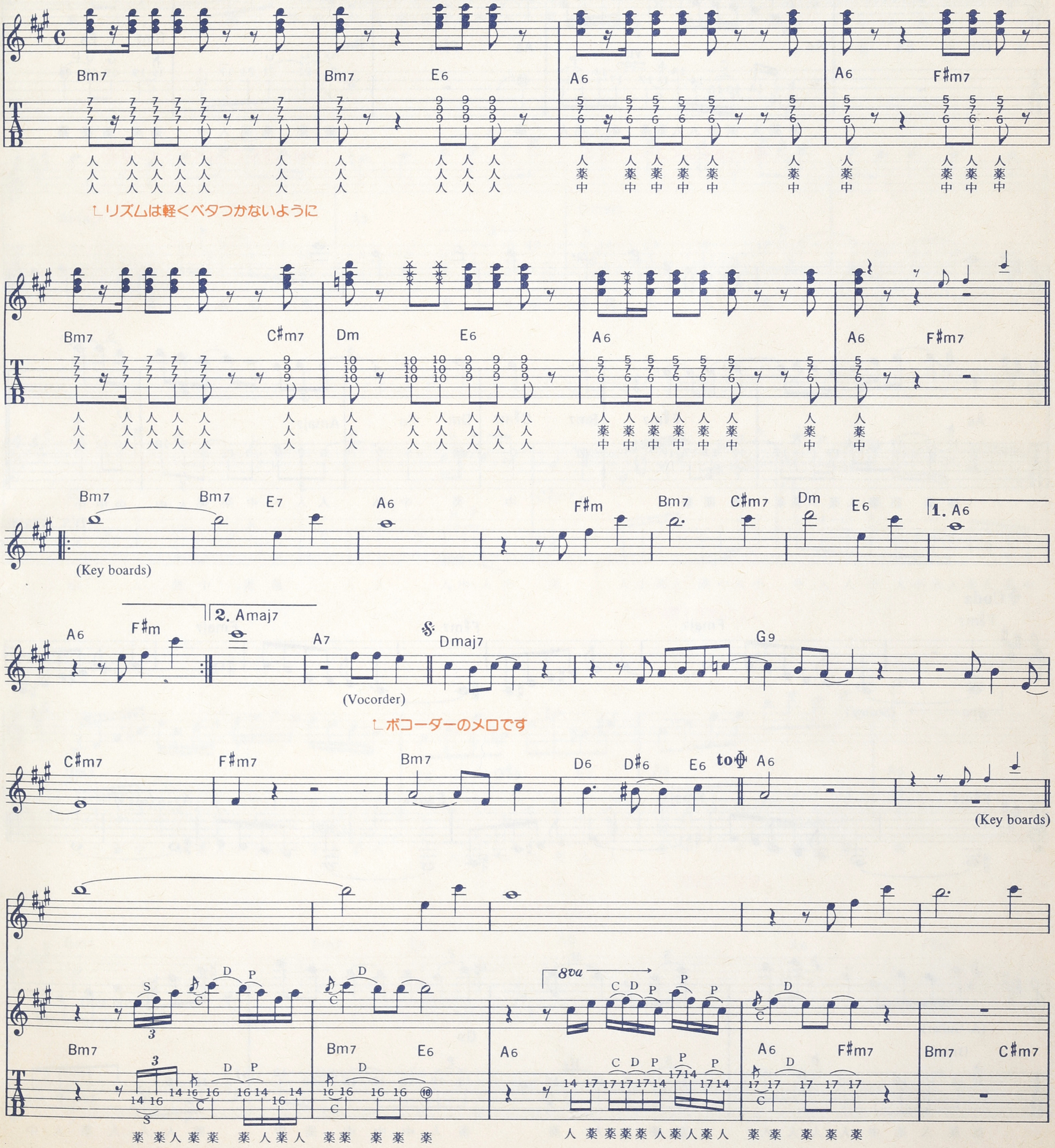
バッキングは、フロント＆リア・ミックスのクリーン・サウンドにコーラス・マシーンとコンプレッサーでメイク・アップ。とにかくクリーンであることがキー・ポイント。





THE SUNSET VALLEY

by Masayoshi Takanaka




Dm E6
A6
A6 F♯m
Bm7
Bm7 E6
∟思いっきりよくスライドする
∟Vol.ペダルでフェイド・インする
A6 F♯m7
Bm7 C♯m7
Dm E6
Amaj7
A7
D.S. al Coda
Coda
F♯m7 Fmaj7 F♯m7 Fmaj7
8va (Strings)
F♯m7 Fmaj7 Esus4 A7-5 (on E♭)
(A. Guitar)
Dmaj7
G9


C♯m7
F♯m7
h.C.D.P
Bm7
D6
D♯6
E6
Amaj7
A7
Dmaj7
G9
H P
C♯m7
F♯m7
高中選手得意のフレーズ
Bm7
D6
D♯6
E6
A6
A6
指使いに注意
この移動をすばやくキメる
Bm7
Bm7
E6
A6
A6
F♯m
(Key boards)
Bm7
C♯m7
Dm6
E6
A6
A6
F♯m


8va
Bm7
Bm7 E6
A6
A6 F♯m7
Bm7 C♯m7
Dm6 E6
A6
A6 F♯m
Bm7
ロック・ギター独特のフレーズ
Vol.ペダルで
フェイド・イン
Bm7 E6
A6
A6 F♯m
Bm7 C♯m7
この移動をすばやく
Dm6 E6
A6
A6 F♯m
Bm7
Bm7 E6 A6 A6 F♯m Bm7 Dm6 E6 A6 A6 F♯m
Repeat & F.O.



It's
THE SUNSET VALLEY
星を隠した
雲さえ晴れる
MY RAINBOWLAND

It's
THE EVENING BREEZE
風が運ぶよ
乾いたメロディー
MY PRECIOUS TIME

THE SUNSET VALLEY
Lyric by Choux SUZUKI

THE MOON ROSE

演奏解説

ちょっと聴くとサラリと聞き流してしまいそうな曲ですが、実際にはかなりの力量を必要とするプレイばかりが出て来ます。まず第一にノン・ディストーションのナチュラル・サウンドなので、ゴマカシがききません。第二に複音プレイが入るので、その前後のポジショニングに制約があります。第三に高中選手の得意なドリアン・スケールはもちろんのこと、オーギュメント・コードに対応するホール・トーン（全音）スケールなどの色々なスケールが盛り込まれています。第四にメロディー・ラインを飾るためにスライドなどのフィンガー・テクニックが多用されています。

とまァ、ちょっと数え上げただけでも多数のポイントが出て来るわけですネ。このうち何と言っても重要な点は、ディストーションが掛かってないことでしょう。こうなると基本的なピッキングやフィンガリングが悪い人はアラがモロに出てしまうものです。そこで少しでもアラを目立たないようにするために、ギター・キッズのみんなはコンプレッサーのレベルを少し下げて、アタック音をツブしてやるとピッキングのタッチが安定して聞こえますよ。ただしこのときサステインをあまり上げ過ぎると不自然になってしまうので気を付けましょう。

次はフィンガリングですが、もうこれはとにかく指が動かないことにはどうしようもないのです。ひたすら練習あるのみ!! それと小指を使った方がベターなフレーズが結構多いので、三本指と四本指のフィンガリングをうまく使い分けて弾くといいですネ。

高中選手はポジションのチェンジやメロディーの色付けにスライド（バーを使ったいわゆるボトル・ネック奏法ではない）を使うことが多いのですが、この曲では特に大胆にスライドやグリッサンド（スライドの中でも特に音程の差が大きかったり、トリッキーな感じのするものを言う）が多用されています。テーマ・メロディーの部分なんかは“これでもか！”というほどに使われているので、みんなも思いっきりプレイしてください。ただ特に下降のスライドは行き過ぎちゃうことがあるので、ブレーキもしっかりネ。

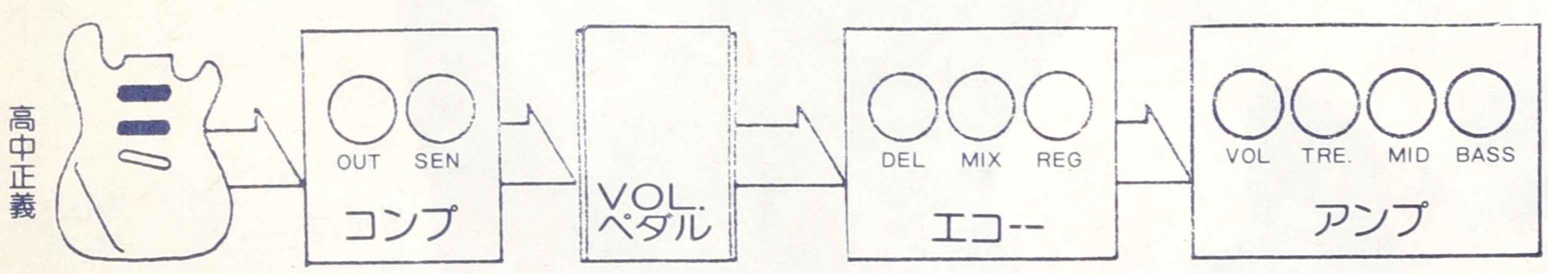
ホール・トーン・スケールはどうしてもフレットが移動するので慣れないと弾きにくいものです。スムーズに移動できるように反復練習しましょう。その他のスケールを利用したフレーズは小指が必要になる場合がほとんどなので、これもみっちり訓練することですネ。

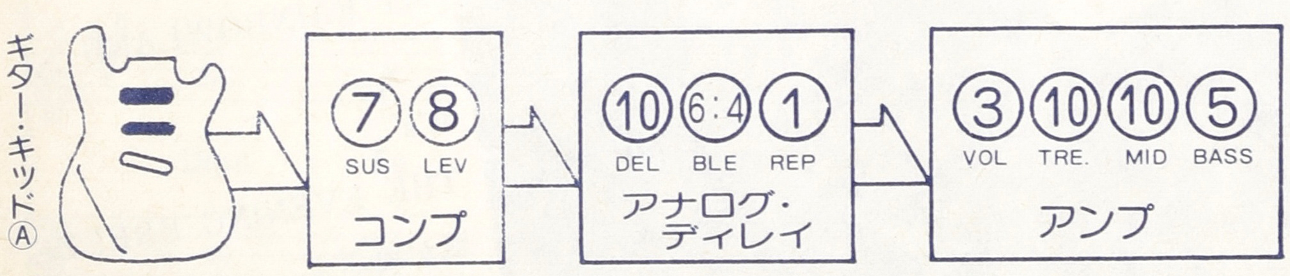
サウンド解説

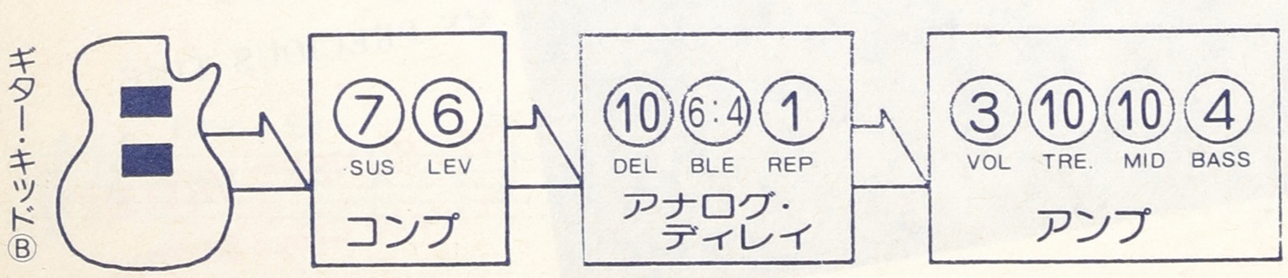
ここでは、ストラトキャスターのハーフ・トーン（フロント＆センターの方）をリードにもバッキングにも使っています。

ヴォリューム・ペダルを使ったフェイド・イン奏法が生み出すヴァイオリン・トーンには、エコー・エフェクトが掛かっています。アナログ・エコー（ディレイ）マシーンの最長ディレイ・タイムぐらいの、つまり400ミリ秒前後のロング・ディレイで、リピートは1回キリだと思います。――高中サウンドに少しでも近ずきたいのなら、やはりエコー・マシーン、ヴォリューム・ペダルあたりのエフェクツも持っていなくては、しょうもないようですネ!?

また、コンプレッサーは例によって全編でONでしょう。そう、ストラトでロック的リード・ギターをキメるには、やはりコンプを掛けるか、あるいはオーヴァードライヴさせないと、チョッと線が細過ぎるんですネ。で、バッキングは今回ライン録りだと思います。









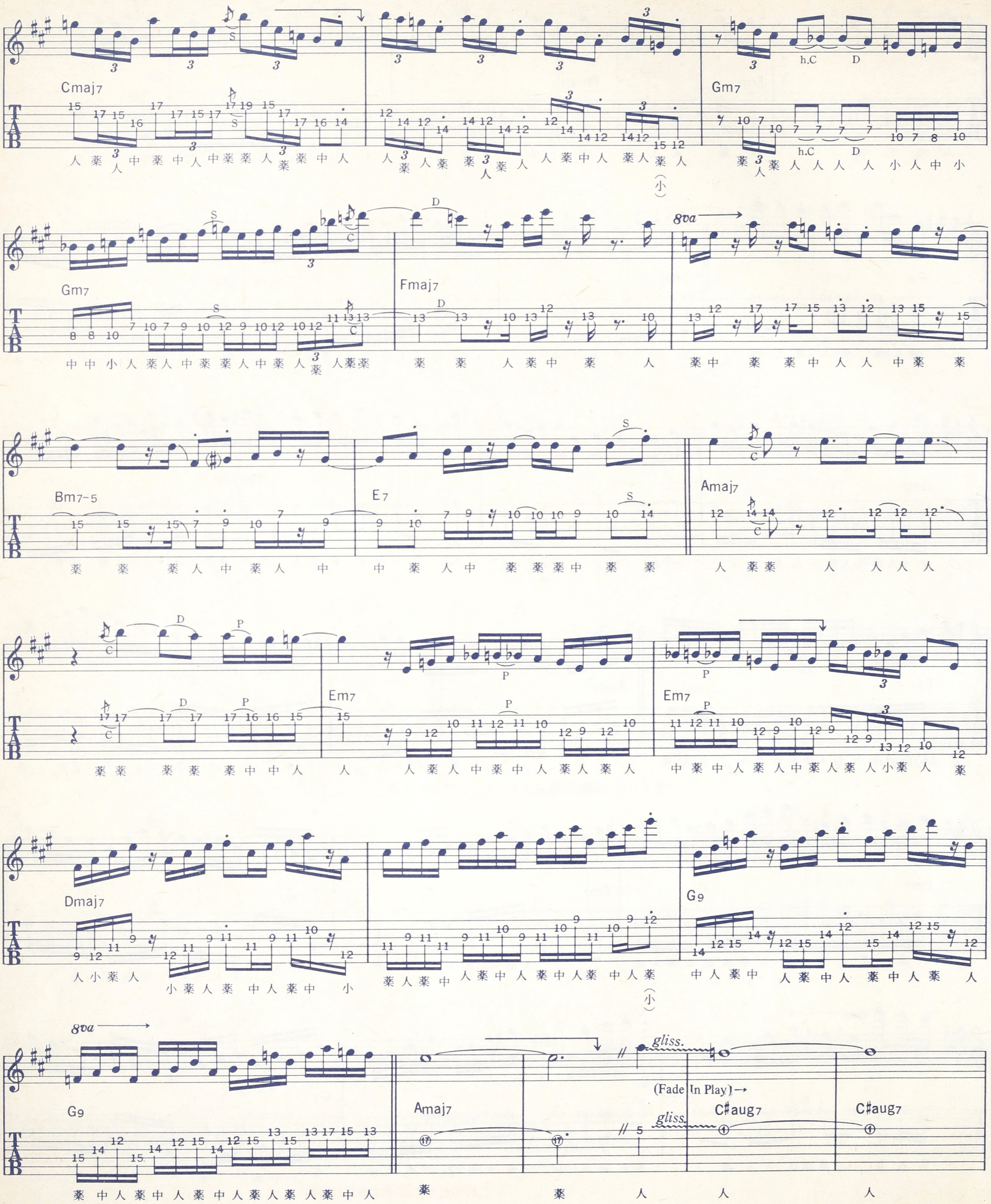
THE MOON ROSE

by Masayoshi Takanaka

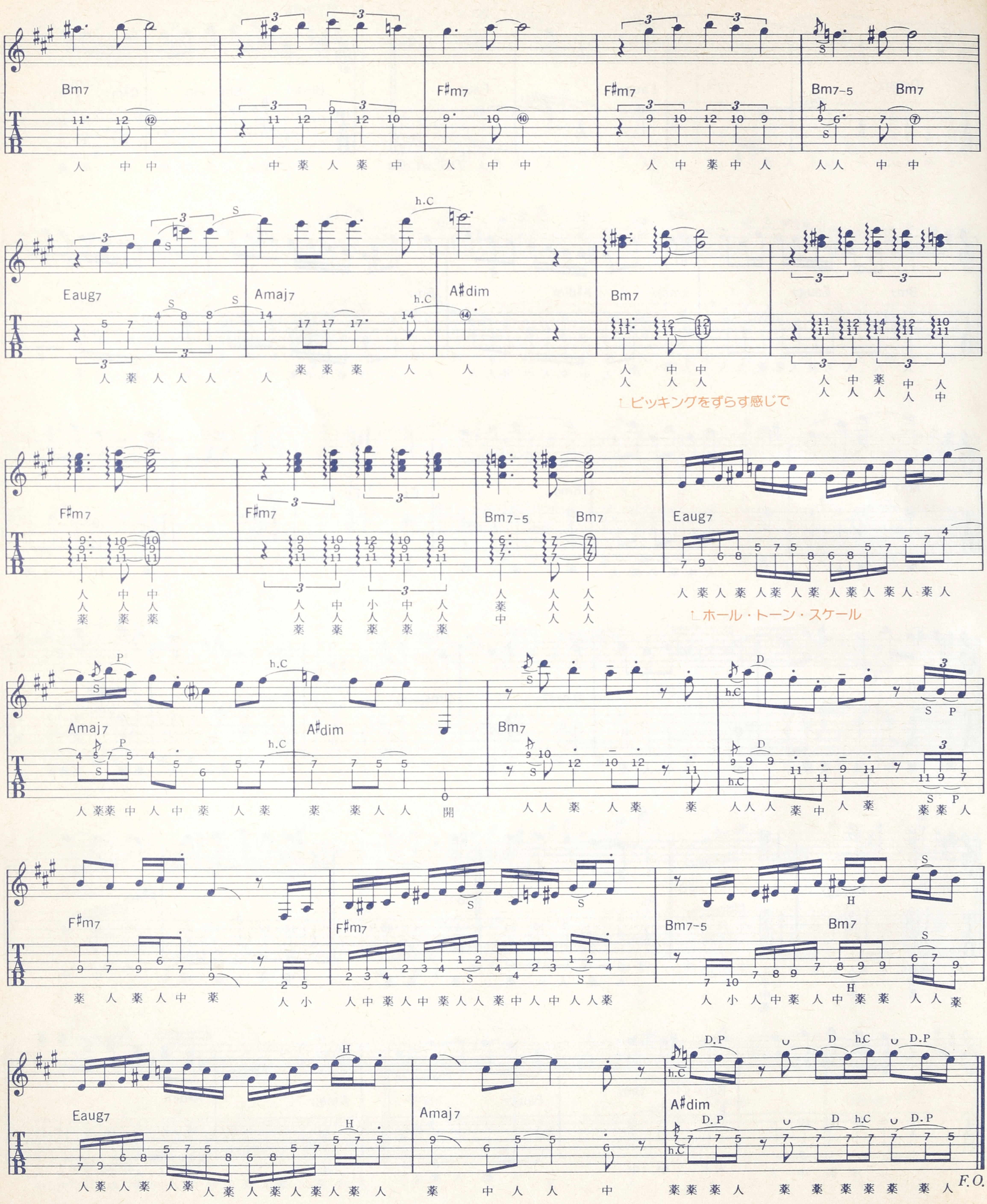


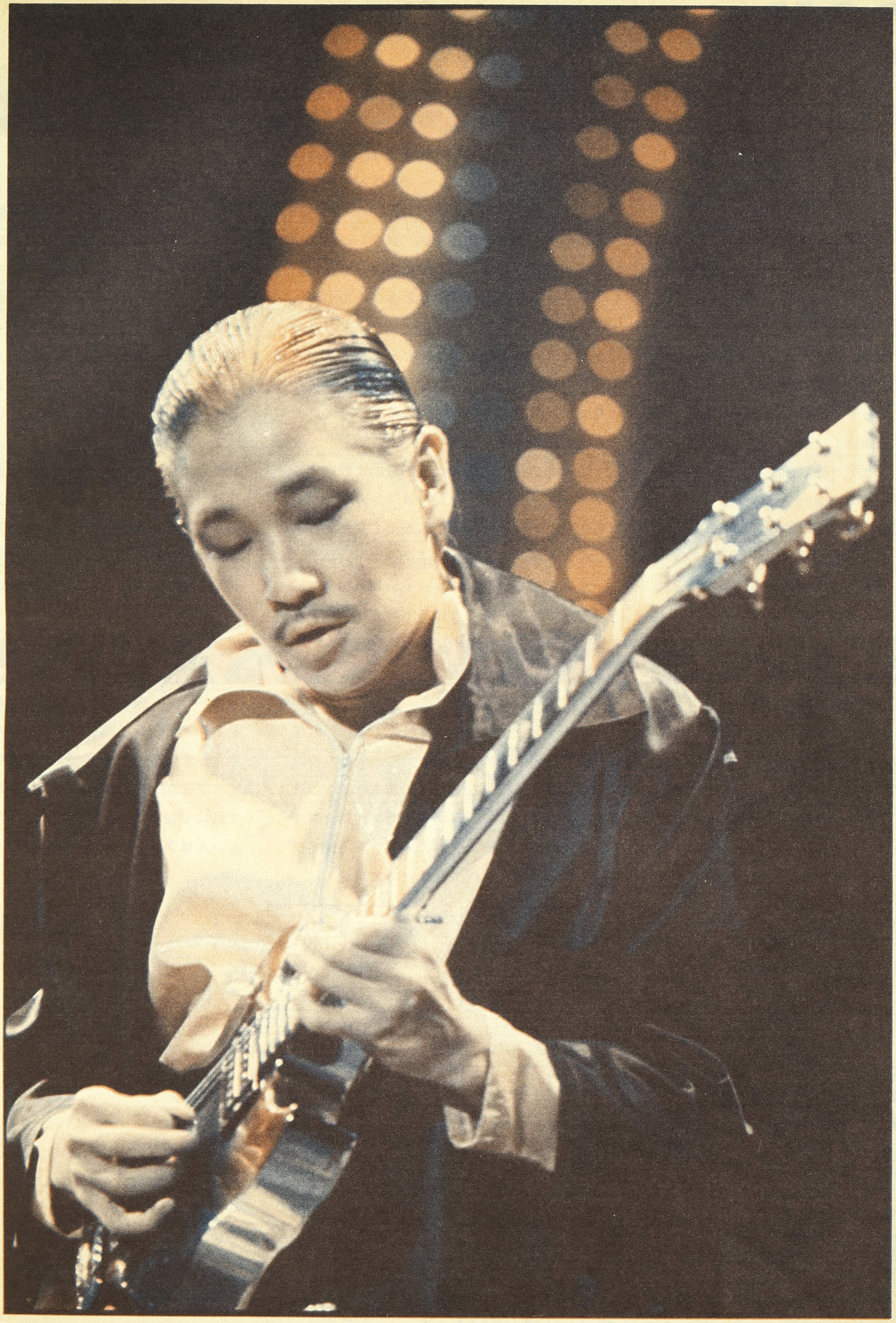

Bm7
Bm7
F♯m7
Bm7-5
Bm7
Eaug7
Amaj7
A
A♯dim
Bm7
Bm7
F♯m7
Bm7-5
Bm7
Eaug7
Amaj7
A
C♯aug7
Dmaj7
Fmaj7
G
軽くはずんで
Cmaj7
Gm7
Gm7
Fmaj7
Bm7-5
E7
Amaj7
Em7
小指が活躍するフレーズ


Em7
Dmaj7
G9
└ピッキングのタイミングに注意
G9
Cmaj7
Gm7
Gm7
Fmaj7
Bm7-5
E7
Amaj7
└人差指のスライドをしっかりキメる
Em7
Em7
Dmaj7
8va
G9
G9
└このあたりの運指は練習が必要


Cmaj7
Gm7
h.C
Gm7
Fmaj7
8va
Bm7-5
E7
Amaj7
Em7
Em7
Dmaj7
G9
8va
G9
Amaj7
gliss.
(Fade In Play)→
C♯aug7
C♯aug7


Coda
gliss.
Dmaj7
Faug7
Faug7
D.S. al Coda
Bm9
Bm7 (onE)
C#m7
F#m7
Bm7
Eaug7
Amaj7
A#dim
Bm7
Dm6
Am7
F#7
Bm9
E7
E7-9
D6
A6
G
A (onG)
D (onF#)
Dm6 (onF)
A (onE)
B9 (onD#)
D6
E7(13 -9)
A6
A6
Bm7
F#m7
F#m7
Bm7-5
Bm7
Eaug7
Amaj7
A#dim


Bm7
F#m7
F#m7
Bm7-5 Bm7
Eaug7
Amaj7
A#dim
Bm7
ピッキングをずらす感じで
F#m7
F#m7
Bm7-5 Bm7
Eaug7
ホール・トーン・スケール
Amaj7
A#dim
Bm7
F#m7
F#m7
Bm7-5 Bm7
Eaug7
Amaj7
A#dim
F.O.



SOON

演奏解説

ちょっぴりサンタナ風のサウンドを感じさせる曲です。やや骨太のコシのある音色を出すためには、ピッキングを力強くキメることが大切ですネ。イントロなどで出てくる1オクターヴのユニゾンは、高中がよく使うオクターヴ・ダブラーではなく、ジャズ・スタイルのオクターヴ奏法です。この場合両方の音をピックで弾く、両方の音を指で弾く、低音をピックで、高音を指で弾く、という三種類のパターンがありますが、この曲では両方の音をピックで弾いているようです。そこで不要な弦のミュートが絶対必要になるのですが、3弦や2弦などの音を出す弦の間にはさまれる弦は人差指の腹を使って確実にミュートしましょう。また1弦が余る場合は小指の腹でミュートします。その他の低音弦は中指と薬指で軽くミュートしておくといいですネ。

テーマ・メロのサビの部分では、非常にロック・ギターらしいフレーズを使ってキメています。楽譜でいうと𝄋印のところですが、そこの2小節目のチョーク・ダウンからプリングの連続ワザが少々過激です。もっと高いポジションならどうってことないのですが、このポジションだと$\frac{2}{3}$へ人差指をとどけるのがかなりツライはずです。どうしても指がとどかない人は、ちょっとばかりウヤムヤになりますがスライド気味に人差指を持っていくしか方法はありませんネ。

この曲のテーマ・メロは部分的に転調するメロディーです。このためフィンガリングもちょっとやっかいなところが出て来ます。タブ譜に注意してください。テーマ・メロディー全体としては割にスロー・テンポなので、落ち着いてプレイすればフィンガリングでとまどうこともないはずです。

さて中間のアドリブ・パートですが、ここでは1音半のチョーキング、低音弦のチョーキング、6連符の掛け上がりなどのクセモノが控えています。特に1音半チョーキングは1弦ということもあって、思いっきりの良さが欲しいところです。低音弦のチョーキングは常識として普通とは逆に6弦から1弦方向に向かって引張り上げるようにします。ただし4弦に限っては普通と同じようにチョーク・アップする場合もあるようです。

後半ではテーマ・メロを1オクターヴ上げた形が出て来ますが、運指はこの方が楽でしょう。エンディングではイントロと同じオクターヴ・プレイが出て来ます。ディストーションを切るのを忘れないでくださいネ。

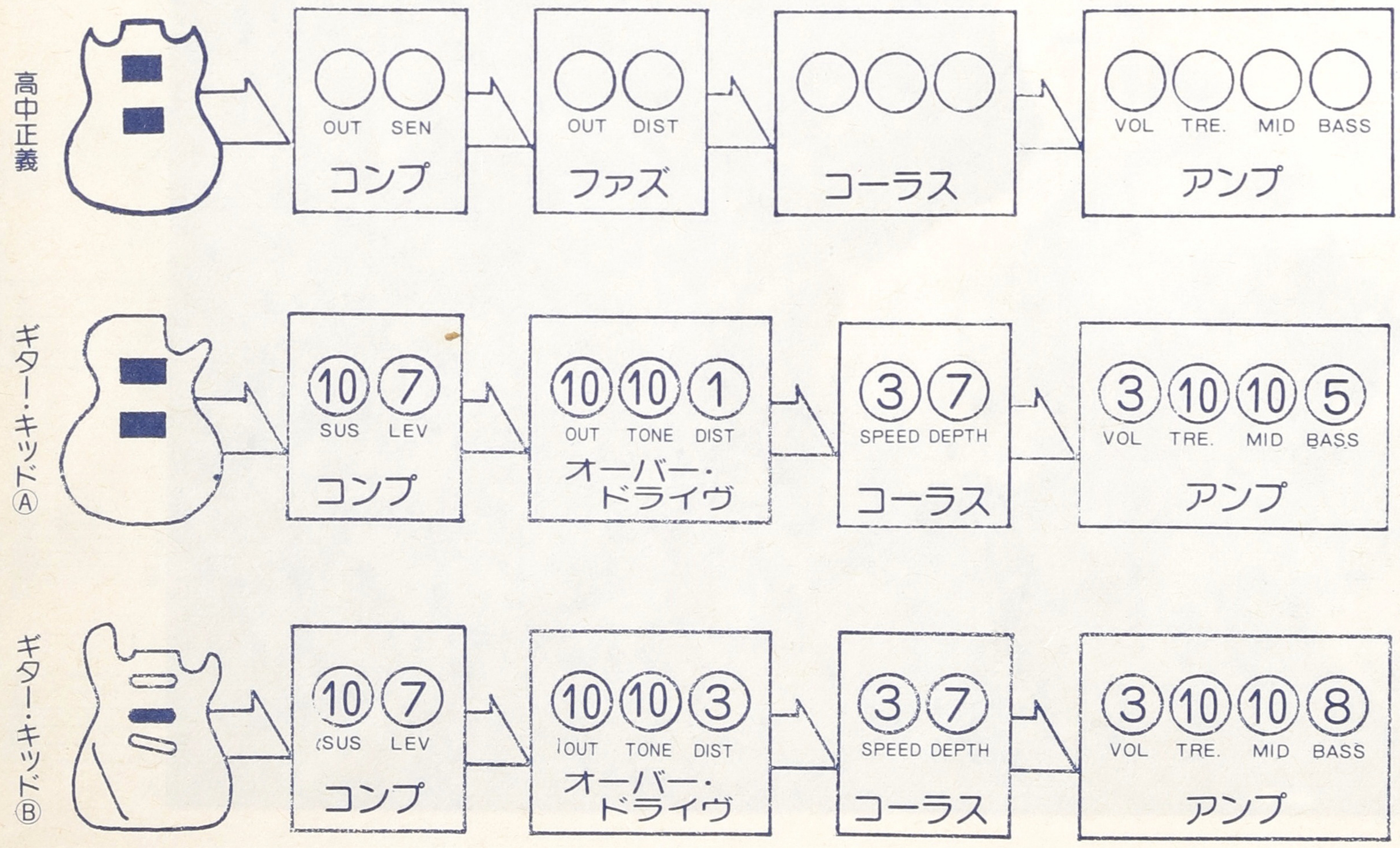
サウンド解説

これは、オーヴァードライヴ・サウンドにコーラス・エフェクトを絡めたパターンです。高中以外のギタリストも良く使うナウいギター・サウンドと言えましょう。

ピックアップは、前半フロント&リア・ミックスで、後半のソロはリアのみ。ストラトなら、センター・ピックアップをフロント&リアの代用とします。

オーヴァードライヴ度は軽めです。『虹伝説』全般の傾向のようです。で、やはりコンプレッサーも併用していて、サステインはそれで出しています。ファズの掛かりはミニマムで良いでしょう。マァ、ストラト・タイプは、やはり若干上げて欲しいですが。

コーラスも軽めです。後半のソロにはミディアム・ディレイのシングル・リピートが薄く入っているのですが、コーラスにもエコー・エフェクトがわずかにありますから、大して気にしなくても良いでしょう。コーラスのない人はフランジャーかフェイザーで代用。





SOON

by Masayoshi Takanaka

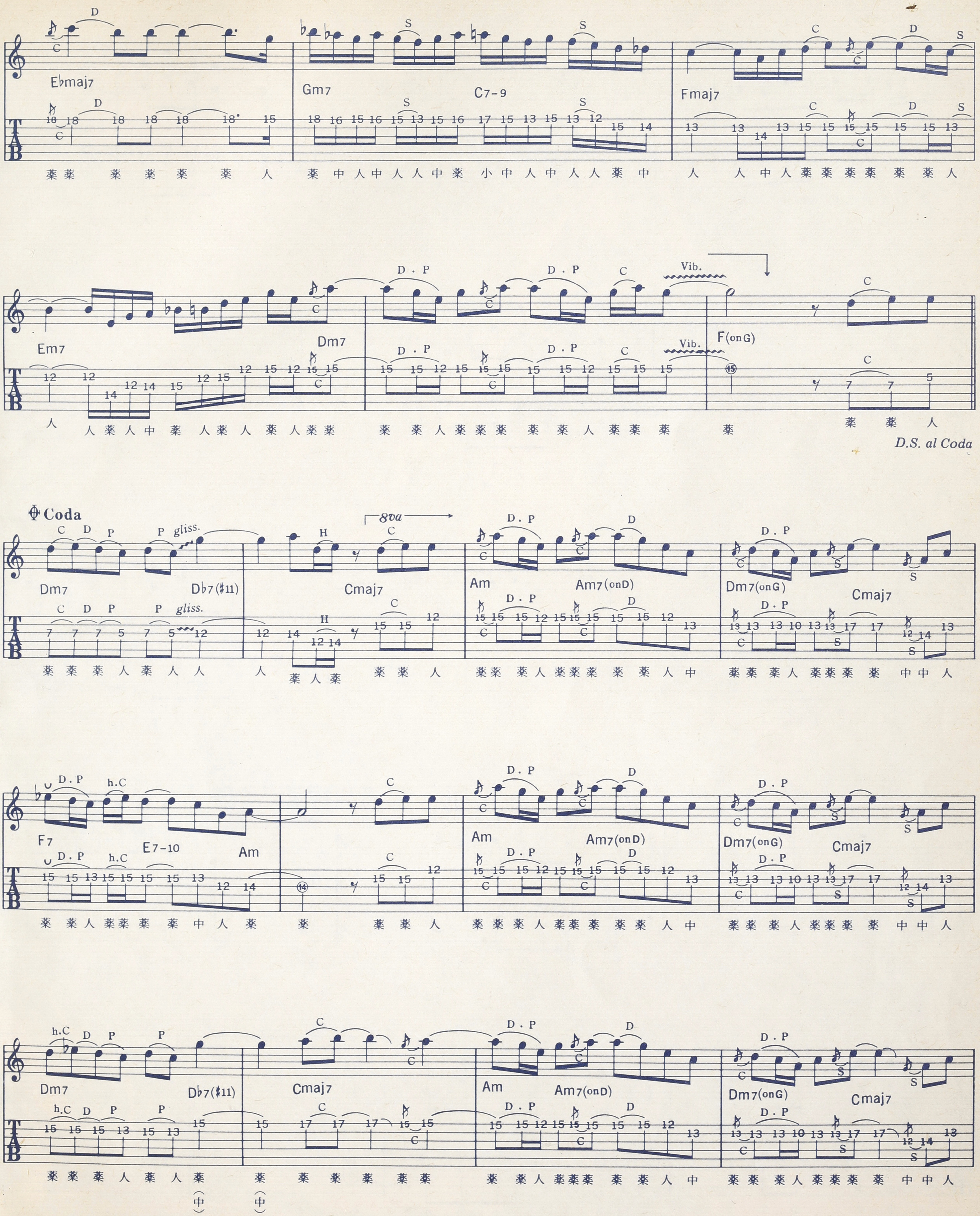



Dm9
Em7
Dm9
Em7
Dm9
Em7
Dm9
Em7
2.
8va
G13
A♭maj7
A♭maj7(onB♭)
E♭maj7
Gm7
C7-9
Fmaj7
Em7
Dm9
Dm7
F(onG)
Am
Am7(onD)
Dm7(onG)
Cmaj7
F7
E7-10
Am
このプリングはかなりキツイ
Am
Am
Am7(onD)
Dm7(onG)
Cmaj7
to
Dm7
D♭7(♯11)
Cmaj7
gliss.
Vib.



└ 普通と逆に１弦方向に引っ張るチョーキング　└ かなり力のいるチョーキング


Dm9
Em7
Dm9
Em7
Dm9
Em7
Fm9
8va
↳指使いに注意
Gm7
Fm9
Gmaj7
A7−9
↳このあたりの指使いはやや変則的
Dm9
Em7
Dm9
G13
8va
↳このソロのハイライト的フレーズ
A♭maj7
A♭maj7(onB♭)


E♭maj7
Gm7
C7-9
Fmaj7
Em7
Dm7
Vib.
F(onG)
D.S. al Coda
Coda
gliss.
D♭7(♯11)
8va
Cmaj7
Am
Am7(onD)
Dm7(onG)
F7
E7-10
h.C


D.P
h.C
lh.C
D
F7
Am
Dm9
Em7
G13
Soon
1.
2.
F.O.



MAGICAL NIGHT LIGHT

演奏解説

独立した曲というよりも、次に収録されている「RAINBOW PARADISE」への導入部としての意味を持った曲です。そこでフレーズ自体はそれほど注目するべきものがないのですが、最後のところに次の曲のメロディーをさりげなく持って来たりするところがニクイですネ。

楽符の方では一応Rチャンネルとしチャンネルの二本のギターでプレイするようになっていますが、実際にはもう一、二本かくし味的にダビングされているようなところもあります。また音をパンニングまたはエコーで左右に拡げたりして、左右の定位も不定になっている部分があるので、この場合は適当と思える方のギター・パートに書き入れてあります。まァギター・キッズのみんなはそんな小さなことにはこだわらないで、全体の雰囲気を出せるようにコピーしてみてください。

奏法的な特徴としては、ほぼ全パートにわたってヴォリューム・ペダルを使ったフェイド・イン奏法が使われていることです。高中のフェイド・イン奏法はトレード・マークみたいなもので、『セイシェルズ』を始めとして色々な曲で使われているテクニックですネ。これはヴォリューム・ペダルさえあれば誰にでも簡単にできる弾き方で、まずヴォリュームを0にしぼっておいてピッキングして、その直後にヴォリュームを上げる（ペダルを踏み込む）だけでOKです。とまァ、簡単なことは簡単なんですが、実際にやってみるとなかなかタイミングが合わなかったりするもので、高中選手のように自由自在に弾きこなすには結構年期が必要かも知れませんヨ。

ヴォリューム・ペダルを持っていない人はどうするかっていうと、これはもうどうしようもないのです。ストラト・タイプのギターはマスター・ヴォリュームのツマミがブリッジのすぐ近くに付いているので、これに小指を引掛けて調節しながら弾くという手がありますが、スピードなどの面で限度があり、レスポール・タイプのギターでは完全にお手あげです。そうバカ高いモノではないので、高中のコピーを目指す人は是非ヴォリューム・ペダルを購入してください。

ディレイはアナログ・ディレイかテープ式のものを使います。あまりオーバーに掛け過ぎないのが、キレイなサウンドにするためのヒケツですネ。

サウンド解説

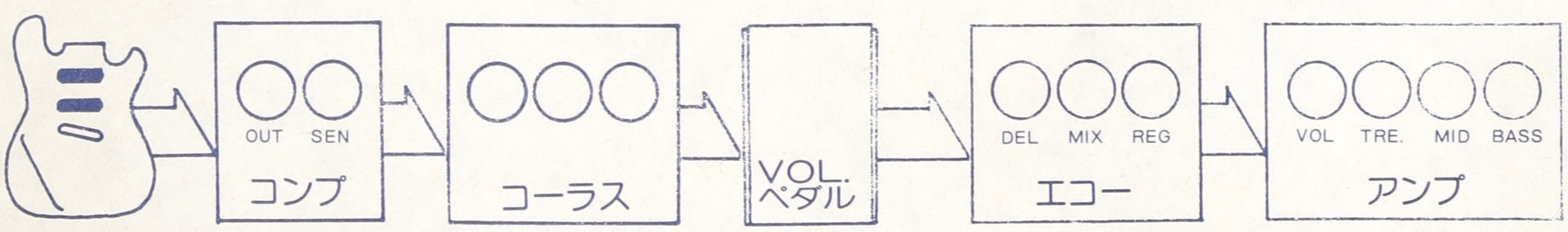
ストラトのハーフ・トーン（フロント＆センター）からコンプレッサー、コーラス・マシーン、ヴォリューム・ペダル、エコー・マシーン、アンプというセッティングによるギター・サウンド。

ストラト、またはテレキャス・タイプのギターなら、マァ、ヴォリューム・ペダルがなくても、ヴォリューム・コントロールでフェイド・イン奏法は可能です。もちろん、レスポール・タイプ、SGタイプ、ESタイプではハードですが。

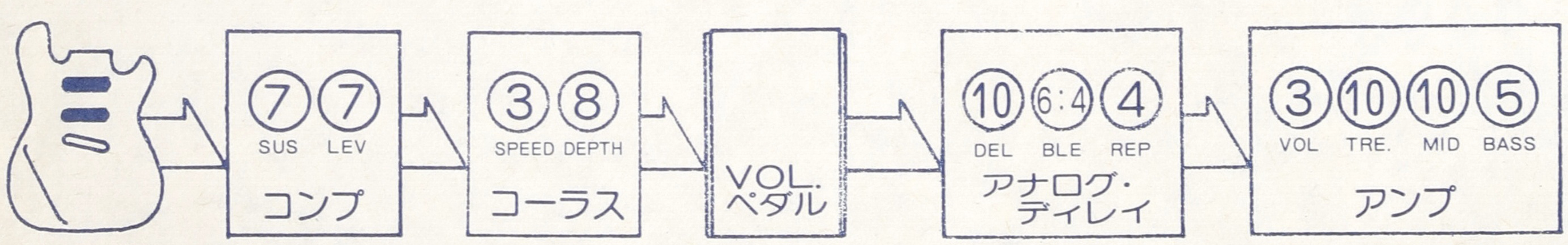
で、コンプとコーラスは無視して、エコー・マシーンは、アンプのリヴァーブ・コントロールで代用。

なんて感じでも、マァ若干気分は出るかもしれませんが、やはり高中同様のエフェクツ類が欲しいですネ。フェイド・イン奏法にしても、ここで聴けるニュアンスは、ヴォリューム・ペダルを使わないと出せません。で、とにかく基本的にはクリーン・サウンドです。

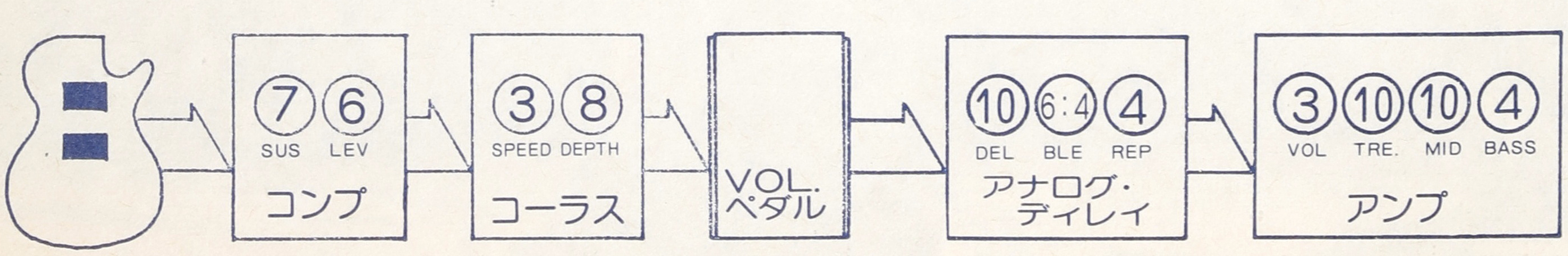
高中正義



ギター・キッドⒶ



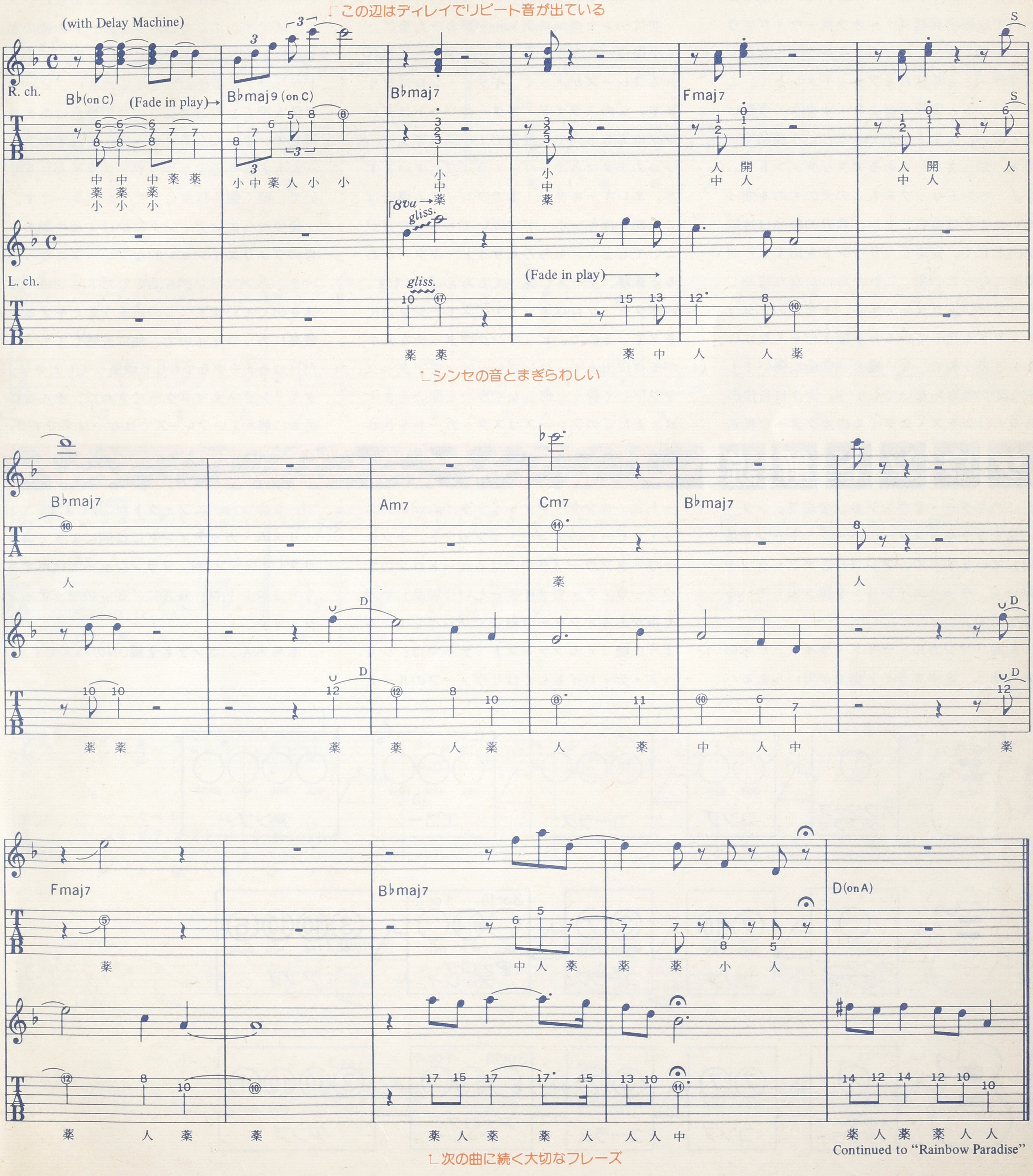
ギター・キッドⒷ





MAGICAL NIGHT LIGHT

by Masayoshi Takanaka



RAINBOW PARADISE

演奏解説

イントロからテーマ・メロディーの前半にかけては秘密兵器（？）オクターヴ・ダブラーの登場です。これはオクターヴァーとかカップラーとも呼ばれるアタッチメントで、これを付けると実際の音より１オクターヴ低い音も同時に出すことができるという便利モノです。割と古くからあるアタッチメントで、ジミ・ヘンドリックスもこのテのものを使っていたことは有名ですが、最近の製品は性能が向上して、安定したサウンドを出すことが可能になったので、これからはかなり普及しそうなエフェクターですネ。まァこのアタッチメントを持っているヒトはまだそんなにいないと思うので、ない場合は普通に弾いてもそう変にはならないでしょう。テクに自信のある人はジャズ・スタイルのオクターヴ奏法で弾いてみるのも面白いですヨ。

次にシンセのメロディーが終わった後に、4小節ばかりスライド・バーを使ったと思われるフレーズが入って、ギター・ソロになります。このスライド・ギターのパートはダビングによるもので、最後の１小節はギター・ソロのアタマとオーバー・ラップしていますネ。エレキ・ギター１本でプレイする場合はこの部分はキーボードに弾いてもらった方がよいでしょう。もちろんサイド・ギターがあるときは、そっちに弾いてもらえばOKです。

ギター・ソロはノン・ディストーションでキメているので、ピッキングのタッチなんかがモロに出ます。コンプレッサーでアタックをツブして弾くと何となくウマく聞こえますヨ。またこのフレーズはスタッカートをきれいにキメて、ハギレのよい感じを出したいフレーズです。ここではスタッカートの音のときは左手の指を少し早めにフィンガー・ボードから浮かせる感じにしてください。ピックで弦を押さえる方法はこの曲の場合はあまり適していません。そういうワケで左手のフォームもあまり極端なロック・スタイルにしないで、軽く握る程度にした方がベターです。

後半からエンディングにかけては中間のソロのヴァリエイション的なフレーズになっていて、ハンマリングを活かしたトリッキーな味を出しています。この辺をうまくキメると最高にカッコイイので、他は失敗してもここだけはうまくやるつもりで頑張ってください。タイミングさえマスターできれば、そんなに過激に難かしいフレーズではないはずですヨ。

サウンド解説

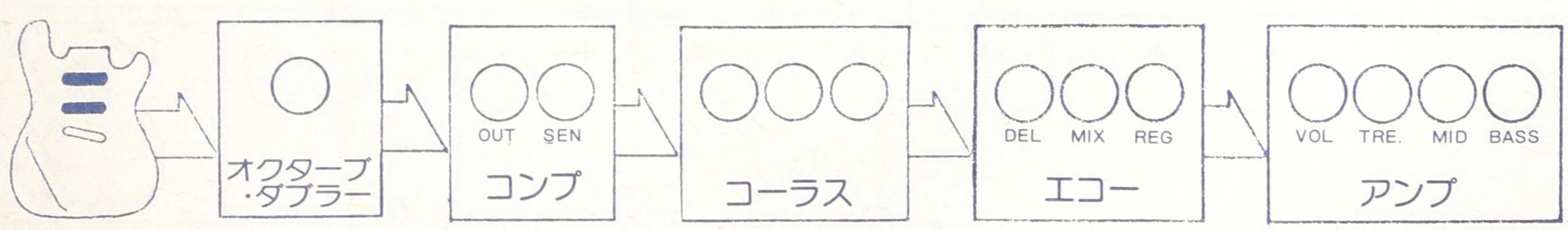
このギター・サウンドも、全編フェンダー・ストラトキャスターのハーフ・トーンを活用しています。で、アレコレとエフェクツを絡めて、ヴァリエイションを弾き出しているワケです。

前曲「マジカル・ナイト・ライト」からの導入部と、途中スライド奏法が用いられるパートは、ロング・ディレイ・タイムwithメニー・リピートのエコー・エフェクト。オクターヴ・ダブラー（高中のはミュートロンのオクターヴ・ディヴァイダーという製品）が薄く掛かってオクターヴ奏法でプレイしているように聴こえるファースト・テーマは、ショート・ディレイもしくはリヴァーブのルーミィーなエコー・エフェクトがONですネ。

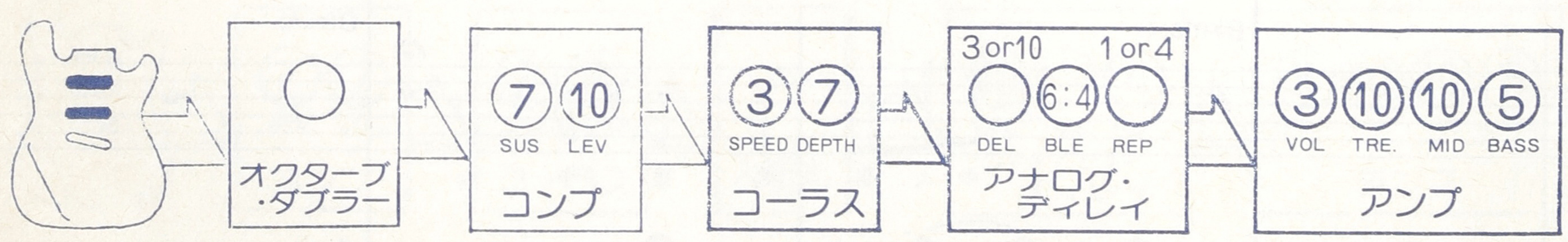
リズム・カッティングには例によってコーラス・マシーンON。フランジャーで代用するなら３コントロール共に「３」のセッティングですネ。

もちろん、コンプも全編ONのハズです。

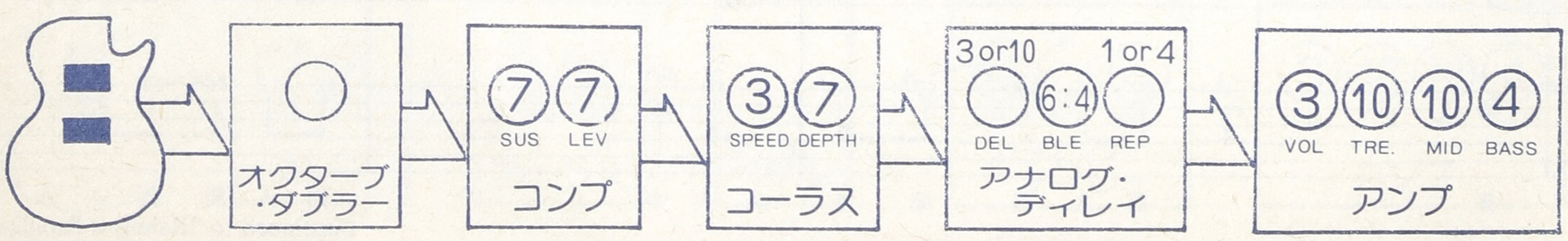
高中正義



ギター・キッドⒶ



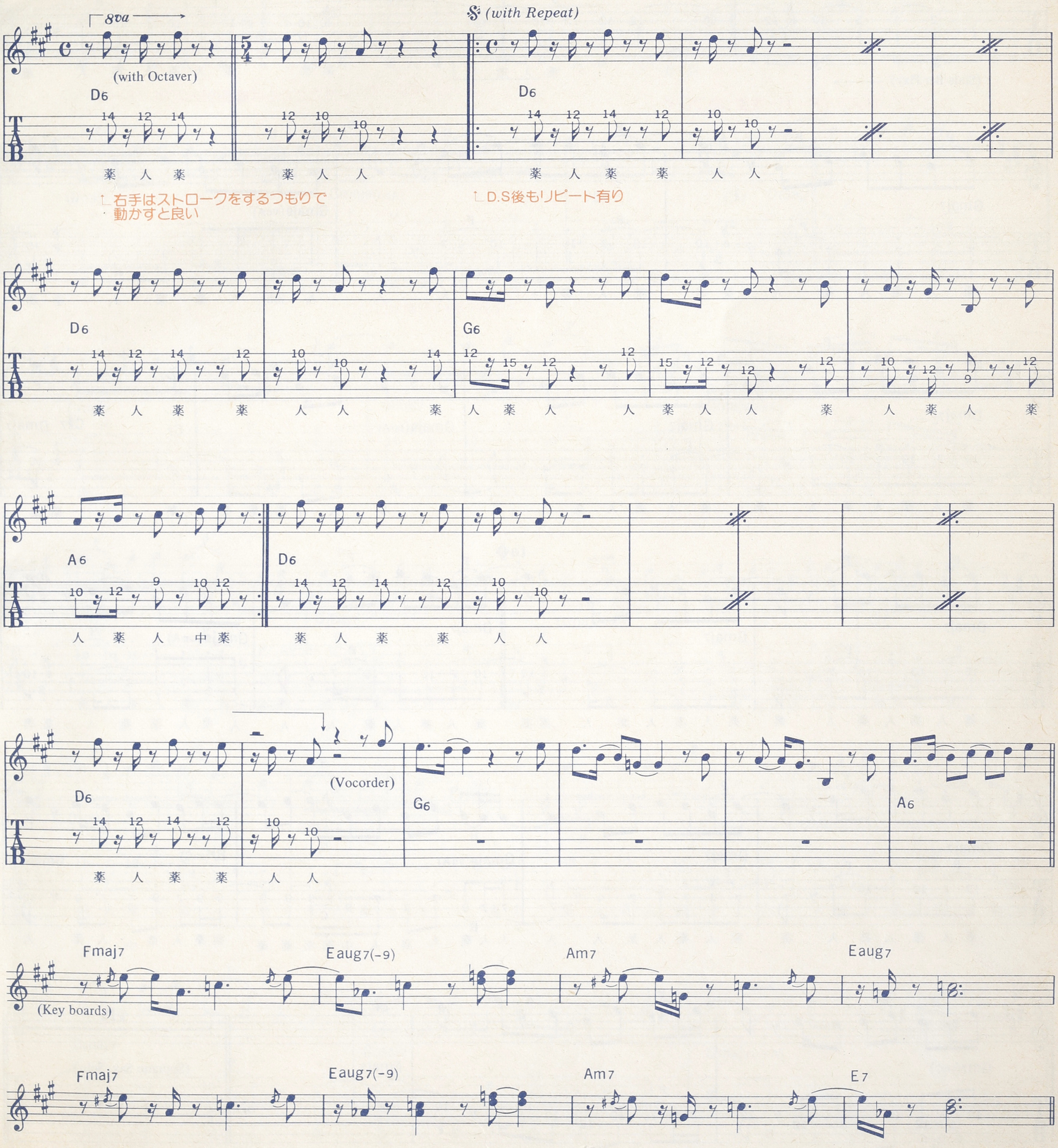
ギター・キッドⒷ



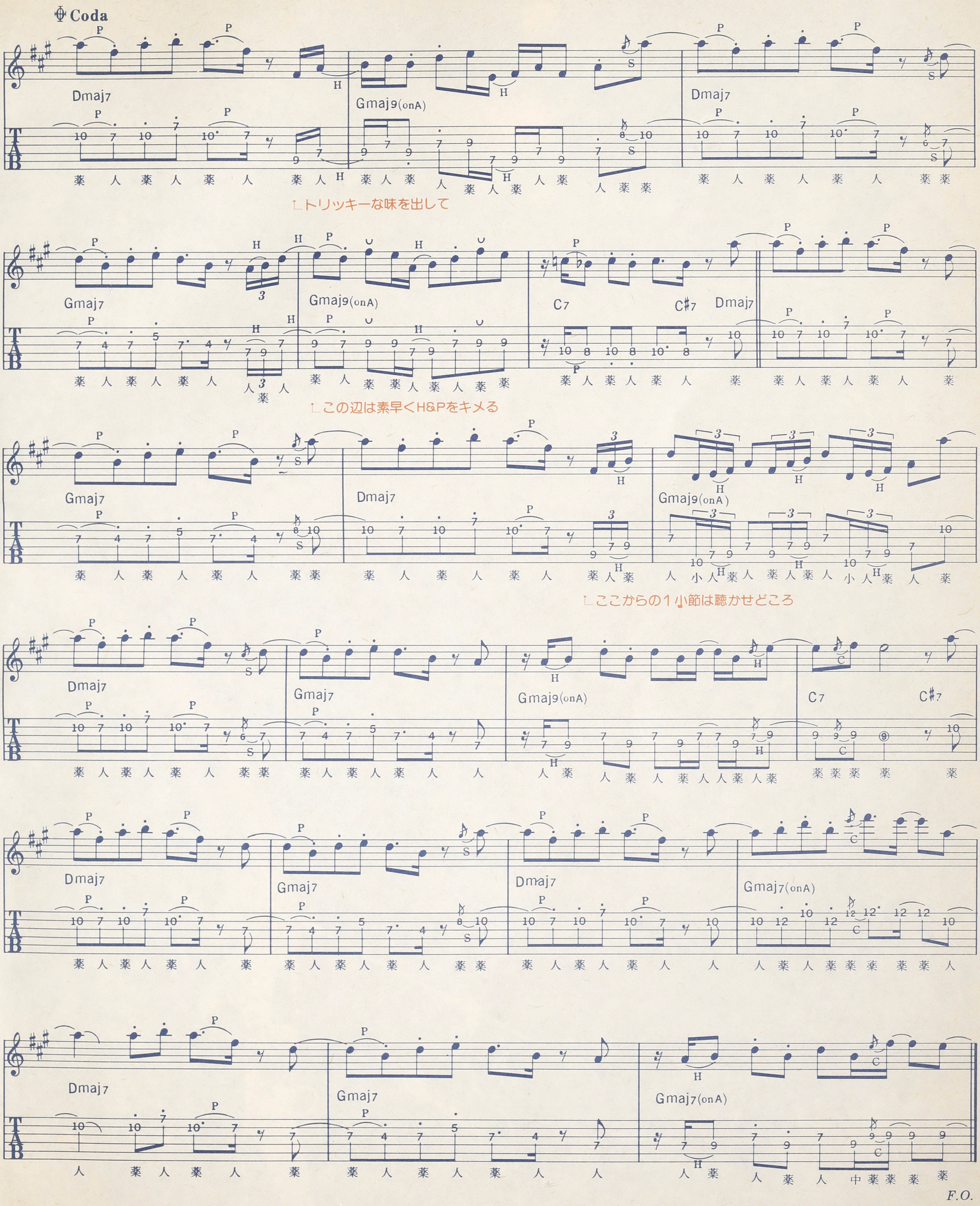


RAINBOW PARADISE

by Masayoshi Takanaka




A
Aaug7
Dmaj7
(Slide Bar Play)
ここだけはスライド・バーを使ったプレイ
ここからは普通のシングル・トーン
Gmaj7
Gmaj9(onA)
Dmaj7
Gmaj7
Gmaj9(onA)
C7
C♯7
Dmaj7
to Φ
Dmaj7
Gmaj7
Dmaj7
Gmaj9(onA)
Dmaj7
Gmaj7
Gmaj9(onA)
B♭(onC)
Gm7(onC)
Gm7(onC)
Fmaj7
15
(Soprano Sax. Solo)
D.S. al Coda


Coda
Dmaj7
Gmaj9(onA)
Dmaj7
└トリッキーな味を出して
Gmaj7
Gmaj9(onA)
C7
C#7
Dmaj7
└この辺は素早くH&Pをキメる
Gmaj7
Dmaj7
Gmaj9(onA)
└ここからの1小節は聴かせどころ
Dmaj7
Gmaj7
Gmaj9(onA)
C7
C#7
Dmaj7
Gmaj7
Dmaj7
Gmaj7(onA)
Dmaj7
Gmaj7
Gmaj7(onA)
F.O.



THUNDERSTORM

演奏解説

タイトルからして何かブキミな雰囲気の漂う曲ですが、特にイントロの部分はディミニッシュ・コードを使ってオーソドックスな(?)ブキミさを出しています。このイントロではオクターヴ・ユニゾンでギターを重ねたりして、結構厚いサウンドになっていますが、楽譜ではスペースの都合もあって三本のギターにまとめてあります。あるいはオクターヴァーの使用も考えられるようですが……。イントロ部分はフィンガリングに関しては特に問題はないと思います。

テーマ・メロディーのところではかなり大幅なスライドを利用したフレーズが目につきますネ。このくらい移動の幅が大きいと、どうしても行き過ぎたり、足りなかったりしがちなので、落ち着いてプレイすることが大切です。また$\frac{10}{1}$での2音チョーキングもかなり過激なので、ノイズが出ないように気をつけながら、なおかつ思いきってチョーク・アップしてください。場合によってはポジションを工夫して$\frac{15}{2}$でチョーキングするようにすると楽かもしれません。

そのあとはツイン・リード風にハーモナイズされたメロディーになっています。一人でプレイするときは上段の下声部を弾いてください。二人以上でプレイするときはリズムをきっちりとそろえて、ノリのよい演奏にしましょう。

D.C.(ダ・カーポ)の17小節前からはピッキングが忙しくなって来ます。違った弦を連続で弾かなければならないので大変なのですが、ゴマ化す方法としてはアタマのところをチョップ風に全部ダウンで弾く手があります。ただこれはあくまで最後の手段ですから、なるべくはオルタネイト・ピッキングで頑張ってみてください。

その後ダ・カーポして最初に戻りますが、終わる場所は「Fine」と書いてあるところです。その前に一度リピートするのを忘れないようにしてください。

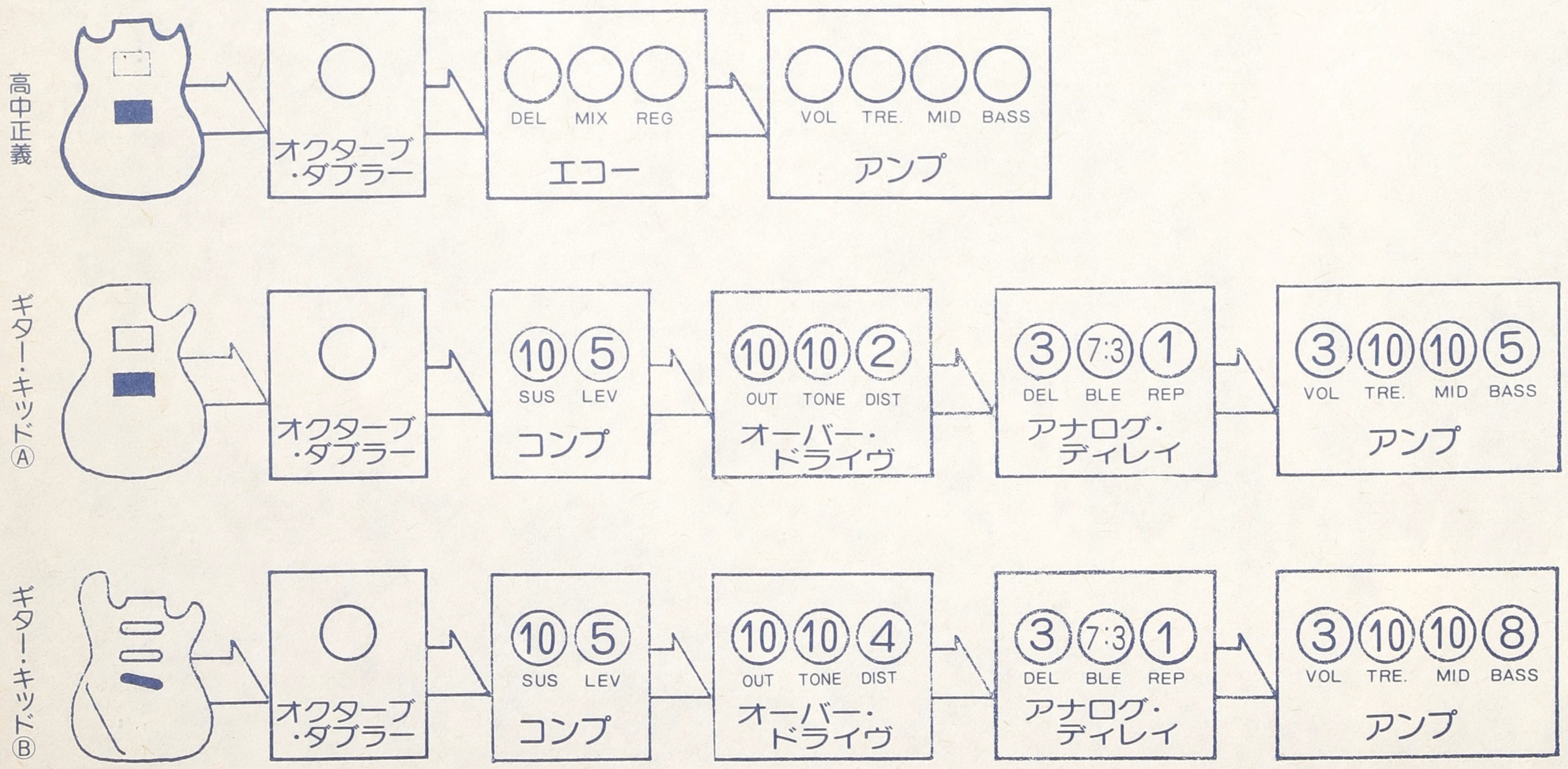
全体にソロ・ギターよりもアンサンブルを重視した曲創りがされていますから、なるべくなら二本以上のギターでプレイしたい感じがしますネ。ただリズムなんかもコッてるので、相当いい練習になることは間違いないでしょう。

サウンド解説

このギター・サウンドは、全編ヤマハSGのリア・ピックアップを使ったものですが、例によってエフェクツを活かしたサウンド・ヴァリエイションも顔を出します。

メインとなるサウンドは、ヤマハSGのリア・ピックアップ&ブギ・アンプのコンビネイションによるオーヴァードライヴ・サウンド。割とトレブルは少なめでウォームなトーン・ニュアンスですから、ギター・キッズはギターのトーン・コントロール、またはファズ、アンプのトーン(またはトレブル、ハイ)を2～3割ほど少なめにするのがベターでしょう。

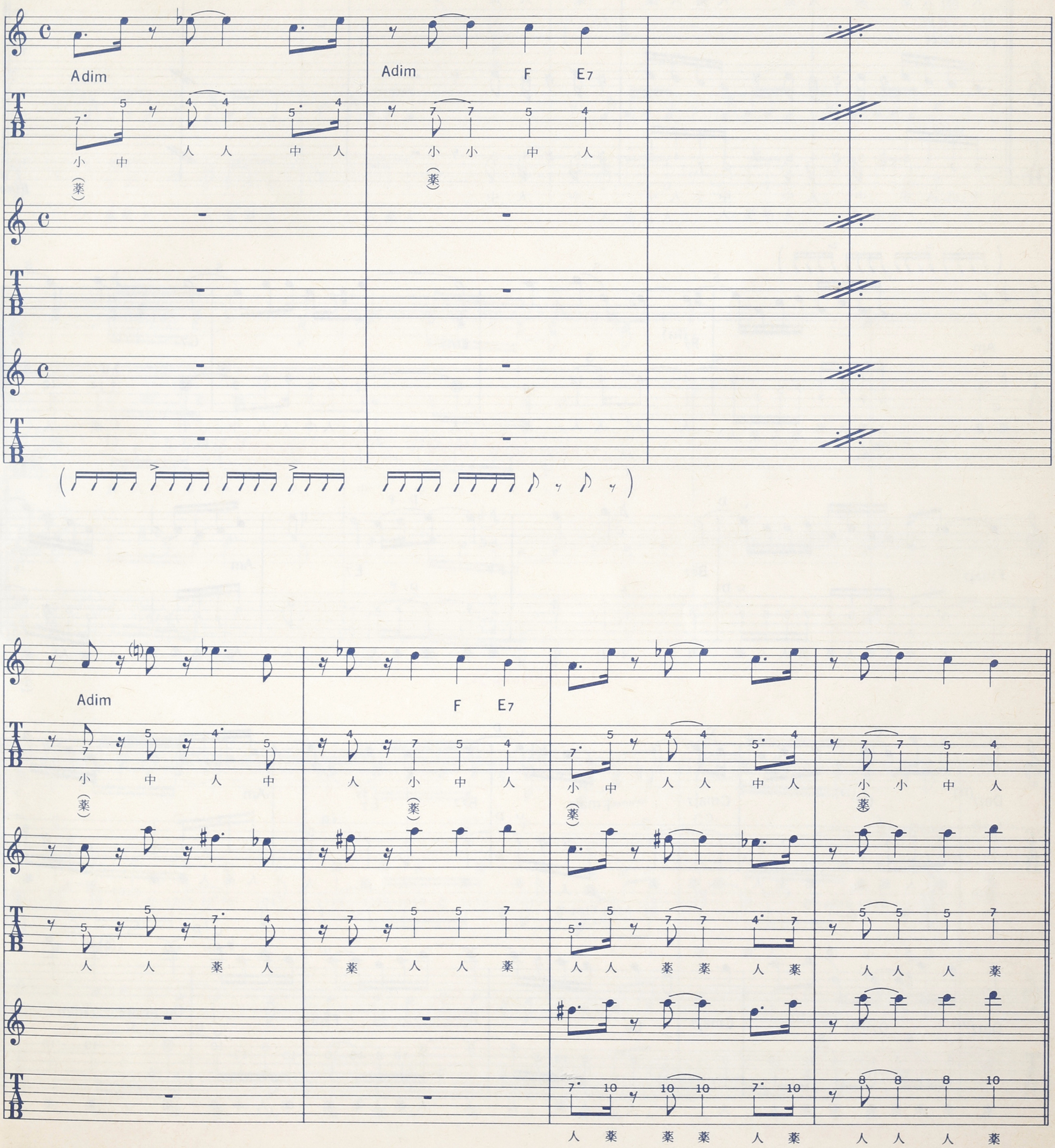
また、かつて高中の十八番だった3度ハーモナイズのパートはオーヴァーダビングですが、オクターヴのハモリは、またまたオクターヴ奏法でもなく、オクターヴ・ダブラーで自動的に弾き出しています。オクターヴ・ダブラーはセッティング図のように必ずギターに一番近くセット!!エコーも若干必要です。



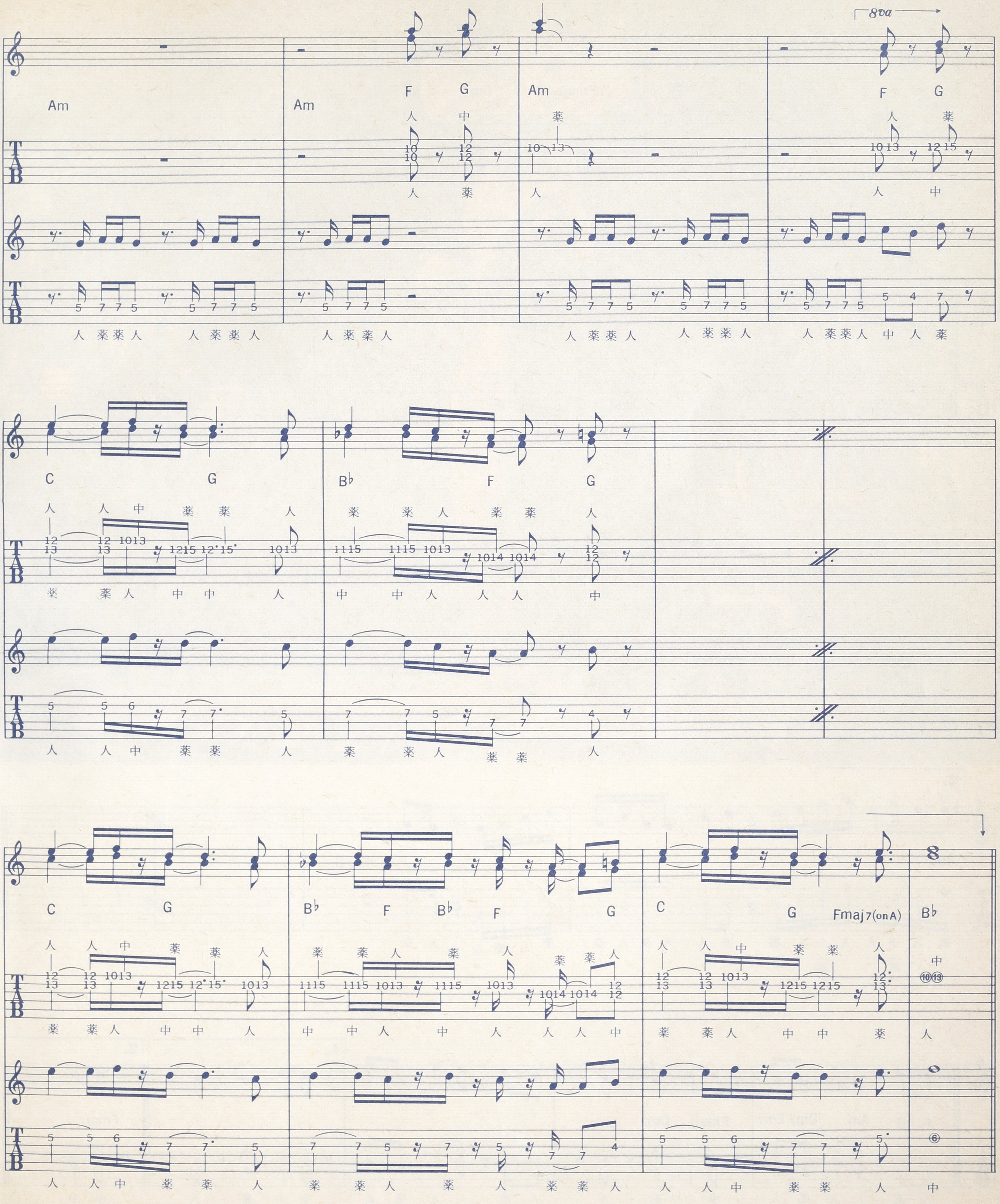


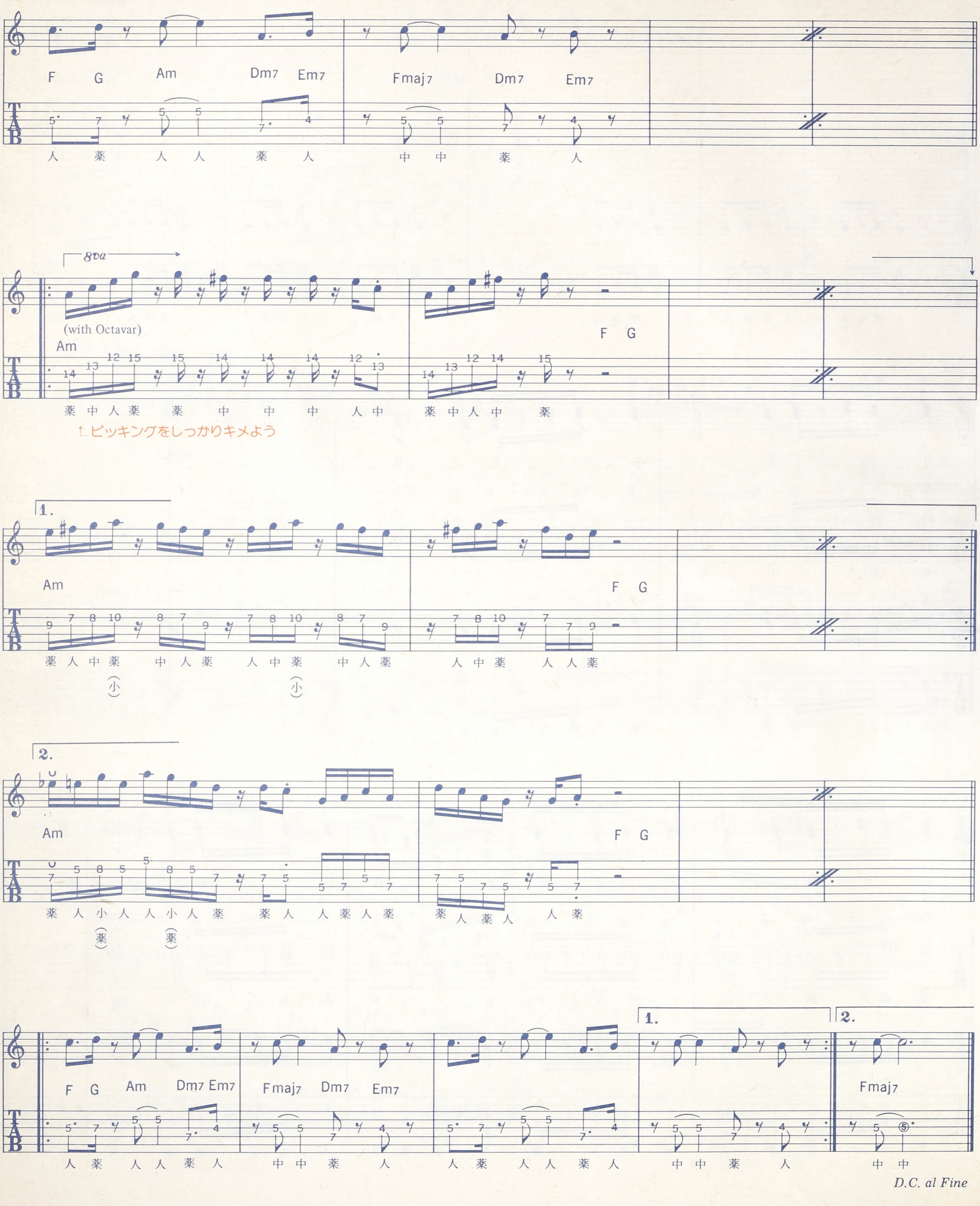
THUNDERSTORM

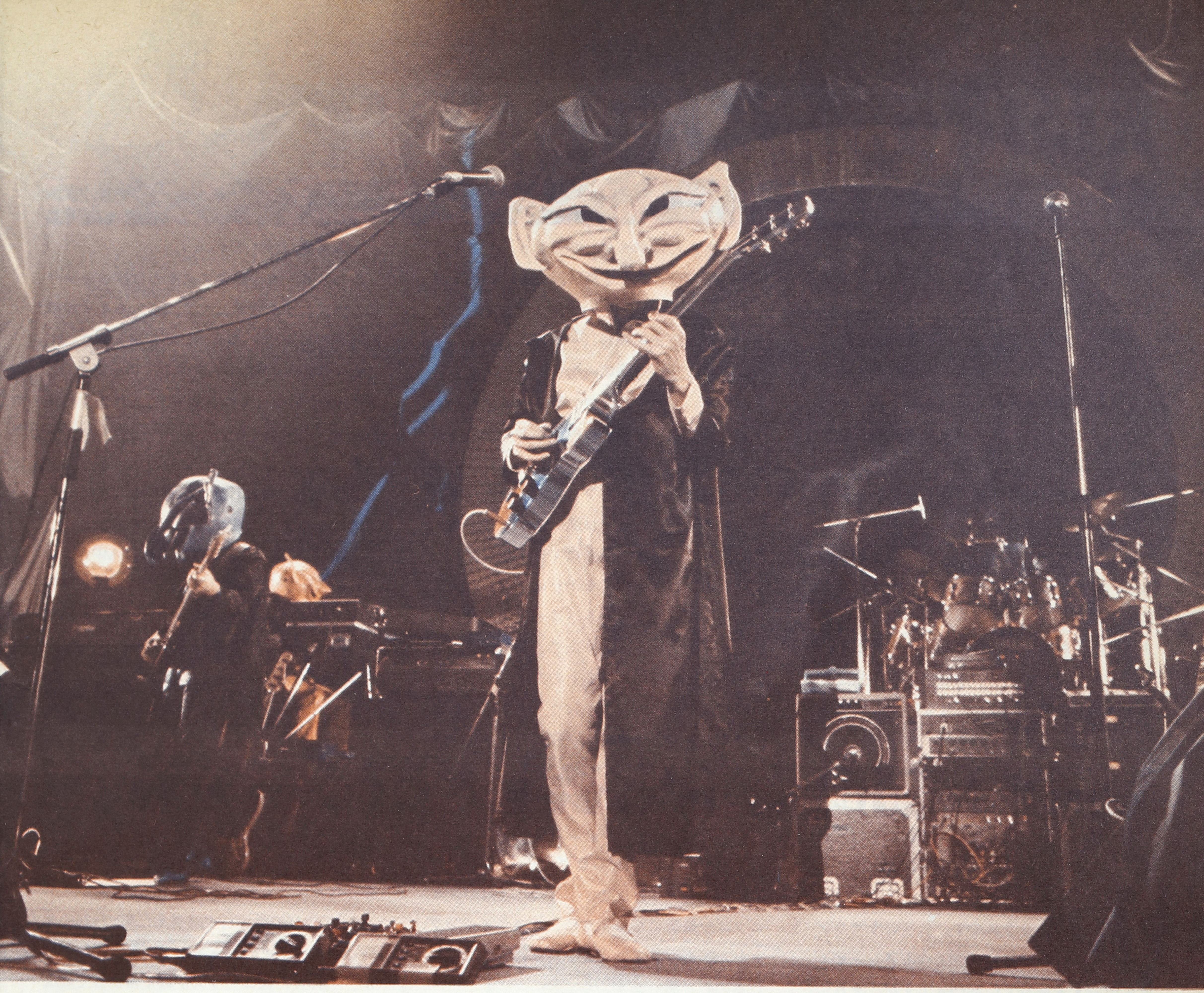
by Masayoshi Takanaka




(D. C後もリピート有り)
Am
Am F G
音をハギレよく弾こう
1× tacet
Fine
Am
F7(♯11)
Em7
C7
思いきってスライドする
この移動を素早く
Fmaj7
B♭7
F7
E7
Am
D. P
h.C
ノイズが出ないように
Dm7(11)
G7(13)
Cmaj7
Fmaj7
B♭7
E7♯9
Am
Dm7(11)
D7(♯11)
Cmaj7
C9
F
F♯dim
Dm7(onG)
G♯dim
この薬指の動きに注意
合計で2音チョーキングになる


8va
Am
Am F G
Am
F G
C G
B♭ F G
C G
B♭ F B♭ F G
C G Fmaj7(onA) B♭


F G Am Dm7 Em7
Fmaj7 Dm7 Em7
8va
(with Octavar)
Am
F G
ピッキングをしっかりキメよう
1.
Am
F G
2.
Am
F G
F G Am Dm7 Em7
Fmaj7 Dm7 Em7
1.
2.
Fmaj7
D.C. al Fine



RISING ARCH

演奏解説

これは、インタビューにあるように、あのラリー・カールトン直伝のハーモニクス奏法を活用した演奏です。

本書の"高中正義奏法"で写真解説してあるので、そちらとシンクロしながら事を進めて下さい。譜面を見ても分かるように、ノーマル・ノートとハーモニクスを連続的に組み合わせてプレイしているワケです。で、ハーモニクス奏法（ここではクラシック・ギター・スタイルを指す）のピッキング・フォームを活用しながら、カールトン・スタイルで言えば、ピックのみ（ノーマル・ノート）と、ピック＆人差指（ハーモニクス）のピッキングを組み合わせていけば良い、ということに一応なるのですが、この演奏のように弦跳び（3弦から5弦、4弦から1弦）が多い場合それではキツイので、別のピッキング・フォームを考えた方がベターでしょう。そこで出て来た物のひとつを写真解説の方に載せておきました。アレですと、中指（ノーマル・ノート）、人差指＆親指（ハーモニクス）ということになり、弦跳びの場合も実にスムーズでしょう。もちろん、ハーモニクスが連続する場合は、人差指＆親指のハーモニクス・ピッキングのみを用います。

さて、ピッキング・フォームのみならず、左手の方も、いつもとは違います。どう違うかと言うと、指記号通りに1音1音、運指していくのではなく、あらかじめプレイしやすいフィンガー・フォーム（コード・フォーム的になります）をキメた上で、若干指さばきが入る、そんな感じが多いのです。大体、1小節か2小節単位でフィンガー・フォームが変わりますが、各自よく研究してよりよいフォームを見つけて下さい。

また、8～9小節目に取りわけ訳の分かりにくいプレイが登場します。そちらも写真解説の方でピック・アップしてありますよ。

さらに、IN・TEMPO後の7～10小節目は、チョッパー・ハーモニクスです。これまた写真解説してありますが、とにかく押弦したフレット・ポジションのハーモニクス・ポイント（大体12フレット上がった所）を人差指あたりでチョップすることになりますネ。

最後に、FREE・TEMPNとIN・TEMPOについて。FREE・TEMPOの部分には、規則的リズムはないのですが、エレクトリック・ピアノ、ベースと呼吸を合わせながら、FREE・TEMPOな演奏をしなくてはなりません。IN・TEMPO後は、明確に4分の4拍子であります。

サウンド解説

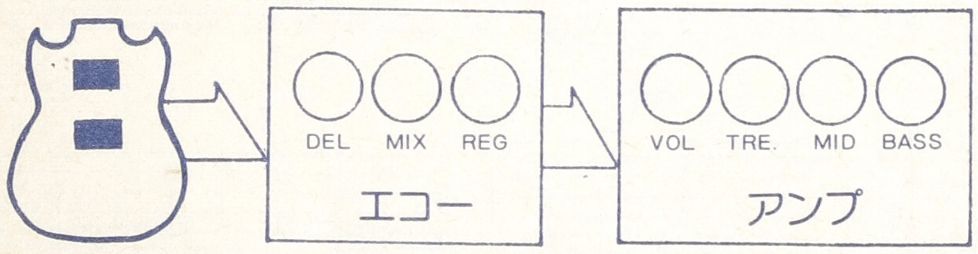
高中サウンドとしてはシンプルなものですが、やはりエフェクツは活用されています。

ギターはヤマハSGで、ピックアップはフロント＆リアのミックスです。こういうサウンドの場合、アンプはピーヴィー＆アレンビックのセットを使っているハズですが、それにしてもブライト＆クリーンであるところから考えて、ピックアップをシングル・コイルにしているか（ヤマハSGはヴォリューム・ノブがその切換スイッチですネ）、もしくはハーモニクスが綺麗になるように、イコライジング、トーン・セッティングをトレブル強調にしているのだと思います。

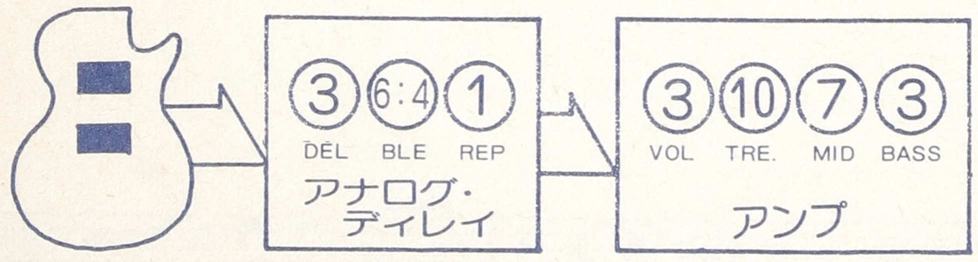
で、エフェクツは、まずエコー。スタジオ機器で付加しているか、あるいはリヴァーブかも知れませんが、エコー・マシーンでも十分に作り出せる効果です。

IN TEMPO後の11小節目あたりから24小節ほどアルペジオのバッキングが入っていますが、それらにはコーラスが軽く掛かっています。

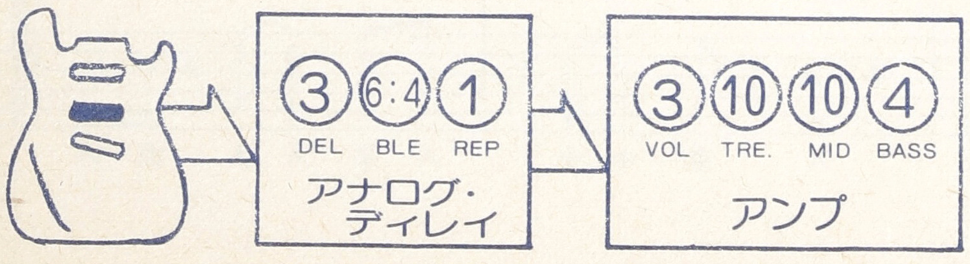
高中正義



ギター・キッドⒶ



ギター・キッドⒷ



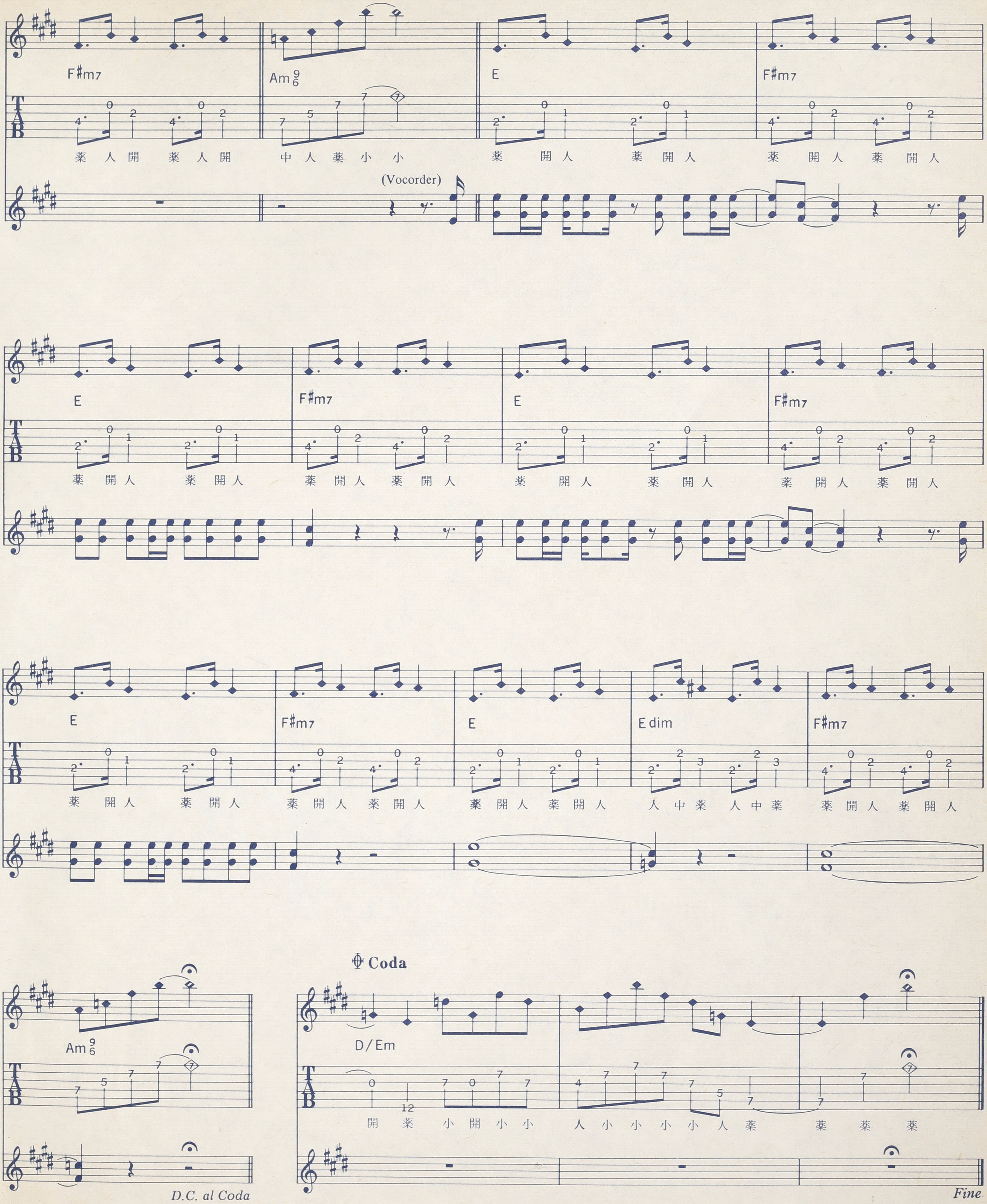



RISING ARCH

by Masayoshi Takanaka




to Φ
In tempo
Em
Am
Em
Am
└シンセサイザーのフィルイン
Bm
Am
D7
Gmaj7
Am
Bm
Cmaj7
D♭dim
D
└チョッパー・ハーモニクスだ
E
F♯m7
E
F♯m7
E
F♯m7
E
F♯m7
E
Edim


F♯m7
Am 9/6
E
F♯m7
(Vocorder)
E
F♯m7
E
F♯m7
E
F♯m7
E
E dim
F♯m7
Am 9/6
D.C. al Coda
Coda
D/Em
Fine



JUST CHUCKLE

演奏解説

この曲はギターはひたすらバッキングに徹していて、メロディーはヴォコーダーとサックスでプレイされています。まァ、アルバムの中には1曲くらいこういうリラックスした曲がないと、かえって印象が弱くなってしまうものなので、ギター・キッズのみんなもちょっと休憩のつもりで楽譜をながめてみてください。とは言っても一応途中でサックスとハモッたギター・パートが出て来ますから、そこは小指も目いっぱい使ってプレイしましょう。小指まで使うということを除けば、割と簡単なフレーズですよネ。

で、ヴォコーダーという楽器について簡単に説明すると、一口で言って発音源に人間の声を利用したシンセサイザーのことです。人間の声の波型を活用して、キーボードで音程をコントロールして音にしますから、音痴の人でも正確な音程で歌えるワケです。高中サンがすっかり気に入ってしまっている理由も案外その辺にあったりして……。

さて、それとこの曲ではバックでのコード・ストロークもギター・キッズ諸君にとって勉強になるはずですネ。楽譜にはしませんでしたが、高音弦を主にした省略コードやカッティングのタイミングなど色々と参考になると思いますよ。リード・ギターは弾けてもバッキングがイモでは、ギタリストとして半人前です。なんてシビアなことは言わないにしても、ヒマがあったらコピーしてみてもいいんじゃないかナ？

それとコード・フォーム自体も普通のハイ・ポジションのセーハ・コードの他に、1〜4弦を中心にした省略コードを多く使って、トレブリーな軽いサウンドをねらっています。省略コードを使うときは、不用な弦のミュートに気をつけるようにして下さい。

ここでのリズム・ギターはディレイで左右に振り分けてあるか、ダブル・トラッキングしてあるかのどちらかですが、こういう方法はレコーディングの場合は有効な手段としても、ステージではちょっと無理だし、仮にアンプを2台使ってもそれほどの効果は期待できません。コーラス・アンサンブル等を使って、サウンドに厚味を付けるのが流行っているのは、前のような効果をモノラルで出そうという目的もあるのです。

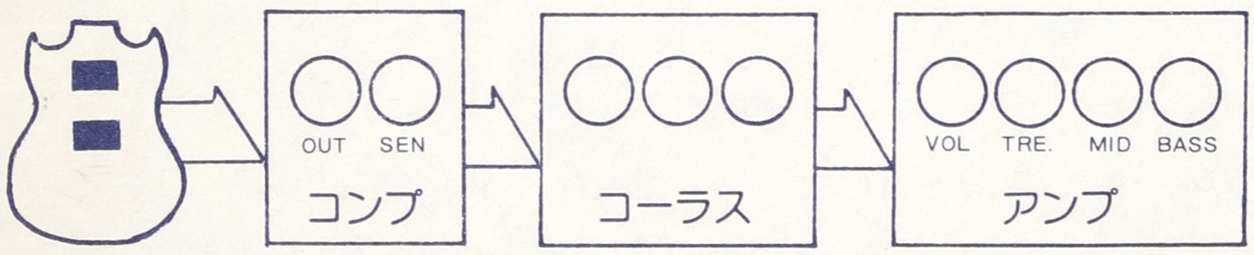
サウンド解説

テーマ・メロディーは、再びソリーナでピッチ・コントロールしたヴォコーダー・サウンドです。ギターにもアタッチ可能なヴォコーダーを持っている人は、高中がステージでやっているように、ギター＆ヴォコーダーでプレイすれば良いワケですが、ヴォコーダーがない場合（大体みんな持ってないでしょうが）、何か適当な手を考えるしかありません。この曲調なら、レスポール・タイプ（フロント＆リア）、ストラト・タイプ（フロント＆センターまたはセンター＆リア）どちらでもクリーン・サウンドにコンプレッサーを強めに掛けた感じが良いのでは？

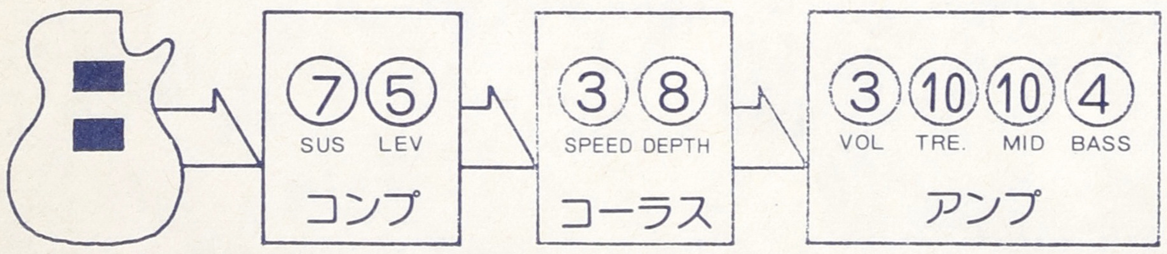
バッキングは、ヤマハSGのフロント＆リア・ミックスにまたまたコーラス・エフェクトです。もちろん、オーヴァードライヴ度「0」のモロ・クリーン・サウンド。

最近いささか食傷気味のコーラス・マシーンではありますが、微妙なエコー＆ピッチ変化によるその効果、やはり捨て難い味です。

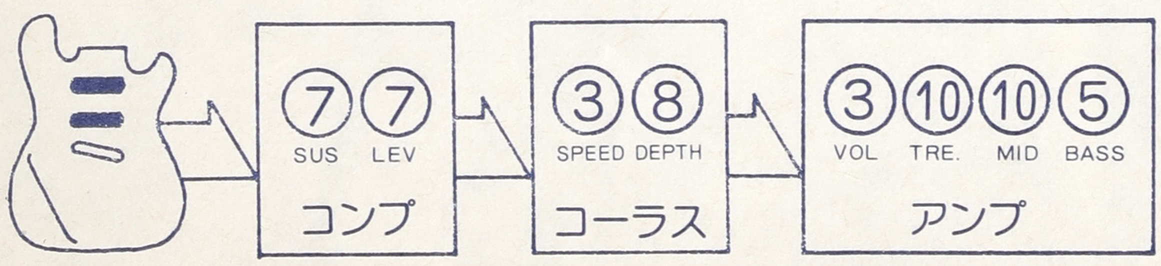
高中正義



ギター・キッドⒶ



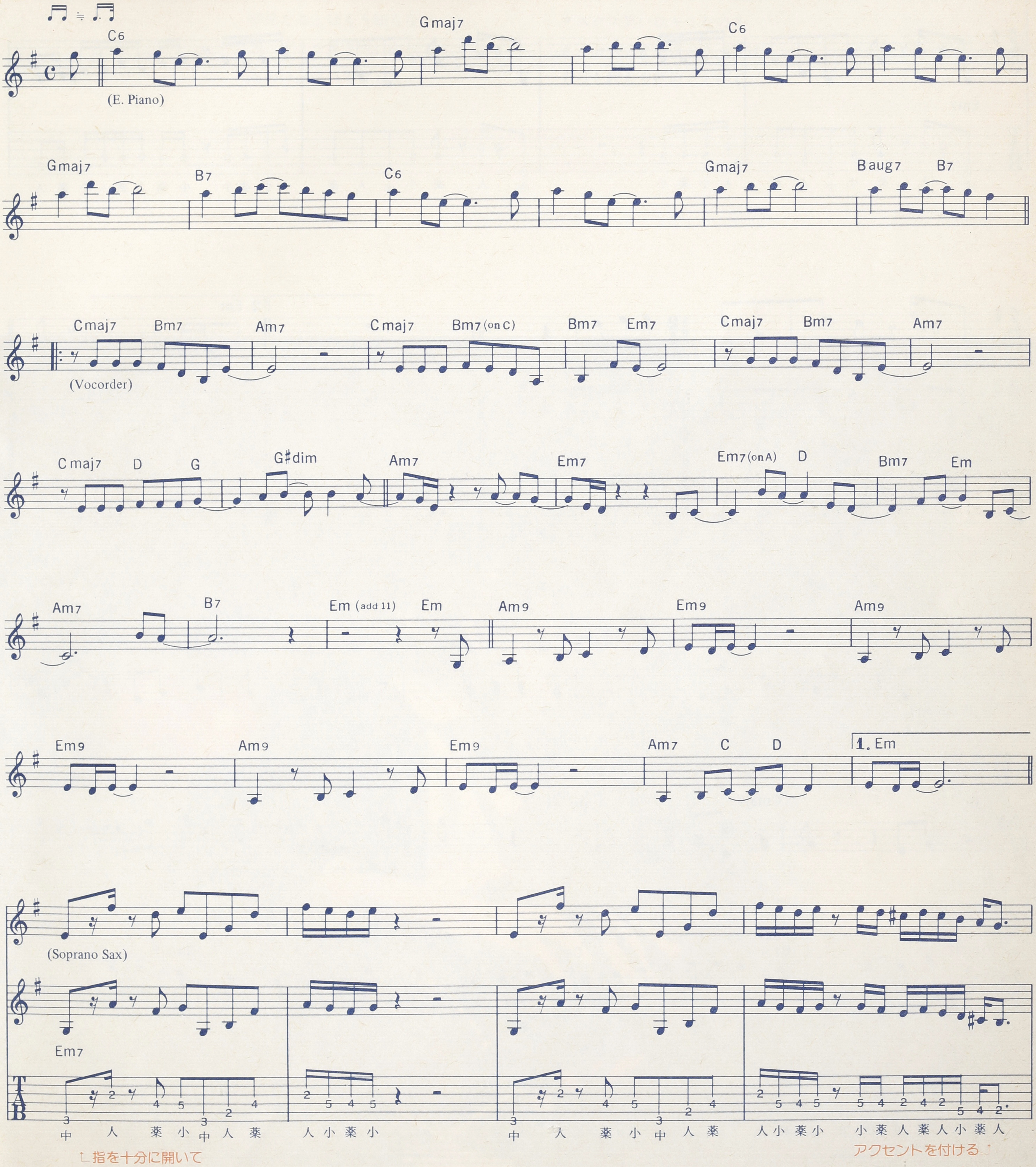
ギター・キッドⒷ

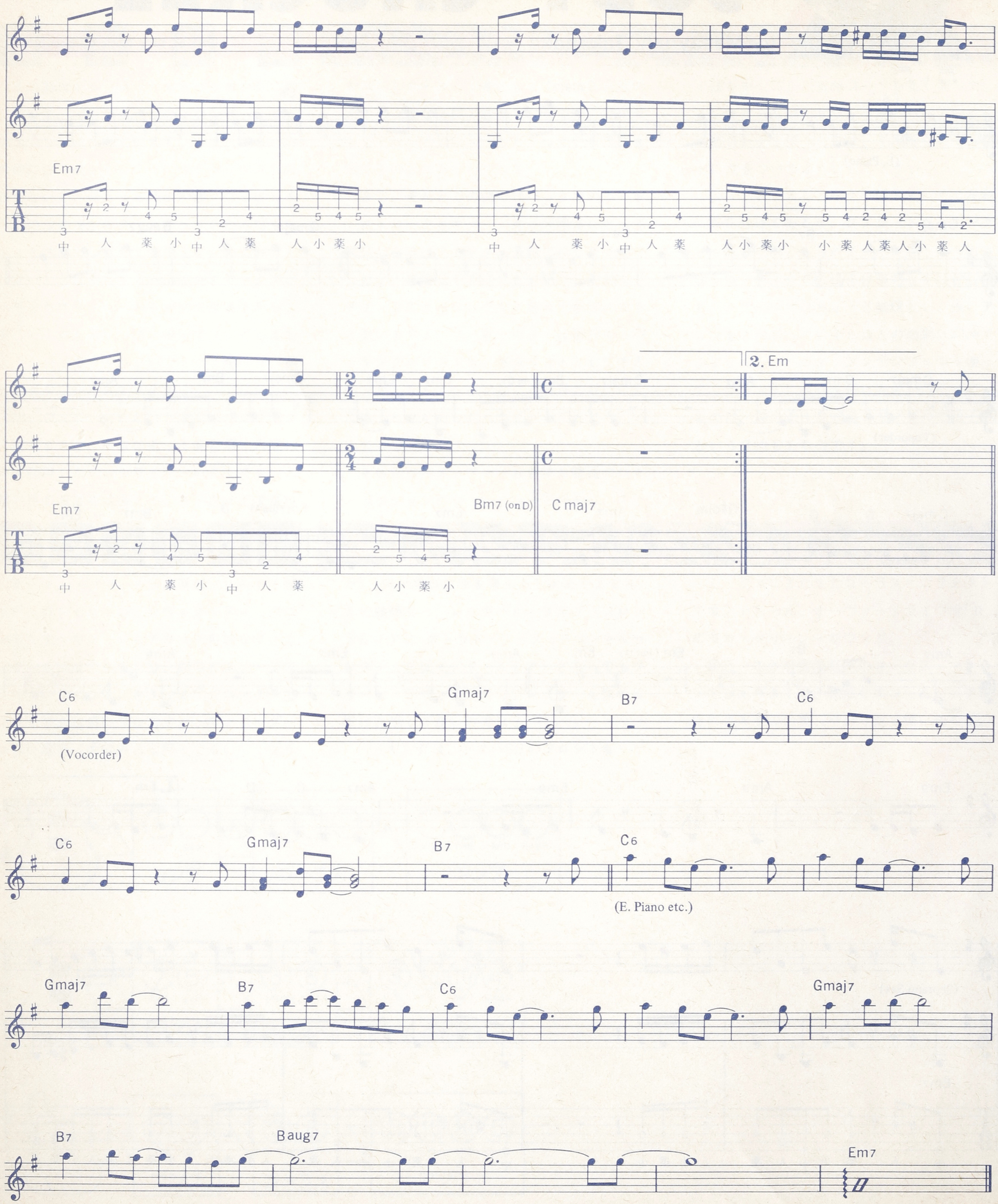




JUST CHUCKLE

by Masayoshi Takanaka




Em7
中 人 薬 小 中 人 薬 人 小 薬 小
中 人 薬 小 中 人 薬 人 小 薬 小 小 薬 人 薬 人 小 薬 人
2. Em
Em7
Bm7 (on D)
C maj7
中 人 薬 小 中 人 薬 人 小 薬 小
C6
(Vocorder)
Gmaj7
B7
C6
C6
Gmaj7
B7
C6
(E. Piano etc.)
Gmaj7
B7
C6
Gmaj7
B7
Baug7
Em7

風にまぎれる花の香りは
あの虹のおくりものみたいさ
Just chuckle　Just chuckle
夢見たことはもう知らない
きっとステキさ空に向って
鳥の口笛吹いてごらんよ

横顔染めるオレンジ色は
あの赤い夕日のわすれものみたいさ
Just chuckle　Just chuckle
クスクス笑いはキミなの？
きっとステキさ夢のつづきは
そっと教える虹のことばで

JUST CHUCKLE

Lyric by Choux SUZUKI



RAINBOW WAS REBORN

演奏解説

ミディアム・スローな16ビートの演奏で、キーはホ長調（KEY・IN・E)。ダイアトニック・スケール・コード（この場合Eメイジャー・スケール上、3度構築で出来るコード）以外のコードも色々と出て来ますが、ここでの高中は、あまりコード・チェンジに対するスケール・チェンジを活用していません。

で、フィンガー・ピッキングが、この作品全体に一貫したテクニック・ポイントであります。完全にピックは使わず、右手（ピッキングする方）の親指、人差指、中指あたりでプレイしていきます。別に、どの弦にどの指という規則はありませんから、やり易すいようにやって良いでしょう。

さて、イントロは「ライジング・アーチ」で多用されているクラシック・ギター・スタイルのハーモニクス奏法でキメます。やはり、1音1音の運指を追っていくのではなく、フレージングごとのフィンガー・フォームを設定した上で、プレイして下さい。

ファースト・テーマの、3度ハーモナイズになったダブル・ノート（複音）のメロディーは、親指などで両方ピッキングするのではなく、4弦は親指、3弦は人差指、2弦は中指と、別々の指で弾き分けるのがベター。そうすると、何となくダブル・ギター（2本のギター）でプレイしているようで、厚みがあるようです。

セカンド・テーマにおいては、2度出るポルタメントしたチョーキング（アップ＆ダウン）がミソ。いずれも人差指を使っています し、とてもゆったりとしたポルタメント加減であるため、相当に指の力が必要なのです。

で、ラスト・コーラスからのソロ。前述したように、ダイアトニック以外のコード（ここではBaug）の部分を、強調、活用しませんから、スケール云々は必要ありません。が、一般のロック・ギターには見られないような今一歩進んだ高中ならではの変則的フレーズ・フォーム＆フィンガー・フォームが活用されていますから、チョッとした工夫がポイントとなります。

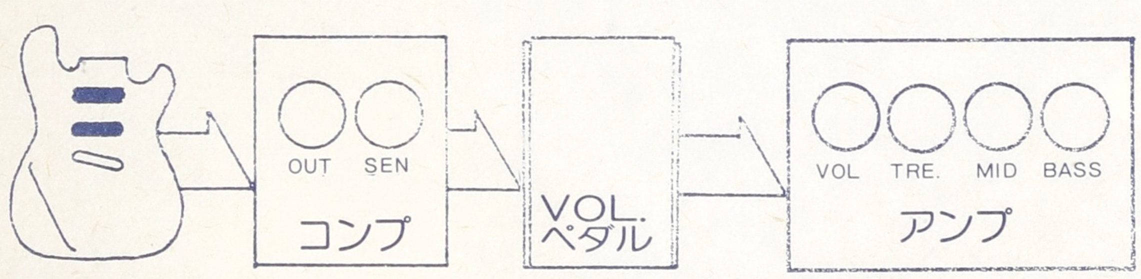
また、ソロの$\frac{F\sharp m7}{B}$→B→$\frac{A}{B}$というパートとその後のEmaj7の4小節目ではブルースっぽい展開が、全体のソフト＆メロウ・ムードの中で光ります。特に前者は、C♯音$\frac{14}{2}$→B音$\frac{12}{2}$というスライド・ダウンが効いています。並のギタリストなら、C♯音／6thではなく、D♮音／♭7thを使うと思うのですが、サラリと6thをキメるとは………ニクイ！

サウンド解説

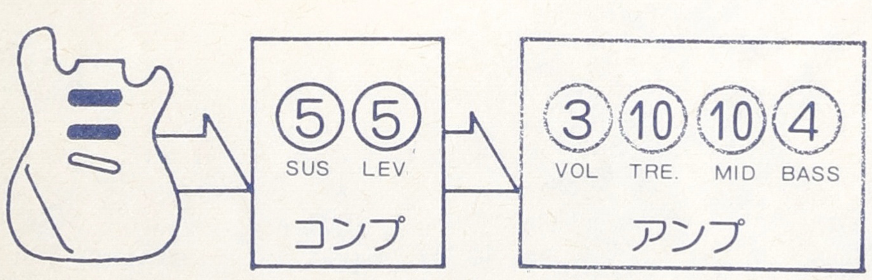
これはストラトキャスターのハーフ・トーン（ここではフロント＆ミックス）with コンプレッサーによる典型的なギター・サウンドですネ。このマイルドなサステイン・サウンドは、コンプレッサーなしには不可能ですし、コンプって他にも色々と活用の場があるので是非とも入手して欲しいと思います。

ギターはストラト・タイプしかありませんが、マァ、テレキャス・タイプのフロント＆リア・ミックスでも結構似るかも。レスポール・タイプなどのハムバッキング・ギターの場合、とりあえずフロント＆リア・ミックスで、トーンはベース、ミドルを抑えてなるべくトレブルのブライトなニュアンスを強調しましょう。リア・ヴォリューム「10」、フロント・ヴォリューム「8～9」とセットするのも、この場合効果的でしょう。また、ストラトでも、フロント・ピックアップのニュアンスが強くて、ハーフ・トーンらしくならないのなら、やはりベースを下げます。

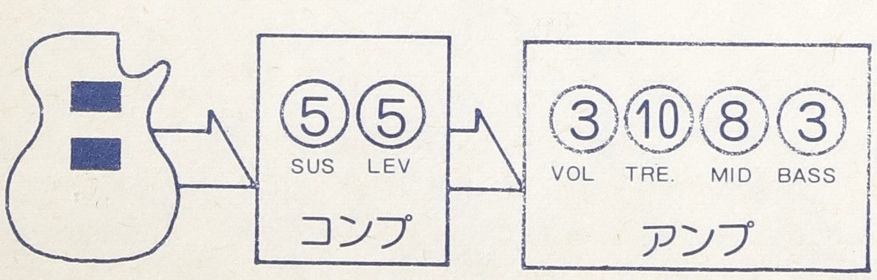
高中正義



ギター・キッドⒶ



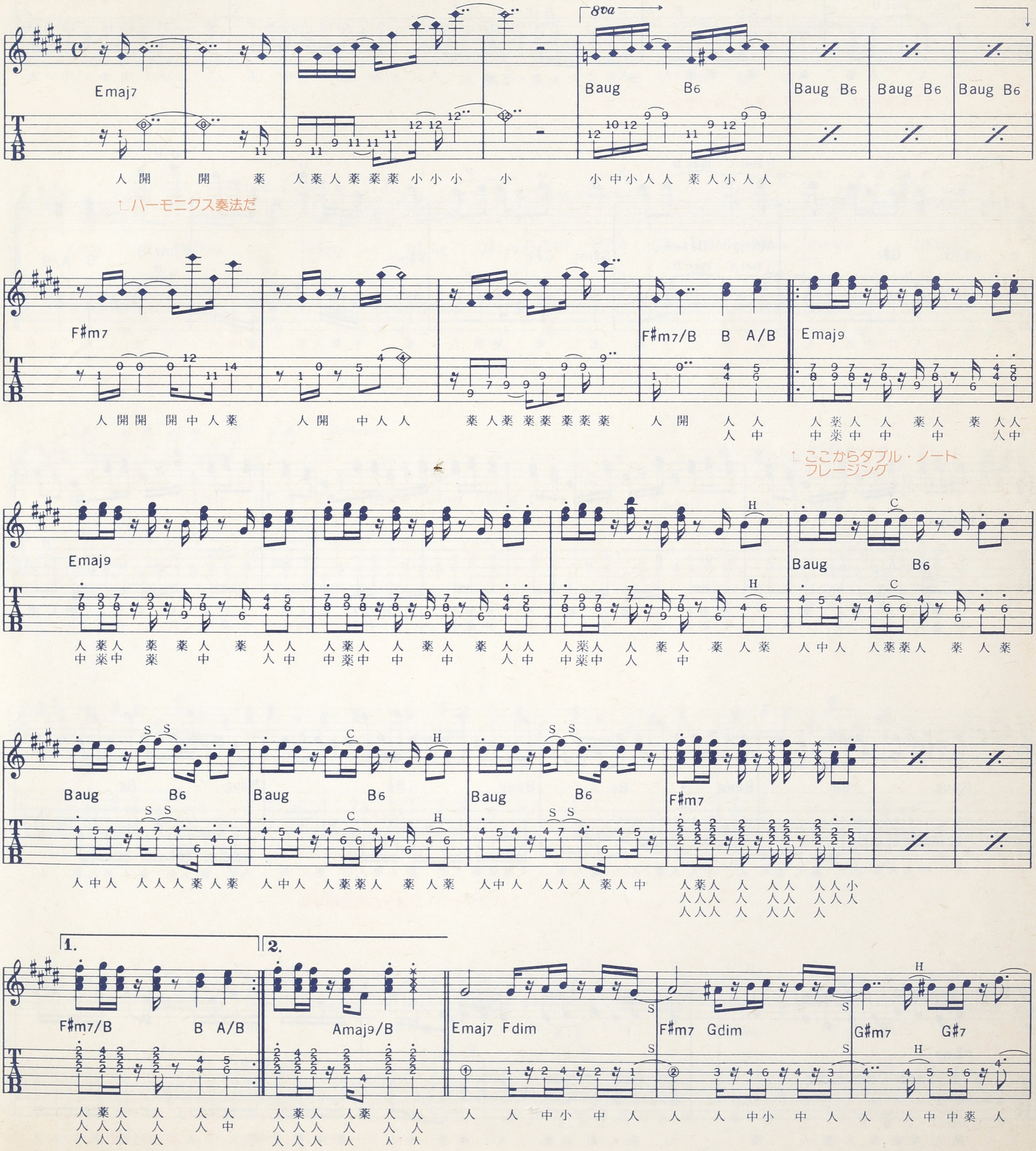
ギター・キッドⒷ





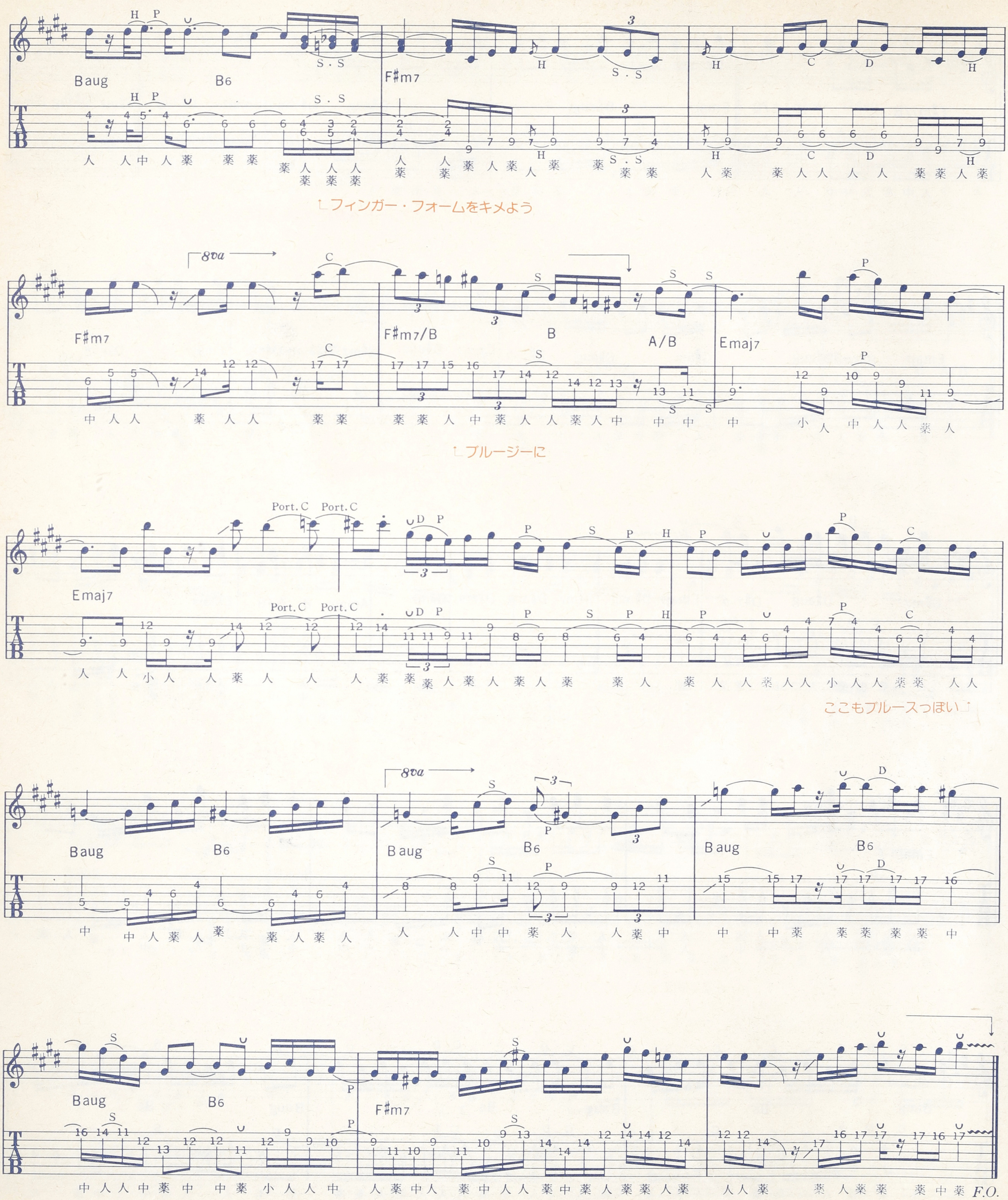
RAINBOW WAS REBORN

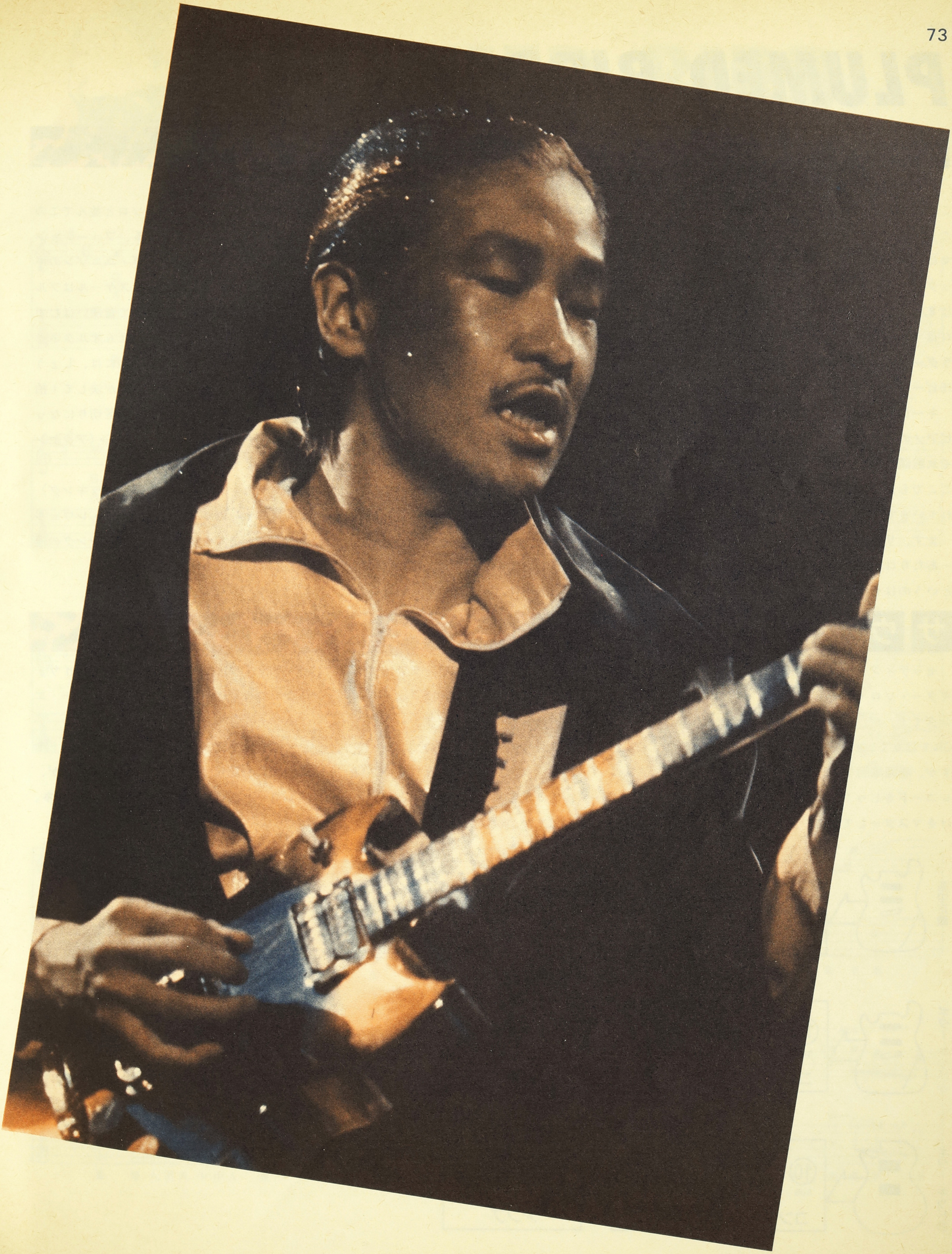
by Masayoshi Takanaka




Amaj7 D#7-9
G#m7 C#9
F#m7 Amaj7/B
Emaj7 Fdim
F#m7 Gdim
十分に粘らせ、チョーク・アップ&ダウン
G#m7 G#7
Amaj7 D#7-9
G#m7 C#9
F#m7
F#m7/B
B A/B
ここも粘りが肝心
チョップ気味に
ダウン・ピッキング
Emaj9
Baug B6
Baug B6
Baug B6
Baug B6
オクターヴ・フォームを活用する
F#m7


F#m7/B B A/B
Emaj7 D#aug
G#m7 D#aug D#7-9
Emaj7 D#aug
G#m7 D#aug D#7-9
ヴィブラートをきれいにキメよう
Emaj7 D#aug
G#m7 D#aug D#7-9
Emaj7 D#aug
G#m7 D#aug D#7-9
Emaj7 D#aug
G#m7 D#aug D#7-9
Emaj7 D#aug
G#m7 D#aug D#7-9
G#m7
Amaj7 B A/B
Emaj9
Emaj9
Baug B6
Baug B6
Baug B6
変則的なのでリズムに注意しよう。チョーキングもしっかり


Baug
B6
F♯m7
フィンガー・フォームをキメよう
8va
F♯m7/B
B
A/B
Emaj7
ブルージーに
Port. C
ここもブルースっぽい
F.O.



PLUMED BIRD

演奏解説

高中サウンドの半数以上は16ビートです。この演奏も基本的に16ビートですが、パートごとに味付けを変えていますネ。リフやテーマは、ディスコ・チックともフュージョン・チックとも呼べる16ビート。ピアノのテーマ部は8ビートっぽい16ビート。で、ギター・ソロは「レディ・トゥ・フライ」、「ブルー・ラグーン」など同様、サンバっぽい味付けの16ビートとなっていますネ。

キーは、一応イ長調（KEY・IN・A）ですが、ピアノのテーマ、そしてギター・ソロはそれぞれ転調と考えて良いでしょう。コードは、ここでもダイアトニック以外のものが多用されています。

まず、リフからギターのテーマ・メロディーあたりは、セヴンス系トニック・コード（$\frac{G}{A}$ というのはセヴンス系なんです）に従い、ミクソリディアン・スケール（KEY・IN・A）が活用されています。ロックでは一般的に、こんな場合ブルース・スケールを用いるのですが、ここではミクソリディアンです。だからロック的というよりはジャズ的、もしくはフュージョン的フレージングでしょう？で、ここでも、単にミクソリディアンでプレイすると言うより、そのスケール・ノートからどれだけ面白い音使いが出来るか、という感じで様々なフィンガー・フォームが取り入れられています。十分、注意しましょう。

そして、ピアノのテーマを経てギター・ソロ。キーが何であるか関係ないぐらいに、コード・チェンジごとにスケール・チェンジしなくてはなりません。マァ、セカンド・ソロよりは、やさしいですが、そこに秘められたアイディアの数々は、さすが！としか言いようがありません。

再びリフをキメたあと、ソロと並んでこの演奏のハイ・ライトと言える、フュージョン的ベースなどとのオクターヴ・ユニゾンのキメが展開されます。基になるスケールはブルース・スケールなので、大して音使いはむずかしくありませんが、いかんせんオルタネイト・ピッキングが出来ないことには、しょうもないですネ。また、フレーズが決して1拍1拍ではまとまらず、変則的な区切りになっている点も気を付けて。これは「＞（アクセント）」で示してありますよ。

で、セカンド・ソロ。右手（ピッキング）左手（フィンガリング）共、ハイ・レヴェルなテクニックを必要とするフレージングの連続ですネ。頑張って！

サウンド解説

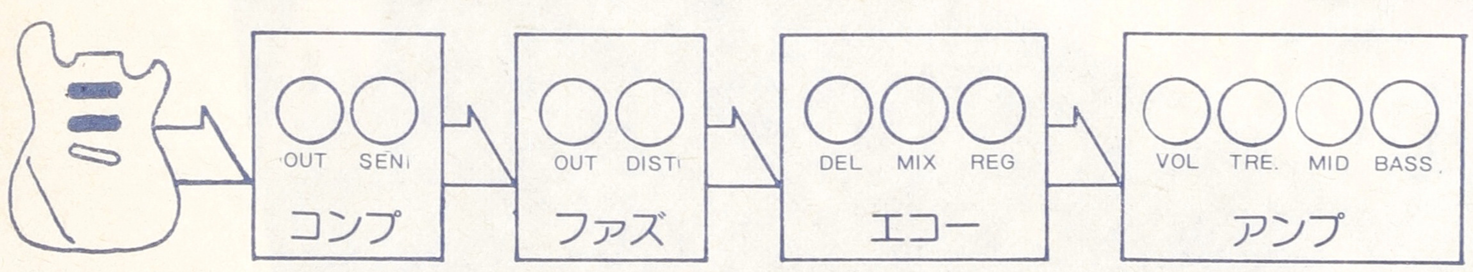
セッティング例は、1st＆2ndソロ以外のギター・ソロ・パートのギター・サウンディングです。が、それぞれのエフェクツは常にONではなく、1st＆2ndソロでもそうなのですが、場面場面でON/OFFしていますから、レコードをじっくり聴き込んで、その使い分けをマスターして下さい。

ギター・ソロはヤマハSG。ピックアップはフロント＆リアで、ストラト同様フェイズ・イン・ミックスしているワケです。

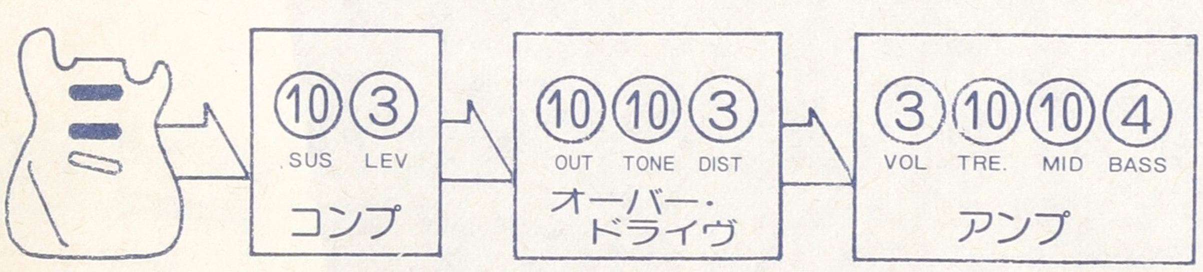
で、Y.G.5月号の曲集では次の「ユー・キャン〜」同様、コンプ＆ファズ＆コーラス（＆エコー）を使ったギター・サウンドと書いてしまったのですが、実際はSG＆ブギのオーヴァードライヴ・サウンドに、ハーモナイザーによるコーラス・エフェクトと、エコー・エフェクトを絡めているそうです。

全編ピックアップ・ミックス・サウンドなので大した変化は感じられないでしょうが、アレコレとプロッた技が絡んでるんですよネ。

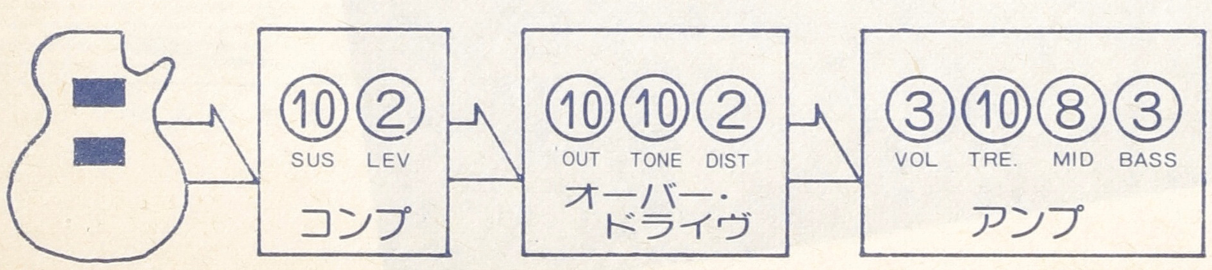
高中正義



ギター・キッドⒶ



ギター・キッドⒷ



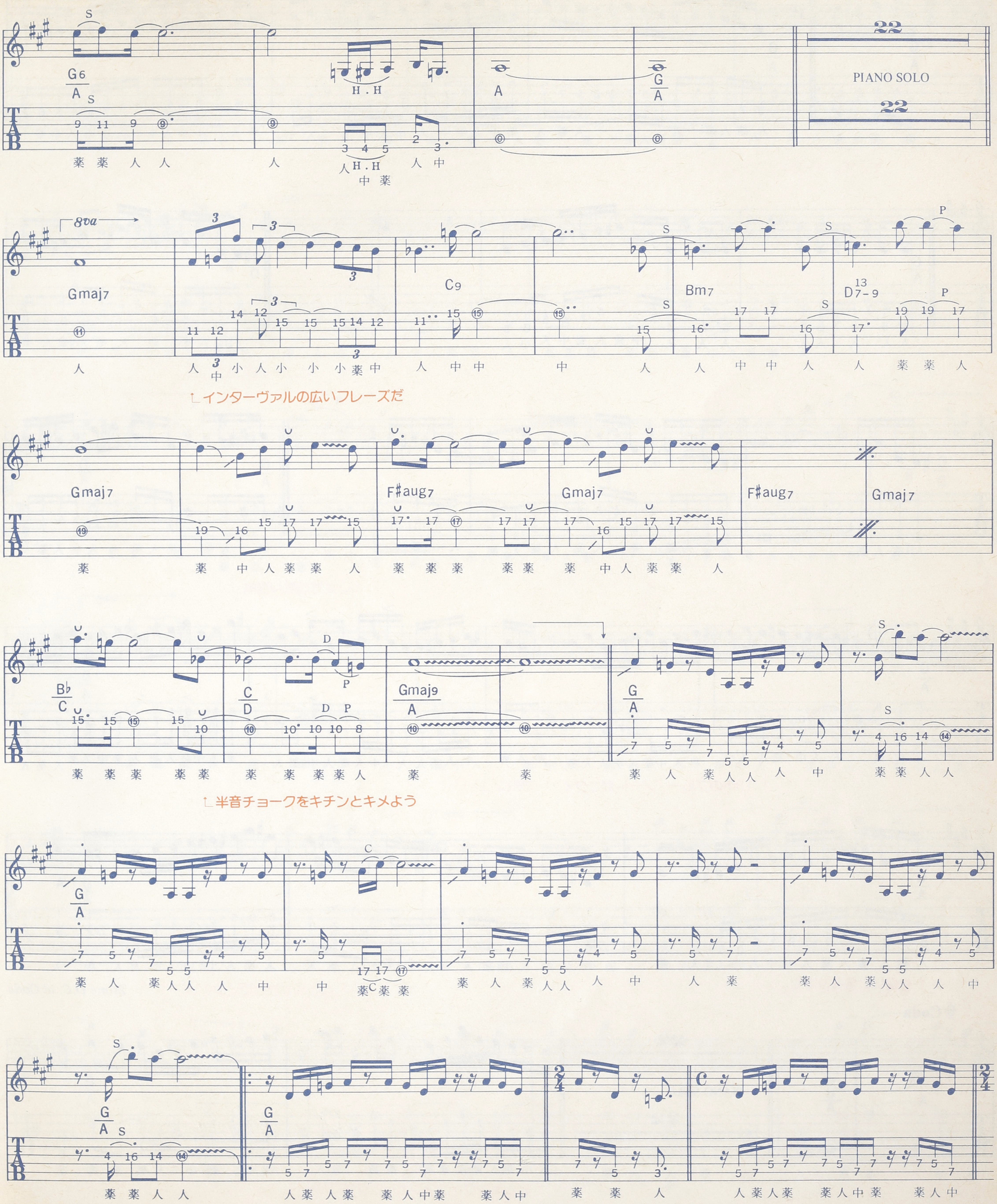


PLUMED BIRD

by Masayoshi Takanaka




G6/A
A7
to
8va
スムーズにスライド・アップ
空ピックをキメる→
G/A
A
開放弦を巧く使っている
トリッキーだ
ピッキングをしっかり
ここもピッキングをしっかり


G6/A
H.H
A
G/A
PIANO SOLO
8va
Gmaj7
C9
Bm7
D7-9 13
└インターヴァルの広いフレーズだ
Gmaj7
F♯aug7
Gmaj7
F♯aug7
Gmaj7
B♭/C
C/D
Gmaj9/A
G/A
└半音チョークをキチンとキメよう
G/A
G/A
G/A


↑♭5thのブルー・ノートがニクイ
↑指使いに気を付けて
2time D.C. al Coda
Coda
PIANO SOLO
↑ピッキング、フィンガリング共にハード


G/A
スムーズにスライド・アップ
ここもスムーズに
8va
指使いがむずかしい
リズムに注意
ピッキングがむずかしい
チョーキングをしっかり


G
A
ピッキングをしっかり
Fine



YOU CAN NEVER COME TO THIS PLACE

演奏解説

ＬＰ『虹伝説』のエンディングを飾るナンバーで、高中らしい歌心にあふれたフレージングが随所に出て来ます。フェイド・イン奏法、オクターヴ・ユニゾン、コーラスの掛かったオーバードライヴ・サウンド、スケール・タイプのフレージングなど、高中サウンドのエッセンスが全部詰まっているような曲と言えるでしょう。

この曲のフレージングで特に目立っているのはピアノの間奏の後24小節目などで見られるメジャー・スケールによる上行フレーズです。特にこの24小節目はスケール練習のトレーニング・パターンとして一般的に行なわれているもので、スピードこそ速いですが手クセに関係したフレーズでないだけ逆に弾きやすいかもしれません。どちらにしても覚えておいて損のないフレーズなので、スケールの練習のつもりで取り組んでみましょう。また、この手の速弾きスケールの場合、ピッキングは当然オルタネイト・ピッキングで、ダウンとアップを正確に交互にくり返しながら弾くのが原則です。このピッキングが正確にキマらないと、いくら左手が速く動いてもグシャグシャの音になって、どういうフレーズを弾いているのかわからなくなってしまいますネ。

この曲のもうひとつのポイントは、中間部から後半にかけてのハイ・ノートを使った盛り上げ方にあります。このハイ・ポジションでのチョーキング・フレーズがビシッとキマると、かなりの快感サウンドになるワケですが、思い切りが悪いと何にもなりません。普通よりも左手の力を込めて、ヴィブラートもやや大きめにするのがコツです。もちろん右手はピッキングを強調しましょう。

一般的なロック・ギター奏法ではどうしても薬指中心のフィンガリングになってしまうものですが、高中の場合それにひとヒネリ加えて、普通と違ったフィンガー・フォームを工夫したフレーズも随所に見られます。タブ譜の指使いの指定に注意していると、みんなにも思い当るところが何個所が出て来るのではないかと思います。

以上のようなテクニカル・ポイントがありますが、それにも増してこの曲で大切なのは構成のメリハリ、表情の付け方といったセンスの問題です。コピーに際してはこの面も忘れずに吸収してほしいですネ。

サウンド解説

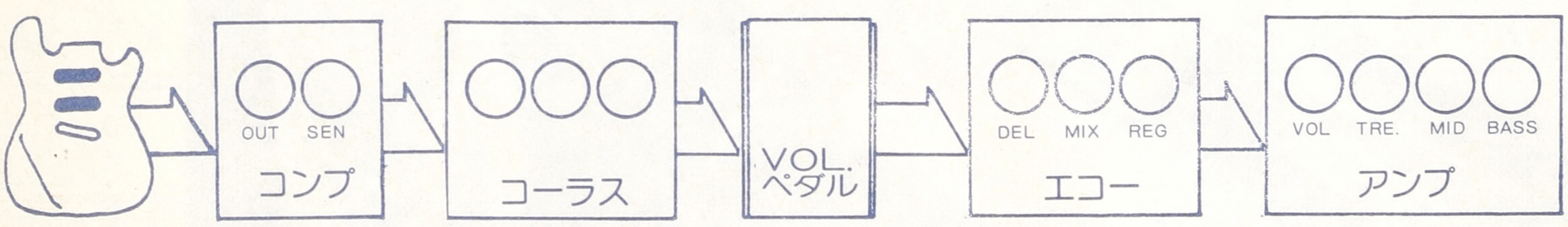
セッティング例は、前半（ピアノによるインタールード前）のギター・サウンドのもので後半はパターンが変わります。

前半は、エコーがないとキマらないギター・サウンドですネ。もちろん、コーラス、ヴォリューム・ペダル、コンプもストラトもあった方がモア・ベターですが。ストラトは、やはりフロント＆センターのハーフ・トーンです。で、エコーは、多めのリピートを長めのディレイ・タイムで掛けます。

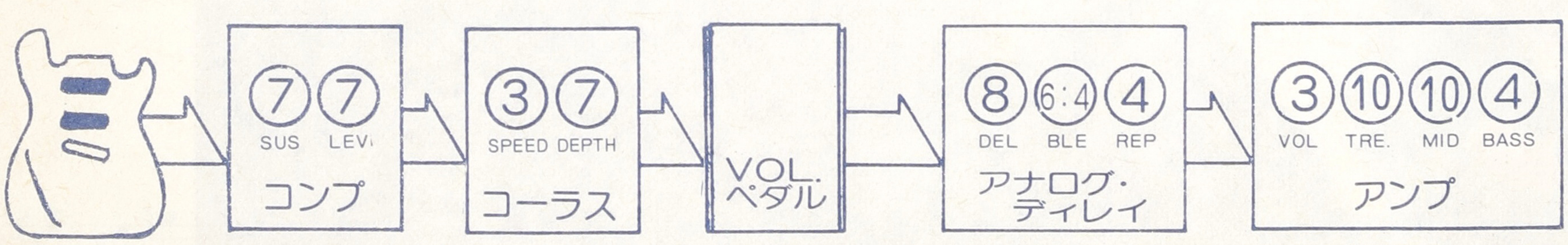
また、オクターブ・ダブラーっぽいエフェクトもありますが、アレはベースにエコーを掛け、ユニゾンにしているようです。

後半は、コンプ＆ファズ＆コーラスっぽく聴こえるのですが、高中自身の解説によるとヤマハSG＆ブギのオーヴァードライヴ・サウンドに、スタジオ機器のハーモナイザーでコーラス的な効果を加えたそうです。マッ、みなさんはコーラスまたはフランジャーを３コントロール共「３」で迫まってみましょう。

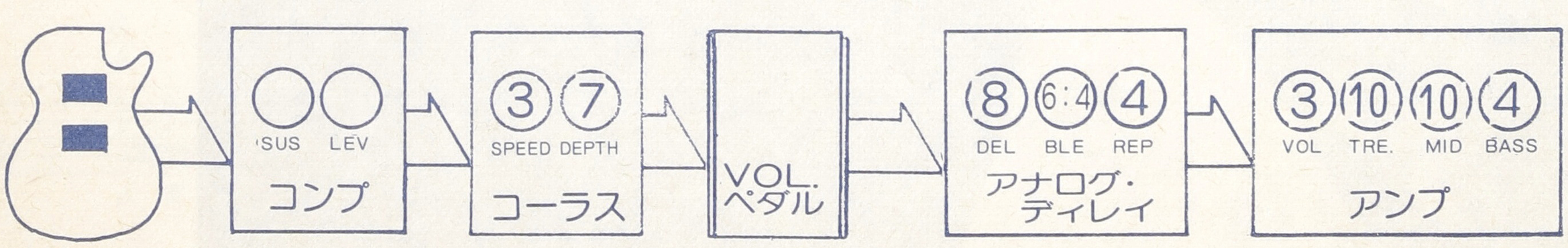
高中正義



ギター・キッドⒶ



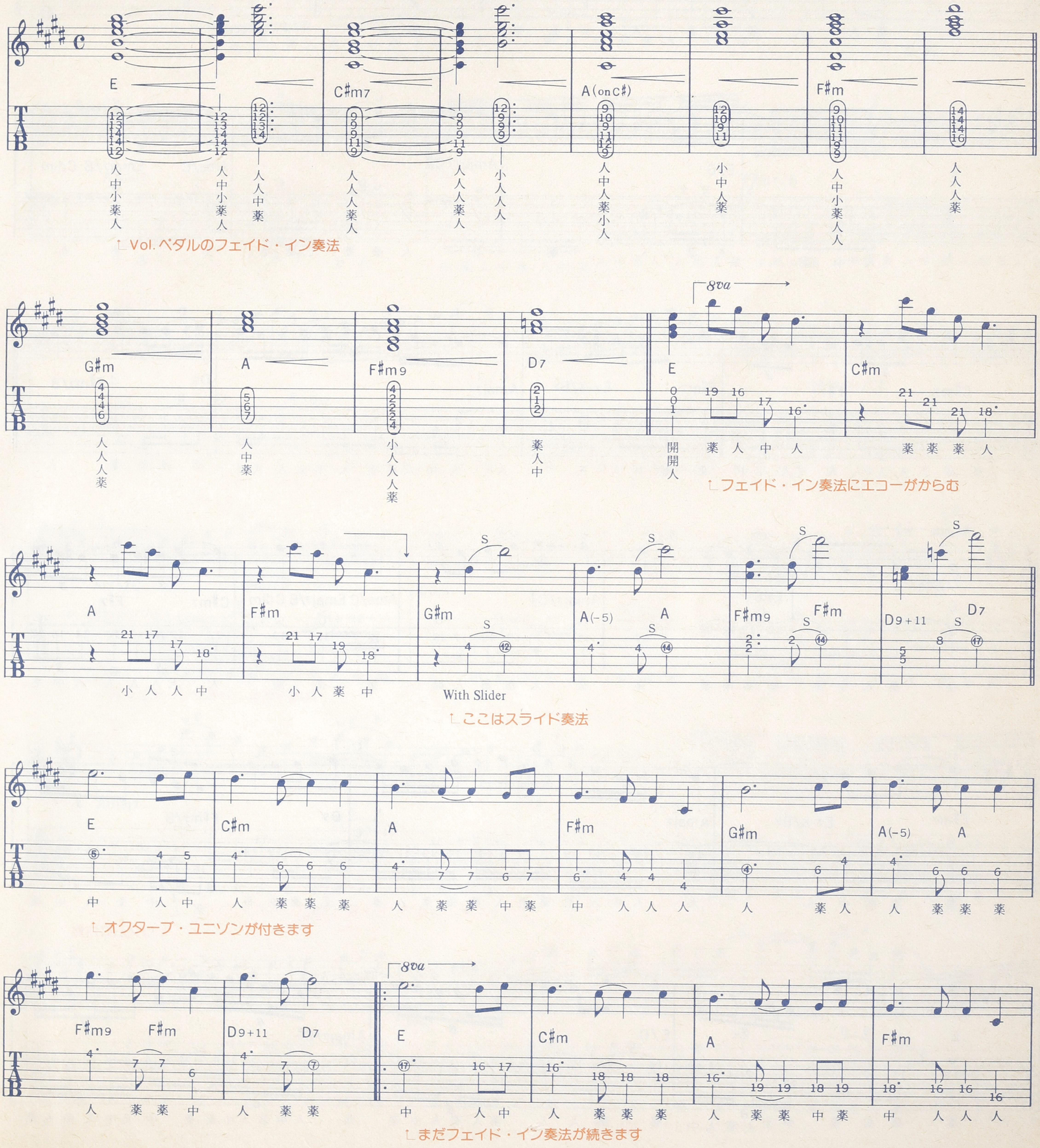
ギター・キッドⒷ





YOU CAN NEVER COME TO THIS PLACE

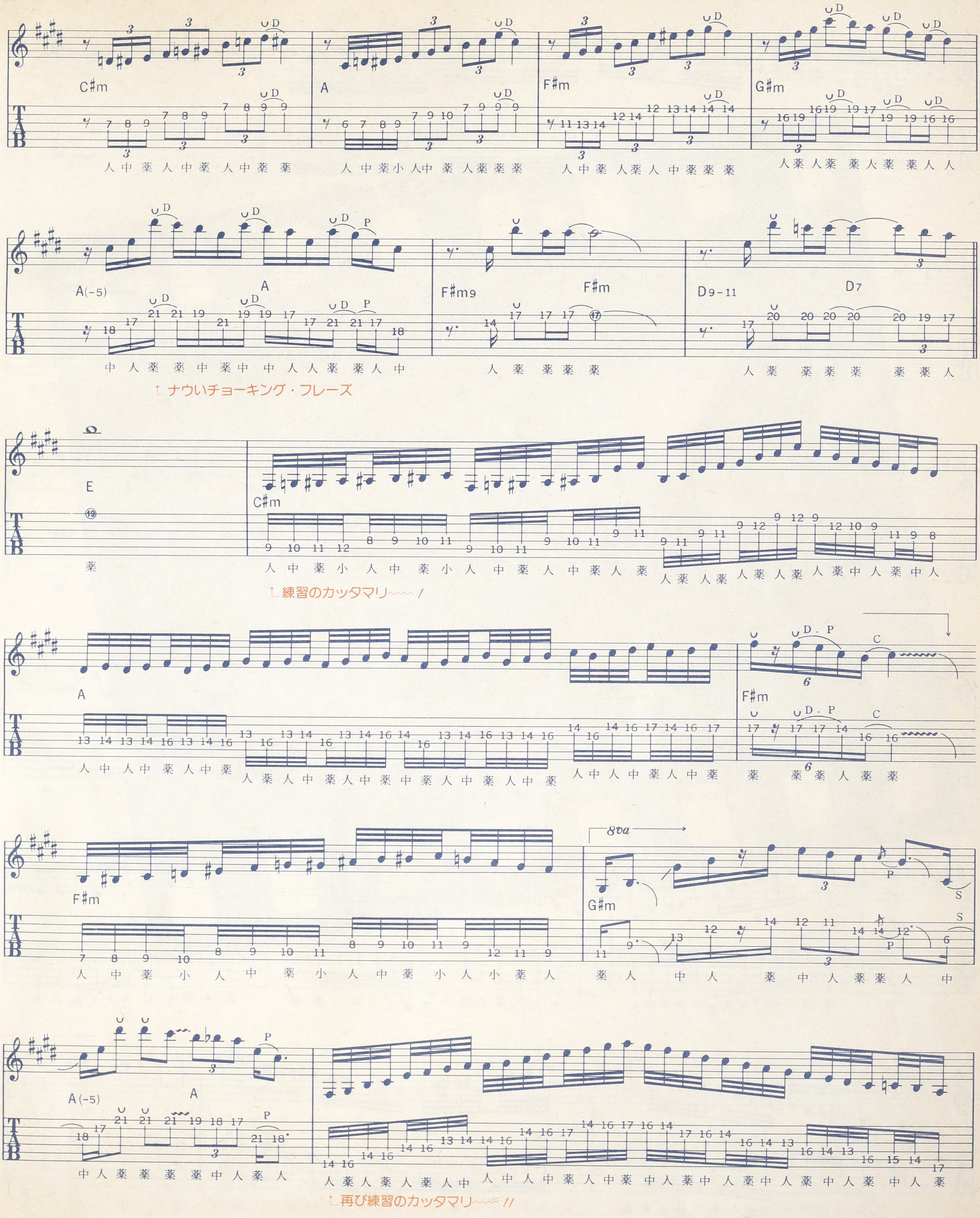
by Masayoshi Takanaka

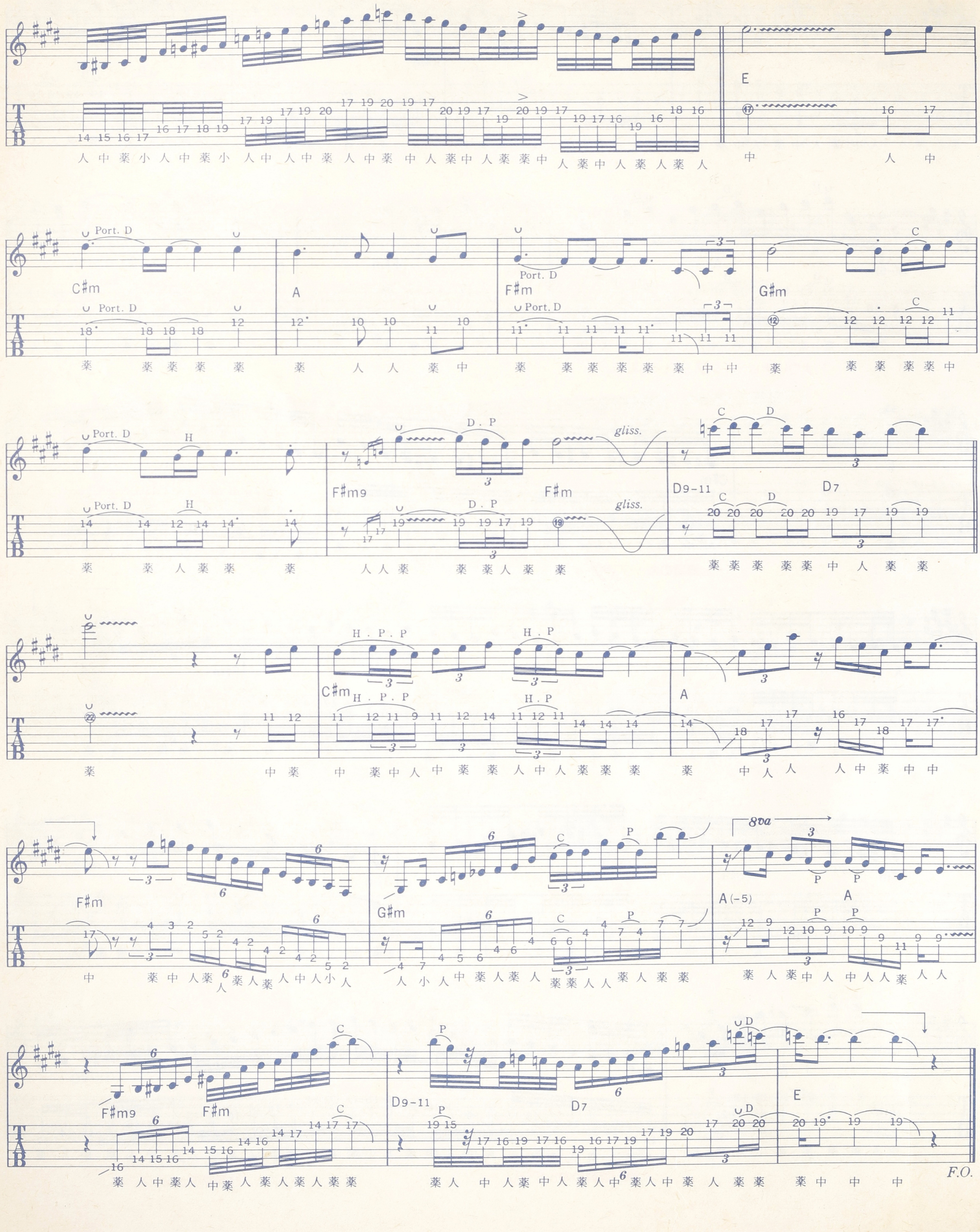



G#m
A(-5)
A
F#m9
F#m
D9+11
D7
Em9
25
Piano
E
E/D
Amaj7/C#
Am6/C
Emaj7/B
Cdim
C#m7
F#7
F#m7
E7-5/B♭
Amaj7
D9
F#m7/B
8va
E/C
リズムに注意


Am6/C
Emaj7/B
Cdim
C#m7
F#7
F#m7
E7-5/B
Amaj7
D9
F#m7/B
└ハード・ピッキングあるのみ
E
E/D
Amaj7/C#
Am6/C
Emaj7/B
Cdim
C#m7
F#7
F#m7
E7-5/B♭
└スライディングをはっきりきめる
Amaj7
D9
F#m7/B
└ナウいフレージング。タイミングをしっかりとろう
E
E/D
Amaj7/C#
思い切り大きいヴィブラート┘


Am6/C
Emaj7/B
C dim
C♯m
F♯7
F♯m7
E7-5/B♭
Amaj7
F♯m7/B
Emaj7/B
C♯m
F♯7
F♯m7
E7-5/B♭
Amaj7
当然、練習あるのみ
B
A/B
E
C♯m
A
1音半チョーキング
F♯m
G♯m
A(-5)
A
F♯m9
F♯m
D9-11
D7
E
ディミニッシュの展開だ


C#m
A
F#m
G#m
A(-5)
F#m9
D9-11
D7
E
└ナウいチョーキング・フレーズ
└練習のカッタマリ〜〜!
8va
A(-5)
└再び練習のカッタマリ〜〜!!


E
C♯m
Port. D
A
F♯m
G♯m
H
D . P
gliss.
F♯m9
D9-11
D7
H . P . P
H . P
8va
A (-5)
F♯m9
F.O.


KODAK SAFETY FIL
18
18A

クリスタル族の君は、この一冊でトロピカル・
シャワーを浴びることになる!



TAKANAKA THE BOOK

トロピカル・ムードいっぱいのカラー写真と高中自身が語る"TAL-KIN' ABOUT MYSELF" 書店・楽器店で発売!!

スーパー・ギタリスト
高中正義
初のパーソナル・ブック

(B5判・160頁・¥1,200)5月上旬予定

新興楽譜出版社
略称 シンコー・ミュージック

全国書店、楽器店でお買求め下さい。品切れの場合は最寄りの書店、楽器店に予約するか直接 当社宛へ、現金書留、郵便振替(東京4―98233)で定価に荷造り送料300円(1部増すごとに100円増し)を加えて、必ず電話番号を記入して下記へご注文下さい。
〒101 東京都千代田区神田小川町2―12 新興楽譜出版社
DM係

TAKANAKA'S GUITAR



あのファンタスティックなサウンドを生みだす高中正義の愛用するギターを紹介しよう。高中のギターといえば、すぐヤマハＳＧモデルが頭に浮かぶぐらい、ステージではＳＧモデルを主体にプレイしている。
「僕はあまり欲がないんだ。ヤマハのギターだって良いし、充分だよ」と言う高中だが、彼はどんなギターであっても高中流ファンタスティック・ギターにしてしまうのだろう。ここに紹介するギターのいずれもが素晴しくごきげんなものばかりである。





⬆最初に手にしたSG-1000



⬆"虹伝説" コンサート用の為に特殊ペイントをしたSG-1000

⬆コンサートで大活躍のブルー・フィニッシュのSG-2000

TAKANAKA'S GUITAR

高中正義の愛用ギターといえば、すぐ思いつくのがヤマハのSGモデルだ。ソロ・アルバム『セイシェルズ』を発表した後にSG-1000モデルを手にして以来、ステージに、レコーディングにと愛用している。ボディーの状態を見てもその使い方がわかるというものだ。このヤマハSG-1000モデルには2つの特別な機能があって、高中もこの便利なシステムが気に入っている。そのシステムとは、2つのトーン・コントロールに装備されたプッシュ・ロック・スイッチによってハムバッキング・ピックアップをシングル・コイル・ピックアップにきりかえができるというバイ・サウンド・システムと、トーンとボリュームをフル（10）にするとブライテスト・サウンドになるダイレクト・サーキットが働くシステムだ。特にそれまでストラトキャスターの愛用者（今でも愛用しているが）であった高中正義にとっては魅力的なシステムといえよう。

“虹伝説”コンサートのメイン・ギターとして活躍したのもSG-1000である。このギターのもとはレッド・サンバーストで、スペアのギターとして用いていたものを、今回のコンサートのためにメタリック・フィニッシュにリフィニッシュしたうえに虹色の特殊なペイントをしたものだ。ヘッドとトラスロッド・カバーに“TAKANAKA”のネームを入れ、コントロール・ノブも色とりどりにアレンジしてある素晴しく美しいギターである。

高中のコンサートでのメイン・ギターでもあるブルー・フィニッシュのSGと、最近手に入れたホワイト・フィニッシュのSGは共にSG-2000モデルで、バイ・サウンド・システムとダイレクト・サーキットを加えた特注モデルである。このSG-2000モデルにはブリッジの下に、音の伸びを良くするサステイン・プレートがうめ込まれているのが特徴だ。

フェンダー・ストラトキャスターは、'59年製のオールド・モデルで、高中にとっては最もつきあいの長いギターである。最近のステージではあまり使用しなくなったが、レコーディングの方では大活躍しており、あのファンタスティックな高中サウンドにはなくてはならないギターである。

アコースティック・ギターはマーチンD-21モデルで、ロスで手に入れた'67年製だ。マーチンD-21モデルというのは製作本数が非常に少なく貴重品である。アルバム『虹伝説』の中の「ザ・サンセット・バレー」の間奏でのアコースティック・ギターのソロはこのギターでプレイしたものだ。



⬅マーチンD-21は貴重品だ

⬇ストラップも虹色のネーム入り

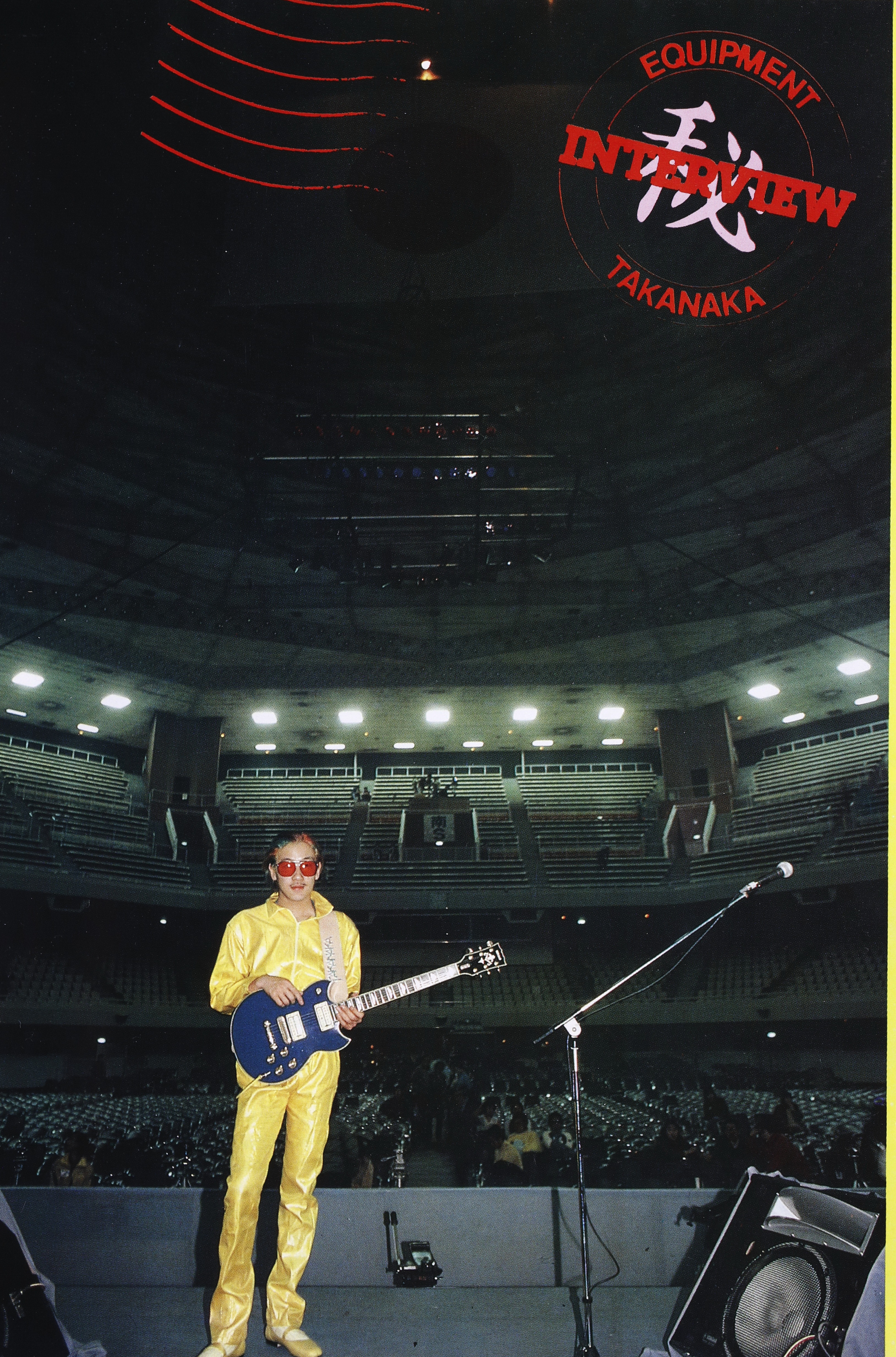
⬅おなじみのストラト。最近ではステージよりもレコーディングで主に使用している

⬇ピックはオリジナルの“TAKANAKA”のネーム入りだ。

➡愛用弦は石橋楽器オリジナルの“メイビス”弦

⬅一番新しいホワイトのSG-2000


YOU SHOULD KNOW THE BEST
mavis
新発売。NEW「MAVIS」ギター・ストリングス。
「高中正義」「柳ジョージ」をはじめとする、多くのミュージシャンが愛用している「MAVIS(メイビス)」ギター・ストリングス。今、パッケージ・デザインも改たにNEW「MAVIS」の新登場です。もちろん品質もこれまでにくらべて、さらにワンステップ。ギタリストの微妙な感性をも的確に伝える《高感度ギター・ストリングス》です。しかも、「エレキ弦」「フォーク弦」共に価格は従来のまま。君はもう、体験したかな、NEW「MAVIS」ギター・ストリングス。
mavis
500XL
MAVIS ELECTRIC GUITAR STRINGS
500XL(EXTRA LIGHT GAUGE)¥500
500L(LIGHT GAUGE)¥500
500SL(SUPER LIGHT GAUGE)¥500
mavis
500C
MAVIS ACOUSTIC GUITAR STRINGS
500C(COMPOUND GAUGE)¥500
500M(MEDIUM GAUGE)¥500
500L(LIGHT GAUGE)¥500
ビンビンくるぜ、メイビス。
高中正義も絶賛使用中!
お買求めは全国有名楽器店で。お近くにない場合は、通信販売を御利用下さい。
通信販売の場合、3セット以上でお申込み下さい。送料はサービスさせていただきます。
●お申込みは
「エレキ弦」ご希望の方は、〒101 千代田区神田駿河台一一八 (株)石橋楽器店「ロック・サイド」メイビス係
「フォーク弦」ご希望の方は、〒101 千代田区神田駿河台二一二 (株)石橋楽器店「フォーク・サイド」メイビス係
ゲージの指定をお書き下さい。
㈱石橋楽器店 ●新宿店350-1484/お茶の水店●FOLK SIDE291-6701~2●ROCK SIDE291-0541~3●BOOK SIDE291-6703●チケット・イン291-6703
●渋谷店462-0157/KEYBOARDS MART 233-1484~5 イシバシ楽器サービス●リペアー・ルーム 295-1286/パーツ・フロア295-1287
music seeker
ISHIBASHI
新宿/渋谷/お茶の水



高中正義 企業秘密を語る

インタビュー●斉藤節雄
撮影●三浦憲治



高中正義の華麗なるギター・サウンドを支える数々のイクイップメント(機材)。彼の生み出すメロディーを見事に演出する心憎い脇役達だ。

いわば高中サウンドの要であり、彼にとってトップ・シークレットであるイクイップメントだが、本誌のために、あえてその企業秘密を明してくれた。では、さっそくインタビューを始めることにしよう。

ワイアレスは一度使うとやめられないね

Q：レインボウ・ゴブリンズの武道館でのコンサートは、一部でレインボウ・カラーのＳＧ－1000、二部ではおなじみのブルーのヤマハＳＧ－2000を使っていましたね。

A：そうね。ライヴはなるべく同じタイプのギターで通した方が、弾きやすいんだよね。途中でギターを替えると感じが変っちゃうじゃない。でも今回のコンサートでは何曲かストラトキャスターも使いたかったんだけど、結局パワーが違い過ぎるし、うまくいかなかったんだ。

Q：ヤマハのＳＧは特別にカスタマイズしているのですか？

A：いや、あれはそのままだよ。今はもうＳＧに慣れちゃってるからね。

Q：ピックアップも交換していませんか？

A：うん。ヤマハのままさ。ただサンバーストのＳＧはギブソンのピックアップに交換しているよ。

Q：アンプはどういうシステムになっていたのですか？

A：企業秘密なんだよね。(笑) ほとんどディストーションの時はブギーを使っているよ。クリアーなサウンドが必要な時は、ピービーのパワー・アンプにアレンビックのプリアンプ、アルテックのスピーカーをステレオで鳴らしているわけさ。ブギーもスピーカーはアルテックで鳴らしているけど。

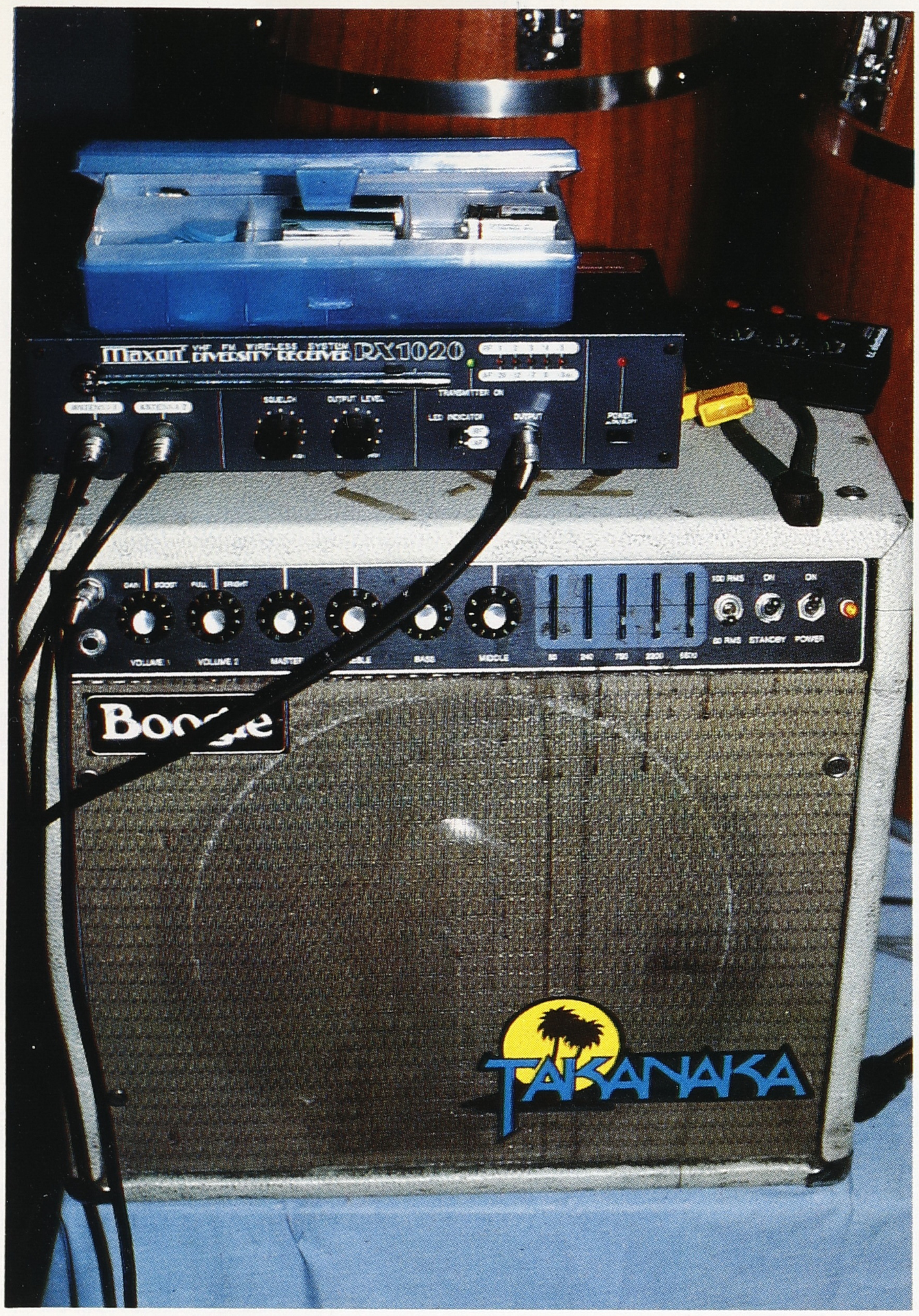
Q：ブギーのセッティングはどうなっているのですか？

A：VOLUME 1、2、MASTER、共に"6""6"、"6"、か"5"、"5"、"5"位にしてあるんだ。サンタナは"7"、"7"、"7"にしているらしいけど、僕のはスピーカーが飛びやすいんでね。それにBRIGHTとGAIN BOOSTをオンにしているよ。

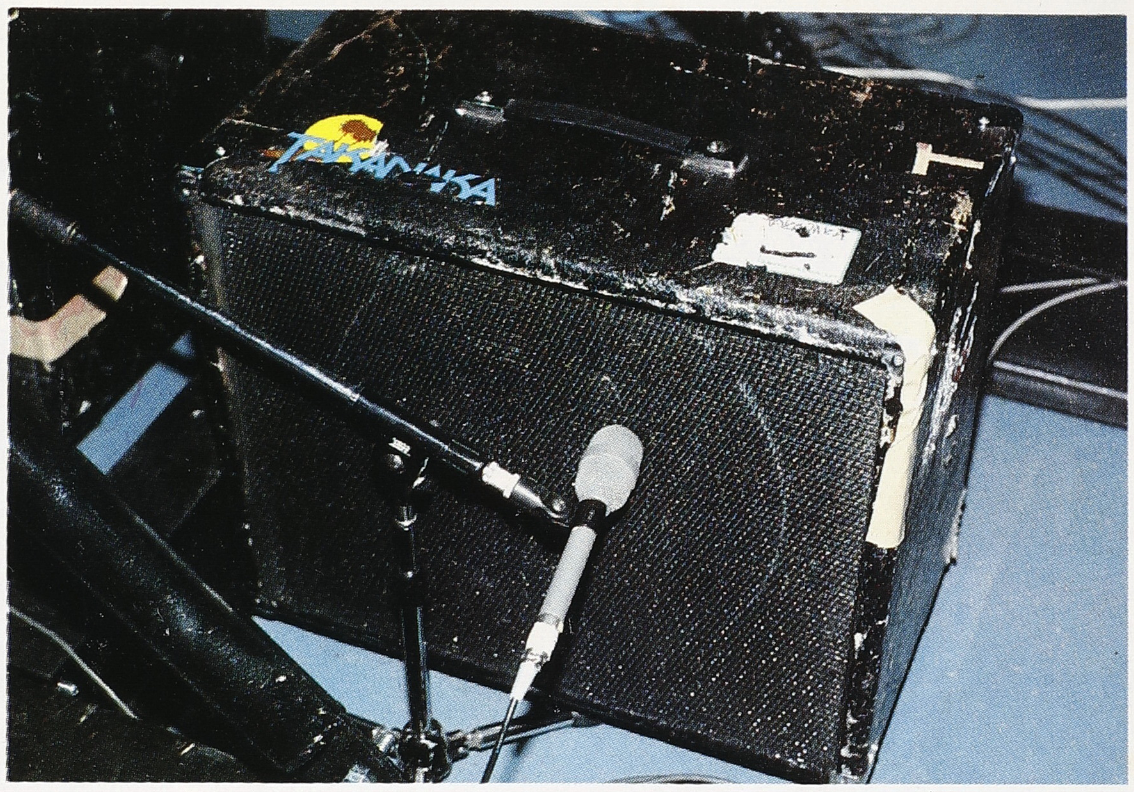
Q：以前はＭＸＲのディストーション＋(プラス)を使ってディストーションを得ていたでしょ？

A：いや、今でもアルテックのシステムの方でＭＸＲのディストーション＋とボスのコーラス・アンサンブル、それにエコーを少し掛

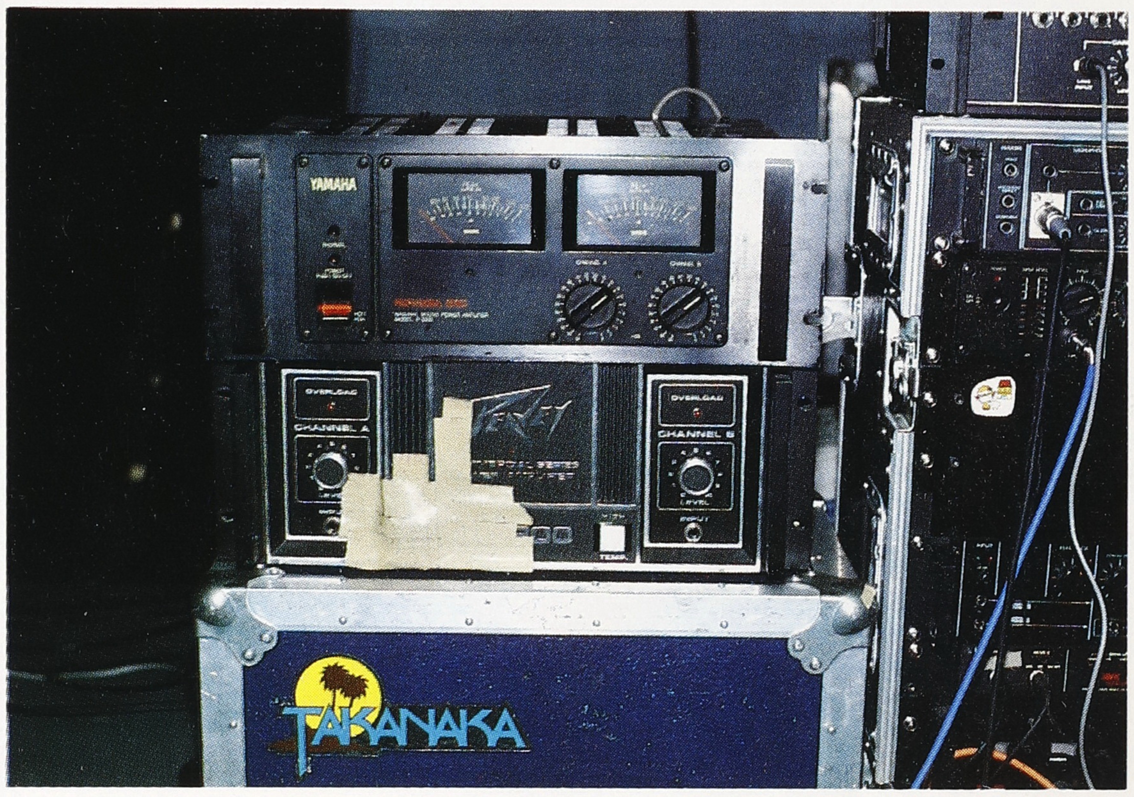
⬇おなじみのブギーの上にはマクソンのワイアレス・レシーバー



⬇スピーカーはアルテック418－8H



⬅ピービーのパワー・アンプ



けて、「BLUE LAGOON」なんかやってるけど。

Q：では、ブギーで得るディストーションとＭＸＲのディストーション＋を使うやり方とを、どのように使い分けているのですか？

Ａ：その時の気分だけど、最近はブギーのひずみ方がいいような気がして、その方が多いね。

Q：アンプとしては、ブギーがかなり気に入っているわけですね。

Ａ：いや、そうでもないけど。もっと良いアンプがあれば換えるだろうし……。

Q：最近またマーシャル・アンプが流行しているけど、どうですか？

Ａ：いや、ブギーのパワーで充分じゃないかな。ライヴでデカい音を出すと、音が回っちゃうでしょ。ステージでは、なるべく関係のないノイズは出さないようにしているのね。音ならＰＡでいくらでも拡大できるしね。

Q：ギターはワイアレスにしていましたね。

Ａ：うん、マクソンのシステムだね。使い始めた頃は、弾いて音が出るまでに、ちょっと遅れるんじゃないかっていう気がしたんだけど、慣れると全然気にならないし、むしろシールドがまとわりつく感じが解消されて、一度使うとやめられないね。(笑)

Q：エフェクターについて、いろいろ聞きたいのですが、最近はオレンジ・スクイーザー（コンプレッサー）を使っていませんね？

Ａ：いや、やっぱり気分なんだけど、ＭＸＲのダイナコンプのシャープな音に比べ、少し丸くて、こもった感じになるでしょ。そのこもり具合いが凄く良い時があるわけ。そういう音が欲しい時に使ってるよ。

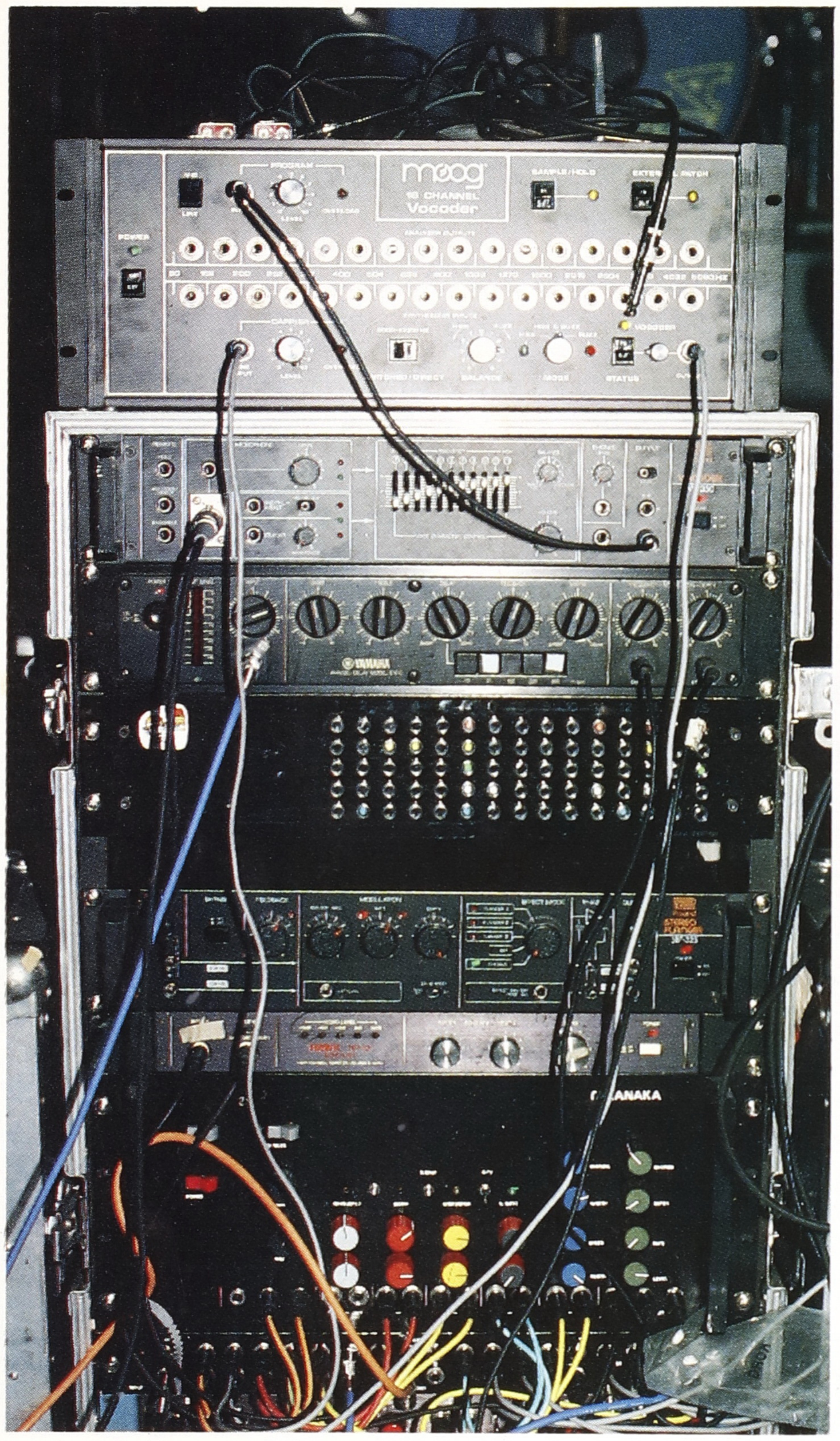
Q：では、例のラックに収められたエフェクターを紹介して下さい。

Ａ：武道館のコンサートの時のセッティングは、まずラックの上にムーグのボコーダーを置いて、ラックの中は上から、ローランドのボコーダー（これは使用せず）、ヤマハのアナログ・ディレイ、５種類のプリセットが可能なスイッチ・ボックス、ローランドのステレオ・フランジャー、ホークのスプリング・リバーブ、その下にミュートロンのオクティバイダー、ＭＸＲエンベロープ・フィルター（オート・ワウ)、ＭＸＲダイナコンプ、ＭＸＲディストーション＋、ＭＸＲノイズゲート、ＭＸＲフランジャー、ボスのコーラス・アンサンブルをまとめてセットし、下がそのパッチ・ボード。一番下にアレンビックのプリアンプがセットされてるよ。その他にミュートロンのバイ・フェイズ、でもこれは、あまり使ってないね。買った時は面白かったんだけど、最近ちょっと飽きてきてね。あとは、最近使いだしたテープ・エコーを２台、これはコルグのステージ・エコー。足元は、スイッチ類とグッドリッチのヴォリューム・ペダルだね。

Q：では、主に使うのは、ヴォリューム・ペダル、コンプレッサー、ディストーション、

EQUIPMENT 秘 INTERVIEW TAKANAKA

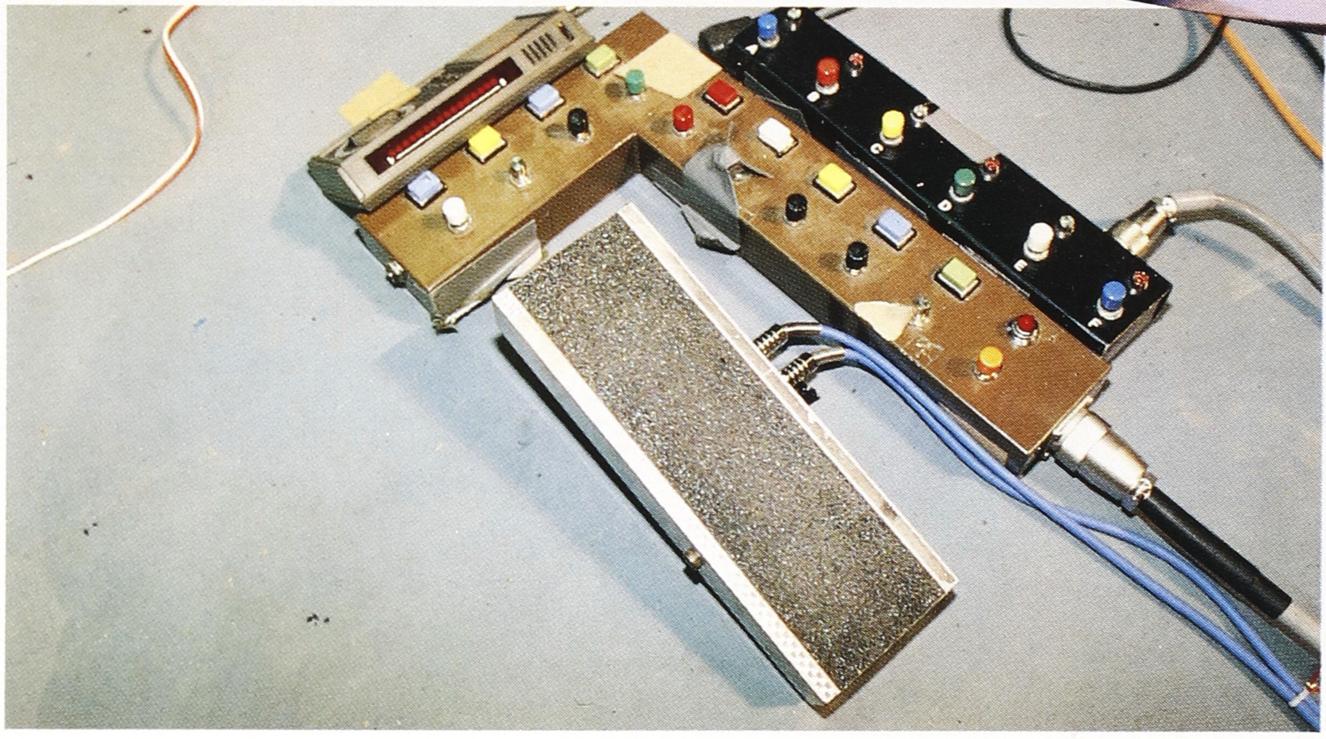
⬇高中サウンドの要 エフェクツ・ラック、上はムーグのボコーダー





⬅ミュートロン・バイ・フェイズと2台のコルグ・ステージ・エコー（テープ・エコー）





⬅スイッチ・ボードとグッドリッチのヴォリューム・ペダル

コーラス、オクターバー、エコーといったところですか？

A：そうだね。あとレコーディングの時は、スタジオにあるハーモナイザーも使ってるよ。あれはいいね。ぜひとも欲しいんだけど。

Q：ハーモナイザーはどういう使い方をしているのですか？

A：ちょっとシャープ（#）気味にセットした音をプラスするわけ。『虹伝説』では2曲位で使ってるよ。例えば「YOU CAN NEVER COME TO THIS PLACE」の最後ソロなんかでね。細い音がふくらむのね。

Q：エコーはどんな使い方をしているのですか？

A：ロング・ディレイをよく使うね。「黒船」をやる時は、ディストーションを掛けているから、あまりエコーを深く掛けると音がグシャ、グシャになっちゃうので、リピートを浅めにしてね。あとは、ショート・ディレイで、タラッ、タラッ位の感じのを使うかな。ヤマハとコルグのをそれぞれあらかじめセットしておいてね。

最終的には良い曲を作りたいわけ

Q：あまり練習しないという話ですが……。

A：普段はね。でもレコーディングの前とかコンサートの前は集中的にやるよ。（笑）

Q：やっぱりね。『虹伝説』の「YOU CAN NEVER〜〜」など、スケール練習していないと出来ないようなフレーズが、たくさん出て来るでしょ。やはり、かなり研究しているわけですか？

A：いや、あれはもう作曲なのね。アドリヴじゃなくて作ってるわけ。自分でコードを弾きながら、口で唄いながら、それじゃ、どういう音を使おうかなって感じで、譜面に書くわけ。

Q：全部譜面にしちゃうんですか？

A：あの曲は全部譜面にしたよ。

Q：すると、ほとんどの曲もそういったやり方で……？

A：ウーン。大体最初に4リズムで録るでしょ。メンバーにわかってもらうために、まず僕がメロディーを弾いて、でソロのパートは適当に弾いておくわけ。いい個所は覚えておいて残すけど、結局はどんどん変えていってね。最終的にああいう形になるわけ。

Q：「BLUE RAGOON」や「READY TO FLY」もライヴでは、レコード通りに演奏していますよね。結局レコードの演奏が、最終的な形で、それが半永久的に残るという感じですか？

A：まあ、そうだね。

Q：ではジャズのスケールとかは、まったく練習してないわけですね。

A：そうだね。別にスケールとか意識しているわけじゃなくて、感じでやってるからね。適当なんですよね。（笑）やっぱり聴いていて楽しければいいと思うのね。例えば大村憲司とか渡辺香津美とかは、そういうスケール練習みたいなところからギターに入ってきたと思うのね。でも俺はそういうところってないんだよね。

Q：フィンガリングも小指をあまり使わないロック・スタイルですよね。



A：そうなんだよね。（笑）やっぱり小指って力が弱いんだよね。いざっていう時は、やっぱり3本になっちゃうわけ。本来は小指を使わなければいけないところでもね。わりとソフトな音の時は、よく小指を使ってるけどブギーを使う時は、どうしても3本になっちゃうんだよね。あまり頼りにならないって感じがあってね。

Q：コンサートのアンコールで見せてくれた「鉄腕アトム」（左手でベース・ラインを入れ、右手で弦を叩いてメロディーを弾く特殊奏法）は何からヒントを得たのですか？

A：きたな。（笑）1日練習したんだよね。え〜と、バラしちゃうと、ビル・ブラッフォードのバンドのベースが演ってたんだ。凄くキレイな音で早くてね。それで「シャフト」を演るわけ、もう凄いんだから。そのやり方で「鉄腕アトム」を演ったら面白いんじゃないかと思ってね。今度は「ローハイド」を演ろうかと思ってるんだ。（笑）

Q：ハーモニックスのプレーも随分前から演ってますよね。「MAMBO NO.5」のイントロとか……。

A：あんなに速く出来るわけないじゃない。（笑）あれはテープのスピードを遅くして録音し、あとで元に戻したわけ。

Q：クラシック・スタイルのハーモニックスでやったわけですか？

A：あれは、こうだね。（右手人差指でハーモニックス・ポイントに軽く触れ、親指で弾くスタイル）ラリー・カールトンに会った時は、人差指をハーモニックス・ポイントに当て、ピックで弾くスタイルを見せてくれたけど、あれはちょっと練習しないとうまくいかないんだよ、あのやり方の方が音はハッキリ出るけどね。それにフレットを人差指で叩いても出るでしょ。あまりキレイに出ないけど、ちゃんとフレットの真上を叩くと出るよね。

Q：指で叩くハーモニックスのやり方も、ラリー・カールトンで一般的になって来たと思うのですが、それ以前からもう演ってましたよね。

A：そうみたいね。『SEYCHELLES』を発表した後のコンサートあたりから演ってたしね。例のスタイルでハーモニックスが出るんだから叩いても出るんじゃないかと思ったわけ。

Q：「PLUMED BIRD」のバッキングのギターの音が面白いですね。

A：あれは、ギターのカッティングと同じことをシンセサイザーでやってるのね。

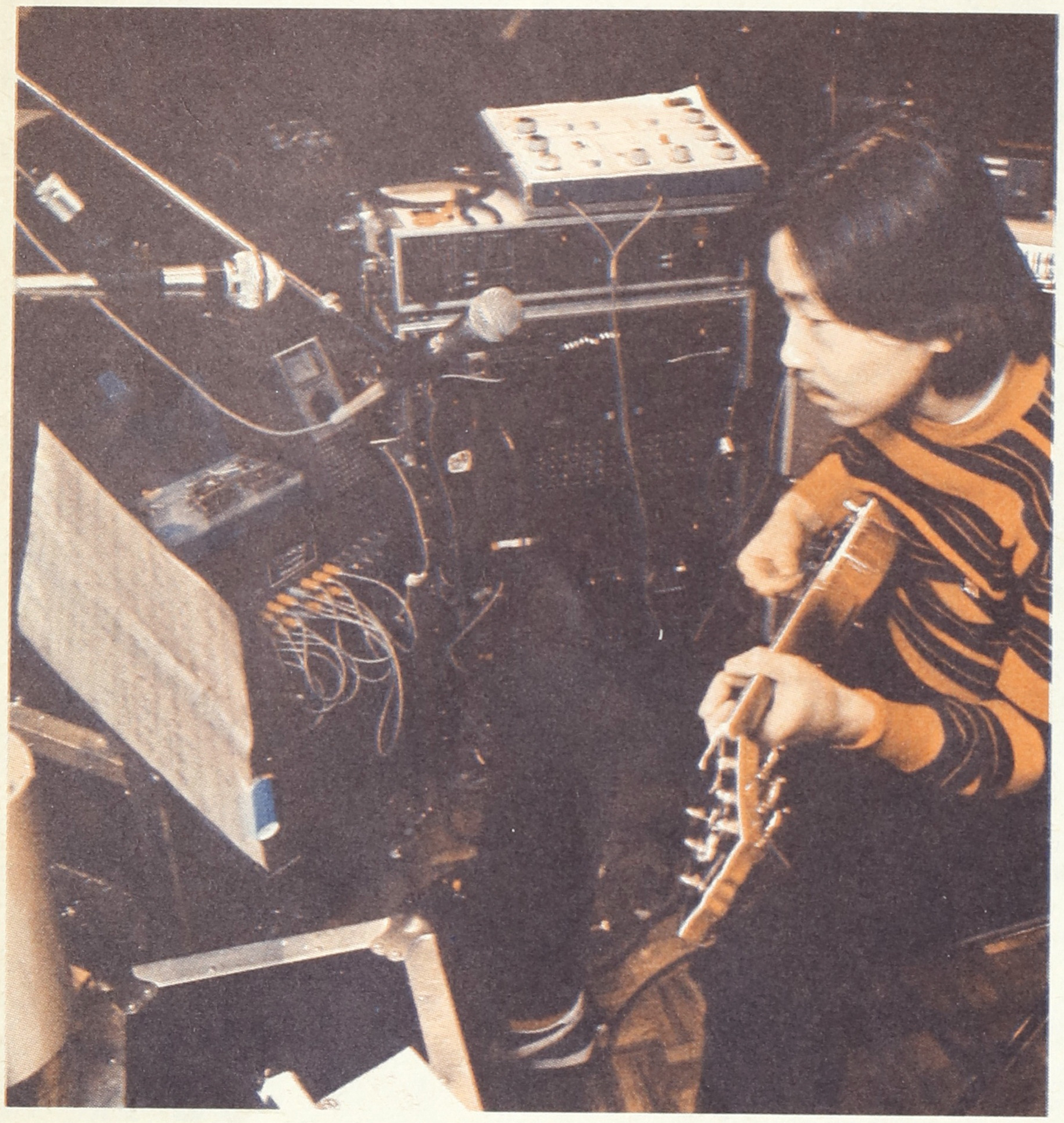
Q：そうなんですか。ギター・シンセサイザーかと思って……。

A：コルグとアープのギター・シンセを持ってるけど、ピッキングをハッキリさせないと音が出ない時があるんだよね、難しいね。練習しないといけないし……。

Q：GRのようなポリフォニック・ギター・シンセサイザーは使ってませんか？

EQUIPMENT 秘 INTERVIEW TAKANAKA

EQUIPMENT
INTERVIEW
TAKANAKA







A：うん、以前日比谷の野音で2曲程使ったけどね。まだ研究段階なんだよね。レコーディングではまだ使ってないよ。

Q：「RISING ARCH」という曲は、ギター1本で演っているのですか？

A：そうだよ。なんで？

Q：ハーモニックスと実音をまぜているでしょ。だから2本でダビングしたのかと……。

A：あの技もラリー・カールトンにこの前会った時に教えてもらったのね。（詳しくはP.58「RISING ARCH」の解説を見て下さい）次のレコーディングの時に君はこれを使うだろ、なんていわれたんだけど、案の上使った。（笑）

Q：「EARLY BIRD」で、ライト・ハンド奏法を演ってますよね。

A：でも、わりと皆んなやってることでしょ。

Q：ライト・ハンド奏法はヴァン・ヘイレンが面白いですよ。

A：へぇ〜。今度テープちょ〜だいよ。(笑)全然聴いたことないんだよね。

Q：わりと他のギタリストのことは全然気にしてないんですね。

A：いや、あまり聴くと気になってくるじゃない。で、マネッコになっちゃうと困るしね。

Q：最近はどんな音楽を聴いてますか？

A：よく言うんだけど、シンガーズ・アンリミテッドとかの歌ものだね。ワーッ、このギターのフレーズがどうのこうのっていうレコードの聴き方はしないよね。でも、ラリーとかリー・リトナーの新譜が出ると気になるけどね。

Q：特に印象に残ったものはありますか？

A：リーの新しいのもイマイチだし、ラリーももっとワイルドなロックの感じの方がいいような気もするね。

Q：TOTOのスティーヴ・ルカサーなんてどう思いますか？

A：あれは、ライヴを見て凄く良かったよ。まあ、TOTOにしろラリーやリーにしろライヴを見るのが楽しいよね。ラリーなんか、やっぱりロスのベイクド・ポテトみたいなクラブでベラベラベラっと弾いているのが、ワーッ、スゴイって感じでいいんじゃない。(笑)

Q：ラリー・カールトンからは得るところが大きいですか？

A：うん、やっぱり速弾きっていうのは、ギタリストの夢でしょ？でも、あまり固執してないけどね。最終的には良い曲を作りたいし速弾きのための曲ではなくて、1曲の中に速弾きも少し入っている位の感じでいいんじゃないの。

Q：では最後に高中正義を目指すギター・キッズにアドバイスを下さい。

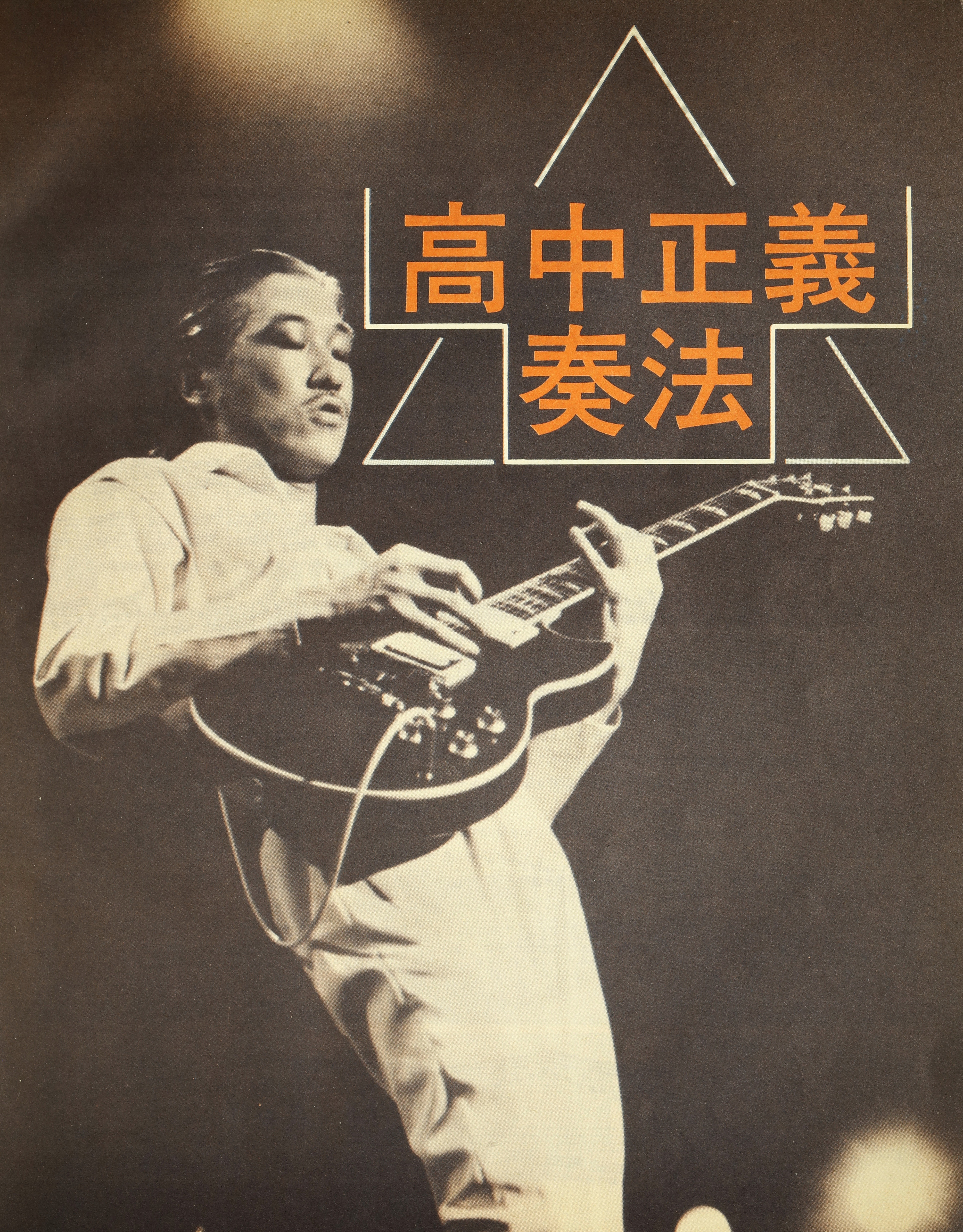
A：とにかく練習量が問題なんじゃない。メシ食っているか、寝てるか、ギターを弾いてるかって感じじゃないとダメなんじゃない。

Q：特に勉強に役立つレコードとか、教則本とかありますか？

A：別にないけど、きっとそういう人達は、スケール練習をやれっていってもやらないと思うんだよね。つまらないからね。（笑）だから、好きなものをどんどんコピーしていくことがいいんじゃないかな。“好きこそ物の上手なれ”ってあるじゃない。ただしコピーも正確にやることだね.

——どうも、ありがとうございました。——

高中正義
奏法



ピッキング

言うまでもなくアップ＆ダウンのオルタネイト・ピッキングだ。

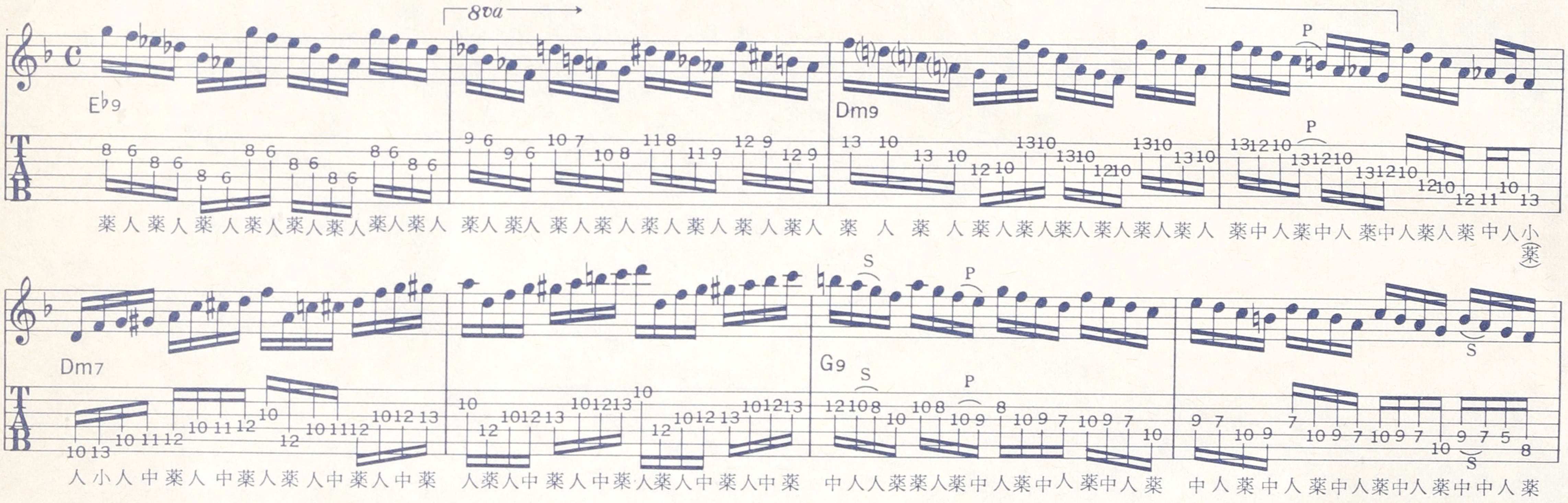
８ビート・ピッキング、３連ピッキング、16ビート・ピッキングばかりか、高中奏法には６連ピッキング、32ビート・ピッキングまで登場する。

さらに、インターヴァル（音程）の跳びに伴い、弦跳びピッキングも多くなっているので、とてもハード。──弦跳びピッキングというのは、１．２．３弦と連続的に異弦をピッキングしたり、１～３弦、４～１弦と隔たった弦をピッキングしたりすること。リッチー・ブラックモア奏法にも良く出て来るが、とにかく君のピッキング・テクニックが問われる難関である。

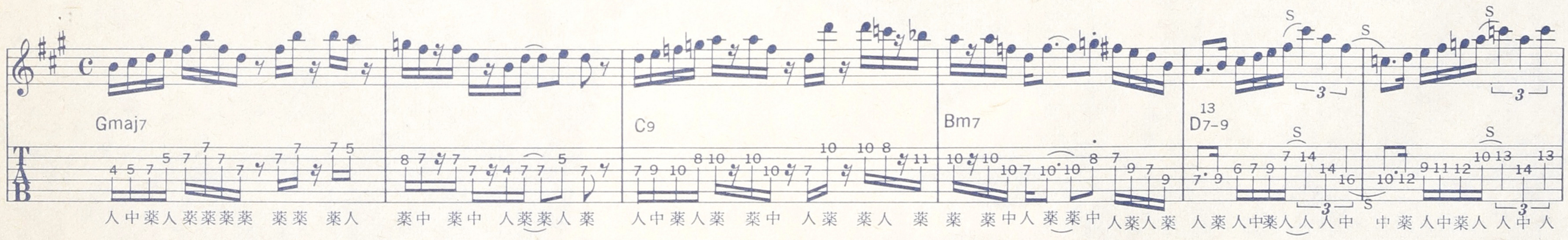
巧く弾ける人はそれでよいが、巧くいかない人は、手首をグニャグニャ回さず、上下（縦）にキチンと振りながらアップ＆ダウンのオルタネイトするトレーニングを積もう。とにかくピッキング・フォームを整然とキメることがスマートなピッキングへの道なのだ。

また、正確に音符を弾きこなすばかりではなく、アタックを効かせたパワフル・ピッキングも高中奏法に必要なことを忘れないように。（譜例1、譜例2、譜例3）

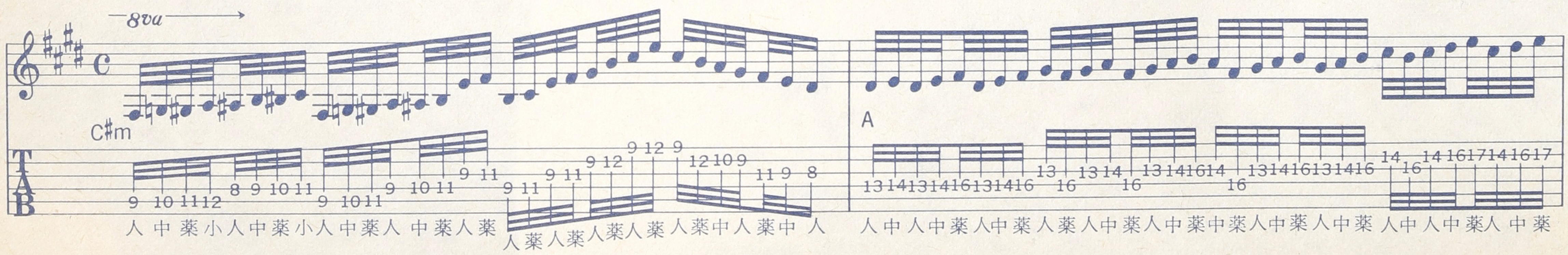
譜例-1 「セブン・ゴブリンズ」より



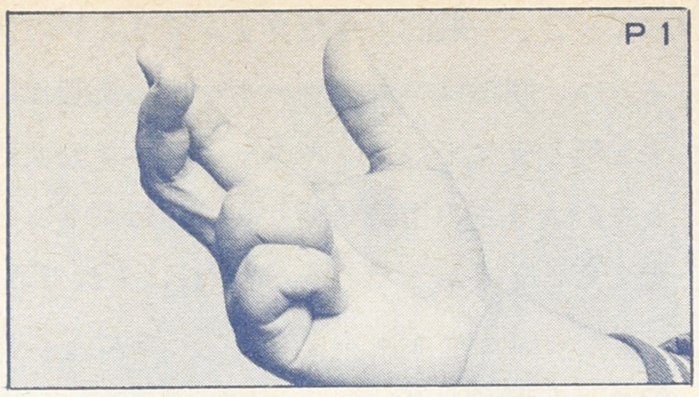
譜例-2 「ブルームド・バード」より

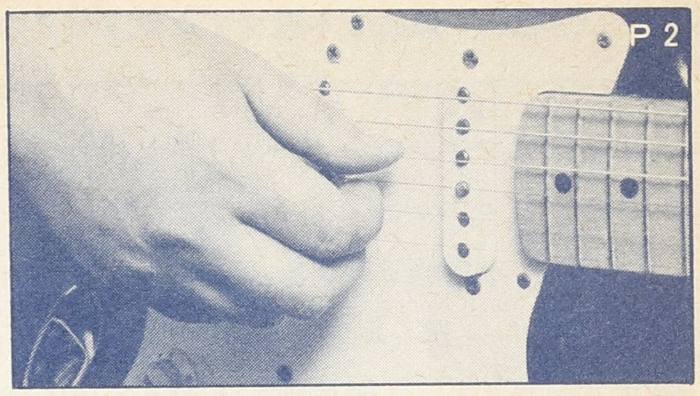


譜例-3 「ユー・キャン・ネバー・カム・トゥ・ジス・プレース」より



さて、以上はフラット・ピッキング（一般的フラット・ピックを使った演奏）であるが、『虹伝説』の「レインボー・ワズ・リボーン」では、フラット・ピックを一切用いず、素手でフィンガー・ピッキングしている。P－1のようなフィンガー・フォームで、P－2のように弦に触れる。クラシック・ギターなどのフィンガー・ピッキングと異なり、この場合、何も定石はないので、弾き易すいようにやればよい。マァ、一般的には親指と人差指で交互に弾く。2、3弦のダブル・ノートは、


P1


P2

2弦を中指、3弦を人差指とした方が余分な力がいらずベターだろう。（譜例－4）

ジェフ・ベック、ジミー・ペイジの得意技にフラット・ピッキングと中指（当然右手）の併用ピッキングがある。そういうのも知っていると、君のギター・プレイにグーッと幅が出るハズだ。

譜例－4 「レインボー・ワズ・リボーン」より

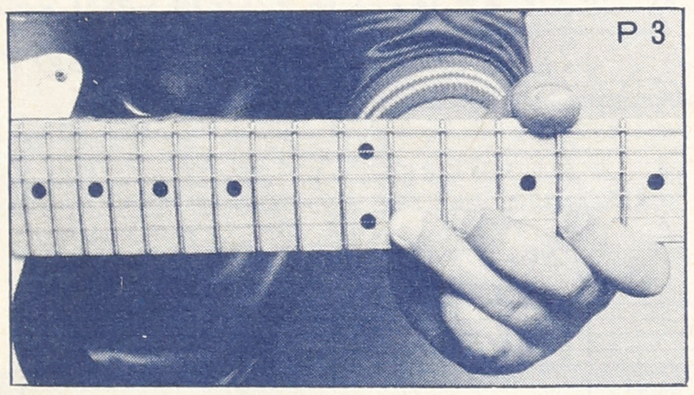


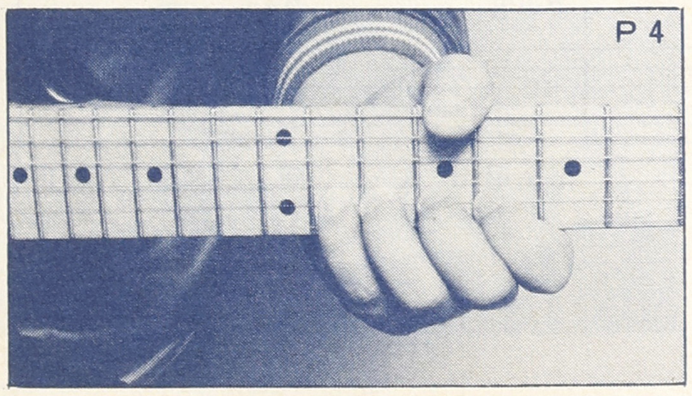
B フィンガリング

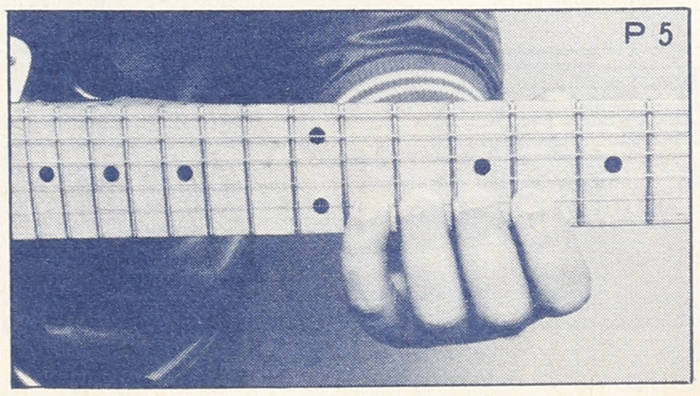
一般的にロック・ギター、ブルース・ギターは左手の人差指、中指、薬指の3本を主体としたフィンガリング、ジャズ・ギター、クラシック・ギターは人差指から小指までの4本指を均等に活用したフィンガリングと言われる。（中には親指まで使う強者もいる。）確かにそうであるが、現在のように特にロック&ジャズ・ギターがミックスされたようなギター・スタイルが出てくると、そこからはその両者を巧みに使いワケるワザ師も登場するのは当然の成り行きだろう。

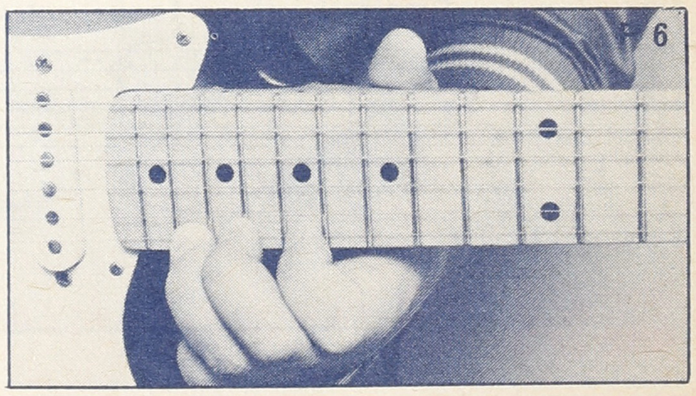
で、高中も、ロック&ジャズ・ギター奏法を巧みにミックスしているギタリストと言えるが、彼の場合どちらかというと3本指中心になってしまうという話がインタビューに出てくる。「セブン・ゴブリンズ」の16分音符の連続など、実にキッチリ4本指でフィンガリングしているようだが。

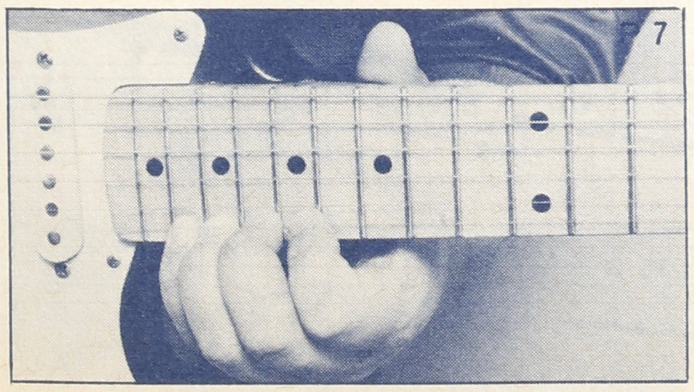
が、基本的に3本指でプレイするギタリストも、当然ケース・バイ・ケースで小指を使ったりするのだから、フィンガリングのいくつかのケースをチョッとチェックしてみよう。

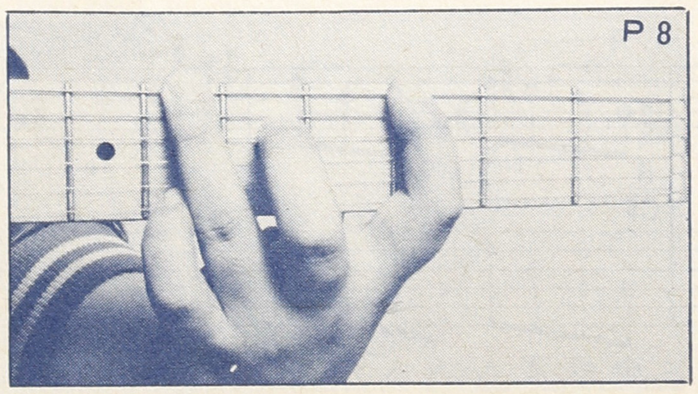

P3

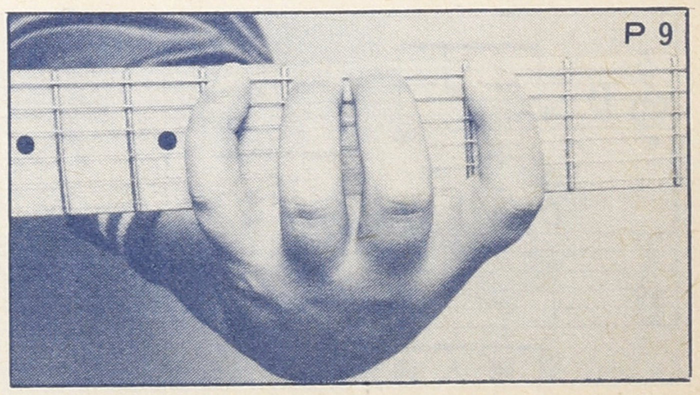

P4


P5


P6


P7


P8


P9

P−3は、一般的3本指フィンガリングのフォーム。チョーキング及びヴィブラートに備え親指はフィンガーボード上部に掛かる。いわゆるアメリカン・グリップだ。

P−4、本格的ロック&ジャズ・ギターの草分けラリー・カールトンなど、アメリカン・グリップのまま、4本指フィンガリングをこなすことも多い。マァ、手のデカさが物を言ってるワケだ。パット・メセニーもコレ。

P−5、一般的4本指フィンガリングのフォーム。親指はフィンガーボードの裏側で左手を軽く支えている。ギターのネックの太さと手の大きさの相関関係から、親指がもっと見えることもあるだろうが、それはそれで可。

P−6は、ハイ・ポジションにおける3本指フィンガリング。

P−7のように、クロマティック(半音程)連続なら4本指フィンガリングしかないが、一般的スケール・ポジションなら、P−6でこなしても、大して左手には余分な力が掛からないハズだ。

が、反対にP−8のように、ロー・ポジションの、それも6弦では、いくら3本指主体の人でも、左手及び指に余分な力が必要だろう。

やはり、ロー・ポジションに限らず特に6弦には、P−9のように小指を活用するのがベターだ。もちろん、高中奏法でもそうだ。

ハーモニクス奏法

チョッと前までロック・ギターのハーモニクス奏法と言ったら、ジェフ・ベックの「ジェフのブギ」が最高峰だった。単にナットとブリッジの間にある5、7、12（ほかにも4、9、17、24フレットなどがある）フレットのハーモニクス・ポイントをフラジオレット(P−10。チューニングに用いるアレ)するだけのものであったが、それでメロディーを作る自体が驚きだった、よネ。？

が、ここ5年ほどの間に、ウェザー・リポートのベーシスト／ジャコ・パストリアス、またチェット・アトキンス系のレニー・ブロー、アール・クルーといったギタリストが、ハーモニクスを活用しまくったプレイを始めて以来、ハーモニクス奏法の実体は変わってきた。

何のことなく、元々クラシック・ギター奏法の中にあったものである。フラジオレットと同様な原理で、フラジオレットがナットとブリッジ間のハーモニクス・ポイントで行なうのに対し、クラシック・ギター式ハーモニクス奏法は、押弦したフレット・ポジションとブリッジ間のハーモニクス・ポイントを利用する。フラジオレットがナットから数えるのに対し、クラシック・ギター式では、押弦したフレット・ポジションから12フレット上(フレットの真上)がセカンド・ハーモニクス、7 or 19フレット上がサード・ハーモニクス、そして5 or 24フレット上がフォース・ハーモニクスとなる。つまり、この方法だと全てのポジションで、各種ハーモニクスを得ることができるというワケだ。

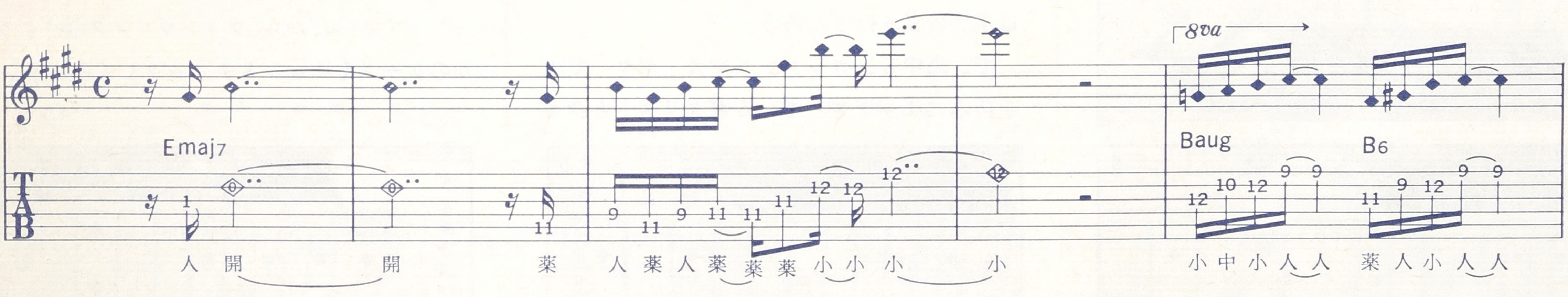
で、クラシック・ギター式は、P−11のように、人差指をハーモニクス・ポイント(例えば押弦したフレット・ポジションの12フレット上のフレット真上）に軽く当て、薬指でピッキング。あとは、フラジオレット同様、ピッキングとほぼ同時に、タイミング良く弦から人差指を離す。これで完了だ。

高中は、また独自の指使い（P−12）で、P−13のように、人差指でハーモニクス・ポジションに触れるが、ピッキングは親指で行なう。

もう有名だが、ラリー・カールトンはP−14のピッキング・フォームを作り、ピッキングはフラット・ピックで行なう。ハーモニクス・ポジションは、やはり人差指で触れるが。

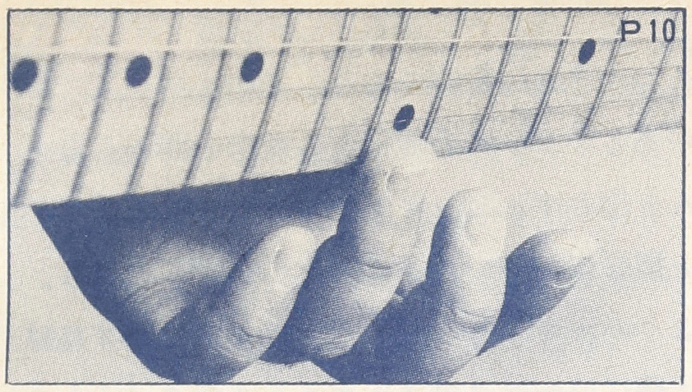
P−15、16は、それぞれ別角度から、そのフ

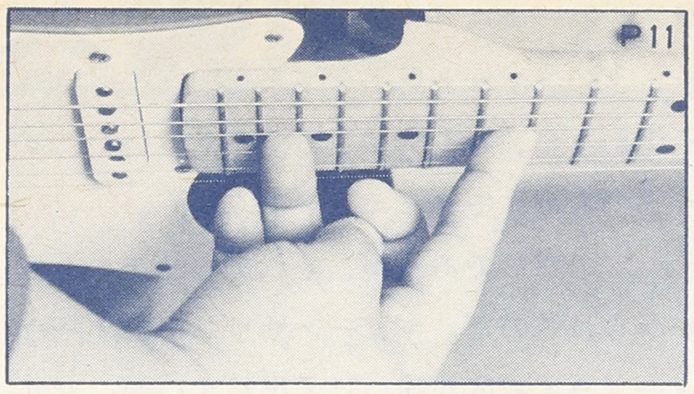
譜例-5 「レインボー・ワズ・リボーン」より

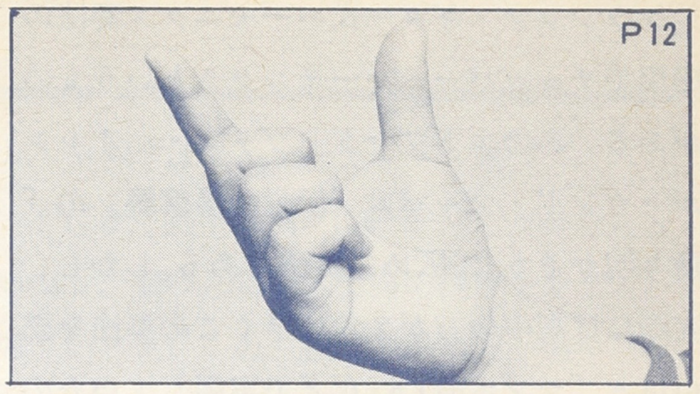


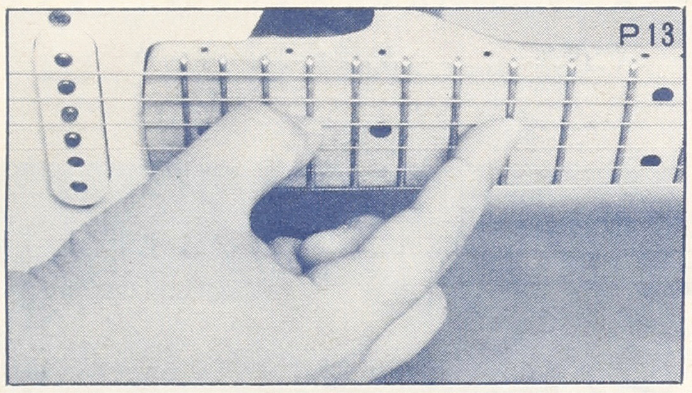
譜例-6 「ライジング・アーチ」より

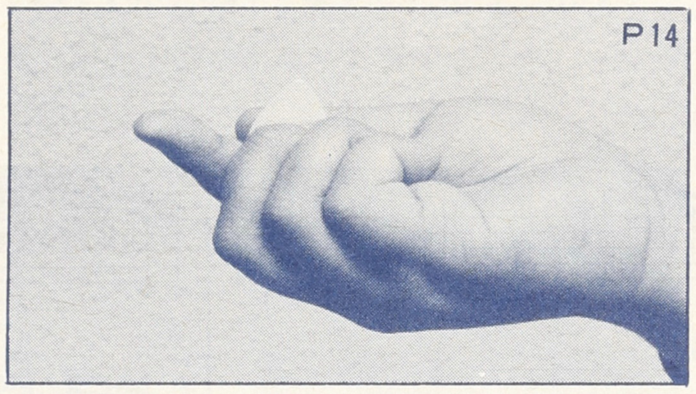


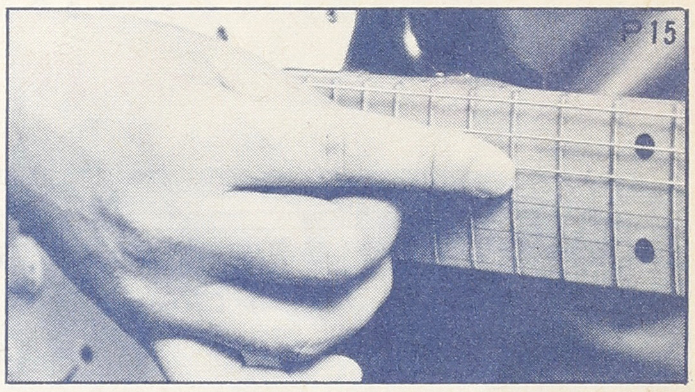

P10


P11


P12

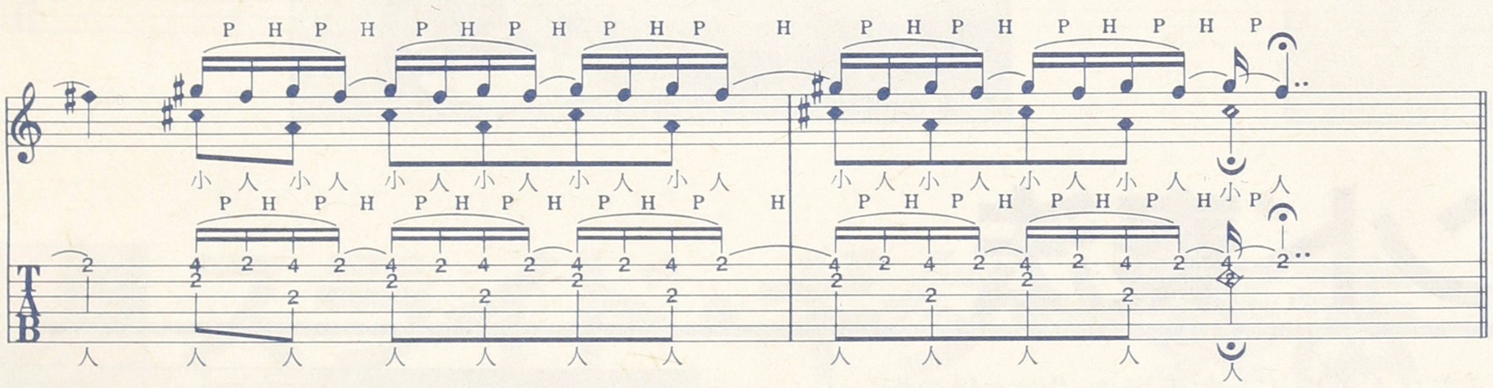

P13

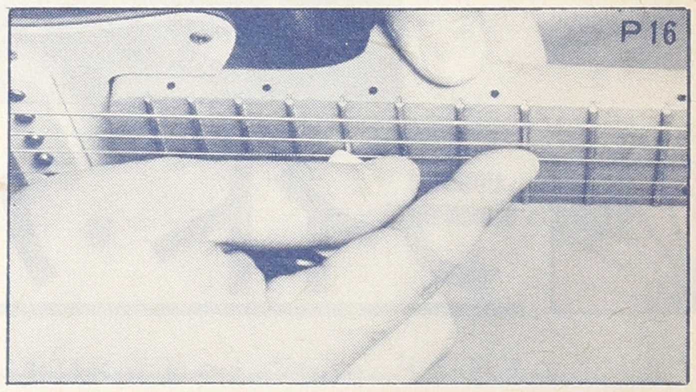

P14

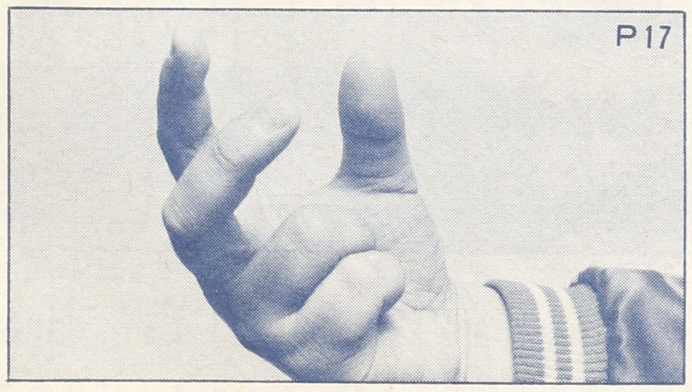

P15

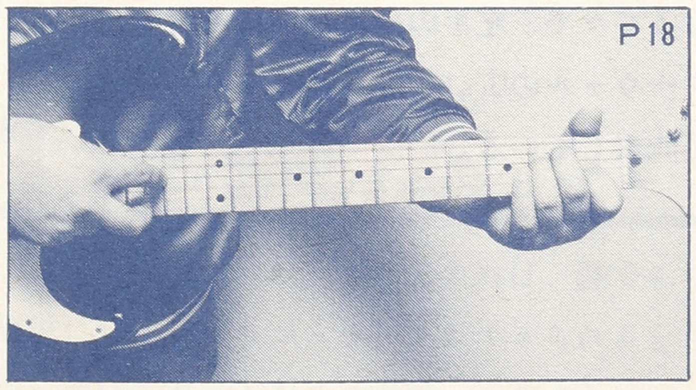
ォームを写している。(譜例—5、譜例—6)
　また、高中が『虹伝説』の「ライジング・アーチ」で試みた、ハーモニクスとノーマル音(普通にピッキングした音)を絡めたギター・プレイでは、P—17のピッキング・フォームが活用される。P—18〜20も見てもらうと分かるように、出だしの部分などノーマル音を中指、でハーモニクスは通常通り人差指&親指で弾けば、巧くこなせるワケだ。もちろん猛練習なくしては、しょうもないが。また、ハーモニクスが続くフレージングは、当然、人差指&親指で連続に弾く。—— もう一ケ所、8〜9小節目を写真解説しよう。P—21、P—22で分かると思うが、1〜3弦2フレットを人差指でジョイントした上で、2、3弦ではハーモニクスを繰り返し、1弦では小指(左手)を使ってトリル(ハンマリング&プリングの連続技)を繰り返すという、ひとりふた役

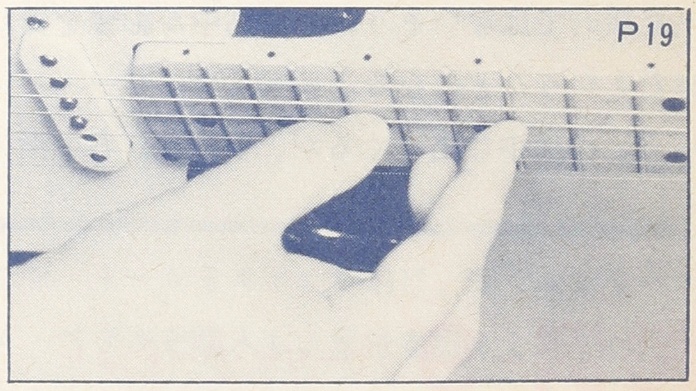
譜例-7 「ライジング・アーチ」より

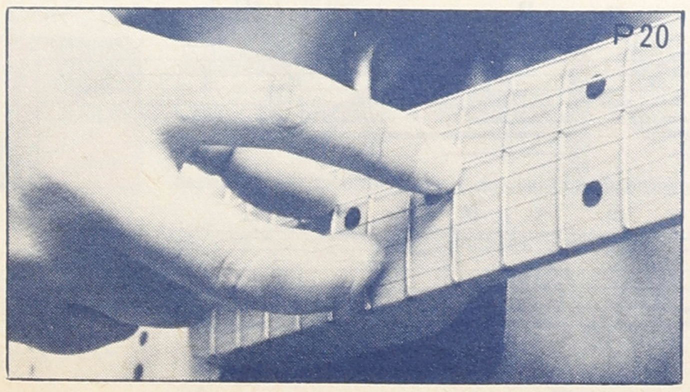


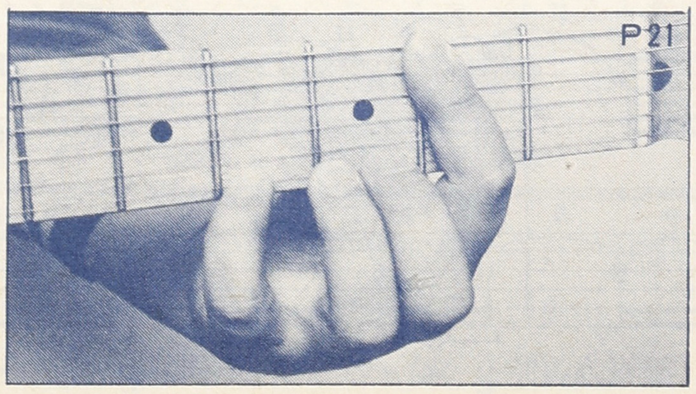

P16

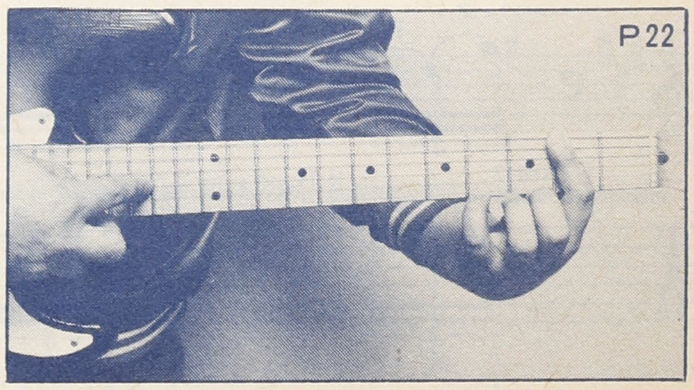

P17


P18


P19


P20


P21

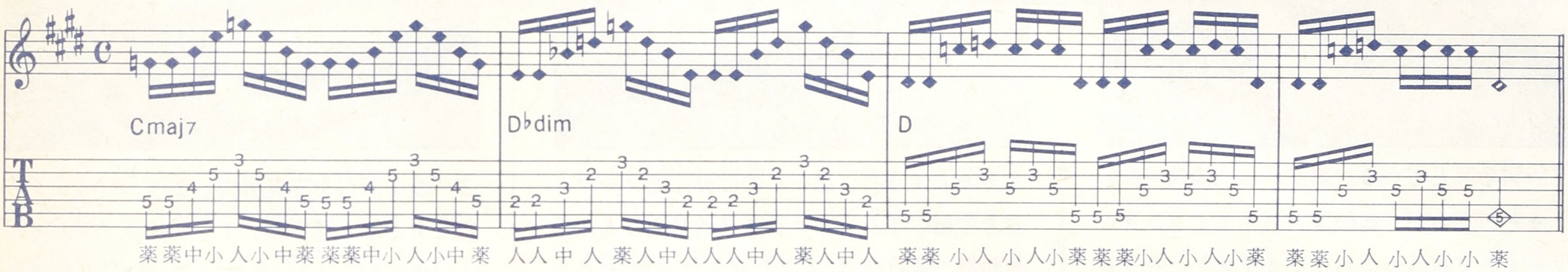

P22

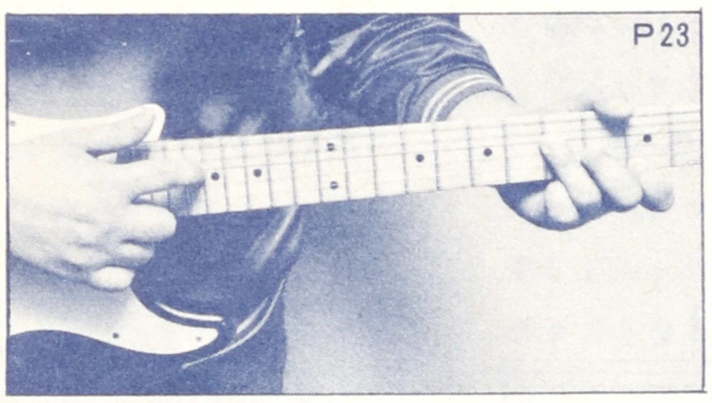
プレイなのである。（譜例―7）

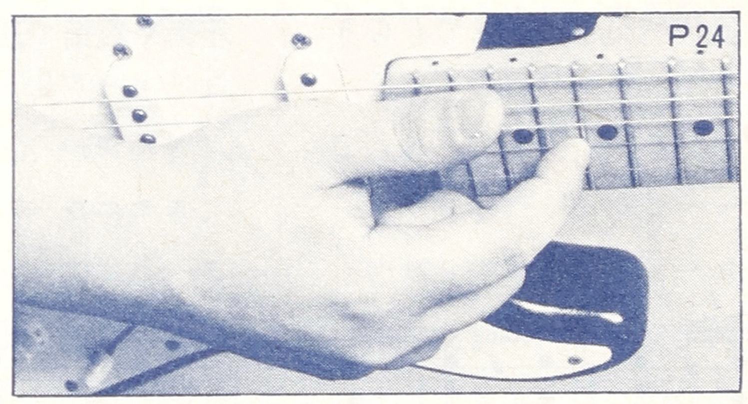
クラシック・ギター式ハーモニクス奏法の応用でチョッパー・ハーモニクスというものがある。あのエドワード・ヴァン・ヘイレンがセカンド・アルバム『伝説の爆撃機』の「踊り明かそう」で広めた奏法である。しかし、実際には高中の方が2年は早くこの奏法を思い付き、「マンボNO.5」などで実用していたのだ。――方法は、押弦したフレット・ポジションのハーモニクス・ポイント、普通はセカンド・ハーモニクス・ポイントである12フレット上のフレット真上を、人差指＆親指で弾く代わりに、人差指（どの指でも良いし、ピックでも可）でタイミングよく叩く。P―23、P―24の感じであるが、それでハーモニクスが得られるのだ。ギター・サウンドのオーヴァードライヴ度が強いほど出易すいが、クリーン・サウンドでも叩き方が良ければ、何とか高中のようになる。（譜例―8）

ハーモニクスと言えば、ピッキング・ハーモニクスも一般的であり、高中も用いることがある。ピックを親指＆人差指の間からほとんど出さず、ピッキングする時、弦をピックと指に当てハーモニクスを得るが、やはり、よりハッキリとしたハーモニクスを出すには正確にハーモニクス・ポイントでキメるしかない。

譜例-8 「ライジング・アーチ」より

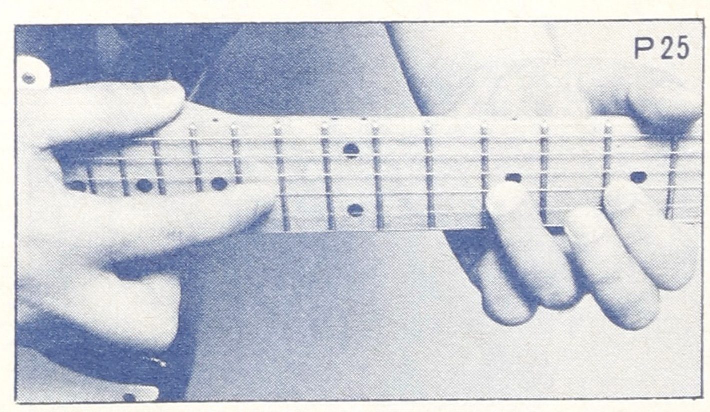



P 23

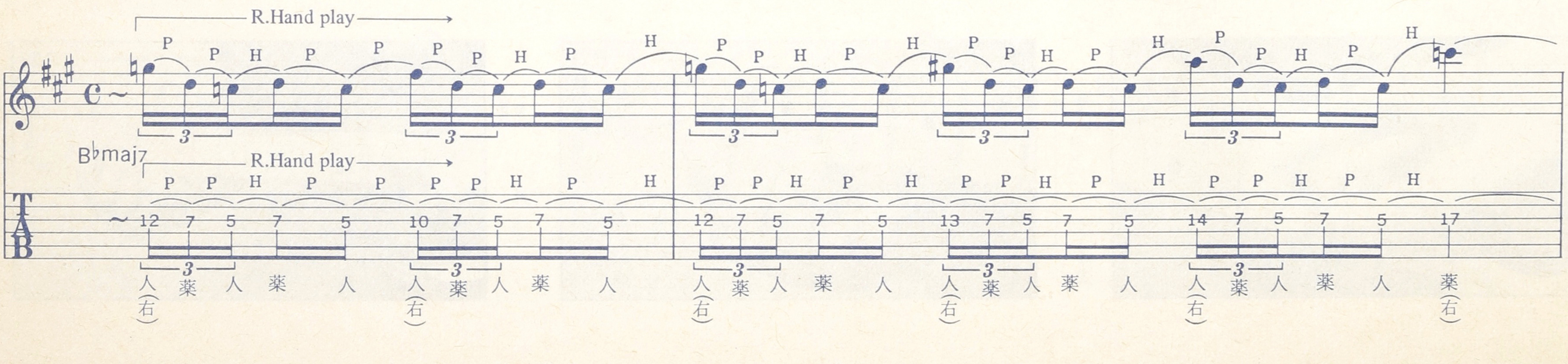

P 24

D ライト・ハンド奏法

これもエドワード・ヴァン・ヘイレンによって広まった技。コチラに関しては，間接的（直接的ではないそうだ）に高中が影響を受けたということになる。――「アーリー・バード」の途中に出てくるが、要領は、右手指（主に人差指）を左手指の“六本目の指”と考え、一体化させ演奏する。P―25のようになるワケで、左手の指だけでは不可能なインターヴァルの広いプリング・オフの連続技を可能にしている。（譜例―9）


P 25

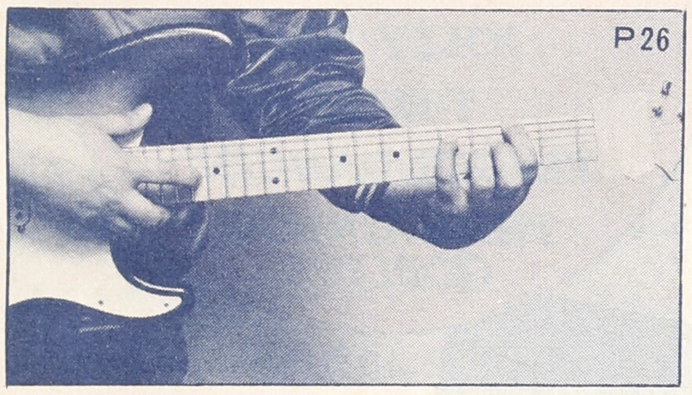
譜例-9 「アーリー・バード」より

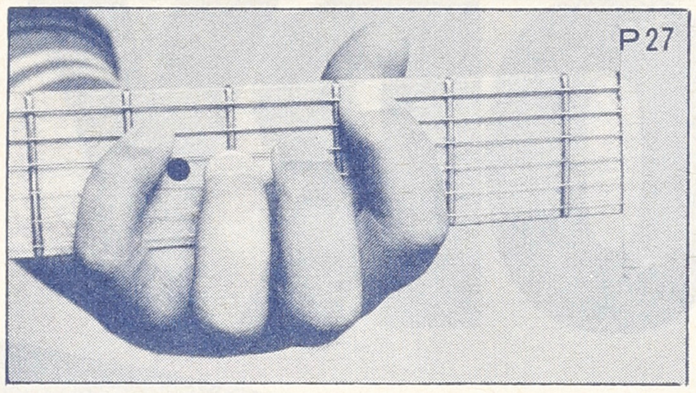


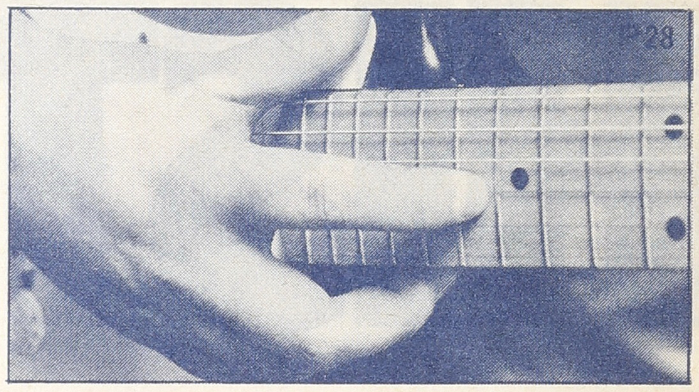
ボズ・ハンズ奏法

ライト・ハンド奏法は、右手指を左手の延長と考えたワケだが、これは両手を別々に使って、１本のギター内で合奏する。多分、日本では高中がこの技の使い手第一号だろうが、インタビューにあるように、高中自身はブラッフォードのベーシストから拝借している。P―26が一応その全景で、P―27が左手、P―28が右手（人差指）の実態。で、譜例のように、左手はハンマリング・オンを使ってベース・ラインを奏で、右手人差指は、やはりハンマリング・オンを使ってメロディー・ラインを追う。この場合の右手人差指は、フレット上ではなく、そのポジションのフィンガーボードでハンマリングすること。――ガム・テープはノイズ・ミュート用。

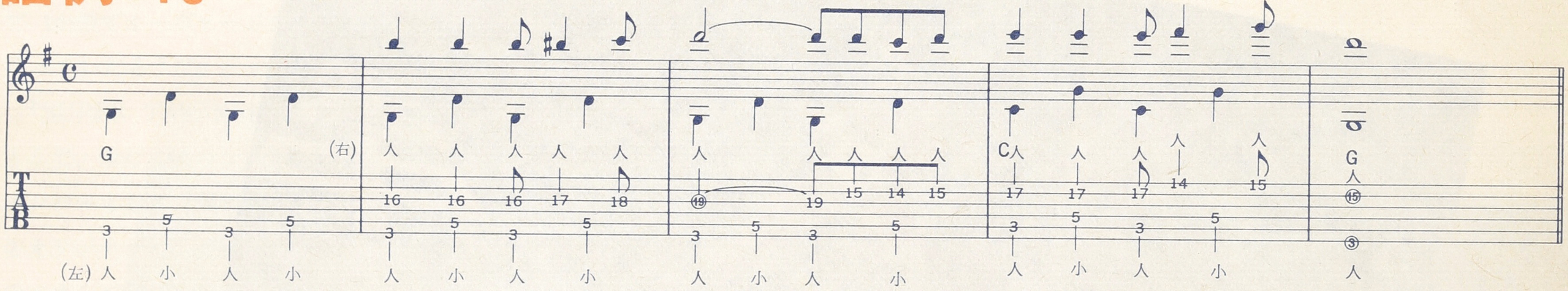
とにかく両手を別々に動かさなくてはならないので、並の人間なら相当の練習を要するハズだ。マッ、この「鉄腕アトム」を両手（ボズ・ハンズ）奏法でこなせるようになったら、次々とレパートリーを増せば面白いだろう。（譜例―10）


P26


P27


P28

譜例－10 「鉄腕アトム」より



スライド・ギター奏法

スライダー（高中はステンレス製を使用）の移動、スライディングによる奏法。別に高中は名人というほどではない。が、コンプレッサーとエコーを掛けた彼のスライド・プレイは、高中サウンドのひとつの特徴と言えよう。

フェイド・イン奏法

高中は、ほとんどヴォリューム・ペダルを活用し、フェイド・イン奏法ならではのヴァイオリン・トーンを、やはり高中サウンドの特徴としているように思う。

ヴォリューム・ペダルさえあれば、誰でも簡単にヴァイオリン・トーンがキメられると思っている君、かなりの感違いだぞ！とにかく、高中のように、スピーディーなヴァイオリン・トーンもキメたい君は、即ヴォリューム・ペダルを購入し、足技を磨くしかない。なかなか手（足？）強い相手だ。

フィードバック奏法

とにかく100 Wぐらいの音量の中でプレイすれば、大体自然と体験出来るフィードバック（ハウリング）。一般的に邪魔とされるその現象を、演奏の中に効果的に取り入れてしまうのがフィードバック奏法。確か、高中のレコードでは聴けないと思ったが、例の武道館公演では、両日ともフィナーレはフィードバック奏法であった。マッ、たまには良いものだ。研究してみよう。

高中正義 MUSICAL HISTORY

SEYCHELLS
TAKANAKA
AN INSATIABLE HIGH
BRASILIAN SKIES
CHA CHA ME
JOLLY JIVE
T-WAVE
FINGER DANCIN'
THE RAINBOW GOBLINS



"フライド・エッグ"のベーシストとしてプロ・デビューした高中正義が、一般的にギタリストとして知られるようになったのは1972年の"サディスティック・ミカ・バンド"結成以降ということになるだろう。実際にはフライド・エッグ時代からスタジオ・ミュージシャンとして、本来の演奏楽器エレクトリック・ギターもプレイしており、ミカ・バンドのファースト・アルバムでも聴けるようなイギリス的なハード・ロック・ギターが彼のスタイルだった。愛器がギブソン・レスポール・ジュニア('58年型のダブル・カッタウェイ。シングル・コイル・ピックアップ)とオレンジ・アンプ(マーシャル・タイプのオーヴァードライヴ主体のもの)だった、ということからも、大概の感じは分かってもらえるだろう。また、グレコのレスポール(コピー・モデル)とエレクトロ・ハーモニクス・アンプ(小型でオーヴァードライヴ主体)も良く使っていたそうだ。

『SUPER TAKANAKA LIVE!』を始めとして、未だに彼のコンサートのファイナル・ナンバーとなる「黒船(嘉永六年六月四日)」のオリジナル・ヴァージョン(ミカ・バンドのセカンド『黒船』)あたりを聴いても分かるように、ブリティッシュ・ハード・ロック・ギターとは言っても、言うまでもなく当時から独自の個性、オリジナリティーを発揮していた高中。そんな彼が、どちらかと言うとアメリカナイズし始めたのが、ミカ・バンドのサード・アルバム『ホット・メニュー』(75年発表)あたりからだ。

『黒船』でも、すでにエコー・マシーン、ペダル・ワウ、ヴォリューム・ペダル、またオクターヴ・ダブラーらしきもの(MXRのブルー・ボックスだと思う)というように、現在の高中サウンドに通じるエフェクツ類を使い始めた彼が、ついにフェンダー・ストラトキャスターも手にしている。そう、現在でも愛用している、あの62年頃の貼り合わせメイプル・フィンガーボードを持ったオールド・ストラトだ。で、アンプはオレンジ、ピーヴィー、フェンダー(ツイン・リヴァーブ)などと変化していたようだが、とにかく、『黒船』以前と比べ、オーヴァードライヴ度「0」のクリーン・サウンドが目立つようになった。ピックアップのセッティングも、すでにフロント&センター、もしくはセンター&リアの、いわゆるハーフ・トーンで、ポップ&ブライトなニュアンスも十分出ている。さらにコンプレッサー、フェイザーといったエフェクツも顔を見せ始めている。

また、ギター的のみならず音楽的にも、『黒船』以上にファンキーな16ビートが活用されているのに加わえ、レゲエやサンバが出て来たりで、実に高中サウンドのルーツ的だ。

そして、いよいよ『セイシェルズ』に至る。75年暮、ロンドンでのライヴ・アルバムを最後にミカ・バンドは解散、高中はソロ・ミュージシャンの道を歩み始めたワケだ。

高中正義奏法は、すでにここで大概のアウ



SEYCHELLS

(MKF-1003)

〔Side A〕
OH! TENGO SUERTE
トーキョー　レギー
蜃気楼の島へ
憧れのセーシェル諸島
〔Side B〕
FUNKEE MAH-CHAN
サヨナラ……FUJIさん
バードアイランド急行
TROPIC BIRDS



TAKANAKA

(MKF-1010)

〔Side A〕
SUMMER BREEZE
MAMBO No.5 (DISCO DANGO)
SWEET AGNES
MAMBO MAGIC
〔Side B〕
I REMEMBER YOU
GASCON COCKTAIL
READY TO FLY
APRIL WAVE



AN INSATIABLE HIGH

(MKF-1023)

〔Side A〕
SEXY DANCE
MALIBU
AN INSATIABLE HIGH
〔Side B〕
E.S.P.
M5
SUNDROPS
GOOD (BAD?) OLD DAYS



BRASILIAN SKIES (MKF-1033)

〔Side A〕
BELEZA PULA
BRASILIAN SKIES
NIGHTS
I REMEMBER CLIFFORD
〔Side B〕
STAR WARS SAMBA
DISCO"B"
FUNKY HOLO HOLO BIRD
伊豆甘夏納豆売り



CHA CHA ME // BACCO (MKF-1048)

〔Side A〕
HIGH ACE
TOKYO LADY
CHA CHA ME
SEVENTEEN AND BLUE
〔Side B〕
GETTI'N LOST DOWN ON 8th STREET
JUST ANOTHER BOY IN THE BAND
KID KIND
STAND BY ME

ト・ラインを固めている。――まず、フィーリング任せのインプロヴィゼイション（即興演奏。アドリブ）ではなく、作品（曲）の完成度で勝負しようとしている。そのため、テーマ・メロディーからソロ・パートに至るまで、そのフレージング・ラインは全て作曲、アレンジされている。そして、あくまでメロディカルだ。一般的ロック・ギタリストとは異なり、ペンタトニックよりも、フル・スケール・ノートでフレージングすることが多い。で、リズミカル。全体のリズム・アレンジも16ビートを主体としてアレコレ凝るばかりではなく、フレージング自体にもリズムの面白さを取り入れている。で、またスリリング。単にメロディーの聴き易すさを追うにとどまらず、リスナーを引き込むセンスも充分だ。

『セイシェルズ』に限って言うと、取り分け3度を主体としたハーモナイズ・プレイが目立つ。が、以後も、このアルバムほど多くはないが、ハーモナイズ・プレイは高中奏法の特徴のひとつだ。

ギター・サウンドは、例のストラトのハーフ・トーンに、コンプレッサーを強めに掛けた、クリーンながらもサステイン十分というのがほとんどだが、エフェクツの活用度がこれまで以上に高く、そのヴァリエイションは目まぐるしいほどだ。従来のエコー、ヴォリューム・ペダル、コンプ、フェイザーなどのほかにもヴィブラート（多分アンプに装備されているもの）、トーキング・モジュレイター、オート・ワウが加わって来た。エレクトリックのみならずアコースティックも巧みに取り入れている。また、「蜃気楼の島へ」、「バードアイランド急行」、「憧れのセイシェルズ」の3曲では、アレムビック・ギター(エレクトリック）を使っており、24フレットを用いたプレイもある。

アルバムの内容としては、特にリズム面でもっともラテン色の濃い仕上がりだ。――ちなみに、「ヴォーカルは不得意」と自ら言う彼が、「トロピック・バーズ」で井上陽水と共に聴かせるハーモナイズ・スキャットは意外だった。が、面白い。

約1年置いて、'77年5月にセカンド・アルバム『TAKANAKA』が発表された。

無気味な雷空の情景から“ピポピポ”テクノ。村上秀一（ドラムス）、深町純（キーボード）という過激派を加わえ、前作にはないワイルド&アグレッシヴなサウンドで迫る「サマー・ブリーズ」。ミカ・バンドの後期にも、いわゆるフュージョンっぽさはあったが、この曲の後半で聴ける深町のシンセとのユニゾンほど、強烈ではなかった。以後も、フュージョン的ユニゾン・プレイは時々活用されている。また、このギター・ソロではヤマハSGを使い始め、曲調にマッチしたオーヴァードライヴ・サウンドをキメている。

ほかの演奏は、例によってストラトのハーフ・トーンWITHコンプであり、前作同様な曲作りではあるが、「マンボNo.5」を始め、どれも村上ポンタのドラミングならではの、ハードなリズム・サウンドとなっている点は、特筆に値する。

チョッとした変化としては、エコーとフェイザーの使用法が幅広くなっている点と、「マンボNo.5」などで新たなハーモニクス奏法が取り入れられた点が挙げられる。

ところで、『TAKANAKA』の直後6月には、サディスティック・ミカ・バンドから発展したサディスティックスがデビュー・アルバムを発表している。高中の作品が高中らし過ぎる、というかソロ・アルバムと同様なサウンドに仕上がっている点を省いては、バンドとしてのまとまりのある素晴しいアルバムだ。特にA面の組曲風なメドレーが長い。高中もギター・サウンドはいつもの通りだが、フレージングなどはバンドに溶け込んでいて実に良い。――ライヴ・パフォーマンスも大好評で“日本のベスト・バンド”と言われた時期もあったが、結局メンバーそれぞれのソロ活動が中心になって行き、一応セカンドとライヴ・アルバムを発表したが、自然消滅的に解散。

さて、'77年12月に高中のサード・アルバム

『アン・インセイシャブル・ハイ』が発表されている。

何と言ってもロスアンジェルスで、ロスの超一流ミュージシャンを起用してレコーディングしている点がポイントだ。曲調も、サウンドも、ラテン色はなく、よりアメリカのイージーリスニング的に仕上がっているのは、元々意図したことなのだろうか？マッ、何はともあれ、高中がリー・リトナー（言うまでもないギタリスト）、チャック・レイニー(ベース)、ハーヴィー・メイスン（ドラムス)、パトリース・ラーシェン（キーボード）などの、スタジオ・ミュージシャンを超えた花形セッション・マンとガップリ四つに組んだ演奏は必聴の価値がある。

奏法的、ギター・サウンド的にも前2作とは若干異なっている。ストラトを活用した例の調子は1曲しかなく、あとはヤマハSGを使用し、よりジャジーに、また、よりハードにキメている。前作でも使用していながら大して存在感のなかったブギ・アンプも、ここでは大いに活用され、ブギならではのナチュラル・オーヴァードライヴ・サウンドがしばしば耳に出来る。——もちろん、高中奏法の基本的な行き方に変更はないのだが。

4作目『ブラジリアン・スカイズ』が発表されたのは'78年の7月。サディスティックスとの活動も含め、3作を半年間隔で発表したり、このあたり正にノリにノッているようだ。

ギター・プレイ、曲調はほぼ前作の延長線上にあるが、ライヴでは「ブルー・ラグーン」とメドレーでプレイされることもある「BELEZA PULA」を、ブラジルで現地のミュージシャンとレコーディングしたり、再びロスへ飛び、今度はTOTOのジェフ・ポーカロ（ドラムス）やエイブラハム・ラボリエル、スコット・エドワーズを起用してレコーディングしたり、また何曲かは伊豆で日本のミュージシャンとレコーディングということで、変化を付けたようだ。

ギター・プレイに再び若干の変化がある。ひとつは、コーラス・マシーンの加入。もうひとつは、ヤマハSG、ストラトのほか、ジャズ・ナンバー「アイ・リメンバー・クリフォード」で、フル・アコースティック・タイプのギブソン・バードランドを使ったと思われる点だ。

で、次に来るのがバコの『チャ・チャ・ミー』。バコは、イギリス人のヴォーカリスト／ジム・ダイアモンド、アメリカ人のドラマーでチャーのアルバムでも御馴染のロバート・ブリル、そして日本の代表的な高橋ゲタ夫(ベース)、佐藤準(キーボード)、そして高中という5人組ロック・バンドとしてアルバムを発表したが、結局ライヴはやらずに解散ということになった。高中がアメリカ進出を意図した上で、ブリルと共同のプロデュース、コンポーズ、アレンジをこなしている。本人達は「失敗作」の烙印を押しているようだが、なかなかどうして聴くべき演奏は少なくない。御愛敬なのが「セヴンティーン・アンド・ブルー」で、何と「嘉永六年六月四日（黒船)」がソロから何から全部登場するという代物。

ギター・プレイは、サディスティックス以上にアンサンブル指向で、ソロよりもバッキングの妙技を聴いて欲しい。ファズ、オート・ワウ、オクターヴ・ダブラー、コーラス、バイ・フェイズ、フランジャーと、いつもながら数多くのエフェクツを活用していて、そのあたりのことも参考になるだろう。

バコ、『オール・オブ・ミー』(ベスト盤)を経て、『ジョリー・ジャイヴ』が発表されたのは、『ブラジリアン・スカイズ』から1年半振りの'79年12月。

全体のサウンドは、3、4作目の若干の渋さはなく、1、2作目のポップさ、派手さをさらに押し進めたという印象がある。

ギター・プレイは、ヤマハSG&ブギ・アンプのオーヴァードライヴ・サウンドに乗った、ラリー・カールトン系統のメロディアス・ギターが耳新しい。3、4作目でいく分、ジャズっぽさとロックっぽさを分離していた高中がその両者を一致させた結果なのだろう。また、ヤマハSGを使ったサウンドにもポップさが加



JOLLY JIVE (MKF-1055)

〔Side A〕
BLUE LAGOON
RADIO RIO
EXPLOSION
珊瑚礁の妖精
〔Side B〕
TAJ MAHAL
BAMBOO VENDER
パラレル・ターン
RAINY DAY BLUE



T-WAVE (MKF-1063)

〔Side A〕
EARLY BIRD
WILD MOW-MOW
MAMBO NO.6
CRYSTAL MEMORIES
〔Side B〕
MY SECRET BEACH
空ド白ソ
PALM STREET
Le Premier Mars



FINGER DANCIN'

(17GK-7908)

〔Side A〕
SPACE WAGON
PLASTIC TEARS
〔Side B〕
FINGER DANCIN'
HEART ACHE



THE RAINBOW GOBLINS

(36MK-9101-2)

〔Side A〕
ONCE UPON A SONG
SEVEN GOBLINS
THE SUNSET VALLEY
〔Side B〕
THE MOON ROSE
SOON
MAGICAL NIGHT LIGHT
～RAINBOW PARADISE
〔Side C〕
THUNDERSTORM
RISING ARCH
JUST CHUCKLE
RAINBOW WAS REBORN
〔Side D〕
PLUMED BIRD
YOU CAN NEVER COME TO THIS PLACE

わっている。ストラトが再び増え始めた。

『スーパー・タカナカ・ライヴ』は、わずか4ヶ月後、'80年3月に発表された。

高中のほか、椎名和夫(リズム・ギター)、石川清澄&小林泉美（キーボード）、高橋ゲタ夫（ベース）、上原ユカリ&井上茂（ドラムス）、中島ハジメ&管原由起（パーカッション）、トキ秀文（サックス）というメンバーによってライヴ・レコーディングされたもので、A面が『ジョリー・ジャイヴ』からのベスト・セレクション、B面がミカ・バンドと1.2.4作目からのピック・アップとなっている。

オーヴァードライヴ・サウンドは、ほとんどヤマハSG&ブギ。スタジオ・レコーディング以上にエネルギッシュなギター・プレイはライヴ・パフォーマンスならではのものだ。

7作目『T-ウェイヴ』もコンスタントに3ヶ月後、『ジョリー・ジャイヴ』とも半年しか離れていない。正に絶好調という感じ。

『ジョリー・ジャイヴ』で編み出したポップ路線の延長で、特にスロー・テンポを削り、さらにノリの良いサウンドに仕上げている。

ギター・プレイに関しては“打撃開眼”ならぬ“フレージング開眼”でもしたように、いままで以上に弾きまくり、さらにその中味が濃くなっている。

ギター・サウンドは、これまた『ジョリー・ジャイヴ』路線で、1～4作目のサウンド・ヴァリエイションをフルに活用し、さらにポップさを増したという所。

'80年12月に発表されたのは、30cm 4曲入りのコンパクト・アルバム『フィンガー・ダンシング』。

これまた『ジョリー・ジャイヴ』路線で、大した変化のない、というか変化しようとも思っていない、安定した高中サウンドが聴ける。ただ偶然か、マイナー・キー（短調）の少ない高中が、4曲中3曲をマイナー・キーで作品を書いている。――ギター・プレイはやはり良い。4曲しかないのに、3様の奏法を聴かせるところは、さすがに高中ならでは。

そして、今年（'81年）3月10日に発表された初の2枚組オリジナル・アルバム『虹伝説』(『オール・オブ・ミー』はベスト盤)『T-ウェイヴ』から9ヶ月後に、これほど充実した、それもトータル・アルバムを完成させてしまうのだから、恐しい。

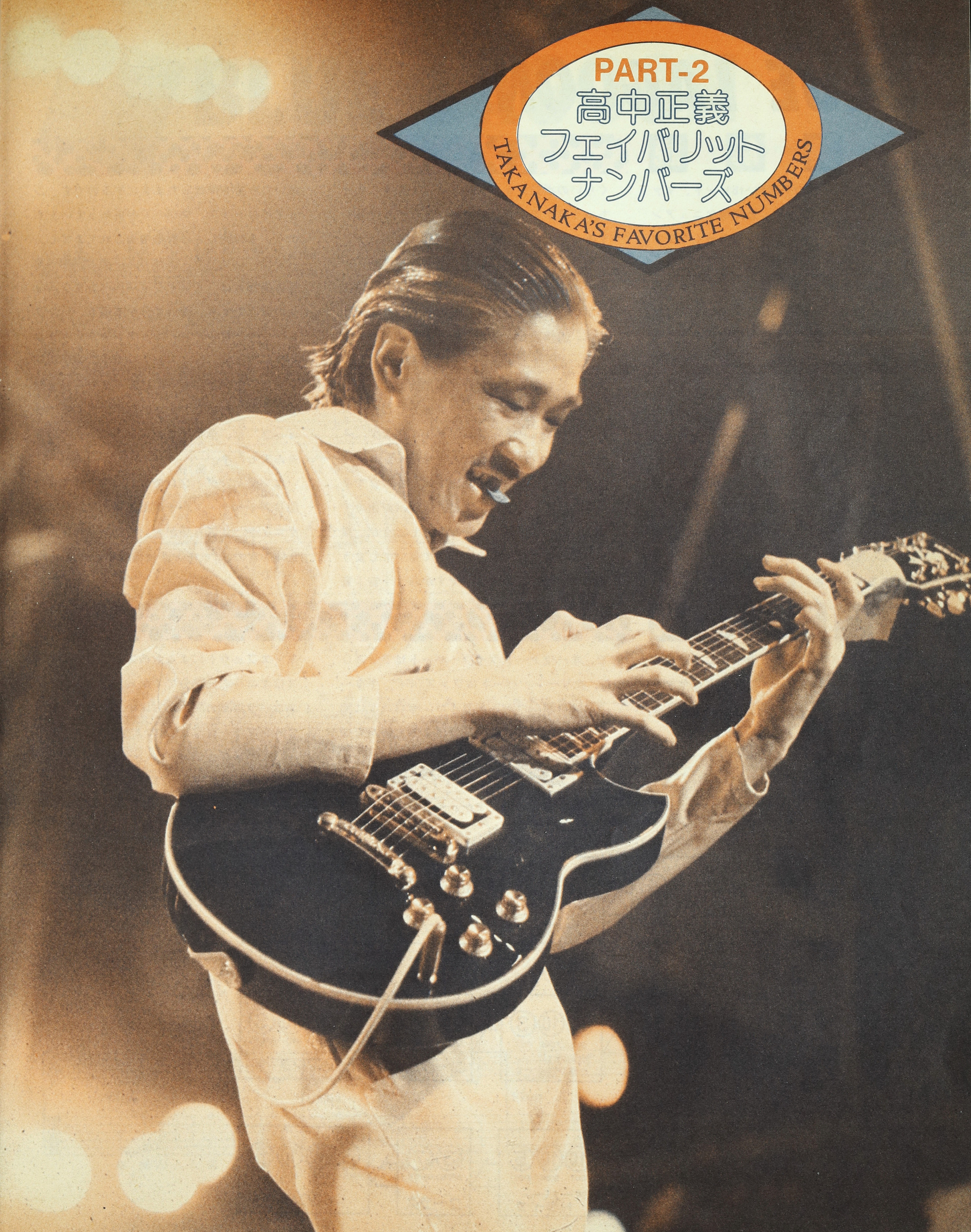
作品、奏法、ギター・サウンド、いずれもヴァリエイションに富んでいて、かつ高中らしさが溢れていて、現在の所、間違いなく高中のベスト・アルバムと言うべき、充実作だ。

すでに周知の通り、イタリアの作家ウル・デ・リコの絵本『虹伝説』からイメージした音をまとめ上げたものであるが、絵本との一体感ということでも申し分ない。

ギター・プレイで特筆すべき点は、まずギター・サウンドに関してストラトのクリーン・サウンドが増したところ。確かに、あの絵の色彩を感じさせるにはストラトのハーフ・トーンがベター、というのはコジ付け臭いかナ？でも、やはりハードなオーヴァードライヴ・サウンド、ジャジーなクリーン・サウンドよりは、はるかにジャスト・フィットだろう。で、ヤマハSG&ブギのオーヴァードライヴ度も、ここ4作に比べ軽めになっている。

奏法的には、「ライジング・アーチ」におけるラリー・カールトン直伝のハーモニクス・プレイ、また「レインボー・ワズ・リボーン」におけるモロのフィンガー・ピッキングといったところが耳新しい、「セブン・ゴブリンズ」と「ユー・キャン・ネヴァー・カム・トゥ・ジス・プレイス」では速弾きが物凄い…………。

というところで、高中正義のミュージカル・ヒストリーは、とりあえず完結であるが、とにかく8作目にして初めての2枚組アルバムで、あそこまで充実したギター・インストゥルメンタル・アルバムを作り上げてしまった高中正義。もしかしたら燃え尽きていたりして…………マァ何てことはないだろうが、何はともあれ、我々は再び、不安と期待の入り混じった気持ちで、グレート・ギター・キッド／高中正義の次作を待つことにしよう。


PART-2
高中正義
フェイバリット
ナンバーズ
TAKANAKA'S FAVORITE NUMBERS

BLUE LAGOON

演奏解説

この演奏は、サンバっぽい16ビート、マァ「レディ・トゥ・フライ」と同様なニュアンスでして、スピードはもう少しゆっくりですネ。キーは、ホ長調（KEY･IN･E）です。コードは、毎度毎度ですが、ダイアトニックのみではないので、スケールもEメイジャー（アイオニアン）一発というワケにはいきませんネ。ただ、モロにスケール・チェンジを活用した速弾きが出てこないので、大してスケール云々は問題ではなりません。仮りに、君がアドリブで弾こうとしても、ムードさえ把んでしまえば、割と巧くいくと思いますよ。

さて、テーマにいきます。テレビのCMを見ている人は気が付いていると思いますが、モノ凄くポジショニングの多いギター・プレイとなっているのです。そう、音列のみを同じにするなら、音列をカヴァー出来るふたつぐらいのポジション・フォームで弾きこなせちゃうワケですネ。ですが、そうやって弾いてみると、物凄く味気ない演奏だと思いませんか？そう表情がないんですよ、表情が。で、高中のようにスライディングを活用して幅広いポジションでプレイしてみると、前者の数倍は、表情豊かな演奏になるように思うのですが、どうでしょう。――単純そうなことですが、センスの違いが分かる演奏ですネ。

8小節のメイン・テーマのあとには、リズミカルなミュート・プレイが出て来ます。そう、ブリッジ付近の弦に右手を軽く乗せ、ポコポコしたミュート音を出すピッキングです。

さらに8小節進みますと、アルペジオですネ。レコードを聴くと分かるでしょうが、譜面のように1音1音、区切って弾いてしまうのではなく、アルペジオですから、1音1音弾いたら音を伸ばしたままにするのです。ここではコーラス・マシーンが掛かっていますから、その美しさは数倍増強されてますし。

では、ソロです。出だし2小節と、18小節目の速弾きは、Eメイジャーのペンタトニックの活用ですネ。聴いて分かる通り、ペンタトニックと言っても、ニュアンスがロックよりジャズに近いところがミソです。あとのパートは、Eメイジャーのフル・スケールを素直に活用した感じですネ。途中出てくる“チョップ”は、全てダウン・ピッキングでキメるんでしたネ。

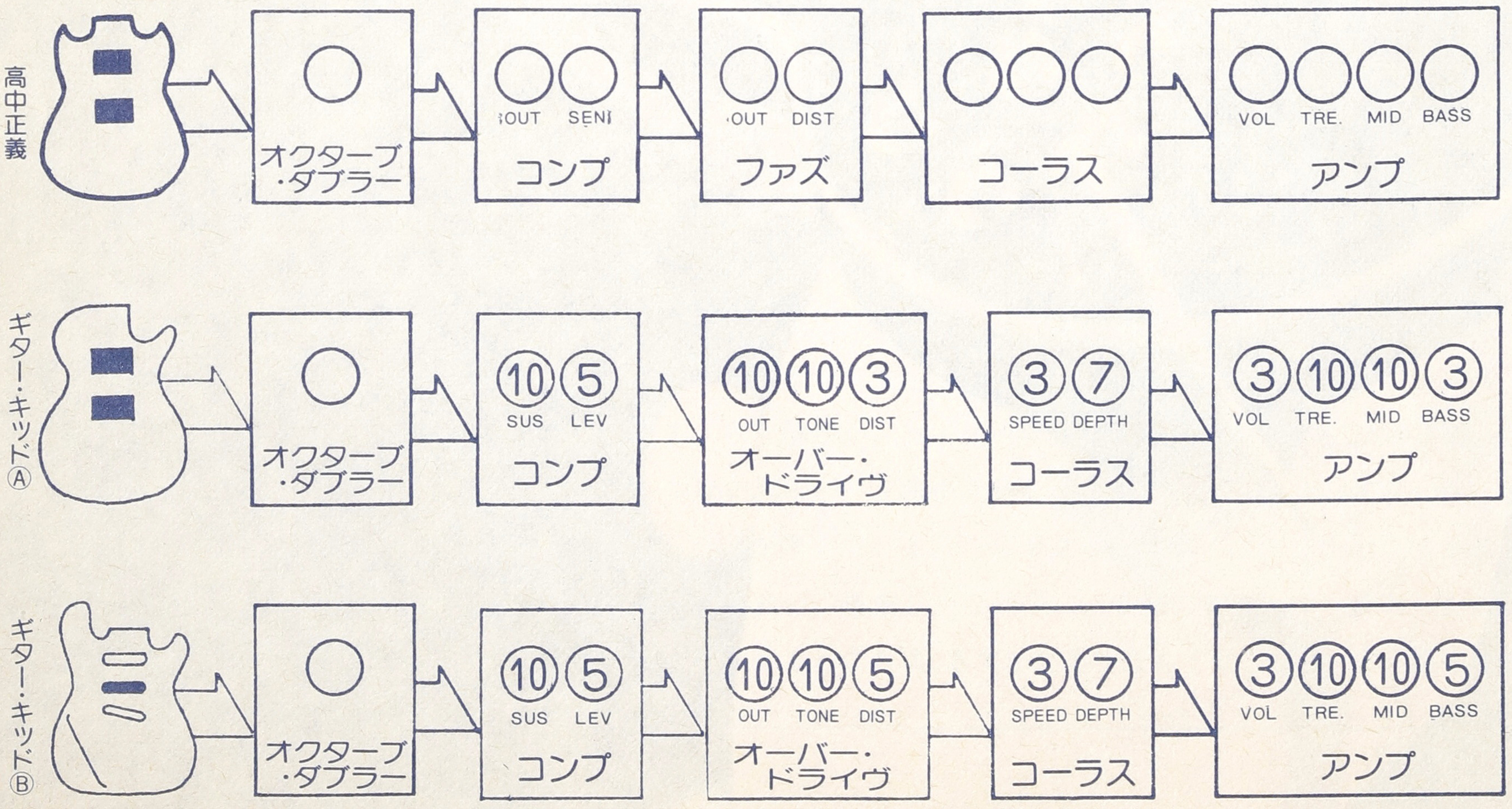
エンディング・ソロでは、高中ならではの超リズミック・プレイが出て来ます。君のテクニック、リズム感が大いに問われますネ？全体を含め、ピッキングは当然オルタネイト。

サウンド解説

テレビCMではストラトを手にしていましたが、レコードのギター・サウンドはヤマハSGだと思います。ピックアップはフロント＆リア・ミックスで。

そして、エフェクツを活用し、4パターンほどのヴァリエイションを弾き出しています。まずコンプレッサーは掛けっ放しでしょう。で、オーヴァードライヴ・パートはファズON、クリーン・パートはファズOFF。ギター・ソロのオーヴァードライヴ・サウンドに関しては、SG＆ブギ・アンプによるものかも知れませんが。で、コーラス・マシーンは、ソロ以外のパート、全てONです。エコー・エフェクトも感じられますが、それは多分コーラス・エフェクトによるものでしょう。コーラスはエコーの兄弟分ですから。あと、テーマ2コーラス目の2.から4小節にはオクターヴ・ダブラーが薄くONのようです。

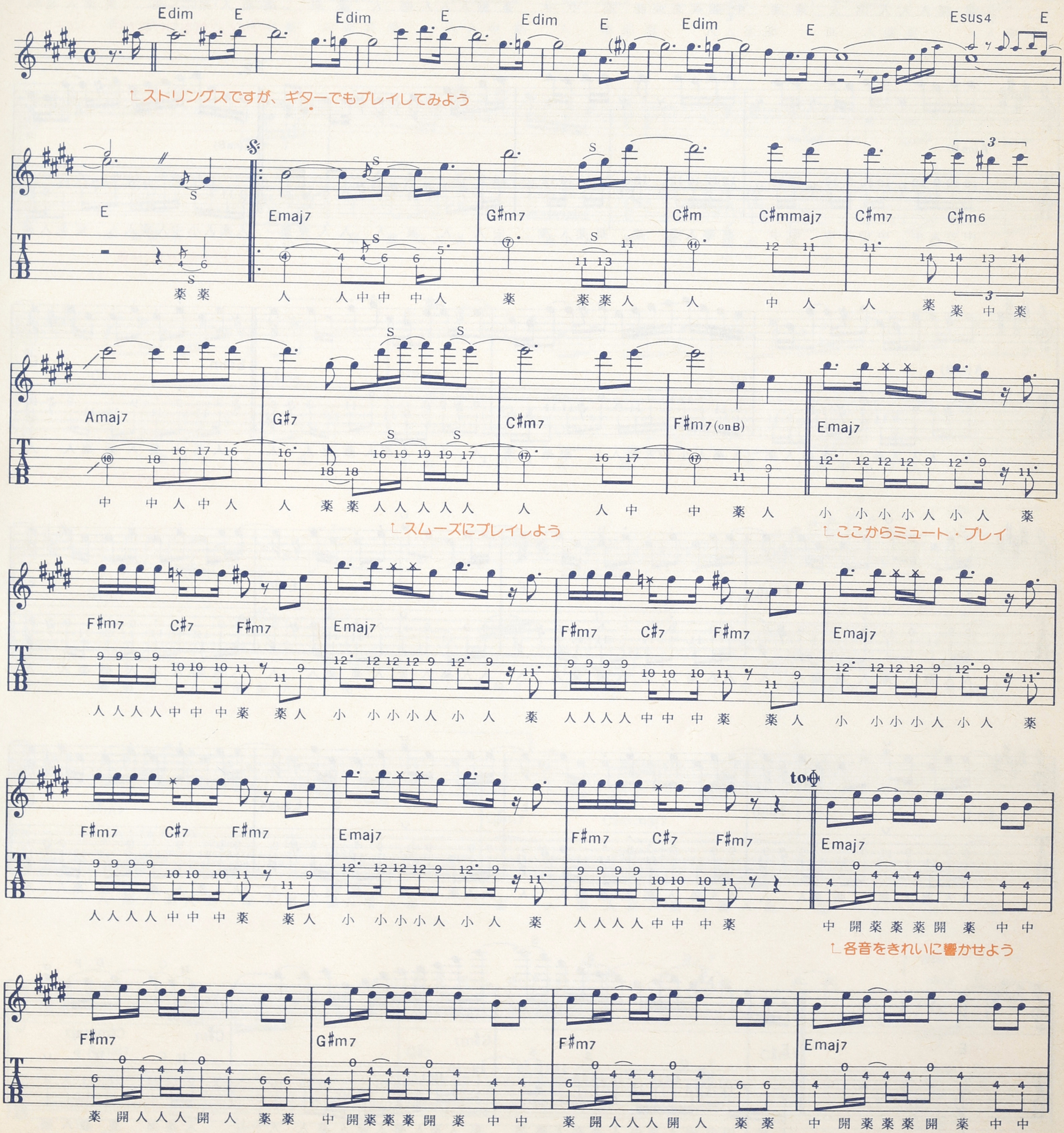
バッキングもSGのフロント＆リア・ミックスで、コンプ＆コーラスが掛かってます。



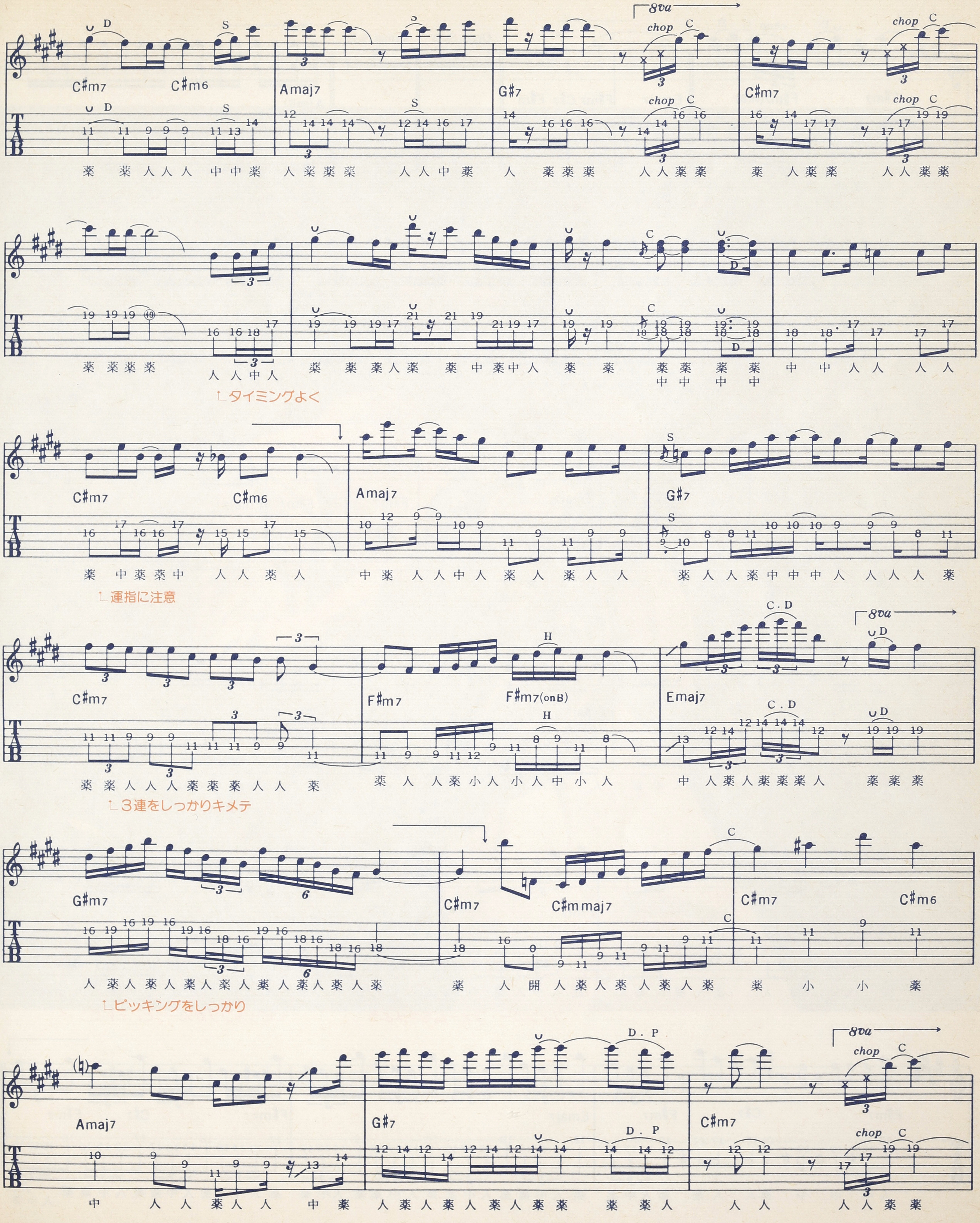


BLUE LAGOON

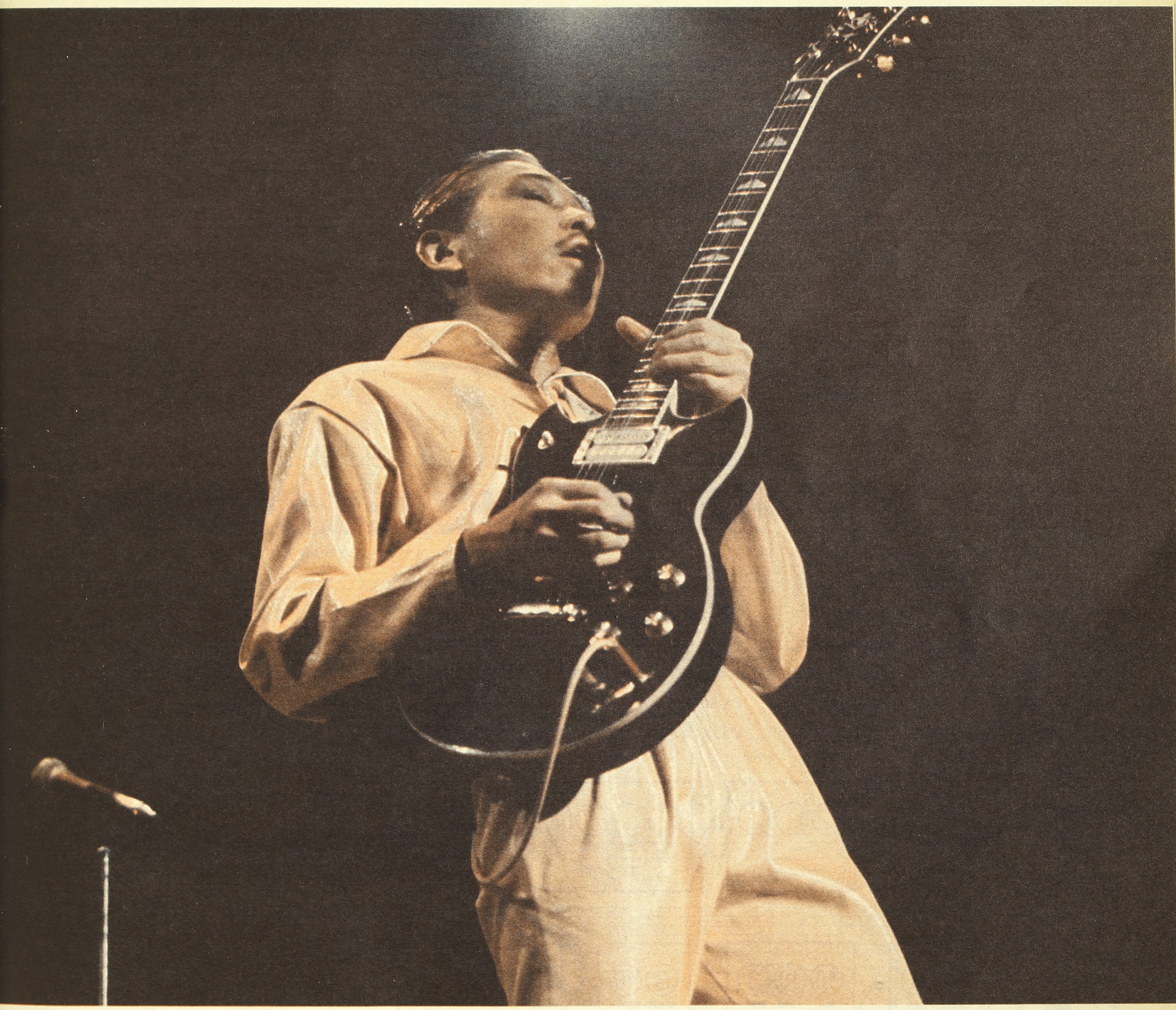
by Masayoshi Takanaka




F#m7
G#m7
A
A(on B)
リズムに気をつけながら、リズミカルに
A(on B)
A(on B)
ピッキングに注意
A(on B)
Edim
E
ここからもミュート・プレイ
E
Edim
E
Edim
E
E
Edim
E
Esus4
E
E
E
G#m7
C#m
C#mmaj7
スムーズにフィンガリングしよう


C#m7
C#m6
Amaj7
G#7
C#m7
8va
chop
タイミングよく
C#m7
C#m6
Amaj7
G#7
運指に注意
C#m7
F#m7
F#m7(onB)
Emaj7
C.D
3連をしっかりキメテ
G#m7
C#m7
C#mmaj7
C#m7
C#m6
ピッキングをしっかり
Amaj7
G#7
D.P
C#m7


chop C D
F#m7 F#m7(onB)
Emaj7 F#m7 C#7 F#m
Organ Solo 6
Strings Solo 8
8va
A(onB)
きれいなハイ・トーンを出そう
オクターヴ・プレイ
D.S. al Coda
Coda
Emaj7 F#m7 C#7 F#m7
リズミカルに楽しく
H
ピッキングをしっかり
フィンガー・フォームをキメよう
ピッキングがズーッとハードだ
F.O.



RANY DAY BLUE

演奏解説

レゲエ風のリズムの上にブルージーなメロディーがキマっている曲ですネ。リズムのノリは楽譜の2小節を1単位としたノリになっています。最初に指定してあるように、8分音符はスウィングした感じで演奏しましょう。これは「ONCE UPON A SONG」で説明したのと同じ省略法で記譜してあるからです。まァリクツはともかく、「タータタータ」という感じになればいいワケですが、それはレコードの音を聴けばすぐにマスターできるでしょう。

テーマ・メロディーは途中からツインでハーモナイズされています。もし一人でプレイする場合は下のパートを弾いてください。フィンガリングは特に難かしい部分はありません。サビのところはスライドを多用して、ちょっと雰囲気を変えたプレイになっています。なめらかさを出せればOKでしょう。

ピアノやベースなどのソロの後からはギター・ソロになります。この出だしのところは思い切って力強くキメましょう。3連符が連続するフレーズはオルタネイト・ピッキングで正確にキメることがポイントになります。このピッキングは是非徹底的にマスターしてください。2拍3連符の部分は少しアクセントを付ける意味で、やや強目のピッキングにすると感じが出ます。

このギター・ソロの部分もフィンガリング的に特に問題になるところはないと思いますが、途中からツインでハモッている部分はどちらを弾くか迷う部分です。おそらく上下がクロスしているハーモナイズではないかと思われますが、便宜上楽譜では上下をはっきり区別して書いてあります。

さてその後はリフに合わせてオブリガート的なフレーズのギターが出て来ます。フィンガー・トリルは楽譜にこだわらずに、フィーリングで入れた方がベターでしょう。このフィンガー・トリルの後の休みの間にディストーションを切って、次のフレーズに備えます。最後の方のフレーズはテーマ・メロディーと同じものになっていますが、ディストーションが掛かっていない分、ニュアンスに違いがありますネ。割にゆっくりめのチョーキングやチョーク・ダウンが出てくるので、そのタイミングはレコードを参考にしてマスターしてください。

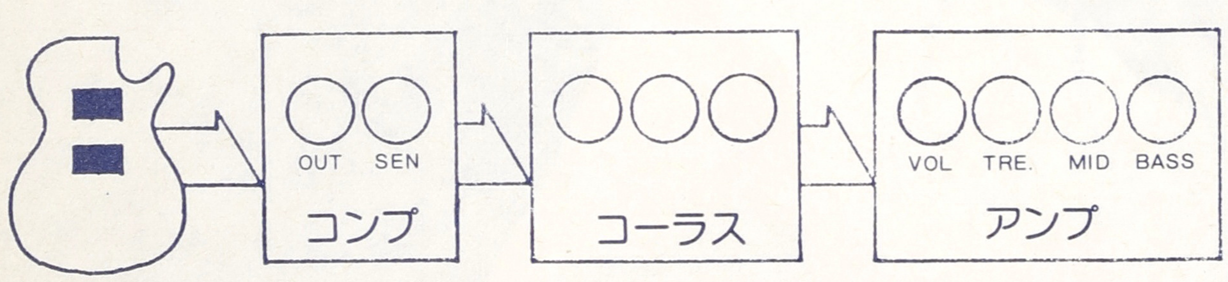
サウンド解説

これは高中としては珍らしくハムバッキング・ピックアップをマウントしたレスポール・カスタム（再生産後）を使って演奏された曲です。もっとも、元来ヤマハSGがマホガニー+メイプルのソリッド・ボディー構造というレスポール系のギターですから、高中本人が感じられるほど、聴く側には大した違いはないでしょう。

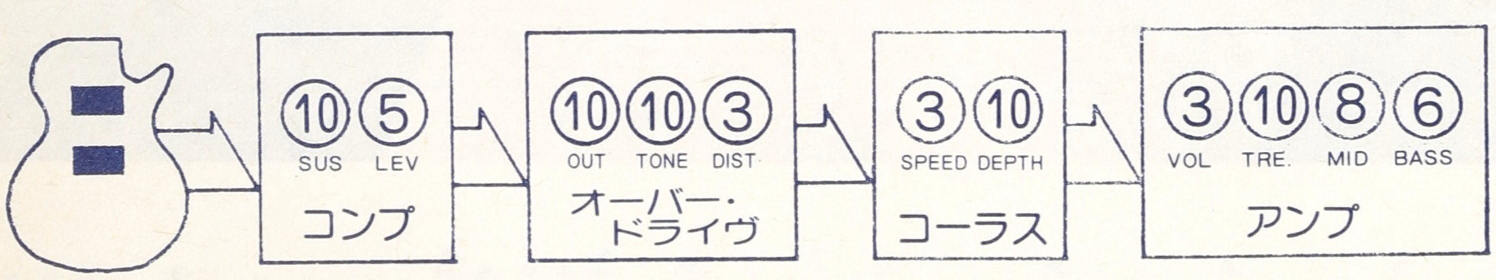
で、リード・ギターはリア・ピックアップを使っています。トーン・セッティングは、トレブルが強めですが、ベースも少なくありません。アンプによっては、イコライザーで2kHzより上を若干ブーストする必要があるでしょう。オーヴァードライヴは、多分ファズ（MXRディストーション・プラス）ではなく、ブギ・アンプによるものでしょう。

バッキング時はフロント&リア・ミックスになっています。で、コーラス・マシーンもON。ボスのCE―1なら、インテンシティ「3～4」、若干強めです。

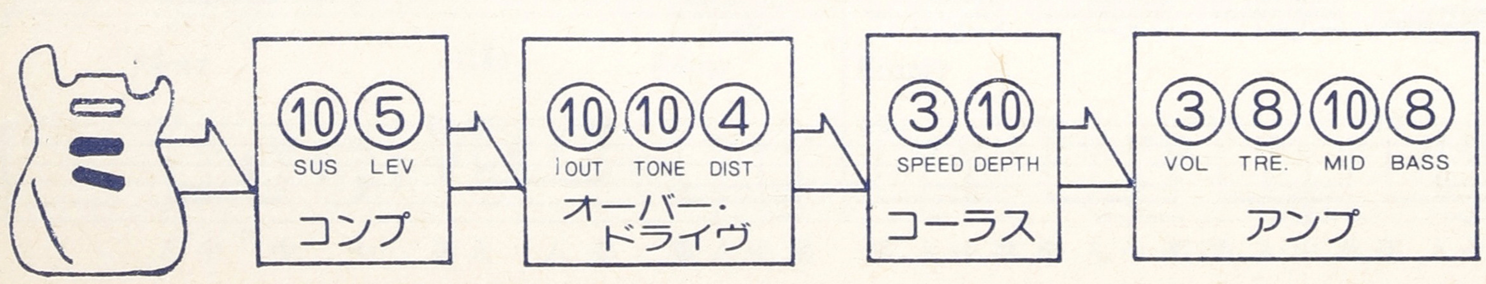
高中正義

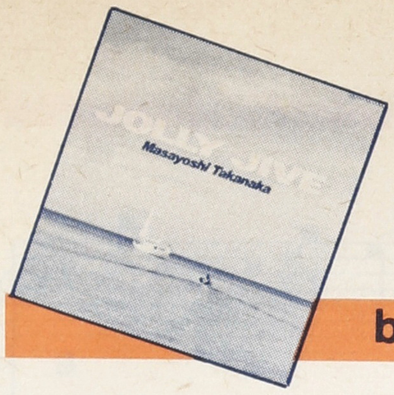


ギター・キッドⒶ



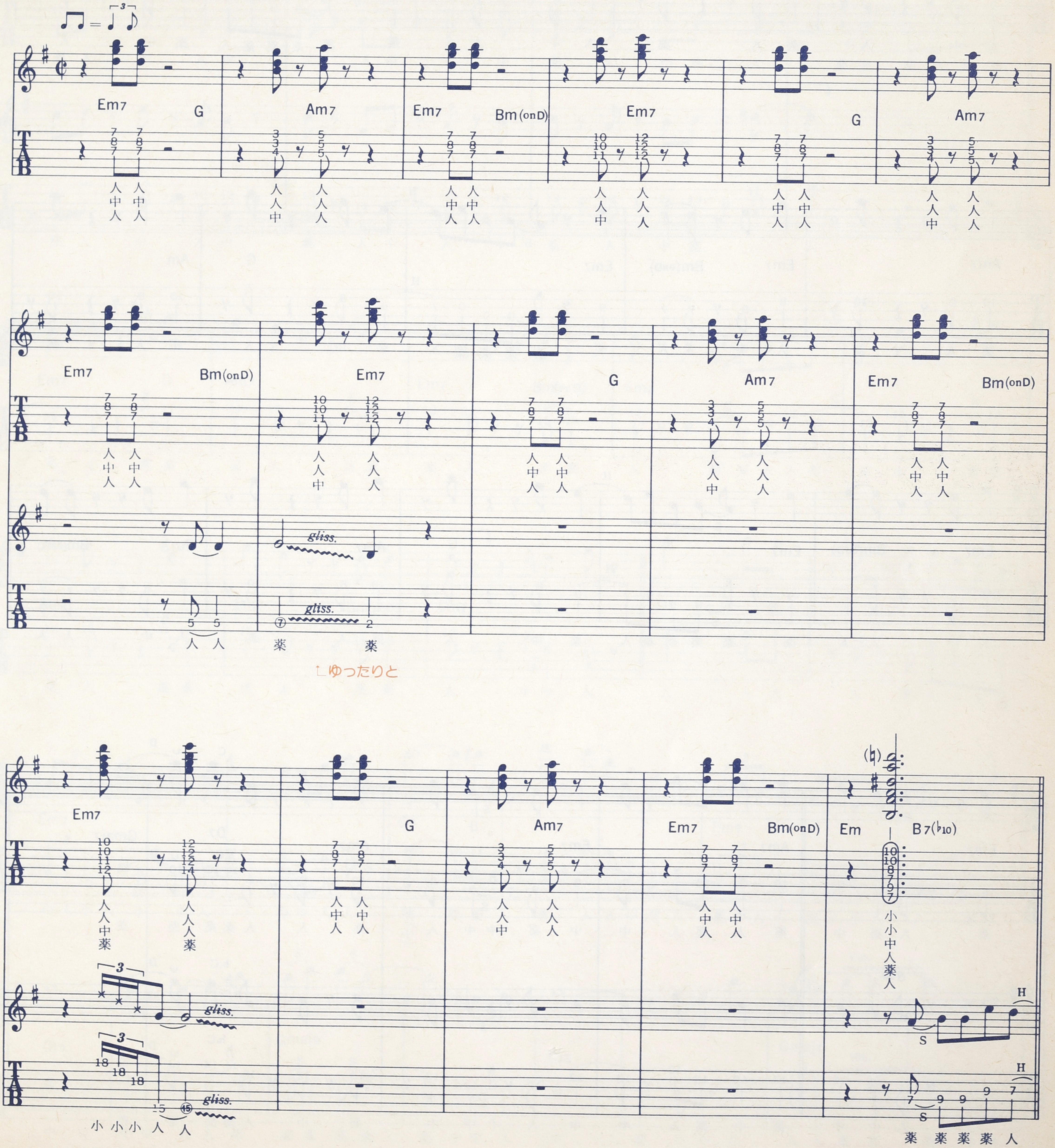
ギター・キッドⒷ

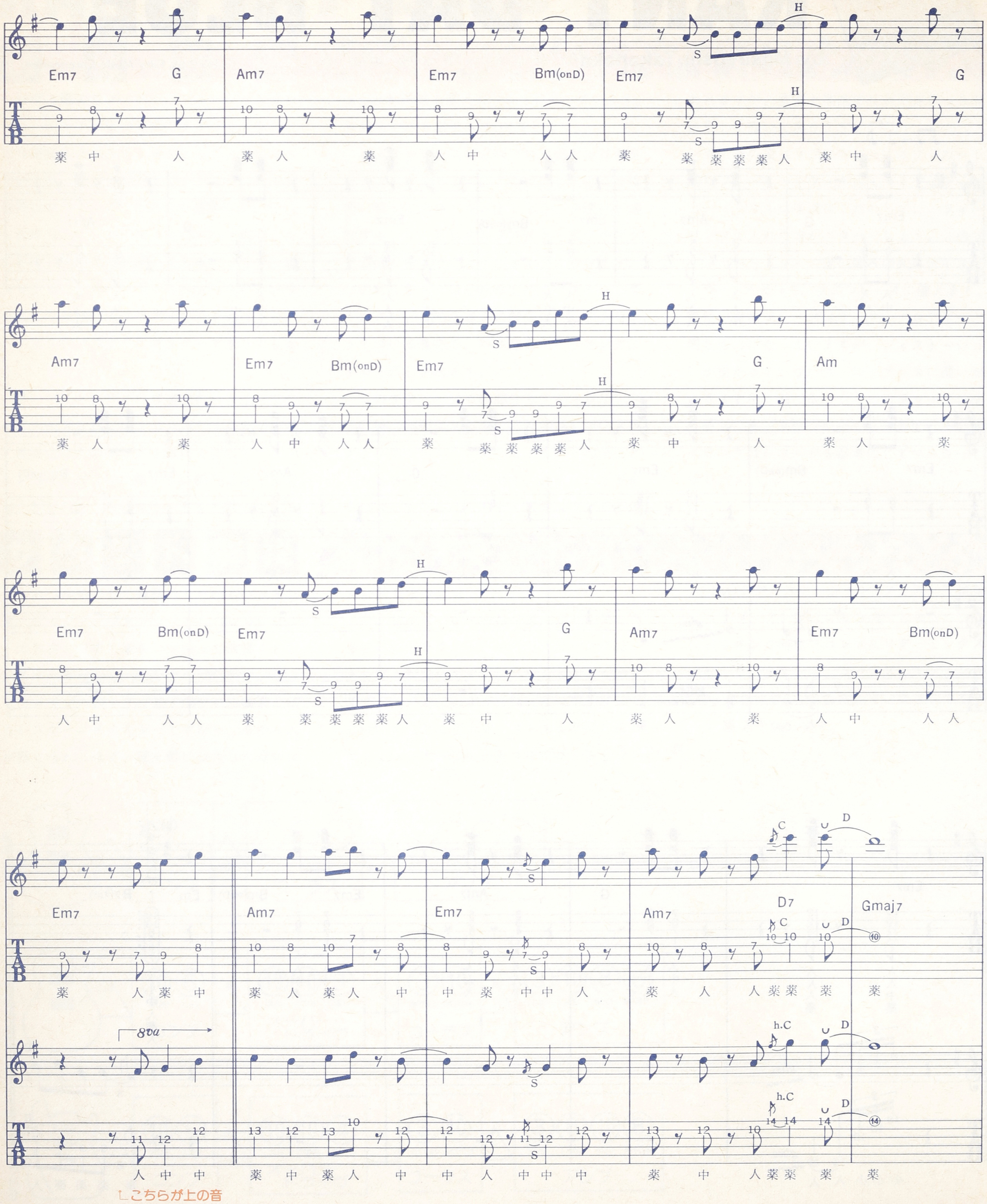


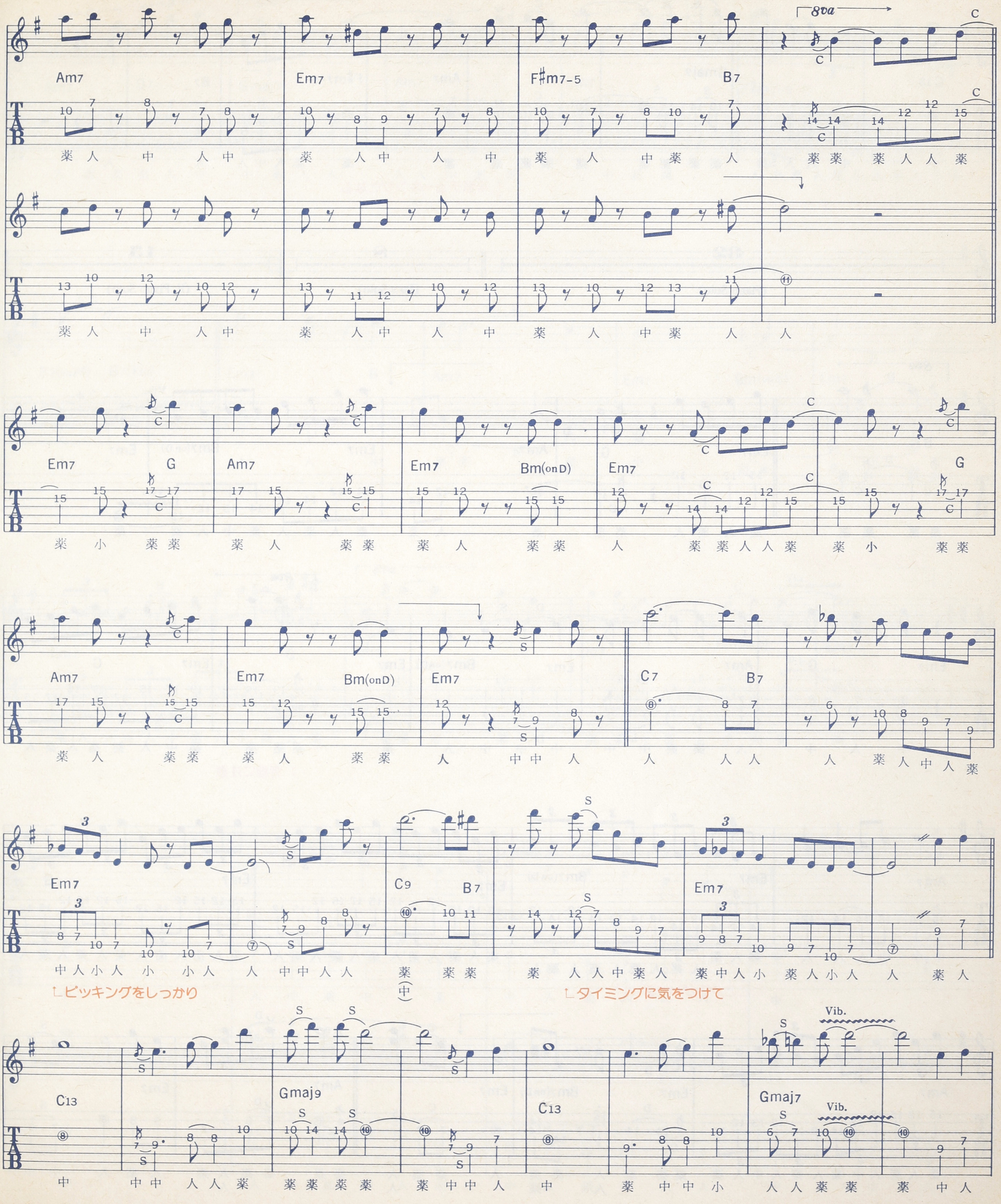


RANY DAY BLUE

by Masayoshi Takanaka



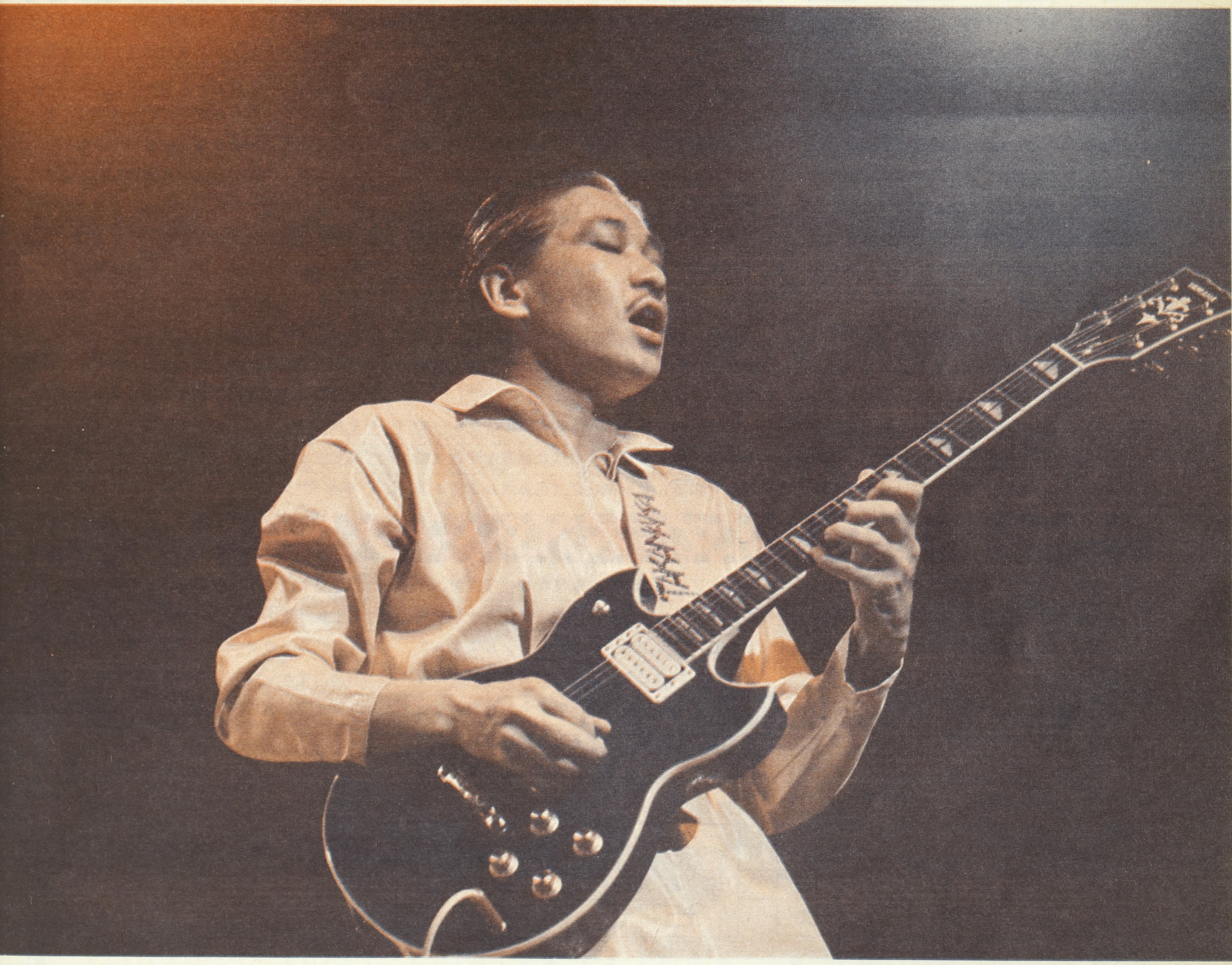

Em7 G Am7 Em7 Bm(onD) Em7 G
Am7 Em7 Bm(onD) Em7 G Am
Em7 Bm(onD) Em7 G Am7 Em7 Bm(onD)
Em7 Am7 Em7 Am7 D7 Gmaj7
8va
└こちらが上の音


8va
Am7
Em7
F♯m7-5
B7
G
Bm(onD)
C7
C9
C13
Gmaj9
Gmaj7
Vib.
└ピッキングをしっかり
└タイミングに気をつけて


C13
Gmaj9
Am7
F#m7-5
B7
半音チョーキングになる
32
(Piano Solo)
8
(Bass Solo)
15
(E. Piano Solo)
8va
B7
Em7
G
Am7
Bm7(on D)
Vib.
力強くピッキング
音程に注意
ここからがヤマ場


8va
Am7
D7
Gmaj7
Em7
F♯m7-5
└オルタネイト・ピッキングで
B7(on F♯)
B7(♭10)
G
Bm(on D)
Vib.
C7
B7


C7
B7
Em7
Em7 G Am7 Em7 Bm(on D) Em7
H & P
1h.C
Em7 G Am7 Em7 Bm7(on D)
フィンガー・トリル
8va
Em7 Em7 G Am7 Em7 Bm(on D) Em7
Em7 G Am7
(Fade in play)
Em7 Bm(on D)
ここからノン・ディストーション
h.C
Em7 Em7 G Am7 Em7 Bm(on D) Em7 Em7 G
Am7 Em7 Bm(on D) Em7 Em7 G Am7 Em7 Bm(on D)
F.O.



FINGER DANCIN'

演奏解説

ディスコ・サウンド調のビートに乗った曲です。全体にスタッカート気味の軽いタッチで演奏してください。テクニック面での大きな問題はあまりありません。シンプルなビートに乗ってダンサブルにキマればそれでOKというタイプの曲でしょう。その意味では比較的コピーしやすいと言えますが、やはりリズムの感じや、音のタッチなどの微妙なニュアンスまでコピーするにはそれなりの努力が必要かもしれませんネ。

テーマ・メロディーの部分はかなり簡単にコピーできそうです。注意点としてはスタッカートをピシッとキメることと、ツインでハモっているサビのところを強目のピッキングでワイルドな感じを出すことくらいでしょう。特にサビの4小節目の16分音符はピッキングをごまかさないでしっかりと弾くようにしてください。

シンセサイザーとストリングスの間奏の後からギター・ソロに入りますが、ここでQ.Cという記号のついた音が出て来ますネ。これは「クォーター・チョーキング」のことで、文字通り$\frac{1}{4}$音（半音のそのまた半音）のチョーキングです。こうなるとチョーク・アップするというよりも、ちょっと指先に力を入れてヴィブラートを掛けようとする感じくらいで音程は変化します。このクォーター・チョーキングをうまく使うとブルージーな雰囲気が出るワケです。

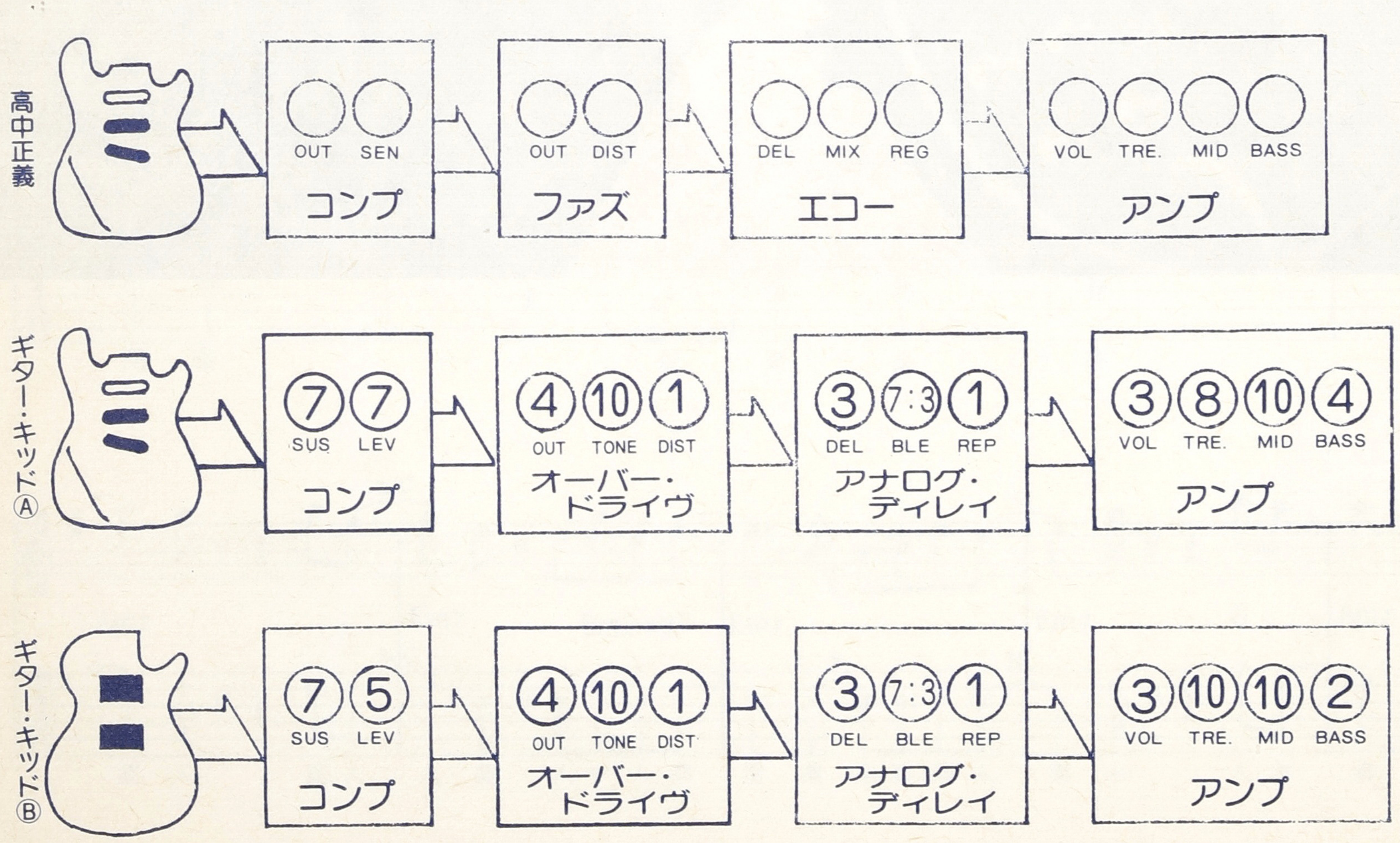
さてこのソロの部分は結構細かいフレーズが並んでいますが、それほど過激な速弾きではないので、ピッキング（当然オルタネイト・ピッキングです）を確実にキメて弾けるように練習しましょう。運指記号では3本指フィンガリングを中心にして指使いを指示してありますが、スケール・フレーズでは小指も使ってみた方が楽な場合が多いですヨ。

エンディングでは何やら異様な音がしますが、この楽譜で「Tune Down」と指示してある部分がそれです。これはスティーヴ・ルカサーなどもよく使う手で、6弦の開放をピッキングした後でチューニング・ペグをゆるめるのです。もしストラトキャスターのアーム付きを持っている人がいたら、単なるアーム・ダウンでも代用できますネ。レコードではそれにディレイか何かで処理をしてあの変な感じを出しているワケです。

サウンド解説

ムード的には全て高中正義サウンドなのです。で、この曲ではストラトキャスターのセンター＆リア・ピックアップのミックスを活かしたフェイズ・イン・サウンドなのですネ。ストラトの特徴として、リア＆センター、またはフロント＆センターの2個のピックアップをミックスしたストラトならではのトーン・ニュアンスが得られるワケなのですが、その時に両者のフェイズ（ポラリティー）がマッチしたフェイズ・イン・ミックスになっていて欲しいのです。仮りにフェイズが逆になっていますとフェイズ・アウトした音になってしまい、高中サウンドとはかけ離れたものになってしまいます。レスポール・タイプなどの2ピックアップのギターの場合は、フロント＆リアのミックスでプレイして下さい。

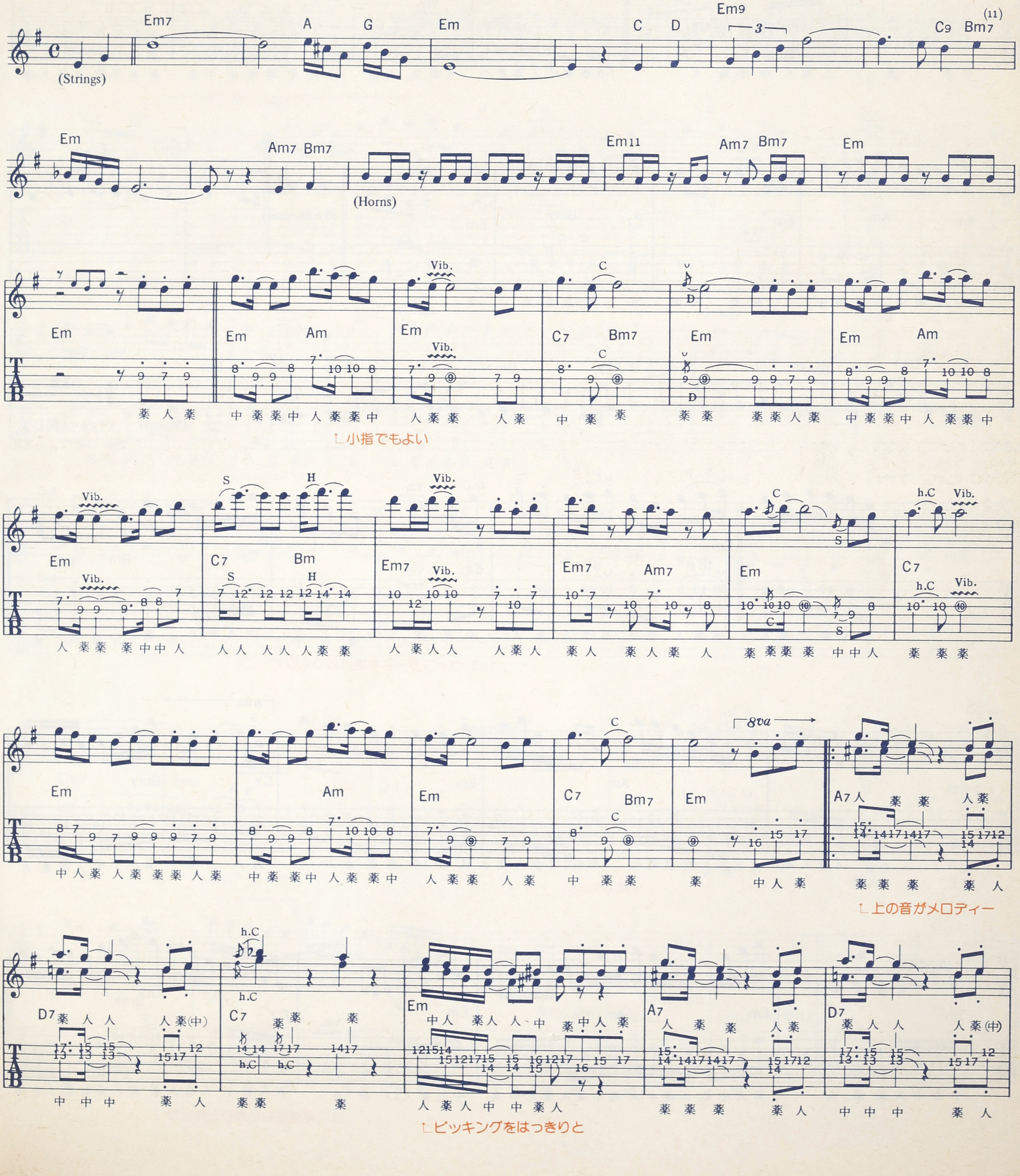
また、オーヴァードライブの掛かりがかなり弱めですが、この場合これでOK。もちろんコンプ＆ファズの併用をキメてある場合ですが。

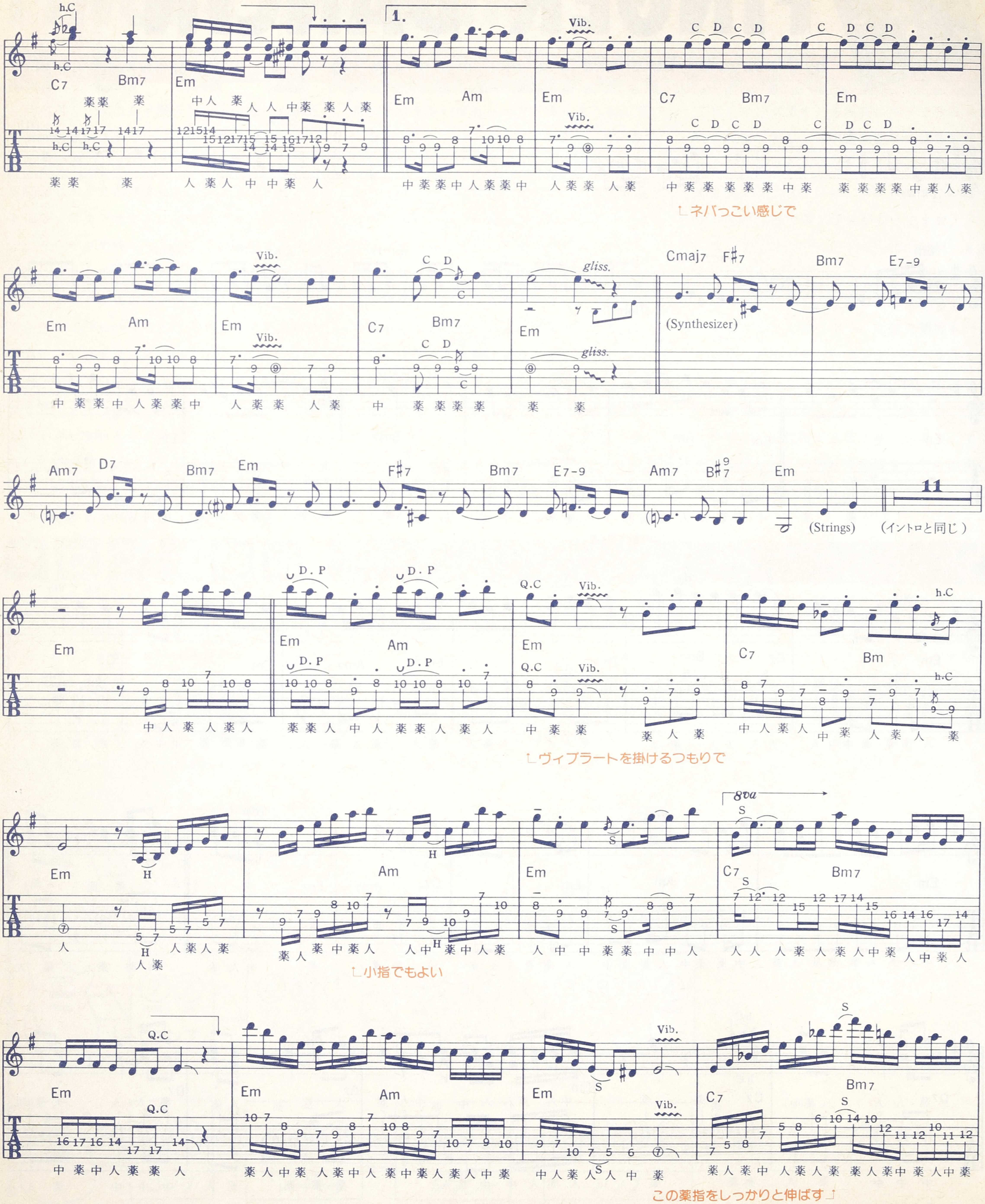




FINGER DANCIN'

by Masayoshi Takanaka




1.
C7 Bm7 Em Am Em C7 Bm7 Em
ネバっこい感じで
Em Am Em C7 Bm7 Em
Cmaj7 F#7 Bm7 E7-9
(Synthesizer)
gliss.
Am7 D7 Bm7 Em F#7 Bm7 E7-9 Am7 B#9 7 Em
(Strings)
11
(イントロと同じ)
Em Em Am Em C7 Bm7
ヴィブラートを掛けるつもりで
Em Am Em C7 Bm7
8va
小指でもよい
Em Em Am Em C7 Bm7
この薬指をしっかりと伸ばす


8va
Em
Am
Em
C7
Bm7
Em
Em
Am
Em
C7
Bm
Em
合わせて１音半チョーキング
Em
Am
Em
C7
Bm7
Em
Cmaj7
F♯7
Bm7
E7-9
(Synthesizer)
Am7
D7
Bm7
Em
F♯7
Bm7
E7-9
Am7
Em
Em9
Em7
A
G
Em
C
D
Em11
C9
Em
Em
Am7
Bm7
Em11
Tune Down
Em11
Am7
Bm7
Em
Em

PLASTIC TEARS

演奏解説

タイトル通り、リリカルなムードを持ったトロピカル・リズムの曲です。メロディーの出だしは毎度おなじみのフェイド・イン奏法ですが、左手の方もスライドやハンマリングなどのフィンガー・テクニックをまじえて、独特のなめらかなフィーリングを出しています。フェイド・イン奏法はヴォリューム・ペダルを利用するのが一番簡単で効果的です。高中もヴォリューム・ペダルでプレイしていますが、少し細かいフレーズになるとピッキングとペダルの動きを合わせて、うまくアタック音を消すことはなかなか難かしいものです。やはりそれなりに練習して、ペダルの使い方に慣れることが大切ですね。

スライドを多用するのは高中選手の特徴のひとつですが、この曲の場合は特にその傾向が強く出ていて、それがこの曲の味にもなっています。単にスライドと言っても、楽譜には表わせない微妙なタイミングやニュアンスの違いがあるわけで、ギター・キッズのみんなには是非その辺まで突込んでコピーして欲しいものです。そうすることで高中の持っている「歌心」みたいなものを少しでも吸収することが、本当のコピーの意味だと思うのですが……。もちろんテクの吸収も大事ですけどネ。

シンセサイザーなどの間奏の後からは普通の弾き方になっていますが、ピッキングを少しソフトなタッチにして、全体のレガートな雰囲気をこわさないように弾いてください。逆にスタッカートの付いている音は、はっきりと短かめに切って弾いて全体のメリハリをつけるようにします。気をつけて欲しいのは2拍3連符のタイミングで、これはレコードをよく聴いて感じをつかむのが一番でしょう。

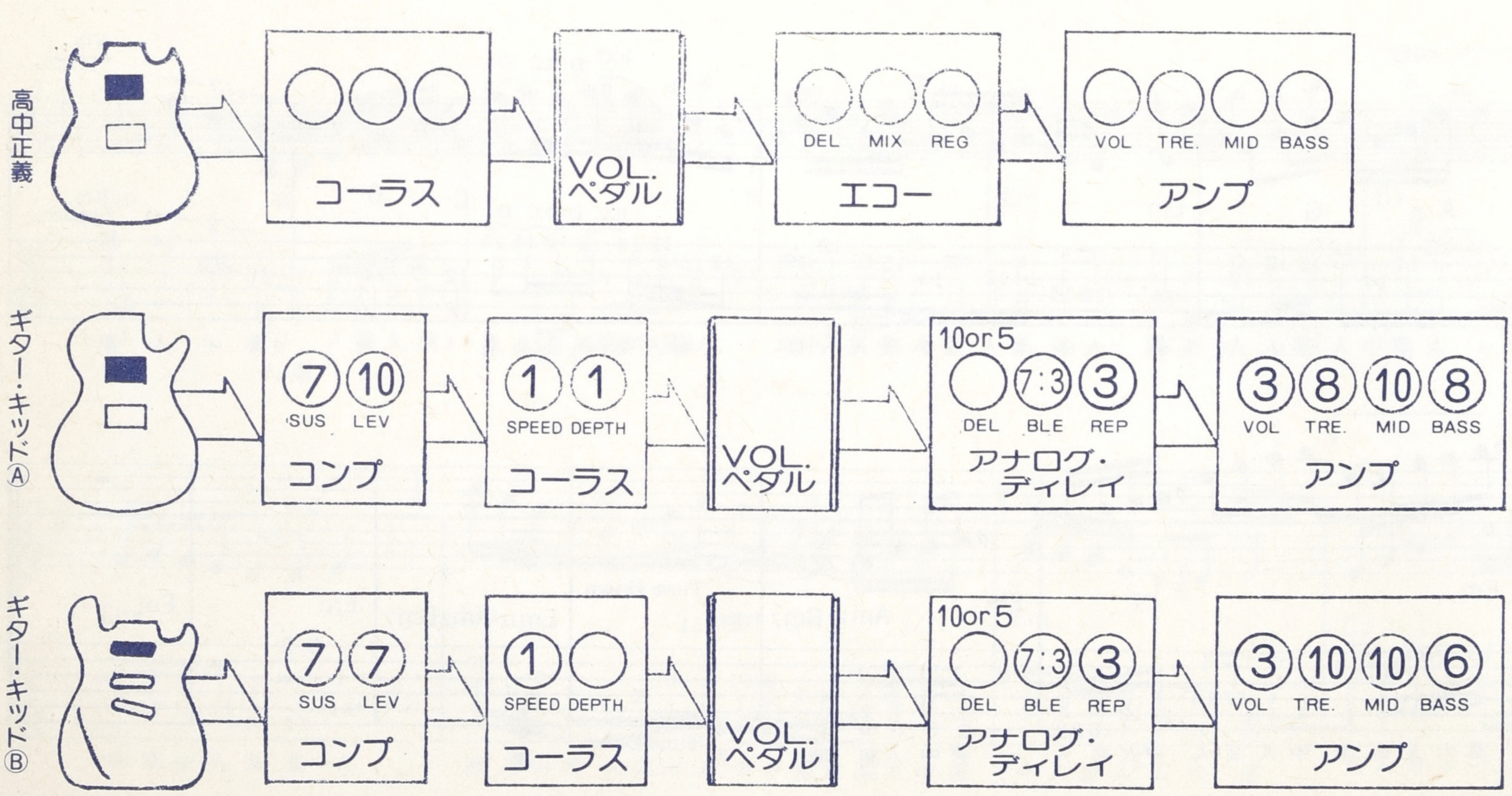
楽譜中に何度かヴィブラートの印がありますが、高中選手はあまり大きなヴィブラートは掛けないタイプのギタリストなので、やや細かくて振幅も小さいヴィブラートです。特にハード・ロック系のギタリストなどにはかなり大げさなヴィブラートを掛ける人が多いのですが、それも曲調によりけりというところですネ。ギター・キッズ諸君のなかにもヴィブラートの苦手な人が多いと思いますが、基本的な方法をマスターするのは当然として、自分なりの味のあるヴィブラートを生み出す工夫も忘れないでください。

サウンド解説

ジャジーなフロント・ピックアップのクリーン・サウンドですが、さらに高中ならではの味付けが施こされています。

まずコンプレッサー。フェイド・イン奏法でピッキング・アタックをなくしても、その後ヴァイオリンのような音のサステインがないとまるでしょうもなくなるのですが、コンプを強めに掛けクリーンながらも伸びやかなギター・サウンドをあらかじめ弾き出しておけばそんな心配はいりませんネ。

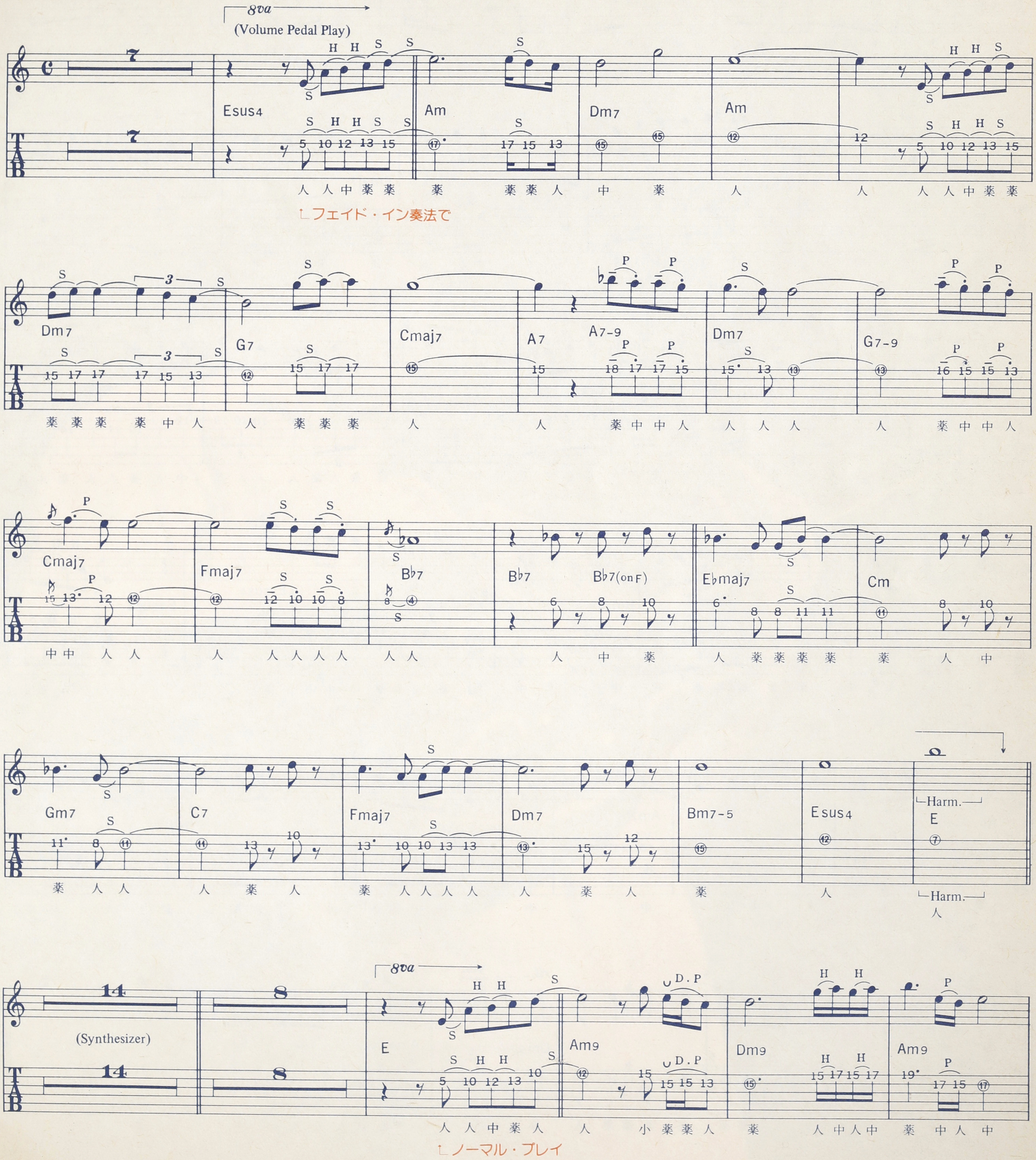
そしてエコー・マシーン。出だしあたりは特に長めのディレイ（アナログ・ディレイ・マシーンの最長ディレイ・タイム0.4〜0.5秒を使う）にリピートも数回付けて下さい。あんまり多くても困まりますが……。で、途中からは「5」という感じのディレイ・タイムでリヴァーブっぽくキメます。マァ、エコー・マシーンのない人は、アタマからアンプのリヴァーブを少し強めに掛けるということになりますネ。





PLASTIC TEARS

by Masayoshi Takanaka




Am9
Cmaj7
ここでポジション・ダウン
Dm7
G7-9
Cmaj7
Fmaj7
B♭9
B♭9
E♭maj7
Cm7
Gm7
C7
C7♯9
ここからのフィンガリングに注意
Fmaj7
Dm7
Bm7-5
Esus4
E7sus4
E7sus4
このあたりの運指をスムーズに
Am7
Dm9
Am7
Dm9
Am7
Dm9
Am9
Am6



HEART ACHE

演奏解説

ラテン・ロック風の味付がされたナンバーで、高中にしてはかなりワイルドでハードな面を見せてくれます。ギター・サウンドもあまりオーバー・ダビングなどに頼らず、エフェクツ類も使用しないシンプル＆ストレートの路線で迫っているようですネ。

まずイントロですが、ハード＆ヘヴィ・メタル・ロックでは必ず使われる「ドローン・サウンド・コード」という省略コードが出て来ます。これは普通のコードの三度の音を省略して、ルート（根音）と五度の音だけを鳴らすもので、ディストーションを効かせて鳴らすとヘヴィで重厚な響きがします。

これは全体を通して言えることですが、高中はピックを深めに持って、ピッキング・ハーモニクス気味なトーン・ニュアンスを出しているようです。途中でモロにピッキング・ハーモニクスになっている部分もありますが、その他の部分もアタックのはっきりした、ブライトな感じのトーンになっていることからも明らかです。ただ速弾きのところはそういうピックの持ち方ではまずいので、適当に持ち換えているようですが……。とにかくギター・キッズ諸君もピッキングは強めでプレイした方がベターですネ。

それとピッキングに関係することですが、この曲の場合、ひとつひとつの音を短かく切って演奏するスタッカートが多用されています。このスタッカートの方法としてピッキング直後の弦をピックで押さえて音を止めるやり方があって、この曲ではその方法が使われています。これだとカチッとした感じで音が止まって、メリハリの効いたサウンドになるので、ロック・ギター向きですね。

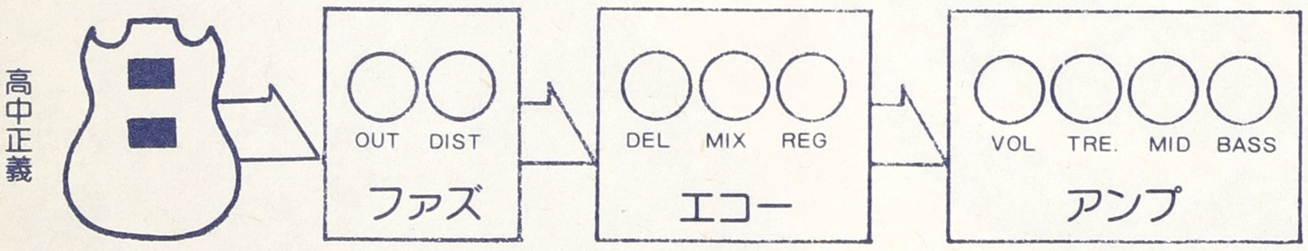
フィンガリングに関してはそれほど特別なものは出て来ませんが、チョーキング、ハンマリング、プリングなどの複合ワザがかなり使われているので、基本をしっかりマスターしていないと困ることになったりします。1音半のチョーキングなどでノイズが出てしまったり、指が思うように開かなくてプリングがキツかったりするんですよネ。

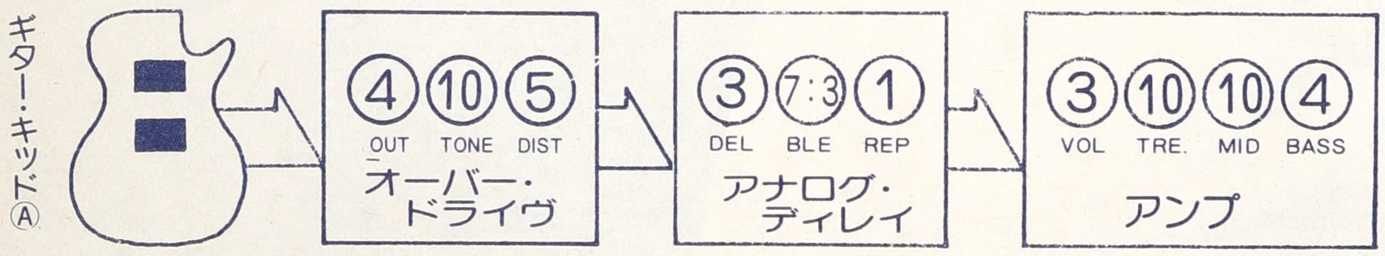
また、高中のプレイの常として、ポジションがよく移動するので、何度もくり返して練習して指を慣らすことがコピーの近道です。部分的にマスターしたらその前後を続けてやってみる。それもできたら今度は全曲通してみるという具合に、根気よく練習することが大切です。

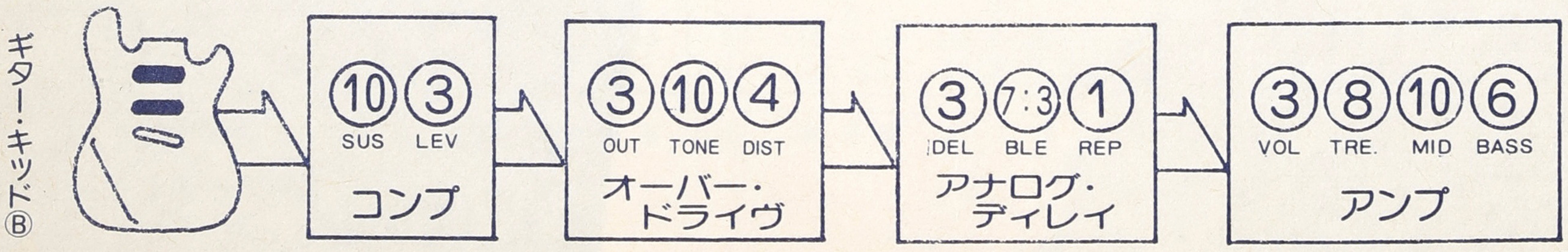
サウンド解説

高中としては珍しくシンプルなギター・サウンドであり、そのシンプルなひとつのサウンド・パターンで全編押し通しています。これは単にファズを掛けただけのオーヴァードライヴ・サウンドで、ギターはハムバッキング・ピックアップのヤマハSGですネ。エコーも掛かっていますが、ここでは去り気ないエコー・エフェクトで特筆するほどのものではありません。基本的には以上の通りなのですが、ここではさらに各パートごと（フレージングごと）にフロント・ピックアップorリア・ピックアップをチェンジするセンスが要求されます。高中がどのようにフロントとリアを使い分けているか把握しておくことが肝心ですネ。

ストラト・タイプなどのシングル・コイル・ピックアップの場合、ファズのみではどうしてもファズ臭が強くなってしまうので、コンプレッサーあるいはイコライザーを巧く絡めて使用してファズ臭を抑えめにして下さい。



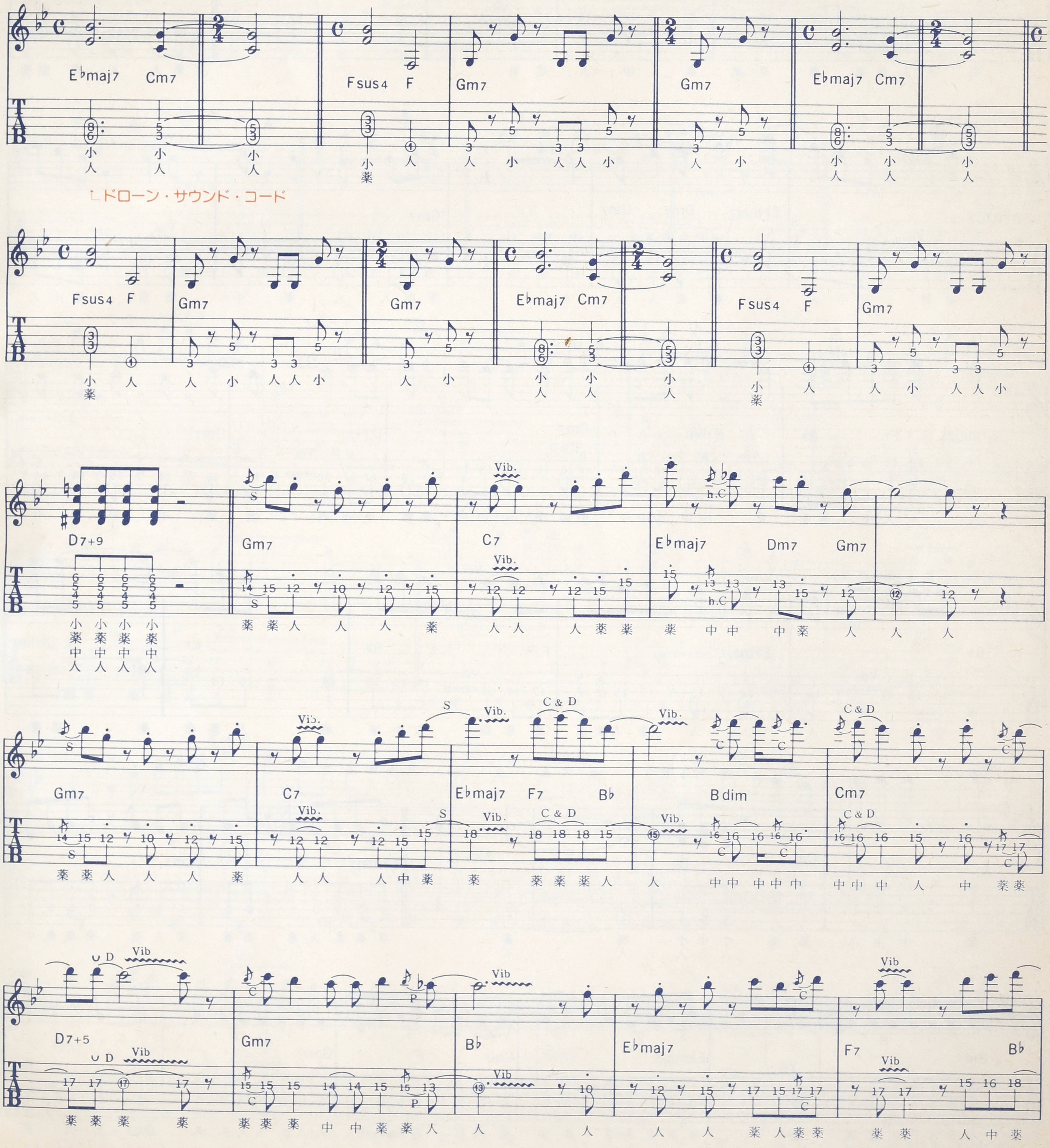






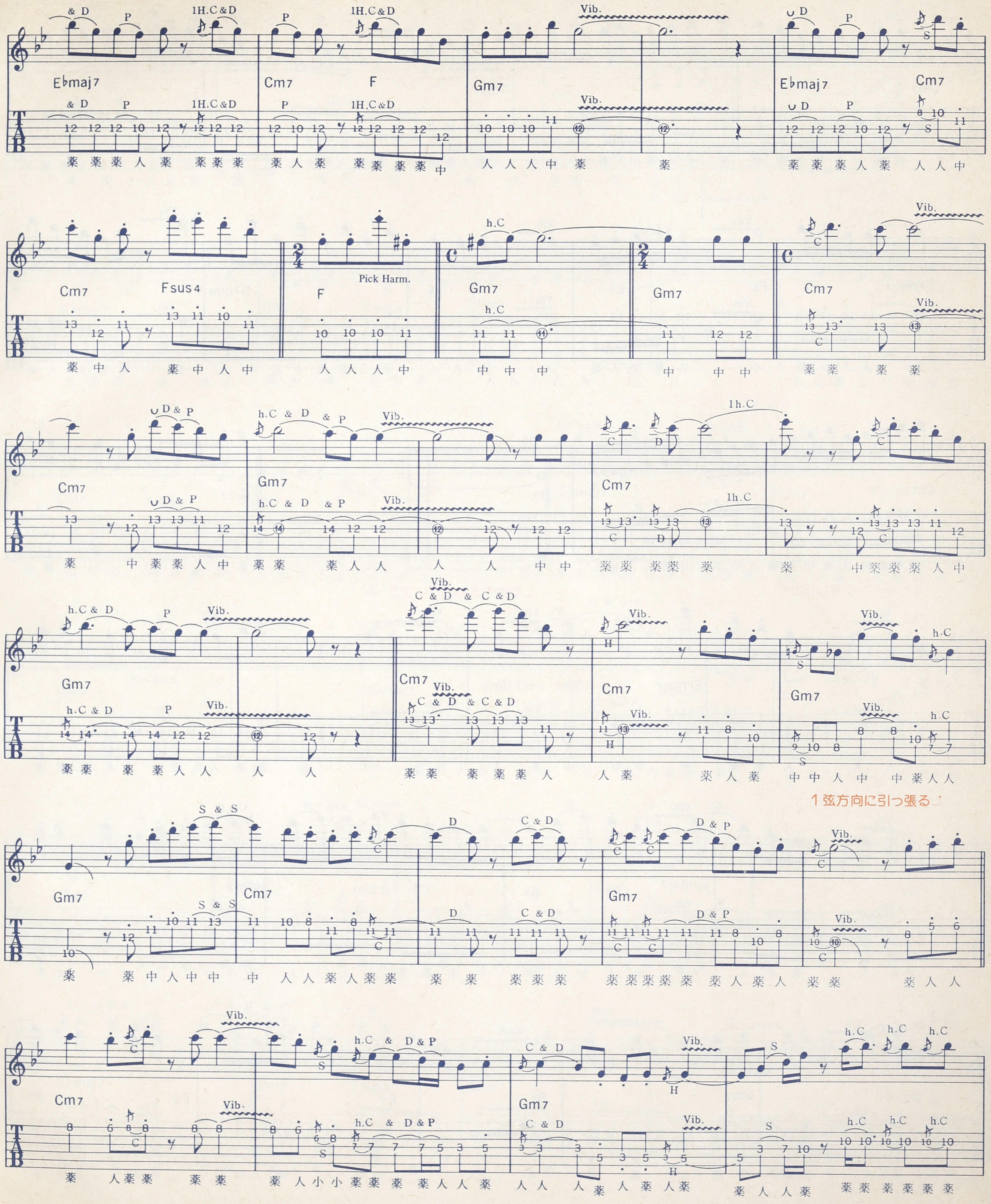
HEART ACHE

by Masayoshi Takanaka

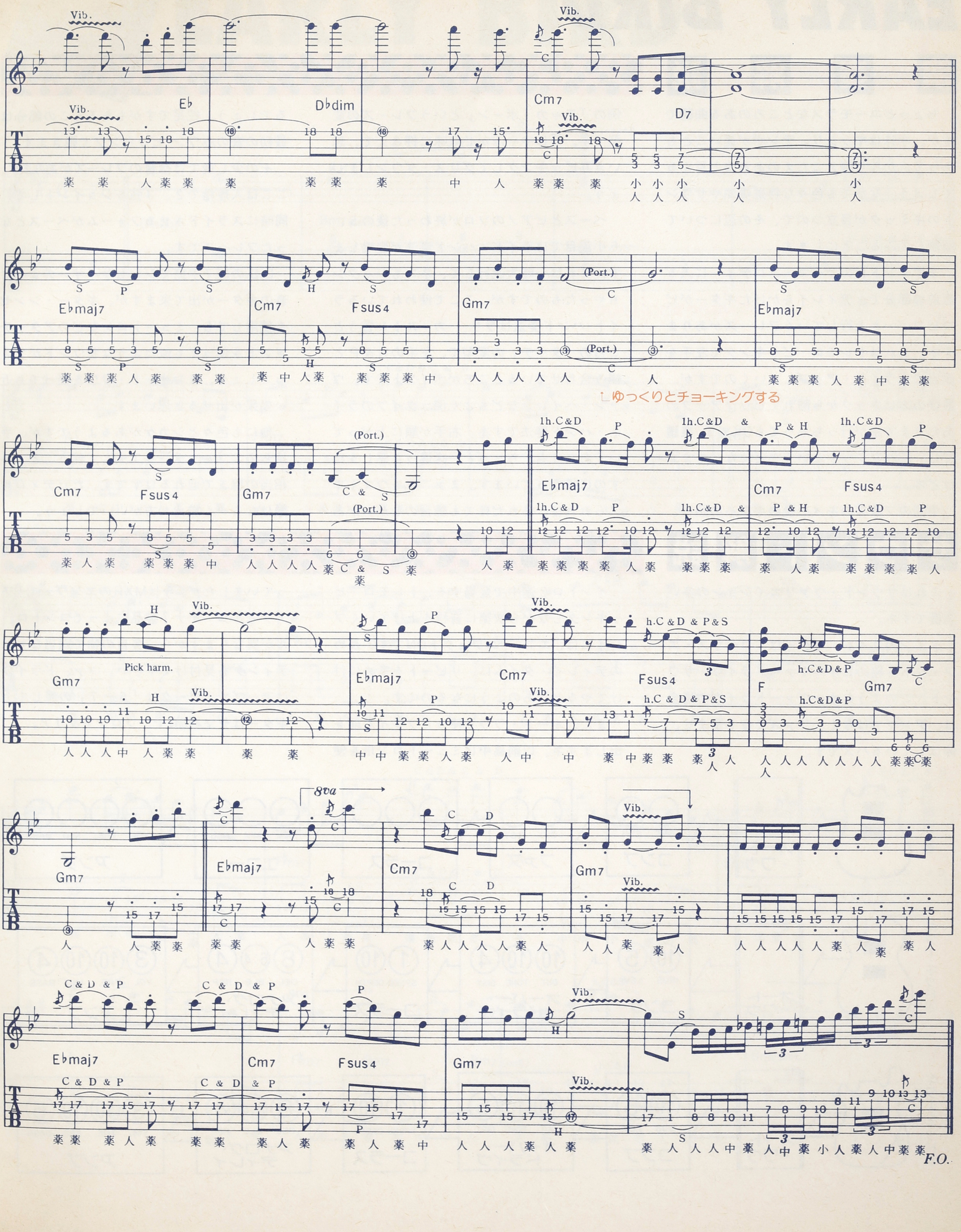



Vib.
1H.C
E♭ D♭dim Cm7 D7 D7 Gm7
C7 E♭maj7 Dm7 Gm7 Gm7
D & P & S
E♭maj7 F7 B♭ B dim Cm7 D7+5 Gm7
C & D
B♭ E♭maj7 F7 B♭ E♭ D♭dim
Cm D7 E♭maj7 Cm7
Gm7 E♭maj7 Cm7 F Gm7
1h.C

1音半チョーキング」


E♭maj7
Cm7
F
Gm7
E♭maj7
Cm7
Cm7
Fsus4
F
Pick Harm.
Gm7
Gm7
Cm7
Cm7
Gm7
Cm7
Gm7
Cm7
Cm7
Gm7
1弦方向に引っ張る
Gm7
Cm7
Gm7
Cm7
Gm7


Cm7
Gm7
Ebmaj7
F6
Bb
Eb
Dbdim
Cm7
D7
ピッキングをしっかり
ややた大きめのヴィブラート
Gm7
C7
Ebmaj7
Dm7
Gm7
C7
Ebmaj7
F7
Bb
B dim
Cm7
D7+5
Gm7
Bb
Eb
F6
Bb


Vib.
E♭
D♭dim
Cm7
D7
E♭maj7
Fsus4
Gm7
(Port.)
ゆっくりとチョーキングする
1h.C&D
P & H
Pick harm.
h.C & D & P&S
F
h.C&D&P
8va
C & D & P
F.O.

EARLY BIRD

演奏解説

ちょっとユーモラスなところのある曲調ですが、中味はギッシリ。テンポが速いこともあって、かなり弾きごたえのある曲と言えるでしょう。なかでも色々な特殊奏法やサウンドのギミックが目立つので、その辺について解説してみることにします。

まずイントロのテーマ・メロディーに入る直前の部分で、ディレイをかけたギターがピコピコ……と上行していくフレーズがありますネ。これはトレモロ・ピッキングで左手を適当にスライド・アップしていくのですが、最後の方はネックから離れてピックアップのあたりまで指が行っちゃってもOKです。楽譜では一応24フレットということになってますけどネ。

中間のブラスのキメの後のギターの頭は、例の「チャカ・ポーン」というフレーズの変型です。$\frac{17}{5}$はやや浮かせ気味に押さえて、思いきりピッキングしてグリス・ダウンしましょう。

ベースとピアノのソロが終わった後の5、6小節目ではライト・ハンド奏法が登場します。これは一時大流行して、ネコもシャクシもやったものですが、ここで使われているライト・ハンド奏法はラリー・カールトン言うところの「タッチ」の変型で、左手のH＆Pと組み合わせているところがポイントです。ヴァン・ヘイレンなどもよく使うタイプのライト・ハンド奏法ですネ。右手が順に上がっていくあたりも、ちょっと一味違った感じを出すのに役立っています。まァこれをウマくキメられれば、それだけでも練習のしがいがあるでしょう。蛇足ですがもちろんこの部分は最初の音のみワン・ピッキングで弾きます。

その少し後では複音のフレーズがあります。ここは人差指で2、3弦をジョイントして、同時にスライドさせるフォームがベースとなったフレーズです。

D.S.の前7小節でシンセサイザーのような音のギターが出て来ますが、ギター・シンセを使用しても、ミュートロンなどのアタッチメントを使っても似たようなサウンドができるでしょう。またオート・ワウを使っても近い効果が出せると思います。

他にも色々とシカケがあるようですが、手持ちのエフェクターを工夫して使うことでも相当の線まで迫れるはずです。ただディレイ類はなるべく揃えた方がいいでしょう。

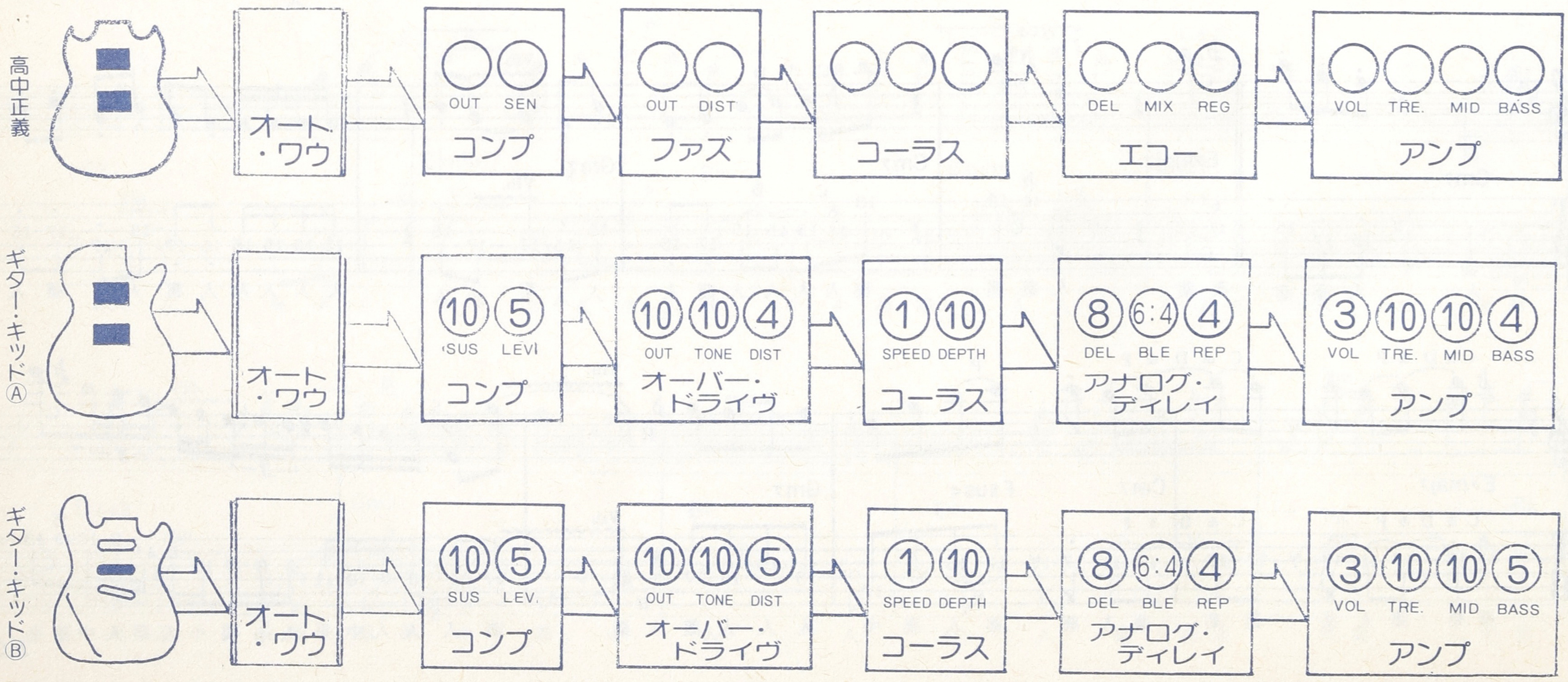
サウンド解説

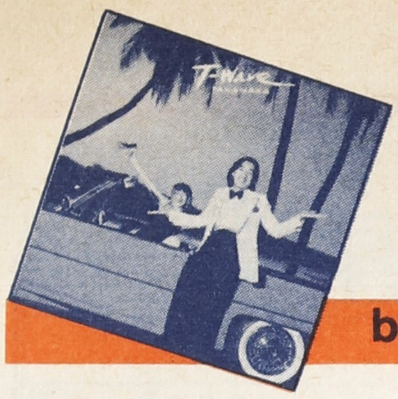
これはサウンド・ヴァリエイションの多い演奏ですネ。

メインのリード・ギターは、コーラス・エフェクトを絡めたオーヴァードライヴ・サウンド。このようなオーヴァードライヴの場合は、アンプではなく、ファズで音を歪ませ、伸ばしているハズです。

イントロと途中で登場する、トレモロ・ピッキングしながら次第に音程を上げていくプレイには、エコー・エフェクトONです。長めのディレイ・タイムに、リピートを多めに付けてやると、あのようになるのです。

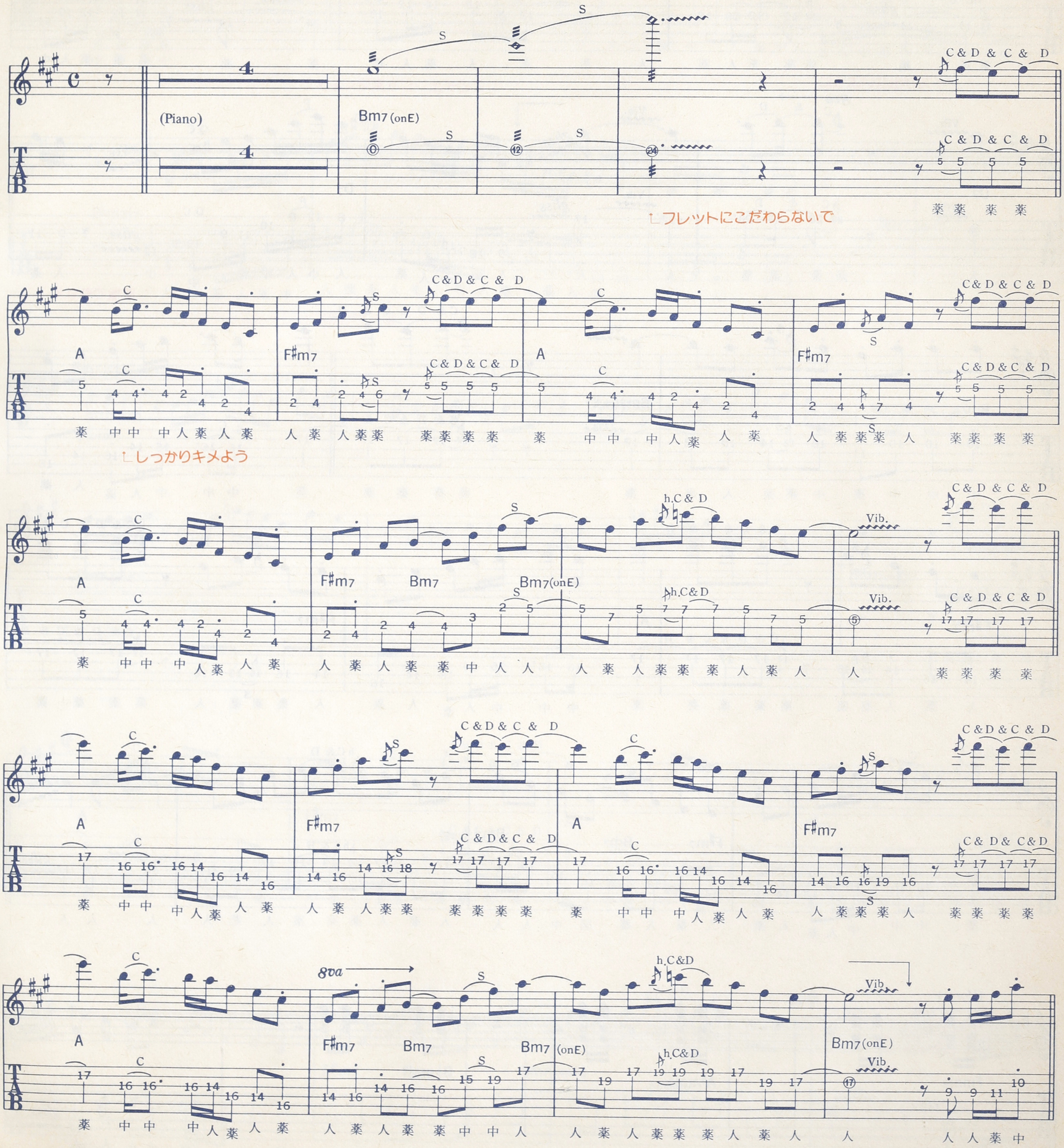
また、オート・ワウを使ったプレイも顔を出しますネ。以前高中はミュートロンIIIを使っていましたが、今はMXRのエンヴェロープ・フィルターかナ？製品によってコントロールが異なりますから、各自の物で適当なセッティングを見付けて下さい。マァ、ドライヴはアップで、ピークは「6～7」の感じネ。ギターはヤマハSGで、フロント＆リア。





EARLY BIRD

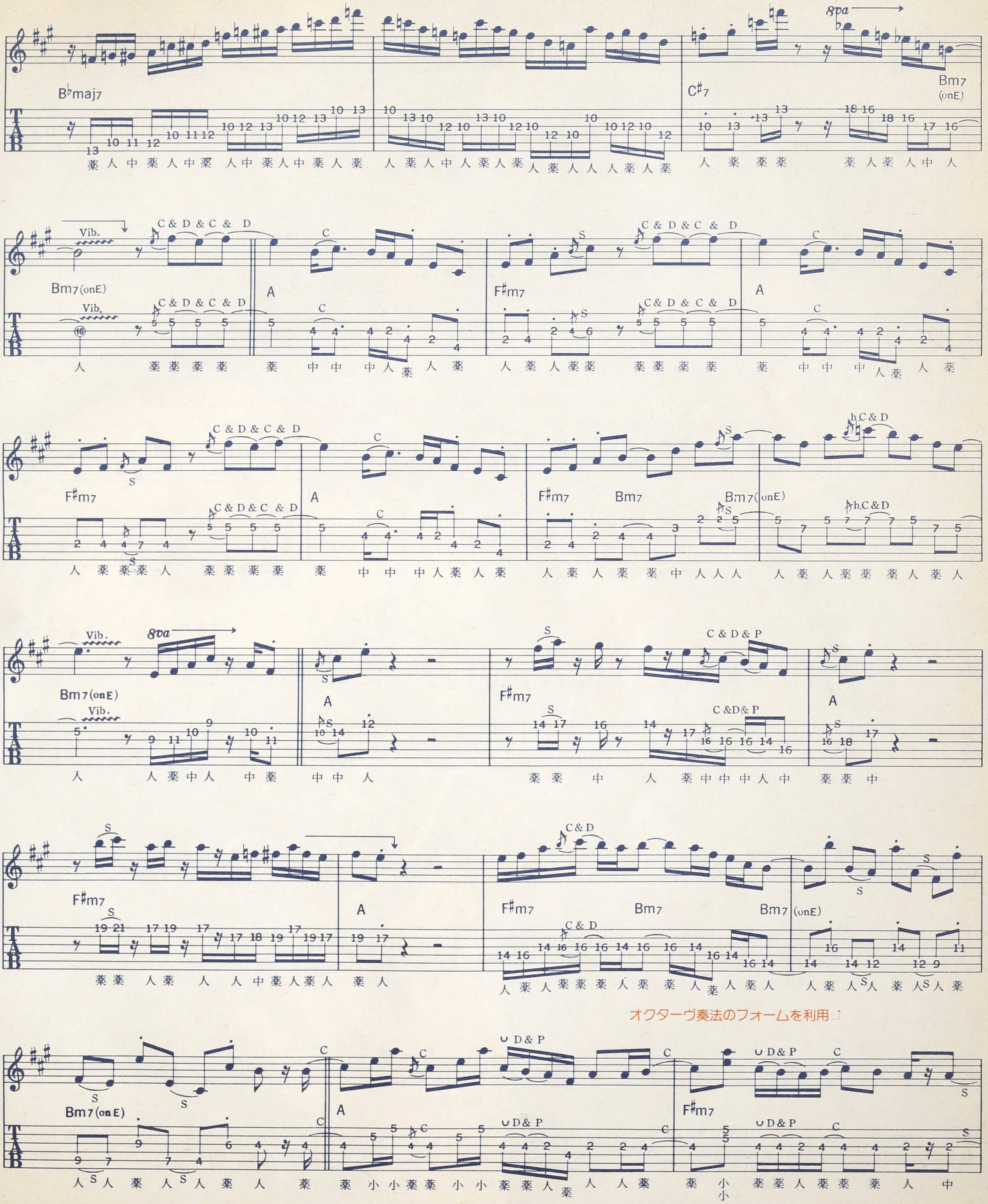
by Masayoshi Takanaka




D7
1h. C
C & D & P
gliss.
Q.C
Vib.
⌞ノイズが出ないように
⌞このチェンジを素早くキメる
8va
⌞薬指でもＯＫ
Bm7
Bm7(on E)
A
F#m7
(Horns)
Fmaj9
A♭maj9
B♭maj7
ドギューンという感じで⌟


C♯7+9
Bm7 (onE)
Fmaj7
A♭maj9
gliss.
ここはノン・ディストーションで
B♭maj7
S
C♯7
Bm7 (onE)
ここはディストーションをかけた音で
Bm7 (on E)
(Horns)
3
Bm7 (onE)
C & D & C & D
A
C
F♯m7
Bm7
Bm7 (on E)
hC&D
to Φ
Vib.
8va


A
gliss.
C
h.C
音程に注意
F#m7
A
F#m7
Bm7
Bm7 (onE)
(E. Bass Solo)
(Piano ad-lib)
8va
Fmaj7
Vib.
A♭maj9
A♭maj7
B♭maj7
R. Hand Play
この曲のハイライト!!
C#7+9
Bm7 (onE)
Fmaj9
ジョイントのままスライド
Fmaj9
A♭maj9


B♭maj7
C♯7
Bm7 (onE)
8va
Vib.
C & D & C & D
A
F♯m7
Bm7
C
S
h.C & D
C & D & P
C & D
オクターヴ奏法のフォームを利用
∪D & P


└タイミングをしっかり
ミュートロン風のエフェクター使用┘
Coda
D.S.
F.O.



TROPIC BIRDS

演奏解説

アレンジも演奏も凝りに凝った大曲です。ギターはストラトキャスターですが、テーマ部分はリアとセンターのピックアップをミックスした俗に言うハーフ・トーンでプレイされていますネ。ギター・パートもかなりオーバー・ダビングされていて、ちょっとしたギター・オーケストラとでも呼べそうなくらいですが、ここでは主に聞こえてくるパートを適当に選んでコピーしてあります。それでも3パートになることもあるので、一人でプレイする場合はどのパートを弾けばよいかをよく考えて弾くようにしてください。

テーマ・メロディーは音色の問題からか、1～3弦だけを使って弾いているので、スライドが非常に多用されています。タブと運指記号をよく見て、スムーズにプレイしてください。あまり細かい動きはないので比較的弾きやすいはずです。それよりもバックに絡んでくる低音のギターの方がフィンガリング的には難かしくて、開放弦の音の止め方などに工夫が必要です。ツインでハモって弾く部分は上段がメロディーで下段がハーモニーになっていますから、一人のときは上段のパートを弾いてください。　　大

ストリングスの間奏の後には部変スリリングなギター・ソロが出て来ます。かなり速弾きの上に、例によってポジションもコロコロ変わるので、完コピには相当の覚悟が必要ですヨ。スケール的なフレーズではやはりどうしても小指を使ったフィンガリングに頼ることになるでで、親指以外の4本の指を総動員するつもりでアタックしてみましょう。また各所にスライドによるポジション・チェンジがあります。これを素早く正確にキメられるかどうかが大問題ですから、練習のポイントをこれにしぼってやるとよいでしょう。

エンディングの方はストリングスとユニゾンになったりして、はっきり聞こえない部分もありますが、ギター・キッズ諸君が自分のバンドなどでプレイするときは当然弾かなければいけない部分なので、楽譜通りにコピーしておいてください。

全体としてはかなりの難曲だと思いますが、部分部分を確実にコピーしていけば何とかカッコがつくはずです。スライドを中心に反復練習で指に覚えさせるつもりで頑張りましょう!!

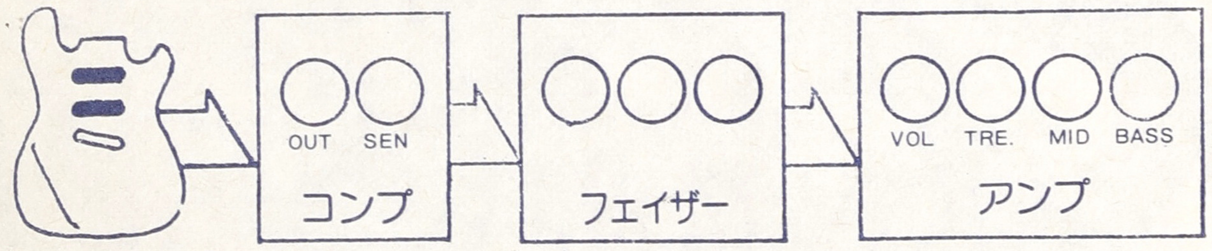
サウンド解説

高中の8作目『虹伝説』でも全体の半分ぐらいで聴けるタイプのギター・サウンドですが、すでにこの演奏を含むデビュー・アルバム『セイシェルズ』で彼のトレード・マークの的なものとなっていましたネ。

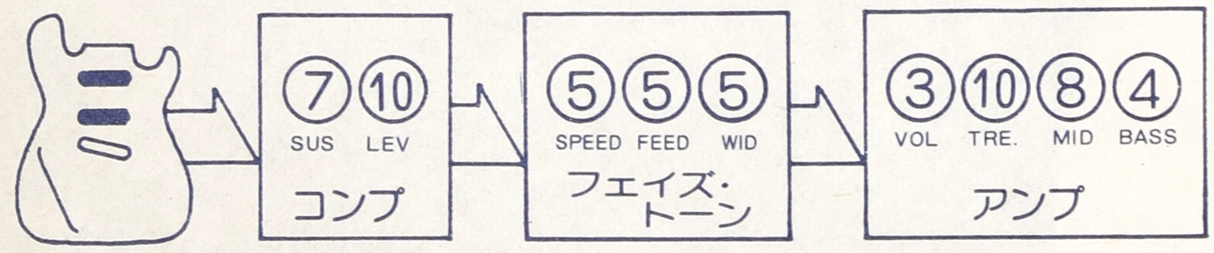
そう、ストラトのハーフ・トーン（高中は大体フロント＆センターの方）にコンプレッサー（ここでは多分ダイナ・コンプ）を強く掛けているワケです。テレキャス、レスポール、ES—335といったツー・ピックアップのギターでも、フロント＆リア・ピックアップ・ミックスにした上でコンプを強めに掛けることにより、大体似た感じは出ますが、ストラトのスリー・ピックアップならではの（P.U.の間隔が狭い）ハーフ・トーン・ニュアンスまではチョッと真似できないですネ。

イントロのハーモニクスにはフェイザーを軽く掛けます。で、基本的サウンド同様フェイジング効果もクリーンにキメたいので、コンプの音量は「6～7」にした方がベター。

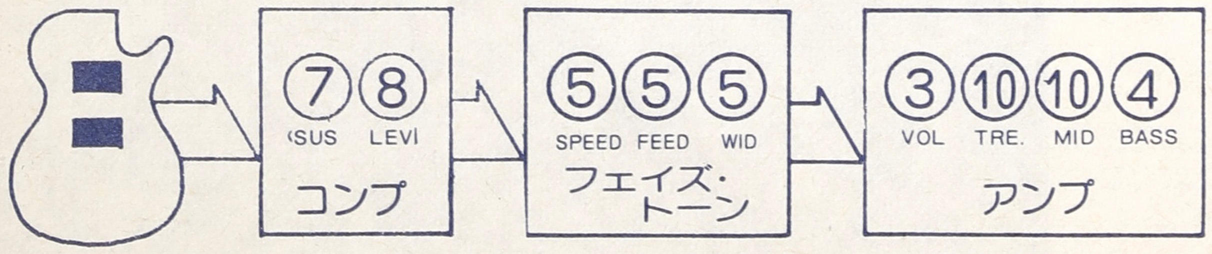
高中正義



ギター・キッドⒶ



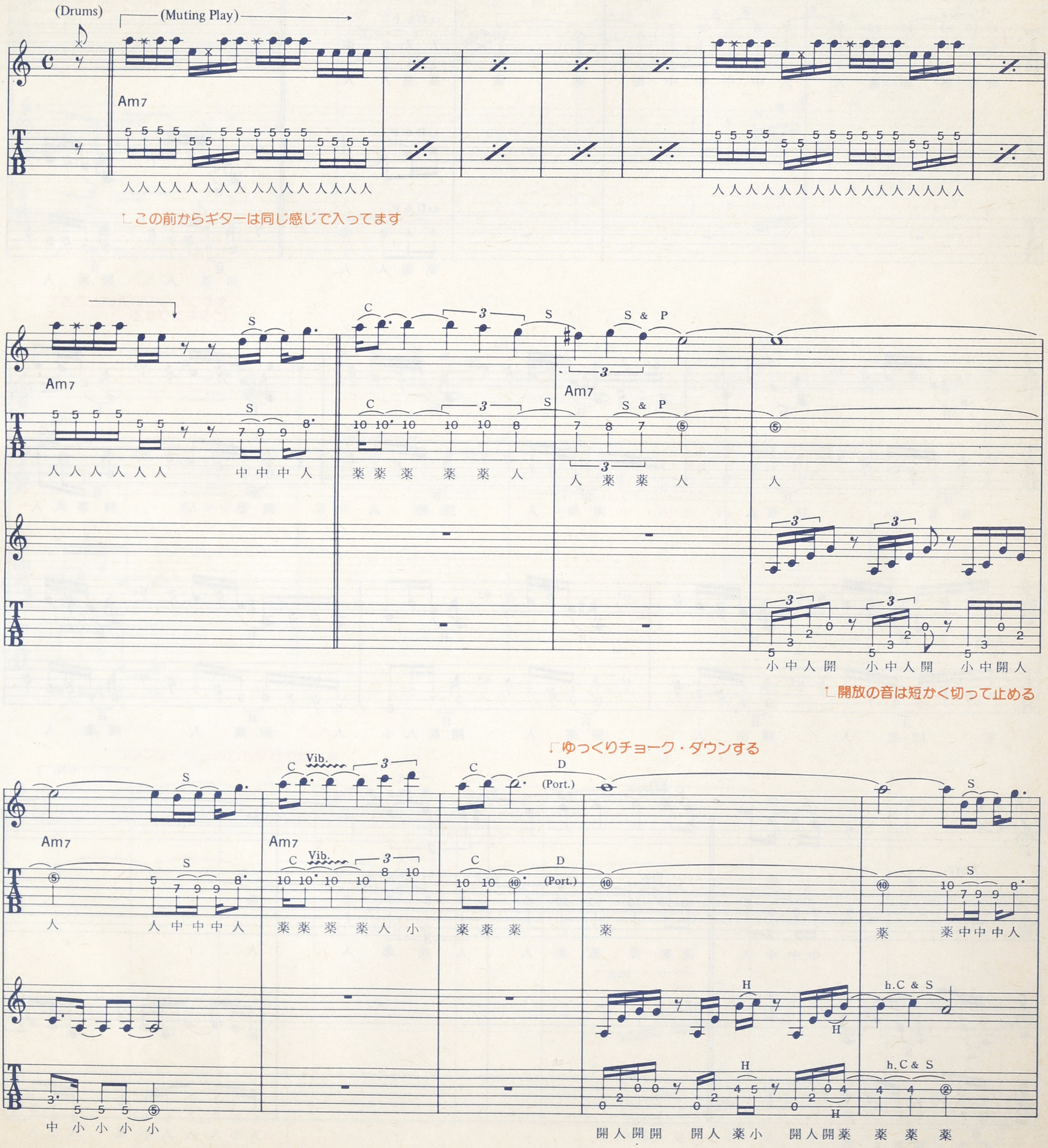
ギター・キッドⒷ





TROPIC BIRDS

by Masayoshi Takanaka




Am7
C
Vib.
S
gliss.
D & P
H
やや ブリッジに近いところで
ピッキングする
h.C
S & P


Am7
C
Vib.
D
(Port.)
S
h.C
&
H
S & S
「コンプレッサーの力も借りて伸ばす
8va


C Vib.
S
C & D
(Port.)
Am7
h.C & D
H
C D


Am7
C Vib.
S
S & S
h.C Vib.
(T. Sax Ad-lib)
Cm7
(E. Piano Ad-lib)
(Strings)
Dm7
Baug
Em7
H
C & D
h.C & D


Em7
タイミングに注意
正確に7フレットまで行けるように
Em7
思いきってスライド・アップする
Em7
Em7
F♯m7
F dim
薬指で上行する


C & D
H
G dim
F#m7
G#m7
Am7
Bm7
Bm7 Em7 C#m7
Dm7
C#m7 (on F#)
C
└セーハの形
8va
Vib.
Em7


8va
Em7
TAB
└リズムのノリが難かしいフレーズ
h.C & D
(Port.)
C & D
(Port.)
h.C
8va
C
gliss.
S


gliss.
Em7
(Latin Percussion)
Em7
F#m7
Em7
F#m7
Em7
Em7
F#m
8va
Em7

READY TO FLY

演奏解説

まず、スペースの都合上、イントロとエンディングのハーモナイズ・プレイ、そして中間部のサックス・ソロ・パートなどを割愛している点を明記しておきます。

演奏は、高中好みのラテン・フレイヴァー（特にサンバ）溢れる16ビート。キーはホ長調（KEY・IN・E）で、ダイアトニック・ノート・スケール（この場合はEmaj7、F♯m7、G♯m7、Amaj7、B7、C♯m7、D♯m7-5の7コード）に含まれないコードも、例によって多用されます。ここでは、それらの曲者コードに伴うスケール・チェンジを活用したフレージングも数多く登場しますので、KEY・IN・EだからEメイジャー（アイオニアン）もしくはブルース・スケールだ！なんていう甘い発想は通用しません。ダイアトニック以外の曲者コードそれぞれがこの場合に伴うスケールを知っていないと、ソロのメロディー・ラインを理解しにくいと思うし、またコピーから先に進めないというシビアな現実が待っているのです。

さらに、ディミニッシュ・スケール（D7-9コードなどに用います）を使ったようなトリッキー・フレージングのみならず、一般的スケール（コード）時においても、並のロック・ギタリストには到底望めない、高中ならではのアイディアに富んだプレイがいくつも出て来ます。最近ではラリー・カールトンやスティーヴ・ルカサーの活躍によって広められつつある、ひとつのロック・ギター・スタイルですが、高中もある程度その流れを汲んで、従来用いられなかったポジション・フォーム及びフィンガー・フォーム、運指を追究し、従来のものでは弾き出せないようなフレーズを、次々と編み出していると言えましょう。

とにかく、ギター・キッズのみんなも、高中のようなナウいタイプのロック・ギターにチャレンジする時は、いつにも増して、柔軟な頭と工夫で対処しなくちゃネ。

また、リズム、と言うかフレーズの符割なんて点でも、この曲を初めとして高中奏法はムズかしい。譜面を見ても分かるように、16分音符の連続、また16分休符を絡めたリズミカル・プレイ、1拍及び2拍3連、さらに3拍系（4分の3拍と1拍半）フレージングなど、実にヴァラエティーに富んでいる。何て文章で書けば造作もないことのようですが、磨き抜かれたテクニック＆リズム感なしには、とても弾きこなせるものではないのです。

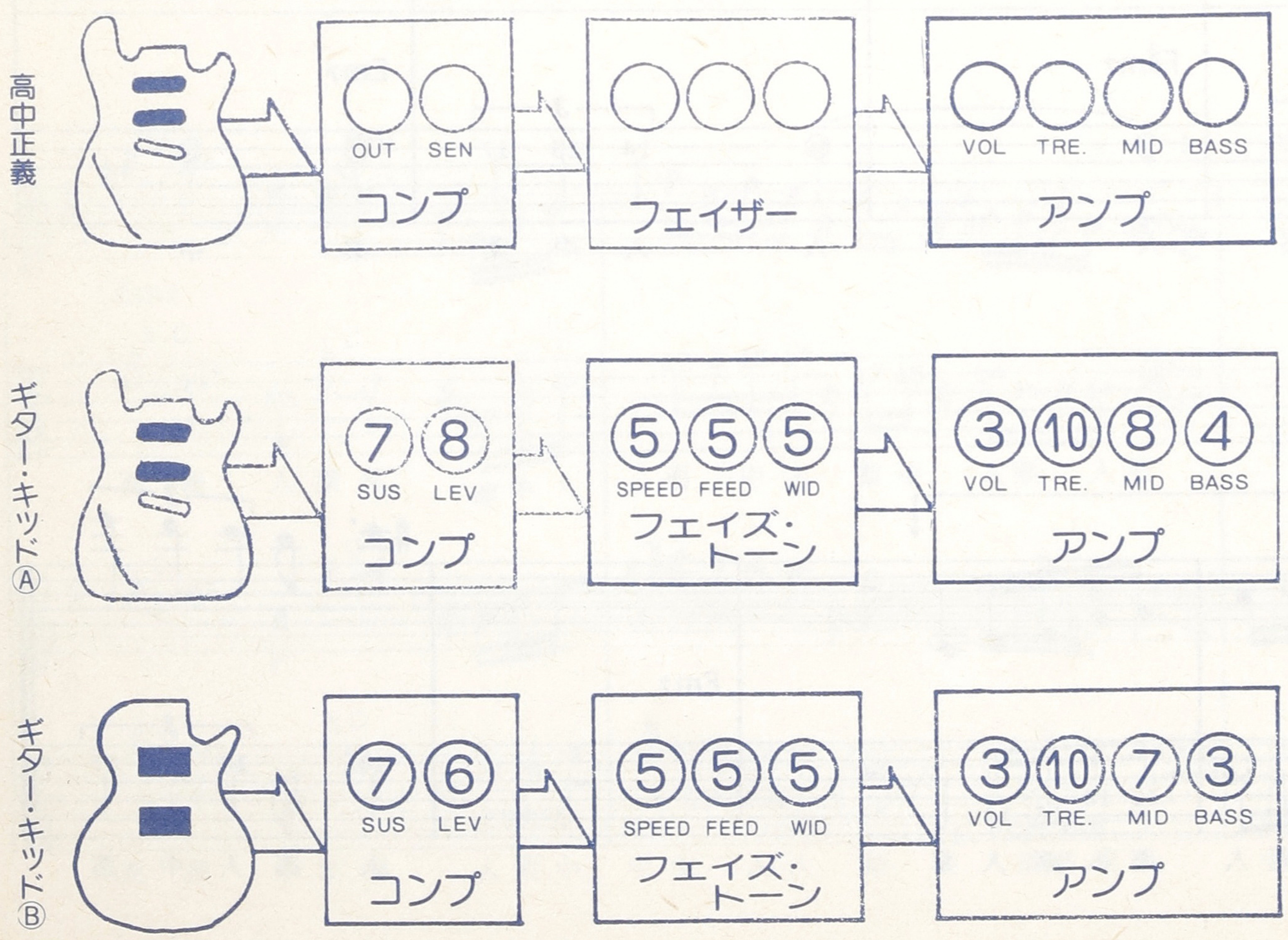
もちろん、以上のことに伴いピッキングも実にハード。スマートなオルタネイトでGO！

サウンド解説

ストラトキャスターのフロント＆センターのピックアップ・ミックス（ハーフ・トーン）に、コンプレッサーを強めに掛けた御馴染のクリーン・サウンドですネ。

一般的には、フロント＆センターよりも、センター＆リアのハーフ・トーンの方が活用されることが多いワケです。普通センター＆リアの方がフェイズ・イン・ニュアンスが巧く出易すいですから。が、多分高中がそうやっているように、トーン・セッティング（またはイコライジング）をトレブル強調にしてやりますと、フロント＆センターのハーフ・トーンのいく分こもり気味のマイルドさが解消されますし、フェイズ・イン・ニュアンスは、かえってセンター＆リアより強まるんですよネ。で、センター＆リアより線も太いですから、リードにはベターと言えるでしょう。

バッキングは主にアコースティック・ギターです。が、ストラトも使われていまして、一部フェイザーONです。

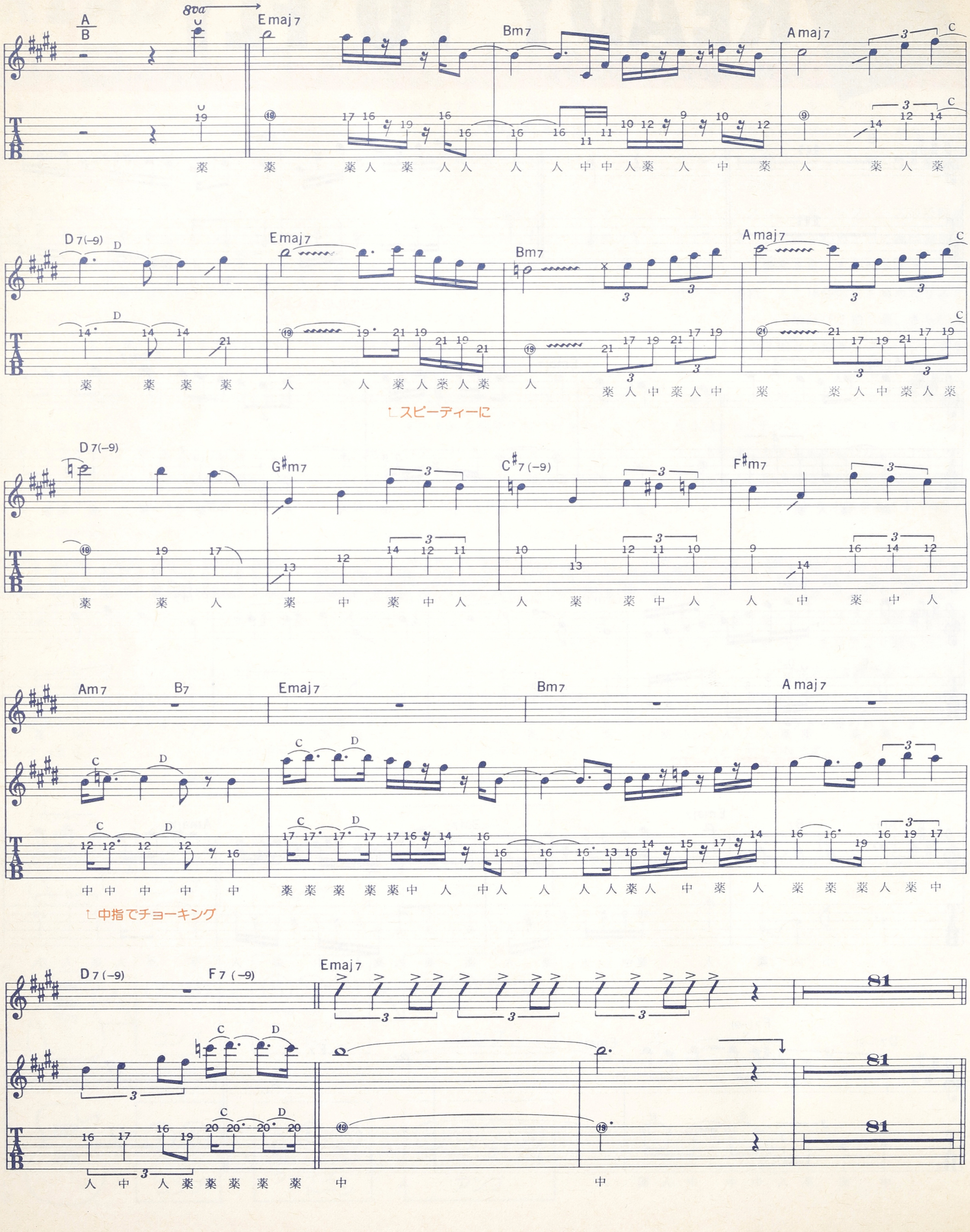




READY TO FLY

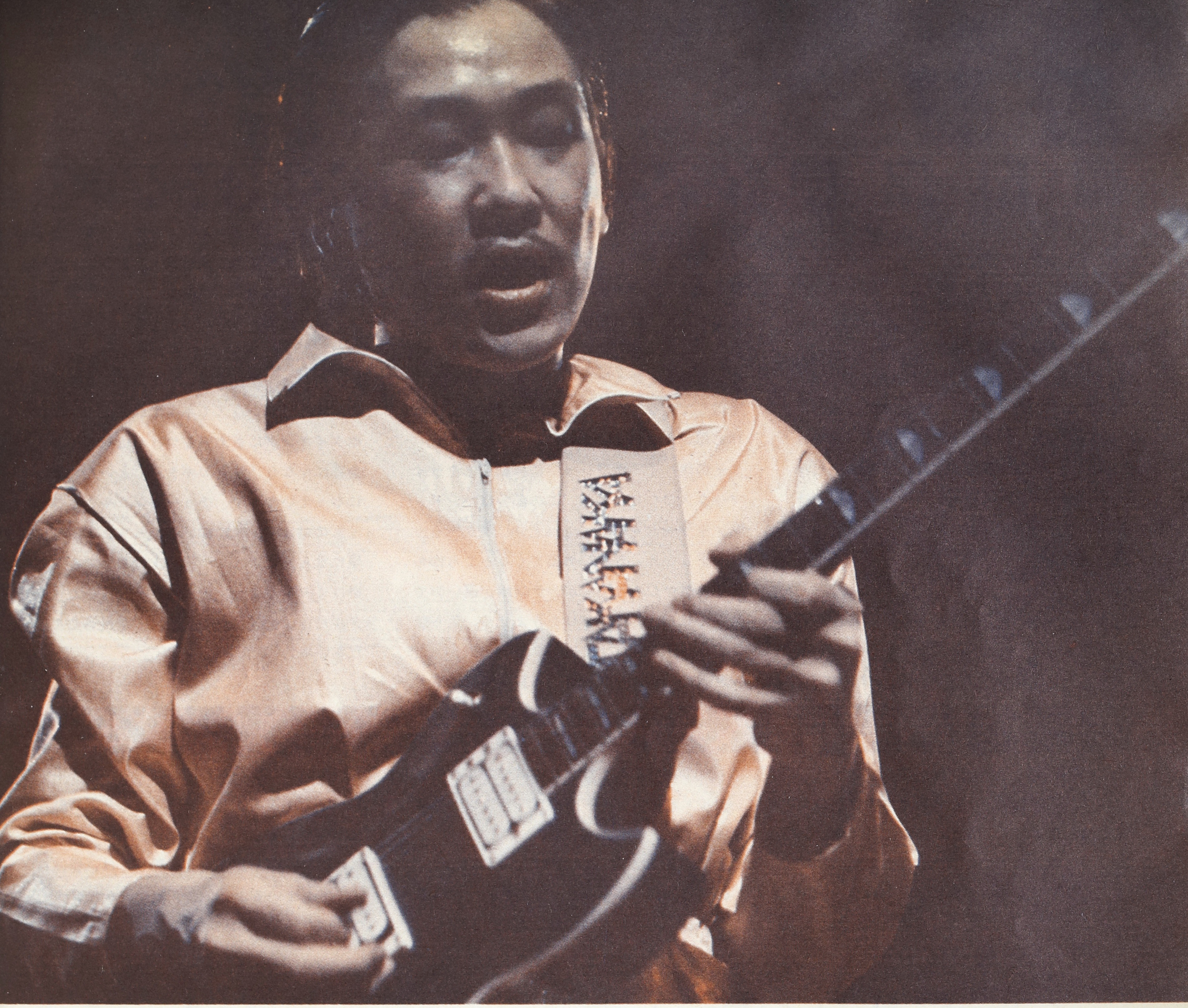
by Masayoshi Takanaka




A
B
8va
Emaj7
Bm7
Amaj7
D7(-9)
Emaj7
Bm7
Amaj7
スピーディーに
D7(-9)
G#m7
C#7(-9)
F#m7
Am7
B7
Emaj7
Bm7
Amaj7
中指でチョーキング
D7(-9)
F7(-9)
Emaj7
81


Emaj7
Bm7
Amaj7
D7(−9)
G♯m7
C♯7 −9
F♯m7
└リズムに注意
└ピッキングをしっかり
Am7
B7
└２拍３連の連続なのでリズムに注意
F7(−9)
└ディミニッシュ・スケール・フレージング
ピッキングをしっかり。運指も整然と┘


Amaj7
D7(−9)
G♯m7
C♯7(−9)
F♯m7
Am7
B7
Emaj7
Bm7
└リズミカルにパーカッシブに
Amaj7
D7(−9)
F7(−9)
Emaj7
└ここもピッキングが大変
└フィンガー・フォームをキメてプレイしよう
Bm7
Amaj7
D7(−9)
Emaj7
Bm7
Amaj7
D7(−9)
G♯m7
C♯7(−9)
F♯m7
Am7
B7



黒船

演奏解説

サディスティック・ミカ・バンド時代の名演です。今回はスタジオ・ヴァージョンの方をコピーしてありますから、レコードはスタジオ盤の方を参考にしてください。

まず冒頭部分はお得意のヴォリューム・ペダルを使ったフェイド・イン奏法でキメています。途中にトレモロというのが出て来ますが、これはトレモロ・アームを使うことではなくて、マンドリンと同じように細かいピッキングをくり返してチリリリという感じに弾くことです。コツはピックを少し弦に対して寝かせ加減にして、軽くピッキングすることですネ。

そのトレモロの後のDm7の小節に人差指の半音チョーキングを使ったフレーズがありますが、これは高中選手がよく使うフレーズで、手クセのようなものでしょう。$\frac{15}{2}$を小指で押さえるところがミソになります。その次からは低音のメロディーになりますが、この部分はオクターヴァーを使用している可能性があります。まァそうは言っても、別に普通のサウンドのままでも不都合はありませんから、無理してオクターヴァーを購入する必要はないと思いますヨ。

その後ハイ・ポジションに移動してクライマックスになりますが、この部分はハンド・ヴィブラートを効かせて、充分にギターを泣かせましょう。5連符の出てくるところはちょっと難かしそうですが、テンポが遅いので楽譜で見るほどのことはありません。落ち着いてプレイすれば大丈夫ですヨ。

注釈で「チョップ」という言葉が出て来ていますが、これはレコードを聴くとわかるように、ほんの短かい装飾音を全部ダウン・ピッキングで入れるテクニックで、コード・フォームを利用するのが普通です。この曲の場合は「F」のフォームですネ。

エンディングはダウン・アンド・プリングの連続したフレーズでキメていますが、音程やタイミングにさえ気をつければ簡単です。全体にかなり「泣きのギター」といった感じになっているので、チョーキングやヴィブラートのニュアンスに神経を使って、単調な表現にならないように「歌い上げる」ことを心掛けてみましょう。それとヴォリューム・ペダルだけは必需品なので、何とか用意してくださいネ。

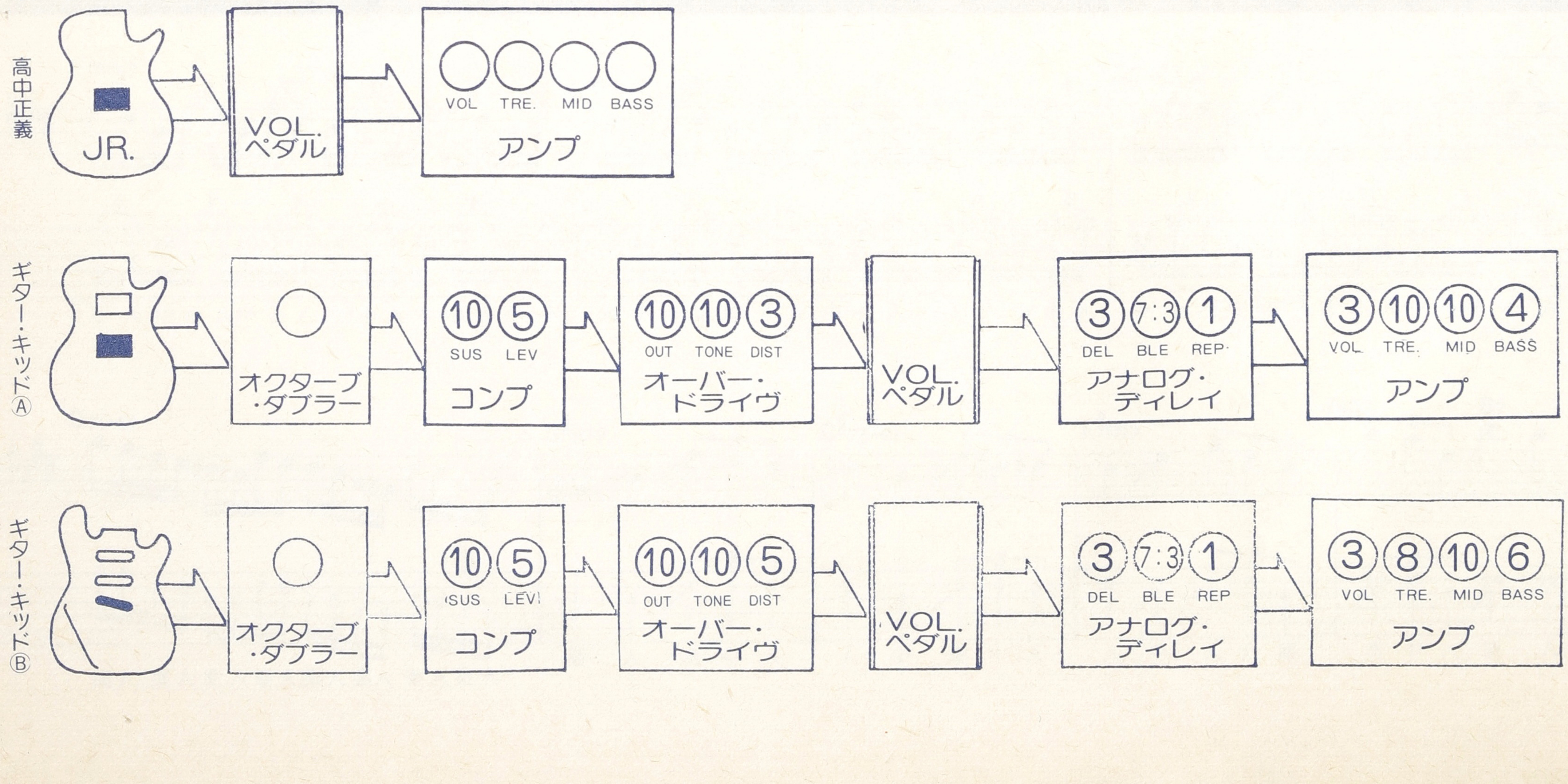
サウンド解説

この頃、すでにメイプル・ネックのオールド・ストラトも使っていた高中ですが、この演奏は、ストラトより前に持っていたギブソン・レスポール・ジュニア（1959年型のダブル・カッタウェイ）でプレイしていると思います。アンプは、マーシャルの兄弟分的オレンジ（どちらもイギリス製）を使い、シングル・コイルながら、なかなかパワフルなナチュラル・オーヴァードライヴ・サウンドを弾き出していますネ。

エフェクツは、まずヴォリューム・ペダル。この頃は、グッドリッチが登場していない頃で、フェンダー製を使っていました。

で、エコーも若干掛かっています。リヴァーヴもしくはシングル・リピートのショート・ディレイがあると、グーッとムードが盛り上がるでしょう。

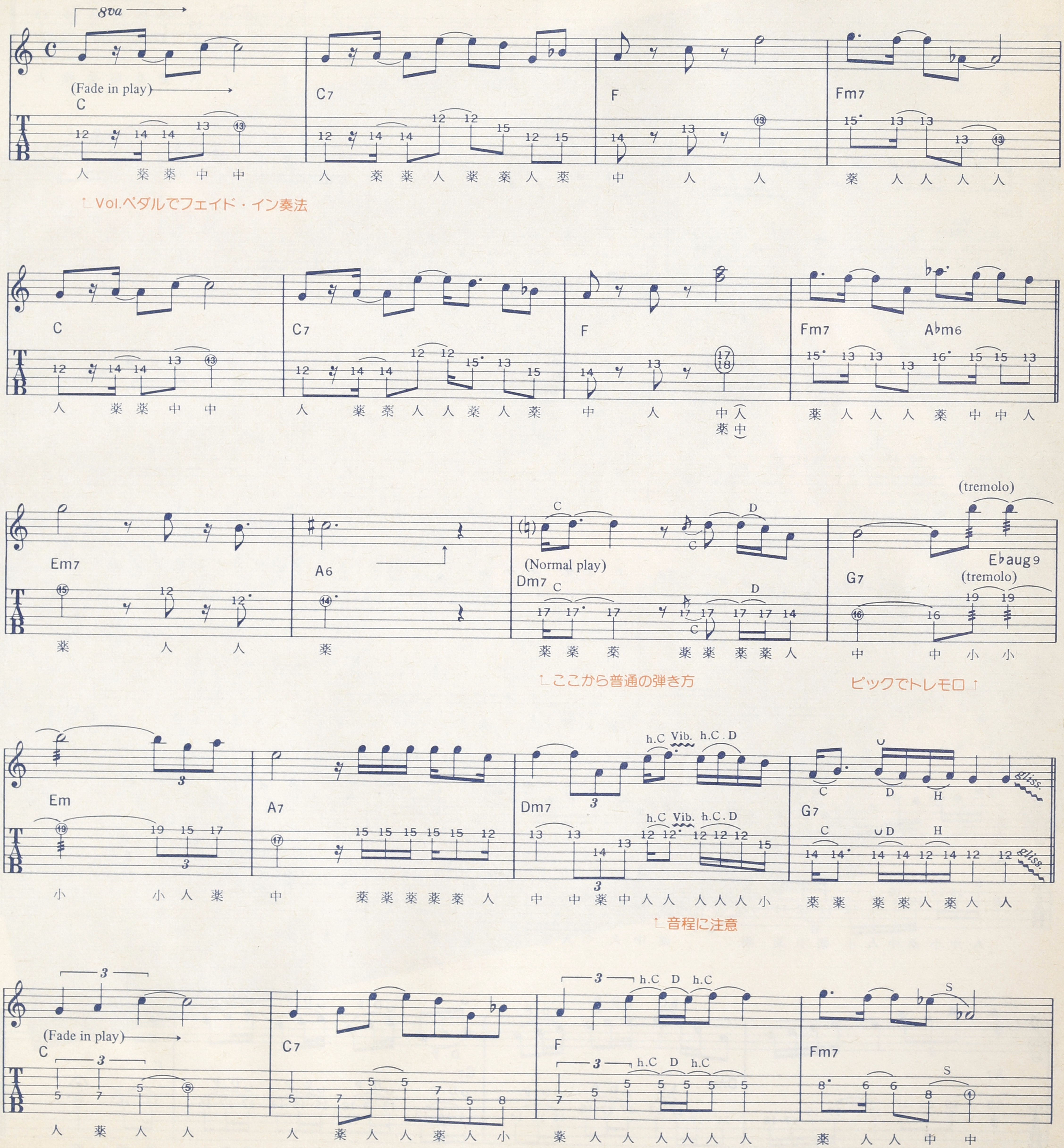
オクターヴ・サウンドに関しては、奏法解説で触れているように、ダビングかオクターヴ・ダブラーか定かでないため適当にどうぞ。





黒 船

by Masayoshi Takanaka




8va
h.C & D
(Normal play)
C
C7
F
Fm7
A♭m6
Em7
Vib.
A7
Dm7
G7
Em
素早く移動しよう
gliss.
(tremolo)
E♭aug
チョップをキメます



TAKANAKA

ヤング・ギター5月号増刊

スーパー・ギター高中正義

CONTENTS



編集●ヤング・ギター編集部
編集協力●斉藤節雄、青山忠英
撮影●三浦憲司、三浦功大
表紙デザイン●丸谷雄二郎
レイアウト●丸谷雄二郎
楽譜浄書●有限会社　三村楽譜
写植版下●竹内写植株式会社
印刷・製本●大日本印刷株式会社

発行人●草野昌一
発行所●株式会社　新興楽譜出版社
〒101 東京都千代田区神田小川町2—12
電話　03—292—2861
振替口座／東京4—98233
日本音楽著作権協会承認第8101803号

発行日●昭和56年5月10日
定価●800円


Based upon THE RAINBOW GOBLINS by UI de Rico
RAINBOW GOBLINS
虹伝説
TAKANAKA
TAKANAKA
彼はいま、虹と散歩に出かけたところだ。
コンサート
高中正義
虹伝説
RAINBOW GOBLINS STORY
全国TOUR

SGバイオグラフィ。



SGの名称は1966年に発表されたヤマハ初のソリッドギター以来の伝統的なものだ。一方SG-2000の歴史的なルーツを探るうえで忘れられないのが現在"幻の銘器"と呼ばれている1974年発表のプロフェッショナルモデルSG-175とこれに続く175カスタムである。カルロス・サンタナのSGのうちブッダ・インレイがほどこされたSGは、この175カスタムの1本である。カスタマイズされたところは多岐にわたるが、ユニークなラミネート構成をとるワンピース構造ボディ、グランドピアノからヒントを得たブラス製のサスティンプレートなど、SG-2000の名を不動のものにした斬新なアイデアがすでに盛りこまれている。この時期にSGに魅せられたトップギタリストも多い。そして、1976年7月。ヤマハ初のSGから10年。ひときわ分厚くブライトなサウンドとともにSG-2000はデビューした。そのサウンドのカギとなっているTクロスメープルによるワンピース構造のボディ(日・米・英・西独4ヵ国特許)。アルニコ合金を独自の方法で着磁した超異方性磁石採用の2基のハンバッキングピックアップ。オープンタイプでありながらハードなピッキングによるコイルの断線を防ぐセミオープン的なカバーもついている。もちろん、演奏性のよいタマゴ型の断面をもつネックや黒檀の指板、チョーキングがスムーズなオーバーバインディングフレット、精度の高いトルク調整つき糸巻なども銘器たらしめているファクターといえるだろう。その実力は、内外の名手がしめしてくれている。そのノウハウは、弟分にしてライバルのSFをはじめ他の兄弟たちへフィードバックされている。ヤマハSG-2000。ザ・ベストギター。

YAMAHA Electric Guitar
SG-2000 ¥150,000

マイク＝ハンバッキングG-I×2
コントロール＝ボリューム×2、トーン×2、3点SW×1
胴＝メープル＋マホガニー／棹＝メープル＋マホガニー
指板＝エボニー／胴・棹＝ワンピース構造
弦＝スーパーライトゲージ／重量＝4.5kg
SGシリーズは他にSG-1000・800・600
各2カラーバリエーション
カタログご希望の方は
〒104 東京都中央区銀座7-9-18
日本楽器製造株式会社広告課LGNZ係まで

YAMAHA

ALL YAMAHA LM CAMPAIGN'81

ヤング・ギター5月号臨時増刊 昭和56年5月10日発行 第13巻第6号 通巻163号
新興楽譜出版社 略称 シンコー・ミュージック
定価800円
雑誌 08838－5/15

高中正義 SUPER GUITAR 「虹伝説」全曲集 (全曲完璧コピー・TAB譜付) ヤング・ギター5月号増刊